

アーネスト・サトウ

一外交官の見た 明治維新（上）

坂田精一 訳



風雲急をつげる幕末・維新の政情
の中で、生麦事件等の血腥い事件
や条約勅許問題等の困難な紛争
を身をもって体験したイギリス
の青年外交官アーネスト・サト
ウ（1843 - 1929）の回想録。

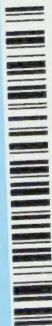
二度まで実戦に参加して砲煙
弾雨の中をくぐり、また攘夷の白刃にねらわれて危う
く難をまぬかれたサトウの体験記は、歴史の地膚をじ
かに感じさせる維新史の貴重な史料。



青 425-1
岩波文庫



S0-AKL-965



岩 波 文 庫

33-425-1

アーネスト・サトウ

一外交官の見た明治維新

上

坂 田 精 一 訳



岩 波 書 店

読書家の雑誌

図書

定期購読をお勧めいたします

[A5判・本文64頁/毎月1日発行]
年間購読料=1000円(税・送料込)

▶ 定期購読のお申し込み方法

ハガキ(〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5), FAX(03-3263-6999)で岩波書店『図書』購読係宛, または岩波ホームページ(<http://www.iwanami.co.jp/tosho/>)をご利用ください。最新号と振込手続用紙をお送りします。

訳者の言葉

アーネスト・サトウ著『日本における「外交官」“A Diplomat in Japan”』は、一九二一年（大正十年）にロンドンのシーレー・サービス会社から出版された。

サトウは、原著書の序文にもあるように、明治維新の前後を通じ二十五年も日本に滞在した人で、青年外交官として日本に赴任してから、風雲の急な幕末の政情の中を縦横に活躍、二度まで実戦に参加して砲煙彈雨の中をくぐり、また攘夷じやういの白刃にねらわれて危うく命をまぬかれたりした。外国人でありながら、明治維新の血なまぐさい事件や多くの困難な紛争を、身をもって体験してきたのである。

それに、幕末から明治維新にかけての日本の歴史は、周知のように対外関係から始まり、たえず対外関係をもとにして発展してきたのであるから、サトウのような立場にあった人でなければわからぬこともあるし、また見聞できなかった事もずいぶん多いと思う。

当時、西郷、木戸、伊藤のような人々をはじめとして、討幕の志士や反幕府的な大名たち、また他方閣老をはじめとする幕府の高官連が、慇懃いんじんをつくして、サトウの歓心を買うことにつとめたことは、第二次大戦直後の日本の政情にも一脈通ずるものがあり、その動向が明治維新の歴史に大きく影響したことも否定できない。

A DIPLOMAT IN JAPAN

Sir Ernest Mason Satow

下二冊とし、写真は割愛した。なお、原著の鹿兒島かごしまと下関しもつけの砲撃の記事には、陣形図が添えてあるが、大型本の原著においてさへ鮮明を欠いているので、使用不可能と考えてこれを除いた。訳出にあたって、正確を期したことはもちろんであるが、できるだけ平易な文体にして、読者の親しみやすく、読みやすいものにしようと心がけたつもりである。

「訳注」は、本文を理解するのに特に必要と思われる個所だけについて、本文の感じをそこねないように、なるべく簡単に記した。

固有名詞などについて、漢字の横に片仮名をふったのがあるが、これは原文のヨミをそのまま記したものである。

下巻の末尾に付録として、「アーネスト・サトウの略伝」、「サトウの著述目録」、「当時の日本の政情」、「年表」（西暦と日本暦とを対照したところの）の四つを載せた。これらが、この訳書を読まれる方々の理解と興味に役立つならば幸いです。

昭和三十五年八月

訳
者

その点で、この著書は日本の近代史、ことに明治維新史の研究者にとって貴重な史料であるが、そればかりではない。当時の日本の風物や、人情、風俗、習慣などが、相次ぐ事件のエピソードにからんで生き生きと描写してあるし、また機知にとんだ奇行や、紅毛膝栗毛的（こうもうひざくりげ）な道中記なども織りこまれており、斬首刑（ざんしゅけい）、腹切（はらぎ）などの場面、各藩の武士氣質（かたぎ）質、維新志士の談論、風格、サトウをめぐる両派要人の暗躍なども、作りものでないだけに興味が深い。

このサトウの著書『日本における一外交官』は、終戦前は（二十五年もの長い間）、わが国では禁書として扱われてきた。

もつとも、昭和十三年に文部省の維新史料編纂事務局で翻訳したものが、「維新日本外交秘録」という書名で「非売品」として配布され、一部の少数研究者の閲覧に供されはしたが、「公表をはばかる個所は、全部削除」とあるように、カットされたところが非常に多く、全章がそっくり抹殺されたところもある。

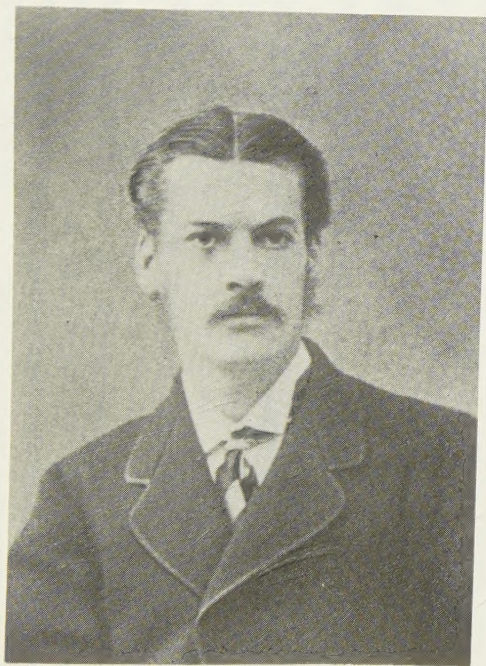
また、昭和十八年に塩尻清市氏のものが出ているが、これは無難と思われるところを、かいつまんで書き下したものであった。

この著書が戦前にこのような取り扱いをうけたのは、「權威」をはばからぬ外国人の自由な觀察によって明治維新の機微な消息が国民の目にさらされるのを、「維新の鴻業（こうぎょう）を賛仰（さんぎやう）」することによって国民精神の基盤（きばん）とした当時の為政者たちが好まなかったからであらう。

原著書はおおよそ菊判大、四二七頁、一冊からなり、写真七枚を挿入（そうにゅう）しているが、訳書は上、

日本における一外交官

これは、開港と王政復古の行なわれた明治維新の日本の、危機にのぞんだ数年間の歴史の内幕を、その時代のいろいろな重大事件に関係して積極的な役割をつとめたイギリスの一外交官が、数々の体験をもとにして書いた記録である。(原著書の扉から)



序 文

この本の初めの部分は、イギリス公使として私がシャムの首都バンコックにいた一八八五年から一八八七年の間に、折りに触れて書いたものである。私は、一八六二年（訳注 文久二年）九月から、一八八二年（訳注 明治十五年）十二月の終りごろまで日本に滞在していた——もっともその間に、賜暇をとって帰国したことが二回ある。

そんな次第で、これを書き出したのは、私が日本を去ってからまだ間もない時のことであつた。だから、そのころは、日本滞在の二十年間に起こつた事件に関する私の記憶は真新しく、脳裡にはつきりと残っていたのである。もっとも、この本の大体の構成は、一八六一年十一月に私が母国イギリスを出発した日から、たえずと言ってよいほど書きつづけてきた日記に拠つたものだが、細かな点は自分のこうした記憶によつて補つたのである。

外交官としての私の生活は、前後を通じて四十五年の長い期間におよんだが、この本の目的は、世界の各地における外交官としての自分の経験を人々に語ろうとするものではない。私の關係してきた事件の中で、最も興味の深いエピソードだけを述べるのが目的なのである。

このエピソードというのは、六百年以上も政權から離れていた日本の古代からの君主の系統が、直接の統治權を取り戻した時まで相次いで起こつたところの、幾多の大事件に關したものである。これらの事件の末に、王政復古の變革が行なわれたのであるが、その結果として、それまで割合

目次

訳者の言葉

序文

第一章 江戸在勤の通訳生を拝命（一八六一年）……………一三

第二章 横浜の官民社会（一八六二年）……………二〇

第三章 日本の政情……………三五

第四章 条約、排外精神、外国人殺害……………四八

第五章 リチャードソンの殺害、日本語の研究……………五八

第六章 公用の江戸訪問……………七三

第七章 賠償金の要求、日本人の鎖港提議、
賠償金の支払い（一八六三年）……………八八

第八章 鹿兒島の砲撃……………一〇四

に近代的な都市の様相をおびていた江戸が東京と改称されるに至り、これが、日本がまだ西洋に知られなかった時分からの古い首都——京都に取って代わるようになったのである。

一八八七年にシヤムを去った時から、私はこの未完成の原稿をうっちゃったまま、一九一九年九月まで顧みなかったのであるが、かつて原稿を見せたことのある親戚しんせきの若い人たちから、あれは完成しなければいけませんよ、と言われた。そんなことから書き出したこの本の後半部は、自分の日記をほとんど写したと言ってもよいようなものではあるが、それでも、作成当時は機密書類に属していた私の起草した文書や、そのころすでに他所で刊行されていた、私の長官ハリー・パークス卿きょうあての手紙などをこれに書き足した。また、母へ書き送った手紙によって、日記に書き漏らしていた細かいところを補足した。

この本のある部分では、私の友人で、すでに故人となっているリーズデール卿の著書『回想録』イモゼリーズと数頁にわたり重複するところがあると思う人もあるかもしれない。それは、同卿がその著述をやっていた際に、卿と一緒に日本に滞在していた時分につけた私の日記の一部分を、同卿に借覧させたことがあったからだ。だから、私が自分の本を書くにあたって、同卿の著書を参考に使ったというわけではないのである。

一九二一年一月

オタリ・セント・メアリで

アーネスト・サトウ

第一章 江戸在勤の通訳生を拝命（一八六一年〔訳注 文久元年〕）

ほんの思いがけないことから、私は日本に心をひかれはじめたのである。私が十八歳のとき、兄がミューディー図書館からローレンス・オリファントの書いた『エルギン卿のシナ、日本への使節記』というおもしろい本を借りてきた。やがて私のところへも回覧されたが、絵草紙ふうのこの本が私の空想をかりたてたのである。

その国では、空がいつも青く、太陽が絶え間なくかがやいている。岩石の築山つぎやまのある小さな庭に面し、障子をひらけばすぐに地面へおりられる座敷に寝そべりながら、バラ色の唇くちびると黒い瞳ひとみの、しとやかな乙女おこめたちにかしずかれることだけが男の勤めであると言ったような——つまり、この世ながらのお伽かぎの国。だが、天の恵んだ、この幸福な島国をおとずれる機会がやってこようとは、夢にも思わなかったのである。

その後まもなく、エルギン卿の使節記よりも前に出ていたペリー提督の遠征記が私の手に入はいった。これは体裁から見ても文体から言っても、エルギン卿のものよりずっとまじめな本ではあったが、前にうけた感銘を強めるのに役立つただけだった。それからというものは、私はそのことばかり考えていたのである。

ある日のことだった。当時私が学んでいたロンドンのユニバーシティ・カレッジの図書館に入

第九章	下関、準備行動	一一五
第一〇章	下関、海軍の行動	一二四
第十一章	下関、長州との講和締結	一四一
第十二章	バードとボールドウインの殺害	一六四
第十三章	天皇の条約批准	一七三
第十四章	横浜の大火	一九三
第十五章	鹿児島および宇和島訪問	二〇七
第十六章	最初の大坂訪問	二二三
第十七章	大君の外国諸公使引見	二四六
第十八章	陸路、大坂から江戸へ	二六〇

このことは、シナ語を勉強することが日本語の学習への早道であるかどうかの問題に、決定的な解答をあたえるものだった。私は当時、シナ語の知識は日本語を勉強する者にとって役には立とうが、それが必要欠くべからざるものでないことは、ラテン語の知識がイタリア語やスペイン語を学ぼうとする者にとって不可欠のものではないのと同様だと思っていたし、今でもそう思っている。そんなことから一刻も猶予することなく、われわれは日本に向かって発足したのである。

その当時北京^{ペキン}のシナ商務部(The China establishment)に所属していた八人の通訳生の中で、一八七七年にそれぞれ領事に昇進したH・J・アレン、C・T・ガードナー、W・G・ストロナツクの三人だけが、まだ(一八八五年現在)在職している。この三人は、私と同時に頭をならべて試験に合格したのであるが、二番で合格した男は一八六七年に「依願免官」となり、三人は死亡、もう一人は同輩中一番優秀だったのに、試験の成績は奇妙に下から一、二番だったが、一八七二年にシナ関税部に転任して、現在その最高の役職についている。

限られた少人数の競争試験であつてさえ、その結果はこのように差ができるのである。その後競争試験が広く一般に開放されるようになってからは、その後の経験でわかるように、試験の成績はいつそう当てにならなくなった。少なくとも日本ではそうだが、日本以外の国へ赴任した人々の場合も同様だろう。

この試験制度の大きな欠点は、人間の徳性^{モラル}を考えないところにある。受験者が紳士の作法を心得ているか、また紳士としての感情をいだいているかどうかは、ユークリッドの定理を書かせたり、ギリシャの学者の書いた文章を翻訳させたりする方法で判定できるものではない。そんな方

ると、テーブルの上に告示がしてあった。それによると、シナと日本へゆく三名の通訳生をもとめているが、その推薦は本大学の学長の適当と思う方法によって行なうというのであった。これこそ、私のかねて望んでいた絶好の機会であった。私は、ようやく両親から競争試験をうける許しを得て、その公開試験に首位で合格したが、その際私は日本をえらんだのである。シナへ行きたいとは少しも思わなかったし、行く意思もなかった。年齢の資格から言えば、私はわずか数時間早く生まれていたおかげで、競争試験をうけられたのである。一八六一年（訳注 文久元年）八月に正式の任命をうけ、同年十一月に楽しい希望に胸をふくらませながらイギリスを出発した。

そのころ日本でわれわれの任務の指導にあたっていた人たちの間では、日本語の勉強をするにはまずシナ語を習得することが必要だという考えが強かったので、同僚の通訳生 R・A・ジェミーンソンと私は、初めの数か月間北京に駐在することを命ぜられた。同地では翌一八六二年初めにラッセル・ロバートソンと一緒にになったが、同氏もやはり日本商務部（The Japan establishment）に所屬していたのである。

北京滞在については、ここで触れないことにする。そこには、そこだけの興味がなくてもないのだが、なにしろ期間が短かったので、シナについて多少なりとも役立つような知識をうるまでには至らなかったからだ。しかし私は、後日大いに役立つ数々のシナ文字をおぼえたとし、満州語の勉強にさえ手を着けたのである。

シナの首都に滞在中に、江戸から急便がとどいた。その結果、つぎのような次第で突然滞在を切りあげることになったのだが。その便には日本の閣老直筆の文書が封入されていた。ところが、それを判読できるシナ人は一人もなく、いわんや文書の意味を解することは及びもつかなかった。

がらも今なおうるわしい夏宮サマー・パレスの廃墟はいきょ、西の青々した山々の間に見える僧院、市の城壁の内外にある壮麗な寺院などの遊覧。雨天や晴天の日の街路に見られる泥土や塵埃じんあい。大理石の橋のかかった池に咲きほこる淡紅色たんしんくの蓮花れんげ。「可憐これん、可憐これん、賞一箇大しやういっかんたい」(訳注 哀れと思つて一文恵んで下さい)とさけぶ乞食チヤンシン。正陽門外チヤンヤンメンガイに、飾り立てた店を並べている雜貨市場。天壇。城壁から望む黄、褐かつ、緑など、色とりどりの瓦屋根かわねと、これらを取りまく樹木の眺め。轍わだちの跡ふかくすりへらされた石の舗道を、がらがら音たてて行く荷車。学校を出たての子供や、母親の膝ひざをはなれたばかりの幼児に取り巻かれて営む、東洋の珍しい生活。イギリス公使館リヤンソンフーになっている良公府の、改築、新装された壮麗な建物——それらは、決して私の脳裏から消え去ることがないだろう。しかし、なにしろ時間の余裕がなかったのである。

後年フレデリック卿となったブルース氏は、気品のある額ひたいと褐色の目を持ち、鼻下と双頬そうきやうに半白な鬚髯ひげをたくわえていた。五十がらみの年輩の実に立派な風貌ふうぼうの人で、当時北京駐劄チンチョウのイギリス公使をしていた。シナ係書記官は、後年トマス卿となったウェード氏。これは偉いシナ学者で、私たちは畏敬いけいの目で見えていたが、気が短いという評判だった。

ウェード氏がブルース公使に随したがつてシナの大臣を訪問したときの話であるが、同氏は激論の末、かつと上せてしまった。

「しかし、ウェードさん」と、總理衙門ツオインリーヤンの總理が言った。「お見うけしたところ、ブルース氏はそんなに怒おどつていらつしやいませんが」。

ウェード氏は公使に、「お聞きですか。ブルースさん。彼らは、あなたが怒つていないと言つていますが」と言った。するとブルース氏は、温容な微笑をたたえながら、いとも上きげんな顔で、

法で知能の試験はできない。頭の鈍い青年でも適当な受験勉強の指導をうければ、山を賭ける「秘訣」を知らない誠実な学生を大抵わけなく打ちまかすことができるからだ。当今、公開試験の受験者はみな受験勉強の先生につくが、この先生は試験目当ての数か月の訓練で、かりそめの不自然な果実をみのらせる。私に言わせれば、合格した受験生とは取りも直さず、上手に受験の指導をうけた志願者にすぎない。しかし、大抵の受験者はこうした方法については嫌気をさし、以前は勉強好きだった者でも勉強する気持をなくしてしまう。

ところで、シナ語、シャム語、日本語などのような言語を習得するには、まじめに勉強するのではなく、到底物にならない。前記のような試験方法は人間の語学能力をためすものではなく、往々にして、外国語を話すことが、あたかも空中を飛べぬと同様に全然できぬ人間を採用する結果になる。私が試験に合格したのは、その原因をもとめれば、他の競争者のだれよりも、学校を出てまだ間がなかったというところにある。

北京に滞在中、通訳生一同が一晚ヴィクトリアの司教に招待されて晚餐を共にしたことがあった。司教は公使のブルース氏が不在中に、公使館に逗留していたのである。話題がたまたまシナ語の研究の知力に及ぶ影響ということにおよんだ。司教は私たちに、こんな無味乾燥で効果の見えない勉強に没頭しては、知力が減退すると思わなかつた。司教自身の経験では、少なくともそういう結果になつていた。これは妙な本音を吐いたものだが、司教の話の内容からすれば確かにそれに違ひなかつた。しかし、私たちの中には、われわれの場合も同様ですと白状するほどの正直者は一人もいなかったようだ。

北京の生活には去りがたいものがあつた。——同市の北郊の平地を駆ける早朝の乗馬。荒れな

イト以上の高空にそびえていた。

高くて気品のある大山や、^{オイヤマ}その他の連山が、富士の西方の平野を画している。一方これと対して、低く這うような砂浜が右手へ急に曲がって、江戸の方角の水平線下にたちまちのうちに沈んでいった。

生地のままの材木で作った奇妙な鴨型^{かもだて}の小舟の群れが、幾筋かの細長い布をゆるくつなぎ合わせた大きい四角な帆をあげて、きらきら光る波上に浮かんでいた。われわれの船は、漁師たちの日焼けした赤銅色の皮膚が見えるくらいに、小舟のすぐ近くを通りすぎた。彼らは、腰のまわりに白布をまといっているだけだった。目と頤^{あご}しか見えぬくらいに、青い布で頬^{ほお}かぶりをした者もいたが、ほとんど裸体に近かった。

ミシシッピ・ベイ^{ミシシッピ・ベイ}(訳注 屏風浦か)の白い断崖がだんだん近くなり、それが次第にはつきり見え^{トレイライ・ポイント}てきた。船は条約岬^{ポイント}(訳注 本牧岬)を迂回^{うかい}して、碇泊地^{ていはくち}のすぐ沖合のところに投錨^{とうびよう}した。一年余りの月日をへて、とうとう宿望を達したのである。

「おお、ひどく怒っていると、彼らに告げなさい」と答えたという。

ジェミーソンとロバートソンと私の三人は、八月六日の早朝出発した。同夜途中の河西塙（カシイウヅ）につき、翌日天津（てんしん）に到着した。それから舟で太沽（タカ）へゆき、同市でギブソン副領事の手厚い世話をうけ、同氏の宅で数日をすごした。

この人は後に台湾へ転任したが、同地でシナの役人と紛争をおこし、税関の砲撃を砲艦の艦長に要求したりして、そのために外務省からひどい譴責（せんさく）をくった。その後はどなく、心痛のあまり世を去ったという。この事件は、いわゆる「砲艦」政策がもう流行らなくなった時代に起こったもので、可哀そうにもギブソン氏は、過度の熱誠の犠牲となって仆れたのだ。

ジェミーソンは上海で一行と別れて、同地に残った。領事の職に就くよりも前途有望だということで、同地で新聞を発行することにしたのである。ロバートソンと私は汽船ランスフィールド号に乗船して、九月二日に日本へ向かって出帆した。

シナの沿岸を離れてから初めて見た島は、九州南方の火山島である硫黄島（いおうじま）で、七日には、霧の中を通って伊豆半島に近づいていた。幸いに暫時霧がはれたので、初めてこの辺を航行する船長が航路の転針を命じた。船は島と島との間を通って進んだ。

翌日の早朝は伊豆大島東方の紺碧（こんへき）の海上をはしり、右手に鋸（のこぎり）の歯のような格好をした鋸山（のこざりやま）の森林を望み、左手に浦賀の小さい入江を見ながら、広い湾を横浜へ向かって進んだ。

実に陽光燦々（さんざんざん）たる、日本晴れの日であった。江戸湾を遡行（そこう）する途中、これにまさる風景は世界のどこにもあるまいと思った。濃緑の森林をまとった形状区々たる小山が南岸一帯に連なっている。それらを見おろすように、富士の秀麗な田錐峰（えんすいほう）が、残雪をわずかに見せながら一万二千フ

つていたり、重い紙ひもで結わえてあつたりするので、代金を支払う前に梱くわを一々念入りに検査せねばならず、茶も見本通りの良質品と信用するわけにはゆかなかつた。日本の商人も、往々同様な手段で相手に返報されたが、不正行為を差引きすれば日本の方がはるかに大きかつた。そんなわけで、外国人たちの間に、「日本人と不正直な取引者とは同意義である」との確信がきわめて強くなつた。両者の親善感情などは、あり得うべくもなかつたのである。

税関の役人どもは極端に墮落だらくしていて、輸入税の脱税を計ろうとする外国人に対して多額の賄わい賂わくを要求した。最大の悪風の一つは、葡萄酒ぶどうしゅ、ビール、その他の酒類や日用品を大量に輸入しながら、「私用」の品だと偽いつはりつて、輸入税を免除させようとしたことである。

横浜の行政は、税関にいる多数の役人がこれに当たつていた。奉行ぶぎやうと称する長官二名と、組頭くみがしらと呼ばれる副長官が二名。役人の行為を監視する目付めつけが二名。調役てうやくと呼ばれる指揮者が数名。定役ていやくという職名の上席書記。その他黒や緑色の衣服を着た大勢の書記、通訳、入港船監視人、警吏などがいた。

通話の際には、口頭、文書のいずれによるも、常にオランダ語を媒介としていた。これは、英語を知っている日本人がまだほとんどなく、日本語を話せる外国人も片手の指で数えるほどしかなかったからだ。しかし、だれもが、少しはその心得があると思つていたのである。

商用のための一種の私生児的な言葉が案出されていたのだ。中でも、マレー語の駄目 *pegi*、破毀サランバンは大きな役をつとめ、それに「アナタ」と「アリマス」とを付け加えて、自分は複雑な取引きをやる資格を持つてっていると、銘々がそう思いこんでいた。この新造語の著しい特徴は、対話者相互の社会的地位を示す日本語のはなはだしい多様性と動詞の複雑な変化がないことである。そ

第二章 横浜の官民社会（一八六二年〔訳注 文久二年〕）

日本が安政五年の条約によって外国貿易の港を開いてから、もう三年たっていた。そのころは相当多くの商人が、長崎と横浜の港に住んでいたのである。ところで、当時の箱館（いそが）は、現在と同様に商売上の企図を誘致するものが少なかったし、政治の中心からも遠く離れていた關係上、他の開港場にみなぎっていたような物騒な気分はきわめて少なかった。

長崎には、西日本の大部分の領主が、農民から年貢（年貢）に取り立てた米穀、その他の産物を同地へ送って、それらを売却する商社があった。領主の家来たちは、しきりに外国人と交際し、武器、火薬、汽船などを購入するため外国人の家を訪れた。このようにして、一種の友好的な感情が醸成していたのだが、その感情を一段と強めた者は、武士階級の青年たちに英語を教え、また日本の将来に少なからぬ影響をあたえたところの自由思想をこれらに伝えた、アメリカの宣教師であった。

しかし、横浜の場合は、外国の商人が取引きの相手にしなければならなかったのは、主として無資本の、そして商売に無知な山師連中であつたのである。契約の破棄や詐欺は、決して珍しいことではなかった。外国商人は、荷の渡る見込みのない商品購入を目当てに、こんな当てにならぬ男どもに大枚の前金を支払ったり、また相場が下がれば荷受けを拒絶して自分のふところを痛めぬようにする者どもを相手に、本国へ製品の注文を発したりしていたのだ。生糸には砂が混じ

地所は、最初は希望者全部に自由に分与されたが、その中には各国領事館の雇人も入っていた。この連中は、商売を始めようと意気込んでくる新来者にこれを売りつけて、全く拾いもの同然の利得をせしめたのであるが、その後、「居留地」が拡張されたときには、商人にせよ役人にせよ一定の代価を支払わなければ絶対に土地の入手ができないようになった。また、もつとあとになると、地券が作られ、地券の所有者、その相続人、管理人、遺言執行者、譲受人などに、土地が交付されるようになった。こうして、不動産と動産とを同時に兼ねたような、イギリス人の経験では珍しい一種の財産ができたのである。

街路は一般の人々の利便をかまわず、また、あまり将来のことを考慮せずに設計されていた。

馬車の時代は日本ではまだ始まっていなかったもので、道路の広さは手車が通ればそれで充分というわけだった。そのために、将来の日本の一番重要な商業都市たる横浜も、交通運輸の点では永久に不便を忍ばなければならなくなったのだが、こういうことは、五十年前のロンドンの商業中心地の状態や、首都が次ぎ次ぎと代わった時代のイタリア王国歴代の首都について知る人々には、最もよく納得なとくされるだろう。建築も、最初は簡単な木造平家建てで満足していたのだが、一八六二年（訳注 文久二年）の後期になると、わずか五六軒程度ではあるが、二階建ての家がこの町の外国人区域に建った。

居留地の背後は、「沼沢地」という名で知られている新しい埋立地になっていたが、そこには競馬場の走路のほかまだ何もなかった。さらに、その後方のきたない沼地を横断すると、ある立派な公爵こうやくが議会の席上で「若い婦人の教育所」と婉曲えんきよくに表現した遊廊ロシワラの安普請が目につく。そこでは、何も知らないある地方司教が、遺手婆やうてばさんに自分の名刺をおいて行ったという話があり、外

れはもちろん、居留地以外には通用しなかったが、ヨーロッパ人がそれを用いたことは、日本人の外国人に対する態度の特徴である「夷狄^{いてき}」輕侮の感情に少なからず役立ったにちがいないと思われる。

神奈川は、条約によつて最初にヨーロッパ人の居留地に決まつた場所である。それは東海道と呼ばれる江戸——京都間の主要路に望んでいたので、諸大名の武装した家来と外国居留民の間に衝突のおこる機会が予想され、またその予想は遺憾ながらよく当たつたのだ。当時大君^{タイクン}（詠注 將軍）の政府は、神奈川から浅い湾を南へ渡つた所にある横浜の漁村に早くも税関や木造平家建ての家を作つて、こうした紛争を避けようとした。日本の役人や外国商人の便宜を計る気持よりも条約の条項の履行に熱心な外国代表の中には、横浜へ移転することに激しく反対する者もいたが、投錨地^{トウカウヂ}に近いという實際上の利便と人命保障の点から商人たちがこれに賛成したので、横浜が条約港として一般に認められるようになったのだ。それから長い間、おそらく今日に至るまで、外国領事は現在人口十万をかぞえる神奈川対岸の横浜の町に在住しながら、公用の報告などの場合は常に発信地を神奈川にしていたのである。またヨーロッパからその時次第で、あるいは横浜あてにしたり、あるいは神奈川あてにして送つてよこす商品にいつもかかつてくる運賃の差額の問題で、おかしな話をよく聞かされたものだ。

外国人居留地の安全をいっそう確保するために、陸続きの方面に広い堀割をめぐらして、それに橋をかけ、この橋を関所として危険人物の侵入を防ぐとともに、また外部から持ち込まれる品物にも課税しようという一石二鳥の考えから、たくましい番兵を橋の所に配置して、居留地への出入りを嚴重に取締まつていた。

るに至つた。しかし、結局、妥協が成立して、問題は落着いたが、その結果商人の方は公開市場で一分銀イチブを買わなければならないようになった。一方、官吏は「メキシコ銀」の重さに等しいだけの日本貨幣で自分の月給相当額、場合によってはそれ以上の額を受取るようになったのだが、このことは公正な人々全体の心にきわめて醜惡な印象をあたえた。誹謗ひぼうする者は、こう言つた。このようにして公使、領事、水兵、陸兵などが受ける利得は一種の賄賂わいろであり、それらの官吏はこれに釣られて日本側の条約規定違反を黙認し、官吏以外の同胞に不利をあたえるものだ。だが、これは偏見である。それは、貨幣の性質と機能に関する誤つた諸説の結果なのであつて、個人的利害關係が、經濟學の原則によく一致している諸見解とは逆になつたまでのことである。

条約によると、百ドルは實際上三百十一分ブと交換されることになつていたが、しかし一八六二年九月當時の為替相場かわせが百ドルにつき二百十四分ブであつたことは確かな事實である。各国の公使館や領事館は、館員の俸給総額とその他の管理費に相当する一定額の洋銀ダツギを、貨幣鑄造費として百ドルにつき十三分ブを差引かれるだけで、日本貨幣と毎月兩替することを許されたのだ。そこで俸給百ドルの官吏は、公定の換算より十三分ブを差引いた二百九十八分を受取つた。そして、市場相場を上回つた額を、彼らは再びドルと交換した。こうして百ドルの金は百三十九ドル二十五となり、四〇パーセント近い利鞘りさやを実際にかせぐことができたのである。

年俸三千ポンドの公使の儲けは、だれにもすぐにわかるように莫大ばくだいなものであつた。しかも、それだけではなかつた。毎月の一分銀割当額と實際の経費との差額は再びドルに換えて、官の金庫に納むべきドルの額を差引いた残りの利鞘を、各人の俸給額に應じてそれぞれの館員に分配したのである。したがって、表向きは少ない俸給でも裕福な生活ができ、馬を飼つたり、三鞭酒サンパンを

国人の若者や不敬の輩^{やから}を腹をかかえておかしがらせたものだ。当時の在留外国人は、みんな若かった。

そのころには、もうカトリックの教会も、新教の教会も建っていた。外国人の墓地は、居留地の外側に特別に設けられていた。この埋葬地に眠っている人々と言えば、日本の武士^{サムライ}（両刀をたばさんだ男）の凶暴かつ誤った愛国心の犠牲になつて仆れた数名のロシア士官と、二名のオランダ人船長にすぎないありさまで、ヨーロッパやアメリカの在留民は大いに健康に恵まれていた。この晴朗な天候と、すぐれた風土の土地にあつて、まだだれ一人として病気で仆れた者はなかったのだ。

少し酷な表現だが、イギリスの某外交官が当時の横浜在住の外国人社会を、「ヨーロッパの掃溜^{はきだ}め」と称した。本国の、口うるさい世間の束縛から解放されて、誘惑の多い東洋の生活へ突然入つたため、神学校の学生のような品行の厳正を保つて行動せぬ人間が多少見受けられたのは当然だ。しかし、それらの人々が、他所^{よそ}にいる同階級の人たちよりも特別に質が悪いとは思えなかった。けだし、各人の行為が半ば公開的で、隠蔽^{かくは}することを大して心にかけない小社会では、他所では気づかれずにすむような悪徳でさえも、そんな悪徳に誘惑されたことのない人々には大きく目につくものである。

また、生計を営むに足るだけの金、できればその上いくらか余裕のある金が必要なのだが、それを持たずに渡ってきて、さほど道徳上の気がねをせずに性急に目的を達しようとする者もかなりいたのである。ところで、東洋貿易に用いている洋銀^{インペリアル}を充分に日本貨幣と交換できぬという苦情が間もなく起こつた。そして、この問題がもとで、日本の財務当局に法外な要求を提出す

競走馬も出場した。日曜日の行樂には、東海道を馬で遠乗りして川崎で弁当を食べ、夕方になって帰宅するのが喜ばれた。もつと遠出をして、金沢、鎌倉、江の島などへ行くこともあった。しかし、条約の制限区域を越えて八王子や箱根などまで行く者は、大胆な、命知らずの人間だと言われた。横浜を去ること二十五マイル以上の旅行をする特権は、諸外国の外交代表だけに限られていたので、公使の許可証を持ってどこかの公使館員に成りすまさなければ江戸へ行くこともできなかつた。周囲の事情でそのできない人々は、そうした恩典を極端な嫉妬の目で眺めていた。公使との個人的な関係はどうにしろ、それとは関係なしに自国民を首都に誘って、一宿一飯をふるまうのは公使たる者の義務ではないか、とさえ口走る不平の徒もあつたのだ。

当時は、そして今でもそうだろうが、次ぎのような理屈が存在していた。それは、国家の公使と言つても、実は横浜在住のきわめて少数の公衆の僕であり、その公僕が自分の雇主たる居留民の願望をいれることができない場合は——陰で悪口されるのは自然であり、当然だといふのであつた。

「ヨーロッパの掃溜め」という好ましからぬ言葉は、居留地に在住するイングランド、スコットランド、アイルランド出身の人々の猛烈な反感を買つた。主としてイギリスの商人からなる横浜倶楽部には、同国の公使館員と領事館員はだれ一人として入ることが許されなかつた。こうした悪感情は大英^{グレートブリテン}国の外交使臣が全く変わった一八六五年（^{イギリス}明治元年）まで続いたのである。イギリスの居留民とこの小社会の指導者たる外交使臣との間が、どうしてこんな関係になつたかと言うと、それは居留民たちが比較的若輩で無知だつたからだ。区々たる行商人の社会に住む人間は、とかく他人が故意に自分たちを侮辱しようとしているとひがみがちで、このひがみが

飲んだりすることもできたわけだ。

時がたつにつれ、このような形で流通される一分銀ブの数が増大して、その値打ちが下がり、交換の割合が市場の場合と同じところまで低落したこともあった。その時には、一時この制度が中止された。どうして金銭が官吏のふところへ、このように大きくなって舞い戻つて来るかということは、経済問題に通じた人ならよく説明できる。私自身の場合を言えば、當時を省みて、まことに慚愧ざんきの念にたえない。歴史の法廷では価値のない弁解ではあるが、私の唯一の弁解は、櫛は子の最下段にいて、事務当局が渡してくれる分け前を受取つていただけであるということだ。

當時の横浜の社会について、もう少し述べてみよう。居留地には婦人がきわめて少数しかいなかった。日本はヨーロッパを去ること遠く、定期航路の船もない。それに、外国人の生命は、大小の刀を帯びた武士階級にねらわれて、相当危険な状態にあると考えられていたのだ。

シナの二大商社であるジャードン・マゼソン会社とデント会社はもちろん横浜に代理店を有していたが、後者は私が到着してから一、二年してつぶれた。そのほかに、上海の大商社であるフレノチャー会社やバーネット会社も横浜に支店を有していたが、この二つとも、もう長いこと忘れられてしまった。その他は多く日本の商社だったが、これに交じつてイギリスの一流商社たるアスピナル・コーンズ会社、マックファーンソン・マーシャル会社、アメリカ屈指の商社であるウォルシュ・ホール会社などがあつた。ドイツ、フランス、オランダなどの商社は、「物の数に入らぬ」と思われていた。

金は豊富だった。いや、そんなふうに見えた。だれもかれもが一、二頭の馬を飼ひ、頻繁ひんぱんな宴会のうちに三鞭酒センバウを景氣よく抜いたものだ。春秋の二期に競馬が催され、時には「本物」の

官のローレンス・オリファント氏とG・C・モリソン氏が負傷した。凶徒は主として水戸藩主の家来であつたが、他藩の者も関係しており、その中には今なお生存している者もあるという。この事件のため、公使のオールコック卿は横浜へ移り、日本政府が町の入口に配置した屈強な衛兵と港内に碇泊^{ていぱく}している外国の軍艦とが嚴重に公使館の警戒に当たつた。

一八六二年の初めにオールコック公使が賜暇休暇で日本を離れるや、それまで襲撃をうけた経験のなかつた臨時代理公使のニール陸軍大佐は、危険の心配はないと信じて公使館を再び江戸の東禅寺へ復歸させた。ところがニール大佐がそこへ着くや否や、同大佐の所信をくつがえすような事件が起こつたのである。

その事件というのは、一人の日本人護衛兵(訳注 松本藩士伊藤軍兵衛)が、館員中一番年少(十五、六歳)の軽率な少年から受けた侮辱に復讐^{ふくしやう}しようとして、寢所の入口に立っていた哨兵^{しょうへい}と巡邏^{じゆんら}中の衛兵伍長を殺害した事であつた。この事件が起こると、イギリス公使館の館員は公文書類をまとめて急遽^{きゆうそ}横浜へ舞い戻り、今のグランド・ホテルの場所にあつた一軒の家に落着いた。この家はホワイというイギリス人の所有だったが、同人は一八七〇年に全くの私怨^{しえん}から就寢中に殺されてしまつた。

諸外国の領事は、神奈川に残つていたアメリカ領事フィッシャー陸軍大佐を除いて、いずれも横浜に駐在していた。伝えられる所によると、ハリス氏は、条約書に神奈川と記載してあるのに日本側が勝手にこれを横浜に代えたのはけしからんと言つて、アメリカの領事が横浜に駐在するのを絶対に許さなかつたのだという。ハリス自身もあくまで反対をつづけて、一步も横浜の土地を踏まずに日本を去り、自分の誓いを貫いた。

なくなるまでの経験と修養とは中年以下の者には容易に得られないものだ。ことに、この行商人の団体がたまたま東洋の土地に住む場合は、いっそうこの傾向が強い。東洋では心の成長が止まり、年齢の点も実質的には本国で送った年月だけで勘定しなければならぬのだ。精神的、道徳的発達をうんぬんする場合には、地球の反対側で過ごした時間というものは、すべて計算外に置かれてしかるべきだ。

条約(訳注 安政条約)によって江戸が各国代表の駐留地と決まった時、日本の風習にしたがって四か所の仏教寺院が主要四か国——イギリス、フランス、オランダ、アメリカ合衆国——の各代表にそれぞれ割当てられた。R・オールコック卿(官位や称号等について年代的に正確さを期することは困難だ。大抵の人の場合は年代を追って昇進して行くからだ。そこで、私は称号を言うときは、その人が本回顧録の物語る最後の時期に帯びていた称号を使用することにした)は高輪郊外の東禅寺を公使館とし、ポルスブルック伯は江戸市街にほど近い長応寺を、デュシェーヌ・ド・ベルクール氏は済海寺を、ハリス氏は麻布の善福寺をそれぞれの居館としていた。

ところが、肝を冷やすような事件が相次いで起きたので、外交団の中でもヨーロッパ地域の外交代表は居館を横浜へ移すに至ったが、アメリカ公使のハリスだけは日本政府の誠意と保護能力とを信ずる旨を声明して、ただ一人江戸に踏みとどまった。一八六二年九月にはすでにハリス公使はプリュイン將軍と交替していたが(訳注 同年五月・文久二年四月両公使交替)、プリュイン公使も前任者にならって江戸にいた。ところが翌年、全くの過失か、放火か、原因不明の出火のために善福寺のアメリカ公使館が焼失したので、やむなく江戸を引揚げた。

イギリス公使館(訳注 東禅寺)は、これよりさきの一八六一年に凶徒の襲うところとなり、書記

味に解すべきだ。シナのイギリス公使館にはシナ係書記官チャイニーズ・セクレタリという肩書のある、その名に相応した官吏が常置してあるが、その職にはいつも学者が当たっていた。

日本人が多少知っている唯一のヨーロッパ語はオランダ語だった関係上、外務省が領事館に職員を配置するようになった際、身分のいかんを問わず、この難解なオランダ語に精通しているところのイギリス人を募ったのである。こうして、ついに四名の適任者を得たが、一人はまず公使館付きの通訳官に任命され、その後さらに高い役にありついた。この男の俸給の一部は、オランダ語を通訳生に教える報酬として特別に給せられたものであったから、普通の俸給とは訳がちがったのだ。八年間そうした職に就いていたが、そのうちに領事の椅子があいたので、「出世する」機会をすかさずつかんだ。この人物は、あらゆる家庭的美德をそなえていて、これという悪い性質は少しもなかったようだ。

この紳士の次ぎは、社交的で多芸多能、音楽の好きな芸術家肌はだ、それに多くの外国語を話すが、しかし骨の折れる仕事はとんと好まないという一等補佐官であつた。この男の手に掛かると報告書は一年半も停滞し、通信文の記録は二か年もほうって置かれた。記録室の仕事を扱う役目をしていたが、それを引き継いだ後任者が「オージーアス王の厩うまや」(訳注 ギリシャ神話、この厩は三十年間掃除しなかったので不潔きわまりなかったが、ヘルクレスは河水を注いで一日で清掃したという)と適評したほど、あとの始末に手をやいたのである。同人は、友人間ではいつも洗札名で通っていて、人柄や長所などは大して問題でないといった種類の人間だった。時がたつにつれて領事になったが、若くして知人のだれかれに惜しまれながら退職してしまった。

そのほか、公使館の職員中には二名の医師がいて、記録室の仕事の補助を兼ねていた。その中

私がこの地に到着したときは、ニール大佐は公使館の書記官で、また公使の留守中は代理公使をやっていた。ニール大佐は、レーシー・エヴァンズ卿の指揮したスペイン軍隊の実戦に参加した老軍人であり、その昔軍医としてポルトガルの海兵旅団にいたことのあるR・オールコック卿に対してはよい感情を持っていないという噂^{うわさ}があった。同大佐はひじょうに筆が達者で、日本政府に対するきわめて峻烈^{しゅんれつ}な覚書を作成した。その中の数通は私の知人F・O・アダムズ氏著『日本の歴史』『History of Japan』の中に記載されている。大佐は以前、ヴァルナ^{（訳注）}ブルガリアの町やベルグラッド^{（訳注）}ユーゴスラヴィアの首都で領事をしていたことがあるので、いわゆる「治外法権」の制度には充分な経験をもっていた。この法律により、ヨーロッパ人は東洋の非キリスト教国のほとんどどこにあっても、その国の法律の適用を免れるのである。ニール大佐の身長は普通のイギリス人よりずっと低く、半白の口髭^{くちひげ}をはやし、額の辺に薄い一つかみの白髪がたれていた。気むずかしく、疑り深い性質だった。その政治的手腕^{てくわん}については格別言うべきこともないが、作成した公文書がまことに明快、巧妙、辛辣^{えんろう}にできているにもかかわらず、彼には自分の置かれている環境についての明察がなかった。これは、弁舌の力や筆の力が、事件の処理に關する適不適を計る尺度にはならぬという一つの例証となるだろう。彼は、きげんのよい時にはすぐに打ちくつろいで、頭の中にしまいこんであるオペラの数節を歌って同僚を興がらせたものである。当時ニール氏は五十五歳ぐらいだったが、そのころすでに、数年後キトー^{（訳注）}南米エクアドルの首都で同氏の命を奪った病気の初期の症状にあったらしい。

次席は日本係書記官^{ジヤパンニーズ・セクレタリ}の肩書を有する人だった。この人は日本人でもなく、日本について知識のある人でもなかった。だから、この肩書は、「日本政府との間の通信を担当する書記官」という意

ならないころだった。仕事に倦むことを知らない勤勉家で、言葉や事件を正確に記憶し、また動植物界を始めとして、自然界の話題に富んでいた。大男は心も大きいというが、その例にもれなかった。私の経験談がこれから進むにつれて、この人物は何度も繰りかえして出て来るだろう。だから、今はこれだけにして置く。以上の人物のほか、通訳生のラッセル・ブルックとロバートソンと、それに私がいたのである。

最後に、とは言え、一番軽視したわけではないが、警護の騎馬士官と護衛の歩兵がいた。後者は第六十七連隊のプライス中尉に指揮されていたが、やがてその歩兵は五十名の水兵と交代した。この水兵は、「愛国の士」スミスとして所属部隊に広くその名を知られていた男の指揮下にあった。この男のことは、あとでもっと述べることにしよう。

騎馬警護隊は、「軍事訓練所」出身の十二名からなり、「豚追い」という名誉ある名前で通っていた。その隊長は中尉で、人がよくて難のない人物だったが、ただ美々しい軍服や立派な馬には目がなかった。私には正装、半正装、通常装などという複雑な軍装に関する知識はなかったので、この中尉の着ていた軍服がその何であつたかわからないが、図々しくも陸軍佐官の徽章を付けていたと言うことだ。これは、重大な軍紀違反なことは間違いない。

それはとにかく、彼の身边を飾っていた黄金の光彩は見るからに素晴らしいもので、これについて少なくとも一度は次ぎのような事があつた。それは、われわれ一行が厳かに行列を整えて、大君の謁見に出かけた時のことだったが、日本の役人がこの中尉を使節と見間違えて、当然公使に向けるべき敬礼をこの中尉に向けてしまった。それほど、この中尉の服装は公使のものより美々しく飾り立てられていたのである。

の一人は間もなく公使館の勤務をやめて、横浜で開業医をはじめ、わずか数年後に相当の財産をつくつて、隠退した。

もう一人は、その人格と、公務によく奉仕した点で、もつと詳細に語る値打ちのある男だ。それは、私の生涯の友人であるウィリアム・ウィリスをさすのであるが、おそらく同君は、実直無比という言葉が適切と思われる性質を、その個人的関係や職務の遂行に際して最もよく示した男だ。幸運にもウィリスの投薬や手術を受けたことのある人々はみな、患者に対して同君以上に優しく親切にしてくれる医師はあるまいと思っている。この男は自分の職務に没頭しつつ、常に自己の経験をひろめる機会を失わなかったのである。当時の医師は、文官の身边にはほとんど起りそうもないような生命の危険にたびたび遭遇しなければならなかった。彼は、負傷者を救うために、敢然として自分の身を危険にさらした。記録室の仕事には、ウィリスは欠くことのできなかった存在で、「オージューアス王の厩」を掃除し、公文書をきちんと整理して、記録を最新式のものに改めたのである。ウィリスを必要とする場合には、彼はいつでも直ちに根気強い働き手となり、また長官に対しては終始変わることもない誠実さを示した。九か年の勤務の後副領事に昇進したが、そのころになると日本人はウィリスの外科医、内科医としての価値を深く知るようになり、イギリスの外務省からもらっている俸給の四倍以上も出すから、ぜひ来てほしいと言ってきた。そこで、小さい刑事事件も外国貿易をもやったことのないどこかの都市の商況報告書を作成するより、将来もつと自分のすぐれた技能を発揮できると思われる医者の道へと進んだのである。この男の巨大な体軀は、開港以来日本に在留していたあらゆるヨーロッパ人の間に伍しても、特に人目をひくに足るものだった。私が初めてこの男を知ったのは、彼がまだ二十五歳になるか

第三章 日本の政情

この時代に、一八六八年の革命(訳注 明治維新)ともいうべき事件にまで発展する運動が、すでに始まっていた。そして、この革命によって日本の封建制度は破壊され、^{いにしへ}古の王政に復帰したのである。

一、二の例外はあるが、外国人はまだほとんどこの時代の趨勢^{すうせい}に気づいてはいなかった。彼らは一般に、次のように想像していた。すなわち、主権者たる将軍と二、三の手に負えぬ大名との間に政治的な闘争が始まっている。これは、将軍が無力でその閥老が無能なため、宗主たる将軍家を無視するに至ったそれらの大名が、神聖な日本の国土を「夷狄^{いじく}」の足で侵させ、貿易による利得をすべて国家の頭首たる將軍家の手に収めさせるような条約(訳注 安政五年の条約)に対して、不満をいだいたために起こった闘争であると。

条約締結の名義人である元首、すなわち将軍が政治上の主権者であって、御門^{ごかど}、すなわち天皇は、単に宗教上の頭首、ないしは精神界の皇帝^{エンペラー}に過ぎないのだと、当時はまだそのように信じられていたのである。

日本の国体に関するこうした考えは、ヨーロッパ人が最初にこの国について知り得た古い知識と何ら変わるところがないのだ。マルコ・ポーロは、日本^{ジパン}について書いた短い二つの章において日本の政治組織のことを何も述べてはいないが、しかし十六、七世紀の間に日本で活動した耶蘇^{ヤソ}

この二人の人間が見間違えられたことによつて、甲の受けた満悦さが乙の当然感じたと思われ
る無念さよりも重かつたかどうかを定めるには、精巧な精神的秤はかりが必要だつただろうが、そんな
ものはすぐに手に入るものではない。しかし、二人の性格の別な面を比較の天秤てんびんにかけて判断す
れば、幸福な思いの方が不幸な思いよりも重さにおいて大いにまさつていたと、私は推定したい。
したがつて、実利主義者にその反対者から不当に嫁せられてゐる道德の規準、すなわち実利ある
ものは常に正しいという規準を適用すれば、この中尉の制服は大いに正しく、人類の賞賛に値し
たものだといふ暫定的な結論に到達するのほかはないと考へたいのである。

ところで、もうこんな雑談ざつだんめいたことは止とどまして、もっと重要な事柄について語ることにし
よう。

したことは、前からの経過を知らぬ患者の病氣を正しく診断できないのと同様に、あえて不思議ではなかったのである。

日本の君主政治の發展をたどると、他国から侵入者がやって来て、純然たる神權政治を行なったのが、そもそも君主政治の始まりである。この政治に誘致された小種族の首長たちが、その侵入者に対して自然に忠勤をはげむようになり、これらの小種族と征服者とが融合して、外見上一組織の一民族を形成するに至った。

その後シナの法律と哲学が輸入され、その影響をうけて行政上の改変が行なわれたが、釈迦の教義、すなわち仏教が伝来するにおよんで、これが、この民族古来の信仰たる神の崇拜に取って代わるようになったのである。

この国の東部及び南部に住んでいた蛮族と、支配的民族との間に、戦いが絶えず行なわれたが、この不斷の戦争によって武士階級の勃興を見るようになった。そして、天皇の血統から起こった平と源の二氏が互いに覇權を争うに至ったが、源氏が勝って、その一族郎党に国土を分与するにおよんで、従来の文官政治は武家政治に制圧されてしまった。日本の君主政治の發展を詳細にたどるには、だれもまだ手を着けていない文書や記録類の奥深い研究を必要とするであろう。

賴朝が征夷大將軍に任ぜられ、封建制度が完全な形をもって樹立されるに至った。昔からの君主政治の正統を継ぐ公家政治は、依然として京都に存続はしたが、それは名目だけのもので、政治的には何らの力も持たず、すでに十四世紀ごろには、朝廷の職能は好古的な研究題目たる過ぎないほど忘却されていた。

東アジアの大帝国であるシナから借用した民法や刑法も廢れてしまい、その一部は痕跡すらも

会の宣教師は、いずれも天皇を宗教上の頭首と信じこみ、將軍を日本の本當の支配者、俗界の王、いや皇帝とさえ称していたのである。日本の事情に関する權威者の中で最も有名で、一番よく引用されているケンペルは、十八世紀の初めに一書を著わして、この二人の主権者の一方を宗教上の皇帝、他方を俗界の皇帝と呼んでいる。ケンペルのこの先例は、私が今書きつつあるこの時代に至るまで、ケンペルのあらゆる繼承者によつて例外なしに踏襲されてきている。實際、日本國家の政体は、早くも十二世紀において、十九世紀後半の初期になつてもまだ見られるような形態をとつていたのである。このように尊嚴な、古い伝統を有する制度は、充分に深く國民の中に根をおろして、國民生活の要素となつていてと考えてよからう。

日本の歴史は、これから新たに書かれなければならない。歴代の天皇のありのままの年代記や、主要な家系の記録などは豊富に残っているが、日本人は今ようやく漢文体の束縛から解放されようとしている所であるし、一方ヨーロッパ人にしても、現在東洋で生活している大多数の人々では勝手ちがいの訓練を要する仕事なので、だれ一人としてまだ新しい日本史の著述に手を染めていない。今から二十年前までは、日本の文学はほとんどヨーロッパ人に知られていなかった。従来、日本語を理解するため使用されてきた手引書は、おかしいほど不充分なものだった。外国人の手に入る一、二の歴史書と言えば、ティツィングが日本人のオランダ語通訳の助けをかりて翻訳し、それをクラブプロスが群盲中の片目の男しか持たないような大胆きわまる自信をもつて刊行した「内裏の年代記」“*Annales des Palais*”という貧弱な本と、シーボルトの著書「日本」のためにホッフマンが翻訳した一組の年表があるに過ぎなかった。だから、外国の代表たちが、日本との条約關係の仕事が始めるに当たつて、当面する政治問題の性質を正確に認識するのに困却

東京の旧称である江戸のあたりに広大な領地を有していたが、また軍隊を指揮して国家を治める人物にふさわしいあらゆる才幹をそなえていた。彼は、元来太閤様と互いに覇権を争って残ったただ一人の権力者であったから、太閤の亡きあと、日本中の大名の中で最も卓越した地歩を占めるに至ったのも怪しむに足りない。二か年の歳月は、二人の先進者、すなわち信長と秀吉の掌握した一切の権力、否、それ以上のものを、この家康の手に帰せしめるのに充分だった。家康を敵とする連合勢力は、全然成功しなかった。一六〇〇年(訳注 慶長五年)に関が原で天下分け目の合戦が行なわれたが、家康はこの合戦に勝って、日本の全土を自分の膝下に屈服させたのである。家康はこの機会を大いに利用して、少しでも忠誠心の疑わしい大名を抑圧する手段をとり、前からの大名の若干を旧領に安堵させたほかは、日本の国土を自分の味方や配下の者だけにあたえた。

前からの大名の中には、九州南部の島津シマズ、本州西端の毛利モリ、本州北部の伊達イダ、南部ナシブ、津輕ツガルなどがいた。家康の子息三人(訳注 義直、頼宣、頼房)は尾張、紀州、水戸——その他の子息も要地(訳注 越前エチノ秀康、越後エチノ忠輝)に封ぜられた。一六一六年、家康が逝去せいきよしたとき、全国の二十分の十九は家康の一味の所領であった。

そこで、イギリスの読者にはバロンという言葉が一番よくその地位を理解させるだろうが、そのバロンに相当する五つ、六つの階級が生じた。第一は、家康の最愛の子息の後裔こうえいにあたる御三家である。家康の定めた制度によれば、將軍に直系の嗣子のない場合、將軍職の継承者は御三家から選ばれることになっていた(実際の場合を見ると、血統が絶えたときには、紀州家だけから選ばれた)。

なくなつた。軍政が全国に布かれ、国民の半ばは彪大な守備隊と化し、残りの半分はそれらに糧食や被服を供給するために困苦して働いた。読み書きは、仏教の僧侶と朝廷の貧窮貴族だけが独占した芸能であつて、国民の學問的天性は長夜の眠りに落ちこんでいた。

外国に侵入される危険がなかつたために、強力な中央集権の必要は感じられなかつた。將軍の支配下の日本は、中世のドイツの国情と同じで、土地は単に獨立してると言うに過ぎない多數の群小統治者に分配され、それらの者の名分上の主君はほとんど傀儡も同然であつた。

こうした状態は十四世紀の第二四半期までつづいたが、ついに後醍醐天皇の時に、この天皇の下に昔ながらの正統な君主による政治を復活しようとする計画が企てられた。この運動が、その後五十余年にわたつた内乱の原因となり、やがて最後に足利氏が世襲の將軍職に就くようになった。ところが、足利氏は間もなく二つの派に分かれて互いに争うことになり、地方の群雄はこれを機会にそれぞれ獨立割拠するに至つたのであるが、十六世紀の半ばに織田信長という一代の風雲児が起こつて、その領地が中央の要衝にあるのを幸いに、各地に蜂起した群雄の間に立つて呼号し、ついに自ら天下の政權を掌握した。この信長が殺害された後に、一般に太閤様の称号で最もよく知られてゐる偉大な武將が国内平定の大業をなしとげた。太閤の權威に反抗を示した小諸侯は、いずれも相次いで鎮圧された。この太閤は、「宮中監督官」(訳注 メロヴィンガ王朝の宮中監督官シャルル・マルテル)のように、新しい支配系統の始祖となつたかもしれないが、その地位がまだ充分に固まらないうちに、経験の浅い年少の世嗣(訳注 秀頼)を数名の後見者に託して、世を去つた。これらの後見者は、太閤の没後たちまち相争うに至つたのである。

太閤に世嗣の後見を託された人々の中で、最も傑出した人物が家康であつた。家康は、現在の

片手に劔けんを握にぎっていたのである。

領地の所有者は、税金を一切納めなかった。国主及びそれと同階級の大名は勝手に百姓に地租を課し、また国内の交易に課税したりして、自分の領地や領民を専制的に支配した。その上に、配下の役人の下した死刑の宣告を毎年一回形式的に中央へ報告する必要があるだけで、領民に対する生殺の権を握っていた。しかし、大名以外の貴族は、それほど独立的な権限を持つてはいなかった。大名はいずれも首都たる江戸に屋敷を構えて、その妻子は永久に江戸に居住しなければならず、大名自身もまた一年交代で江戸と領地の両方で暮らさなければならなかった。

大名が旅行をする場合には、往復ともに少人数の家来を引き連れた。大名の宿泊のために、全国的主要道路にある町々に宿泊所（訳注 本陣）が設けられていたが、こうした旅行に要する費用は、大名の財源に課せられる一種の重税ともなっていたのである。大名が江戸へ到着したとき、あるいは江戸を離れるときに賜たまわる將軍の謁見には厳格な礼法の規定があった。この場合、服従の証として贈物を奉呈するのが定法であった。

大名たちの間には、交際というものがほとんどなかった。彼らは多数の侍女や下僕に取りまかれながら、一生の大部分を世間ときわめて没交渉に送った。一定数の世襲カウセンヤウの評定官（家老と用人）が大名の領地の行政を司り、それ以外の者のあらゆる発議を抑止した。大名自身は外界の様子を全く知らずに育ち、政治の糸は、自分の才能で役職を得た下っ端の役人どもの、目に見えない手であやつられた。

数代を経ると、家康の時代に戦功のあつた武将や政治家たちの子孫は愚鈍な傀儡かいらいに成り下がったが、また一方、世襲制度の弊害は、評定官たる家老の子孫にも同様の影響をおよぼした。こう

第二は、家康の次男以下から出た親戚の家(家門^{カモン})で、第三は、諸国の主(国主^{コクシ})であつた。以上の三階級の諸大名は、一國ないし数國からなる領地、またはそれと同等の広さの土地から収入を得ていた。

それに次ぐ重要な階級は、祖先代々徳川家に仕えてきた大名(譜代^{フダイ})と、旗下の家臣(旗本^{ハタモト})であるが、これらは前述のような徳川家直参^{シキサン}の家臣である。

以上のほかに、家康の最後の合戦で徳川の覇權に服し、その時から麾下^カに入つたところの、在来の大名の残物とも言ふべき外米者扱いの大名(外様^{トザマ})があつた。

大名の資格は、一万石(一石は約五ブッシェル)以上の米穀を産出する土地の領有者であつた。旗本は、一万石以下一千石以上を受ける徳川氏の家臣を称したもので、その下に普通の家来(御家人^{ゴサナ})があつた。

これらの大名の領地も、最初のころはすべてその家臣の間に分配されていた。大名の家臣は、直接の主入との関係においては家来と呼ばれ、將軍との関係においては將軍の主權に服する領主の家来、すなわち將軍の又家来という意味で、陪臣と呼ばれた。侍と足輕との區別は、大名の家来の中に、帶刀の士と普通の兵士の二階級のあることを示すものであつた。

やがて、薩摩の侍の場合を除いて、家臣は自領の石高に相當する米穀の給与を毎年受けるようになったのであるが、それに対する報償として、家臣たる者は自分の収入に応じた人数の部下を養つて、主君のために軍役に服し、戦争の際に出陣するとか、平時は必要な平常軍務に服するとかして、家臣としての義務を果たさなければならなかつた。

薩摩では、土地の封建的細分が極端に行なわれていたので、最下級の家臣は片手に劍をとり、

の公達はいつまでも襲職當時の子供扱いから脱することができず、数年後には全くあつて無きがごとき存在となり、やがて相次いで退けられてしまった。そして、その間、幕府の実際上の頭首には、頼朝の義父たる北条時政の子孫がなつていたのである。

世襲制度の欠陥は、やがて北条氏の場合にも再び強く現われ、それ以来北条氏は重立った顧問官（訳注 内管領）のあやつる傀儡（かいらい）に過ぎなくなつてしまつた。天皇（ミカド）の親政を企てた革命が成功して、一時は幕府の制度を中断させたが、やがて再び足利氏の始祖（訳注 尊氏か）によつて、將軍職の復活が暫時の間実現された。しかし、その権力も時を経るにつれて京都と鎌倉とに二分され、しかも足利氏の二人の頭首がそれぞれの代行者である上杉と細川の両管領（タウシレイ）の権勢の下に立つようになった。

足利時代の末期には、將軍は天皇（ミカド）と同様に空名のもとなり、天下は、各地に起こつた群雄の分割するところとなつた。地方と首都をつなぐ国内交通の不便さが、多分こゝうした情勢を招くにあづかつて力があつたろう。家康の時に、初めて立派な軍用道路が設けられたが、これが家康の国内統一を容易にしたのである。

家康の創設した徳川幕府の組織は、国家の泰平を長く維持するに相違ないと思われるほどしっかりしてゐた。しかるに、世襲制度は、再び強くその影響を現わしてきたのである。三代將軍の家光は、將軍の名にそむかぬ人物であつた。家光は、関が原合戦の四年後に生まれた。祖父の家康は最後の出陣（訳注 元和元年、大坂役夏の陣）の翌年没したが、家光は当時十二歳で、すでに武人としての教育を受けてゐた。徳川の覇業の最後の確立は、家光の有能な活動力に因るものだった。家康と二代將軍秀忠は、大名の江戸参府の場合は市の郊外まで出迎えるのを常としたが、家光は

して、あらゆる大名の家中に、スコットランド山地の氏族のそれに類するような状態が生じた。そこでは、決定的な権力が、貧しくて、しかも貴族的な寡頭執政者の感情と意見によって左右されたのである。

このようにして、大大名の行使する権力は、単に名目上のものに過ぎなくなり、その実は家臣の中でも比較的に活動的で才知に富んだ者（その大部分は身分も地位もない侍）が大名や家老に代わって権力を行使するようになったとき、驚くべき一八六八年の革命（訳注 明治維新）が出現したのである。藩内を事実上支配し、藩主の政策を決定したり、公けの場合に藩主の発言すべき言葉を進言した者は、これらの人々であつたのだ。

何度繰り返して言つても、とにかく大名なる者は取るに足らない存在であつた。彼らには、近代型の立憲君主ほどの権力さえもなく、教育の仕方が誤つていたために、知能の程度は常に水準をはるかに下回つていた。このような奇妙な政治体制がとにかく続いたのは、ひとえに日本が諸外国から孤立していたためであつた。ヨーロッパの新思想の風がこの骨格に吹き当たつたとき、それは石棺から取り出されたエジプトの木乃伊のように粉々にこわれてしまつたのである。

天皇の権力の衰退は、九世紀の半ばから始まつていた。そのころ、初めてわずかに九歳の幼帝（訳注 清和天皇）が祖宗の位についたのである。天皇が幼少のうちには、天皇の外戚たる名門の藤原氏の長者（訳注 藤原良房）が、この国を支配した。この人物は、藤原氏の一門に都合のよい人事を行なうため、官職の任免権を自派で握ろうとかねてから画策していたのである。

これと同様の運命は、將軍職の上にもふりかかつてきた。頼朝の遺児の最後の生存者（訳注 実朝）が殺害された後、年若い公達が相次いで名目上はこの国の支配者となつたのであるが、これら

の夢をむさぼっていた。日本は、森の中に眠る美姫にも似ていた。国家泰平の夢を守る役目の人々は、姫の安眠をさまたげる蠅はえを扇で追うよりも容易な仕事をしていたのである。姫の夢が、熱烈で旺盛おうえいな西洋人の出現によって破られたとき、年老いて耄碌もうろくした皺しわくちやな番人どもは、その職責にたえられなくなり、四囲の情勢の変化に即応するため、もつと適任な人々に自分の席を譲らなければならなくなった。

越えることのできない大きな深淵しんえんによって、国民は社会的に二分されていた。一方には帯刀の家柄、すなわち武士の階級があつた。これに属する人々は、往々にして貧しかったが、その貧乏は身分上の特権によって補われた。他方に農・工・商の階級があつたが、以上二つの社会の間の結婚は禁じられていた。また、武士の階級は名誉という法典によって行動を支配され、それを破る者は自害、すなわち腸をえぐり出す有名な腹切はらぎによって罪を贖あがなうことができたが、後者はむやみに残酷な死刑を科する苛酷かくこくな不文律に服さなければならなかった。農・工・商の階級の者は、武士階級の従順な、そして卑しい下僕であつたのだ。

日本は、すでに十六世紀の半ばにヨーロッパの国々と自由に交際していた。当時、ポルトガルの商人や宣教師は九州の主要な港で歓迎され、キリスト教が日本古来の宗教に取って代わる充分な見込みがあるようにさえ思われた。これに続いて、スペイン人、オランダ人、イギリス人などがやってきたが、しかしオランダ人とイギリス人はただ貿易に従事してただけであつた。

英語を使う極フサイ・ウェスト西の二大社会であるイギリスとアメリカの大規模な伝道事業は、ずっと後年の創建にかかるものである。歴史を顧みれば、一五八〇年にスペインは一時ポルトガルの優位を奪ったが、やがてローマン・カトリック教は日本の僧侶そうりよや神官の敵意を招くようになった。神官

自分の居城にあって、それらの大名を迎えた。彼は、自分のこうした態度に服従することを好まぬ者には勝手に帰国することを許し、干戈に訴えて始末をつけるまで、向こう三か年の猶予をあたえたが、だれ一人としてあえてこれにそむく者はなかった。しかるに、この家光のあとを継いだのは、わずか十歳の幼い息子の家綱であった。家綱が未成年のうちは、歴代の家臣（譜代大名）の中から選んで構成される閣かく老らうが、將軍の名において政治を行なった。こうした制度によつて、徳川氏の頭首の個人的權威はまず最初の大きな打棒を食らうに至つたのだが、さらによくないことは、閣老の首位者である大老の職が、当初から井伊、本多、榊原、酒井の四大名の家に限られていたことで、老中と称する普通の閣老も、やはり譜代大名に限られていたのである。

国内争乱の鎮定から四代將軍の継承に至るまでの間に、世襲制度はこれらの閣老の上にも前述のような弊害をもたらした。閣老連中は単に名目上の行政長官であるに過ぎず、閣老自身の意思というものは全然なく、その意思は自分の家来である世襲の家老によつて指導され、その家老自身もまた、他のだれかによつて糸をあやつられた。そこで、実際の権力は旗本及びそれ以下の徳川直参の家臣の中から選ばれた各部の長官、すなわち奉行の手に落ちたのである。これらの多くは、声望と実力とを兼ねた人物であつた。しかし、奉行としても、怠惰な閣老よりも仕事を好む勤勉努力の士に権能をゆだねようとする傾向が強かつたので、その結果ついには奥御右筆と呼ばれる將軍側近の秘書役が、徳川氏の天下を支配するようになった。実際、政治の機構がひじょうに巧妙にできていたので、どんな小兒でもそれを運転することができたのだ。こうして政治は沈滞したが、それが政治の安定と穿き違えられたのである。

不首尾に終わつた一、二の反幕府的陰謀を除けば、日本は二百三十八年の間、かぎりなき泰平

宗教に奉仕せんとする希望のほかには、何の罪科もない多数の不幸な人々の残酷な犠牲がしのばれ、息苦しいほどの憤りを感じずにはいられない。

この事件以来、ポルトガル人は再び日本に足を踏み入れることを永久に厳禁された。イギリス人は、その商敵であるオランダ人のあまりに幸運かつ巧妙な手口を知って、商業上の競争から早くも身をひいてしまった。そして、この日本にひとり残ったオランダ人にも、爾後^{じこ}は長崎の町はずれに築いた出島^{デシマ}と呼ぶ小島に居住を限るという布告が発せられた。それ以来二百二十五年間、オランダ人とシナ人だけがこの出島^{デシマ}に住んで、次第に貿易高の細ってゆく制限された貿易に従うことを許されたのである。イギリス人は、日本政府のこうした方針を緩和させようと、一、二度努力してみたし、また今世紀の初めにロシア人も同様のことをやったのだが、いずれも徒労におわった。これらの不成功な努力の中から、獲^えられた唯一の儲^{もつ}け物は、興味津津^{とんしん}たるゴロヴニンの日本幽囚記である。ロシアの使節レザノフの提案が日本側に拒否された報復として、ロシアの海軍士官が日本の北辺を襲った事件があったが、ゴロヴニン艦長はそのまた報復として、蝦夷^{エゾ}の地で日本側に捕えられ、投獄された。その獄中生活を書いた手記は、記事の随所に現われる日本の役人の態度を最も迫真的に描いたものであろう。これよりさらに一步を進めた日本との交渉は、一八五二年（訳注 嘉永五年）にアメリカ合衆国の艦隊が日本へ遠征の途に上るまでは、西洋のいかなる国によっても行なわれなかったのである。

や僧侶の連中は、今にも神社や仏閣がキリスト教徒によって破壊され、その収入も奪われるように思つたのである。

信長はキリスト教徒を庇護したが、当時の激しい戦乱のために耶蘇会イエズイットの主な保護者は滅んでしまい、やがて新たに支配者となつた太閤様タイキヤウは、外国人に対して敵意を表明した。キリスト教徒の一女子ガール（訳注 細川忠興の妻ガラシヤ）が、太閤の妾めかけとなることを拒んだことから、キリスト教徒は太閤の最悪の怒りを買つたのである。

信心深い仏教徒の家康は、天下の覇権を握るや、先輩である太閤の宗教政策をそのまま踏襲した。キリスト教に対する家康の嫌悪きらの感情は、秀頼の味方の中に若干のキリスト教徒がいたという事実によって倍加された。若い公子の秀頼自身も、宣教師と親しい関係にあつたと言われていた。

前々からスペインの政治的敵手であつたオランダ人が、これに油を注いだので、迫害の火の手はいよいよ激しくなつた。宣教師たちは、どこまでも嚴重に搜し出されて、宗徒と共に残酷な拷問にかけられた末に、おそろしい方法で死刑に処せられた。狂暴な迫害の手は、家康の隠退後もそのまま続いた。この戯曲の最終の幕は家康の孫（訳注 家光）の時代に演ぜられ、そして、ようやく大団円をみたのである。

その地方の大名の教徒弾圧がもとで、天草島あまぐさに反乱が起こつた。キリスト教徒数千人が反旗の下に走せ集まつた。激烈をきわめた戦鬪の末、この反乱は一六三八年二月二十四日の島原城攻略によって終焉しうげんを見たが、その際三万七千人——その三分の二は女と子供——が、白刃に仆れたのである。この事件に関する日本側の記事を読むとき、防禦ぼくぎょの力もなく、人生の法則として選んだ

較的穩和な手段が、シナ官吏の頑固な保守主義の前に屈して面目を失ったというようなことなかつたのである。

アメリカ人の目は、当時世界の一大産金地として有名になっていた自国のカリフォルニア州と太平洋を隔てて相對している日本に、多年向けられていた。彼らは、この「神国」を取り囲んでいる隔壁を破ろうと試みた、從來のあらゆる計画がみな失敗に歸したことを知っていたので、今度は武力を示してこの日本を開国させようと決心した。日本の国民は物わかりはよいが、近代の砲術を知らない。こういう国民には大砲の威力を見せつけることが、四海同胞説や國際的義務を説くよりも強力な談判の下地となりうるからである。そこで、機略の才と決断力とを兼備した海軍士官ペリーをこの遠征の司令長官に任命したが、ペリー提督は機宜に適した老練な手ぎわで談判を成功させることができたので、決断の方は用いずに済んだのである。

二度目に江戸湾に來航したとき、提督は初回の試みとしては申し分のない条約を、比較的容易に締結することができた。これには多分ペリー提督自身も我ながら意外の感をいだき、会心の笑みを浮かべたことであらう。長崎にいたオランダ人の勧告も確かに効果はあつたろうが、それにして日本の下級の侍の一部に神秘な海外の事情を広く知りたいという願望がすでにきざじていて、それが地位の高い人々の間にひそかに広まっていたと推測することができる。將軍政府のような尊大な政府が、ただ恐怖の念だけで、きわめて立派な古來の制度と誇ってきた鎖国の掟を唯々諸々と廃棄するはずはなかつただろう。

大抵の人間の場合、その動機は複雑である。日本人は慎重という口実で自らを正当化しようとしたのだろうが、アメリカの武力的態度に断じて屈せずと言つたような反対は、日本側になかつ

第四章 条約、排外精神、外国人殺害

ペリー提督の琉球と日本への遠征は、アメリカ人の企てたこの種の計画としては、これが最初のものではなかった。アメリカ人は、半ば烏合の衆たる数百万の植民地人をもつて、よく訓練されたイギリスの軍隊とドイツ人の傭兵を向こうに回して戦い、首尾よくこれに勝つて、アメリカの独立を達成した（その独立は、主としてフランス陸海軍の大きな援助によると言っても過言ではないが）。

アメリカ人は、こうした古い時代の受難をよく覚えていたので、世界空前の大貿易と大海運を擁する強国（訳注 イギリス）に対抗しがたい諸国に対しては、自然同情する念が強かった。そして、独立権を守ろうとする東洋の諸国民に同情を寄せると共に、これらの国々と親しく交際しておけば、通商上の特権を得る上に少なくともイギリス人と同等の資格を得ることができるものと信じていた。この通商上の特権については、アメリカ人はイギリス人に劣らぬ関心を有していたのである。

一八三六年（訳注 天保七年）に、アメリカは使節をシャムと交趾シナに派遣した。この使節は、平和的手段によつて首尾よくシャム国と通商条約を締結することができた。シナにおいては、アメリカも他の西洋諸国と同様に、阿片戦争の成果である協商によつて利益を得た。しかも、この事では、アメリカは武力を行使して非難を招いたというようなこともなかったし、また、その比

なく、また世界の知識に通じているとも思われない人間だった。そして、このような徳性は、当時の日本の王侯の受けた教育からは期待し兼ねるものだった。

翌年にはアメリカ艦隊の再来することが予期されたので、首都の海辺を防禦するため砲台が築造され、また外敵の侵入を防ぐ準備の指揮者に水戸の隠居、すなわち前藩主の斉昭が起用された。奇妙な取合せだが、当時四十九歳のこの貴族は、天皇こそ最高の統治を行なう正当な権利者であることを主張してきた家柄の代表者であり、また同時に、そのころ許されていた諸外国（訳注 オランダおよびシナ）との制限付交際以上に外国との交際を拡大することには、強力に反対してきた人物であった。嚴重な鎖国政策によって首尾よく国土を外国の攻撃から擁護してきた日本——隣邦のシナでは、西洋から新しい宗教を入れたために内乱が起きて四分五裂となり、その内乱の最中に通商問題がもとで西洋の某大国に喧嘩（けんか）を売られ、その結果ひどい目にあったのを目のあたり見えてきた日本が、国内の平和を保持して、ヨーロッパとの勝ち目のない戦争を回避する最上の手段は、過去二世紀にわたる鎖国の伝統を厳守するにありと自ら信じたことは怪しむに足りない。しかし、押しの強い外国人が翌年初めに再び来航したとき、日本にはまだ武力でこれを撃退する用意ができていなかった。そこで、貿易は禁止するが、捕鯨船が長崎、箱館（はこけ）、下田の三港で食料その他の必需品を入手することだけは許し、また難破船の乗組員を親切に取り扱うという内容の条約を結んだ。

日本人は、こうして余儀ない譲歩を重ねながらも、自分たちが現代の戦術を習得して、十九世紀の新式武器と艦船を充分に整備し得た暁には、日本人固有のすぐれた天分によって外国の優秀な装備による武力にも容易に打ち勝って見せるという自信をつないでいた。この信念が、その後

たのである。当時、否、その後まもなく干戈^{かんか}を交じえるに至ったイギリスとロシアの両国が、合衆国に踵^{きんす}を接して日本へやってきた。次いでアメリカの総領事ハリスは、捕鯨船の利益を監視するために下田^{シモダタ}に居を構えたが、シナにおける最新の事件を巧みに利用しながら將軍の政府を説得し、ペリー提督による既得の特権をさらにいつそう拡大させたのである。

一八五八年(訳注 安政五年)、シナの戦争(訳注 アロー号事件による英仏連合軍とシナとの戦い)が首尾よい結果で終りそうに見えたとき、エルギン卿とフランスの大使グロー男爵^{だんしやく}はさっそく日本に渡来して、ハリス氏と同様の条件で条約を結んだ。そして間もなく、オランダとロシアにも同じ特権があたえられ、一八五九年(訳注 安政六年)に、長崎、箱館^{はこがね}、横浜の各港が五大国との貿易のため開かれた。こうして、新しい時代が日本に始まったのである。

將軍の政府が初めて合衆国、イギリス、ロシア各国との間に条約を結んだ時には、日本の国内に条約反対の声がないではなかった。アメリカの軍艦が最初江戸湾に碇泊^{ていぱく}した際には、人心が激昂^{きようげつ}した。日本の聖地をおかす外国の侵入者に対して、いつでも必死の一戦を試みようとする大胆無謀の連中がいなくてもなかったのである。しかし当時の日本には、不平の徒が指揮を仰ぐような指導的人物は一人もいなかった。天皇は將軍の京都駐在官から嚴重な監視をうけていたし、大名連中も互いに仲間割れをしていた。反対派の筆頭は水戸の前藩主(訳注 斉昭^{なりあき})であつたが、しかし水戸家の家憲によれば、將軍を支持し、あらゆる国難に際し意見を提出して將軍を幫助^{ほうじょ}することになつていたのである。

時の將軍家慶^{いえよし}は、ペリー提督の滞在中に病魔の襲うところとなり、ペリーの艦隊の退去後まもなく死亡した。その子家定^{いえさだ}が二十八歳にしてその後を継いだが、この將軍は力量のある人物では

に立つて絶対絶命、ついに家康の信賴の最も厚かつた家臣の後裔である彦根の大名、井伊掃部頭カキノノカミを閣老首席（訳注 大老）、すなわち外国人が執權リシエンと呼んでいる地位に任命して、この難局に当たらせた。そこで、既述のように、ハリス氏が將軍の政府に英仏連合艦隊のシナ海における最近の動靜を説き、その巧みな説法によつて例の条約を獲得したのであるが、これは全く「徳義的」な圧迫を用いただけで、最高の価値のある外交的勝利を収めたものだ。イギリス、フランス、ロシア、オランダ各国との条約が、これに引き続いて締結された。この新しい締約諸国のために、將軍は破棄することのできない政策に縛られて、退引のひききならなくなったが、一方排外派の方には、それまではほとんど成就する機会のなかつた強固な結束が生まれたのである。

この約定のインクの跡が乾くか乾かぬうちに、數週間前から微恙びようの氣味だつた將軍家定は、嗣子も無きまま、祖先を追つて亡き人々の數に入つた。それまでに二回先例のあつた將軍の直系断絶の場合の慣例にしたがつて、將軍の後継者には紀州家の若君（訳注 慶福）が選ばれた。水戸の前藩主とその同志の有力諸侯、すなわち越前、尾張、土佐、薩摩、それに四国にある小領地にはもつたいないほど有能な宇和島の伊達イデは、一橋家の養子になつていた水戸の若君（訳注 慶喜）を將軍の後継者にしたいと望んでいた。しかし、大老は、これらの諸侯に対しきわめて強硬な態度をとつた。そして、自分の指名した紀州家の若君を選ぶことを主張して、反対者を強制的に隱退させてしまつた。そんな事から、將軍家の政策に対するかねての不満に、さらに大老に対する個人的な怨恨が加わり、退けられた諸侯の家来どもまでが、ひどく大老を憎惡するようになった。二年後に、流血の復讐が井伊大老の身に加えられたが、それと共に徳川の制度に対する反感も次第に増大して、ついに徳川幕府が完全に崩壊するに至つたのである。

ずっと長い間日本の対外政策の中心思想となっていたことは、後章の示す通りである。

しかし、この時代でさえ、少数ながら、この方面の新しい研究に進んで手を着けようとした日本人もいたのである。また実際、二人の日本人（訳注 吉田松陰、金子重輔）がペリー提督に対し、彼の旗艦に乗せて渡航させてくれと頼んだのだ。しかし、この日本人の願いは拒絶され、その熱意のゆえに自国政府の咎めをうけて、投獄されたのである。

ハリス氏の下田居住及び同氏の主張する首都訪問の問題は、將軍の側近者にとって新たな頭痛の種となった。將軍の閣内にあつても、当路の役人でない人々は反対の意見書を提出した。そこで將軍は、自己の立場を強固にするためついに天皇（ミカド）に対して条約の裁可を請うの余儀なきに至った。このように、將軍が天皇の權威を仰いだことは、従来の慣習を一変したものと言つても過言でない。信長も秀吉も家康も、自分の行動に天皇の承認が必要だとは考えなかった。家康は、全然自分の責任で通商の特権を外国に許したし、そうする權利について少しも問題はなかった。条約の裁可の件で京都へ伺いをたてたのは、將軍の權力が衰微したことを示す最初の徴候であつた。天皇の大權が一度認められるや、国事に関し天皇に発言権のあることは、もはや議論の余地がなくなつた。朝廷の貴族連中は、機を逸せず条約の裁可を妨害する態度に出たが、こうした妨害的態度は、常に個人及び党派の握る強力な武器になつてゐるのだ。十人中一人でも充分な決断力をそなえた人があれば、その立場が合法的である以上、常に他の人々を屈服させることができるし、また暴力によつて妨げられることもない。

一方では、ハリス氏が条約（訳注 ペリーの結んだ条約）の改正と、神奈川、大坂の開港を迫つたのであるが、朝廷ではあらゆる提議に対し頑として耳を貸さなかつた。將軍の政府はこの両者の間

帶刀階級の者であつた。このように無残な斬殺を行なつた人々も、その犠牲者たちに何らの私怨を持つていたわけではない。政治的な動機からの暗殺で、しかも殺戮者^{さつりくしや}は、いずれの場合にも処罰を受けずにすんだ。そこで外国人たちは、日本は命がけの生活をしなければならぬ国だと思ふようになり、すでに多くの実例のあるこうした不幸な最期を遂げるのを恐れて、居留民は一般に戦々兢兢^{ききょうきやう}として暮らしていた。私は任地へ出発する前、まだイギリスにいた時から、日本では氣候の変化から来る病氣以外に、熟練した剣士の手にかかつて不慮の死を遂げる危険をも考慮に入れなければならぬと考へたのであつた。したがつて私は、相当量の火薬、弾丸、雷管と共に一挺の拳銃^{けんじゆう}を買ひこんだ。外国人居留地の境界外に出る場合には、だれもが常に拳銃を携帯し、また常にそれを枕の下に入れて寝たくらいだから、当時これらの武器はかなり多く日本へ売り込まれたに違ひないと思う。コルトやアダムズの会社は、当時大した繁昌^{はんじやう}ぶりだつた。

しかし私は、長年日本で暮らしたが、その間に拳銃で命を落とした人間はただ一人しか聞いたことがない。それは或るフランス人が、ひどく威嚇^{いかく}的な態度で賃銀の支払いを要求した大工を射殺した時のことである。私の記憶によれば、われわれが江戸において拳銃の携帯をやめたのは、一八六九年(詠注 明治二年)のことである。その主な理由は、この都市に在留していたわれわれ数名が相談の上、拳銃は重くて携帯に不便であるし、それに、血に飢えた両刀の紳士がわれわれの命をねらうとすれば、彼らはその機会をえらび、こちらに弾丸で機先を制するようなまねはさせないだろうとの結論に達したからである。

一八六二年(詠注 文久二年)の春、ラザフォード・オールコックは賜暇を得てイギリスに帰り、その間ニール陸軍大佐が公使館の責任者として残つていた。この代理公使は、前に述べたように、

水戸は反対派の頭目で、徳川一門の宗主に反抗し、朝廷と通謀して盛んに陰謀をやり出した。ところで、外国人は続々神奈川や横浜へやって来ていたが、これらの外国人は、日本の礼法に従って卑屈にべこべこしなければならぬこの国の町人とは全く異なり、自主的な態度を保っていたので、尊大な侍たち^{サムライ}の感情を害していた。間もなく流血の惨事が起こった。イギリスとアメリカの公使が江戸に居を構えてから六週間後の八月二十六日^{（訳注）}安政六年七月二十八日^{（訳注）}の夕刻のこゝと、ロシアの軍艦の士官と水兵が、食料品の買い込みに上陸した横浜の街頭で、ずたずたに斬り殺されたのである。

十一月には、フランス副領事の使っていたシナ人下僕が横浜の外国人居留地で殺害された事件があった。それから二か月後に、イギリス公使館にいたオールコック卿付きの日本人通訳^{（訳注）}伝吉が、江戸のイギリス公使館の門前に立っているところを背後から刺し殺された。それから一か月もたたぬうちに、オランダ商船の船長二名が横浜の街上で斬り殺された。その後八、九か月間は何事もなく過ぎたが、またもやフランス公使の召使が江戸の公使館の門前に立っているところを何者かに斬りつけられ、重傷を負った。一八六一年一月十四日^{（訳注）}万延元年十二月四日^{（訳注）}には、アメリカ公使館の書記官ヒュースケンがロシア公使館の晩餐会^{（訳注）}のあと、乗馬で帰宅するところを襲われて殺害された。次いで七月五日^{（訳注）}文久元年五月二十八日^{（訳注）}の夜半には、これまでにない大胆不敵な襲撃が外国人の生命に加えられた。すなわち、イギリス公使館が武装した凶徒の一隊に襲われたのであるが、その時は日本人の衛兵たちが頑強に防戦した。

これは、開港以来わずか二年ばかりの間の出来事としては、かなりの件数である。襲撃はあらゆる場合計画的なものであったが、それも特別に理由があつての事ではなく、また加害者は必ず

のイギリス人の撃った拳銃の弾丸で負傷した。血のしたたりが地上に点々と庭からさきへつづいていたので、どの方向へ逃げたかはよくわかった。この男は自分が下手人であることを隠せそうにもないと観念したので、將軍の政府から申し渡されるに違いない死刑に先んじて自ら死を選ぶよりほかはなかったのである。

その他の衛兵（イギリスの法律から言えば事前の従犯者）が、明らかに事情を知つていながら犯行にあずからなかったということは、この男が単に私怨のためにやったということを裏書きするものである。犯行に夜陰をえらんだのは、事件後の追求をのがれようとしたからだと思われる。ウィリスの言葉によると、起き上がつて戸外を見たとき、外は真のやみ夜であつたという。満月の前の夜で、ちょうど日本という梅雨期の中ごろであつた。風が強く、空には重々しい暗雲がたれこめていた、というのだ。荒天で、時刻が遅かつたことは（十一時から十二時までの間）、おそらく構内のあちこちにつるした提灯（ちようどん）に火がともっていなかったことの理由になるだろう。それなのに、番兵が燃えつくしたろうそくの取り換えをしなかったのは怪しいと言ふのは、少しく邪推気味だと思ふ。

ロバートソンとジェミーソンと私の三人が、この公使館襲撃の新事件を耳にしたのは、北京から日本へ向かう途中の、太沽（たか）においてであつた。日本での生活には付き物だと、前から聞かされていた物騒な事件の一つを経験する機会を逸したわけで、私としてはむしろ残念だった。もちろん、この事件は私たちをびっくりさせもしなかつたし、また決して自分の任務に対する魅力を薄らげせもしなかつた。しかし、ジェミーソンは上海にもつとよい勤め口を見つけていたので、あとの二人だけが便船を得るや否や横浜へ渡つたのである。

オールコック公使が横浜に官邸を移転させた理由について納得がゆかず、前にイギリス公使館になつていた寺院（訳注 江戸高輪の東禅寺）へ再び舞い戻った。前頁に記した公使館襲撃の（日本曆による）一周年目に、外国奉行の一行がニール大佐を訪問し、その後外国人の生命に關する不穩な事件もなく満一年を経過したことを互いに慶祝し合つた。ところが、その夜大佐の寢室の入口で哨兵と伍長が斬殺されたので、大佐は激怒すると同時に、その日の朝來訪した奉行たちの意圖を疑つた。奉行の公使館訪問と祝賀の挨拶は、こちらを油断させようとしたもので、日本政府、いや將軍の閣老は、文明人たるすべての權利を日本国民から剝奪しなければならぬような裏切的な野蠻行為と關係があると考えた。それは無理もなかつた。と言うのは、最近日本人の番兵が交替して、新顔の連中が前年ラザフォード・オールコック卿の防衛によく奮戦した人々と入れ代わつていたからだ。

しかし、よく考えれば、このような疑惑には正当な根拠のないことが容易にわかるだろう。暗殺者は番兵の一人（訳注 松本藩士伊藤軍兵衛）であつた。この男はイギリス人二名を殺害したのち、自分の屯所へ帰り、日本の流儀にしたがつて割腹自殺をとげた。その行動が陰謀によるものなら、下手人はこの男一人ではないはずである。將軍の閣老は、外国使節の神聖なゆえんを知らなかつたかもしれないし、おそらくは知らなかつたろうが、しかし將軍政府が西方の有力な諸藩主の積極的な反對に直面している現在、外国の武力報復を招くようなことをするのは、閣老にとって不利である。イギリス公使館の居住者慘殺の計画に閣老が關係していたなぞとは、私には全く考えられない。しかし一方から見ると、同僚がこの男の意中を知つていて、ある程度の目的を果たして逃亡するのを黙過したということ、大いにありそうなことだ。下手人は、斬りつけた二人目

そのころどこへ行っても、外国人に対しては、この国の人々の払う普通の料金におかまいなくいい加減にきめられた特別の料金があつた。外国人は劇場で、一分の入場料を払わなければならなかつた。おまけに、「疊^{ふみ}敷^{しき}」という最も高い場所にある敷敷、すなわち役者の口跡^{くちせき}が全く聞きとれないほど舞台から遠い場所に押しこめられた。見るにも聞くにも最上の場所は、舞台の前面に近い平場の土間^{ドマ}である。

ある時のこと、私は劇場へ行き、定額の料金を払うからと言って、土間の桁^{マサ}の一つに席をとつた。ところがだめだつた。彼らは、どうしても金を受取ろうとはしないのだ。一分を払つて外国人の席へ行かねばならない。私は観客の一人として、自分の権利を主張し、あくまでもがんばつた。私が日本人と同じように靴を脱いですわらぬとも言うのか。それはとにかく、私がそこから出なければ幕を揚げぬと言うのだ。私は、勝手にしたらよかろうと答えた。たつた一人の外国人を困らせようとすれば、金を払つた他の全部の観客からも楽しみを奪うことになるだろう。そこで、私は頑として席を離れなかつた。そのため、興行者の方でとうとう折れてしまった。「観客」は、外国人が日本語を使って議論に勝つたのを見て、おもしろがつていた。そのおかげで、その後の横浜在留中、私は劇場のどんな場所でも好きな所に、難なく席を取ることができたのである。

そのころの横浜の劇場は、午前十一時ごろ始まつて十二時間も開演するのが常だつた。得意の出しものは「忠臣蔵^{チュウシンザウ}」、すなわち忠義な家来の蔵、「皿屋敷^{サラヤシキ}」、すなわちこわされた皿の屋敷などであつた。内部の装置、衣裳^{いしやう}や演技の型、背景や照明の素朴さ、脚本の文学的形式などは別に変わったところもなく、ヨーロッパの思想にふれても、著しい改良は行なわれそうもない。舞台の品

第五章 リチャードソンの殺害、日本語の研究

横浜に着いた翌日、私は神奈川へ案内されて、当時会話体の日本語に関する著書刊行の仕事をしていたアメリカの宣教師 S・R・ブラウン師と、日本語の辞書の仕事をやっていた J・C・ヘボン博士に紹介された。前者は数年前に死んだが、ヘボン博士は現在（一八八六年）訳注 明治十九年）も日本に在住している。貴重な辞書の第三版を刊行し、また多年没頭してきた聖書の翻訳をも完成している。

その当時、われわれが神奈川へ行くには、一分の金を出してこの国の櫓舟で湾を横断するか、馬に乗って堤道を迂回するかしなければならなかった。現在鉄道の通じている土地も、当時はまだ埋立てができていなかっただのである。

この国の人々は、一枚の天保銭（十六枚半が一分に相当）を払って乗合いの渡舟でわたっていたが、外国人はこの安い舟に乗ることをどうしても許されなかった。たとえ、舟が岸を離れぬうちにさつさと乗りこんで席を取ったとしても、船頭は一向に舟を出そうとしなかった。船頭がいつまでも動かないので、侵入者の方がとうとう待ちくたびれて、勝負をあきらめるのであった。

在留数年の後、私の日本語がかなり流暢になり、理屈や議論でこの国の一般の人々を納得させることができるという自信がついてからのことだが、私はついに外国人を渡そうとしない渡船場の連中の頑固さに打ち勝つことができた。

兵を動かすなと命ぜられていたにもかかわらず、公使館付きの騎馬護衛兵を率いて飛びだした。フランス公使のベルクール氏は、六名のフランス騎兵からなる護衛隊を現場へ急派した。第六十七連隊のブライス中尉は、数名のフランス歩兵と公使館付護衛兵の一部を率いて繰りだした。しかし、先着者の中でも、おそらくだれよりも一番さきに駆けつけた人は、ドクトルのウィリスであつた。自分の職責に対する強い義務の観念から、ウィリスは全く恐怖のなんたるかを感じなかつたのである。彼は、イギリス人の血のにおいをする刀を持った連中の行列にそつて一マイルほど馬を走らせ、神奈川の街道を通りぬけると、そこで三、四人のイギリス人に会つた。ウィリスは生麦ナムギに向かつて一散に馬を走らせたが、そこには気の毒にもリチャードソンの死体が路傍の木陰に横たわつていた。リチャードソンは負傷して、どうすることもできず、その場に倒れていたところを、さらに喉のどを切られたのである。死体には一面に刀傷があり、どれも充分な致命傷であつた。

死体は、その場から神奈川のアメリカ領事館へ運ばれたが、そこにはクラークとマーシャルが避難していて、ヘボン博士の手で外科治療をうけ、さらにイギリスの医者ジェンキンス博士の手当をうけていた。港内に碇泊していたイギリスの軍艦はただの一隻であつたが、その晩のうちに、キューパー提督が砲艦リングダヴ号をしたがえて旗艦ユーリアス号で来着した。

外国の商人たちの間では、仲間が殺された最初の事件だったので、その興奮はひじょうなものだつた。日本刀は剃刀ひそりのようによく切れ、おそろしい深傷ふぐきを負わせる。日本人は相手の息の根が止まるまで、ずたずたに斬つてしまうのである。この事件はヨーロッパ人にきわめて大きな衝動をあたえたので、両刀を帯びた人間さえ見れば、刺客ではないかと恐れるようになり、往来でそ

位を向上させて、劇場を若い者の道義や作法の学校にしようということを時々聞くが、こうした説を新聞、雑誌で唱える立派な人々でも、私の知るかぎりでは、思い切つて実際にやつて見ようとはしなかった。私の希望としては、芝居は従来と同じように、今後もずっと日本人の娯楽と慰みの場所であつてほしい。当り前の人間が、みんな当り前の所で満足して流すような涙をさそう悲劇と、その外の方に顔面の筋肉を引きのばさせる喜劇とがかわるがわるありさえすれば、場面がもつともらしいとか、妥当であるとかいうことには少しもかまわずに、老若男女がみんな楽しみに行けるような場所であつてほしい。

九月十四日(訳注 文久二年八月二十一日)に、野蠻きわまる殺戮がリチャードソンという上海の商人に加えられた。この人は、香港のボラデル夫人およびウッドソープ・C・クラークとウィリアム・マーシャルという二人とも横浜に住んでいる男と一緒に、神奈川と川崎の間の街道を乗馬でやつて来たところ、大名の家来(おき)の行列に出会い、わきへ寄れと言われた。そこで道路のわきを進んでゆくと、そのうちに薩摩藩主の父、島津三郎(訳注 久光)の乗っている駕籠(かご)が見えてきた。こゝでは、引き返せと命ぜられたので、その通りに馬首をめぐらそうとしていたとき、突然行列中の数名の者が武器を振るつて襲いかかり、鋭い刃のついている重い刀で斬りつけた。リチャードソンは瀕死の重傷を負つて、馬から落ちた。他の二人も重傷を負つたが、夫人に向かつて「馬を飛ばせなさい。あなたを助けることはできない……」と叫んだ。夫人は無事に横浜へ帰つて、急を伝えた。馬や拳銃を持っている居留地の人々は、すぐさま武装して殺害の現場へ馬を飛ばした。

イギリス領事のヴァイス中佐は、ニール大佐から、自分または司令官からの命令があるまでは

つたが、大佐は大いに太っ腹なところを見せて、一切の個人的意見を捨てて自分も出席しようとして約束した。

外国人の間では、こうした状況では、ニール大佐は自分たちの要求するような強力な処置はとれまいという考えが強かった。実際、大佐が冷静な態度をとり過ぎると言つて、非難したのであるが、これは実戦の経験のある人としては当然のことであり、また責任のある地位の人としてはなおさらのことだった。そこで外国人連中は、イギリス以外の公使たちやその他の外国代表の一般的な輿論（よろん）の力をかりて、大佐を引きずつてゆこうと考えた。しかし、この予想は当てがはずれた。会議の席上でニール大佐は、大君（ダイクリン）（将軍）の政府をこの国の政府と見なすことができるのであれば、実際上日本と開戦するに等しい結果を招くことになるが、そのような手段は容認できるものではないと、頭からこれに反対したのである。フランス公使もまた、全くそれと同じ意見をのべた。穏和派が力を得たので、交渉を外交手段にゆだねることになった。艦隊の司令官らはその夜のうちに居留地を巡視して、その結果、海岸の近くに監視船を配置し、非常の場合に軍艦と通信させるだけの処置をとつたのである。

約二十五年を経た今になって回顧すると、私はニール大佐が最上の方策をとつたものと思う。商人連中の計画は、向こう見ずで、威勢がよくて、ロマンチックと言つてよかつた。それはおそらく、あの有名な薩摩侍（サムライ）の勇敢さを压して、一時は成功したかもしれない。しかし、外国水兵によつて日本の有力な大名が大君（ダイクリン）の領内で捕えられたとなると、大君が「外夷」に対して国家を防禦し得ないという明白な証左になるわけだ。そうなれば、大君（ダイクリン）の没落は、実際に没落したよりもずっと以前に、そして、新政府の樹立を目ざす各藩の連合がまだできあがらぬうちに到来したた

んな人間に出会うものなら、それをやり過ごしてから、これで大丈夫と思うところで神さまに感謝したものだ。

その夜島津三郎は、横浜からわずか二マイルたらずの宿場、保土が谷に泊まるということがわかった。外国人たちの意見では、入港している外国船の兵力全部を集めれば、島津三郎を包囲して捕縛するのは造作もないことであり、またそうするのが当然だと言うのであった。そして、その後わが方の損害補償要求に対する日本側の出かたや、考え方について知り得た知識によれば、外国人側のこうした意見は大して誤ったものではなかった。乱暴な両刀階級の秩序を維持するだけの組織ある警察力や兵力がなかった時代のこととて、日本の諸侯のだれかがもしこのような乱暴を受けたとすれば、だれしもこれと同じ手段をとるであらう。しかも、日本にある諸外国の国民は、この国の一つの藩と同等の地位にあったのである。外国人は自分の国の官憲の支配をうけ、その官憲は刑事と民事の両方について自国民を裁判する権利をもち、自国民を法律の埒外に出さず、また自国民を襲撃から守る責任を有していた。

イギリス領事F・ハワード・ヴァイスの司会のもとに、フーパー(W・C・クラークの協同経営者)の家で会合が行なわれた。熱心な討議がつづけられ、外国の海軍当局に頼んで兵員一千を上陸させて凶徒を捕縛してもらうという動議は否決されたが、居留民の重立った者数名を代表者に選んでオランダ、フランス、イギリスの各艦隊司令官を訪問させ、会合での決論を述べさせることにした。

イギリスの艦隊司令官はこの問題に介入することを断わったが、翌朝六時にフランス公使の居館で開かれる別の会合には出席することを承知した。代表者はそれからニール大佐のところへ行

当時は、日本語を学習する手引きがほとんどなかった。J・リッギンス師の書いた、長崎の方言のわずかな語句しかない薄いパンフレットや、ウィリアム・メダースト(兄の方)の編纂へんさんで何年も前にバタヴィアで刊行された単語集、ランドレス編のロドリゲス日本文典、オランダ語で書かれたドンケル・クルチウスとホフマン共著の文法、レオン・パジェスによる同著のフランス語訳、同氏による一六〇三年の日葡辞典の一部訳、ホフマンの日蘭英会話書、ロニイの日本語入門など、そんなものがあるに過ぎなかった。しかも、これらの書物はほとんど日本では手に入らなかった。私はロンドンを立つとき、日本語に関する書物は何も持って来なかった。幸いにも、当時S・R・ブラウン博士が「会話体日本語」を印刷に付していて、上海シャンハイの印刷所から時々刷ったのを送って来るたびに、寛大にも数枚ずつ私にまっ先に見せてくれた。メダースト単語集の日本版は、弁天通りと本町一丁目の交叉点こうさてんにある和本の書店で買うことができたが、すぐにそれは役に立たないことがわかった。しかし、私はほんのわずかながらも漢字を知っていたし、また運よくメダーストの支英辞典を持っていたので、日本語は書いてもらいさえすれば、どうにかその意味を理解することができた。しかし、最初は大いに骨が折れた。私には先生もなかったし、また球戯場に接したホテルの一室に寝起きしていたので、実に騒々しかったからである。

大佐はロバートソンと私に、毎日「事務室」(当時は記録室と言わなかった)に顔を出して、仕事があるかどうかを尋ねるようにと命じた。その仕事というのは、主として公信と、それに際限のない計算書の筆写であった。私の筆蹟は人並みよりも上手じょうずらしかったので、私の希望以上に筆写の仕事が回って来るものと観念した。当時私は、通訳生の任務は何よりも先にその国の言葉を覚えるにありと考えたが、この考えは今でも変わっていない。もし、大佐が命令をあくまで固執

ろう。その結果、日本はおそらく壊滅的な無政府状態となり、諸外国との衝突がひんばんと起って、容易ならぬ事態を招いたであろう。保土が谷を襲撃すれば、その報復として長崎の外国人が直ちに虐殺され、その結果は英・仏・蘭連合の遠征軍の派遣を見るようになり、幾多の血なまぐさい戦争が行なわれて、天皇の国土は滅茶滅茶になっただろう。その間に、われわれの日本へやってきた目的たる通商は抹殺されてしまい、ヨーロッパ人と日本人の無数の生命が、島津三郎の生命と引き替えに、犠牲に供されたにちがいない。

その日の午後、私はホテルの外に立っていたが、騎馬で急ぐ人々の騒ぎを見て、何事が起こったのかと尋ねた。「イギリス人が二人、神奈川で斬り仆された」というのだ。私は、少しも驚かなかった。前にイギリスの新聞に出ていたこの種の事件の記事や、北京からの途中で耳にした公使館襲撃事件などで、外国人の殺害など日常茶飯事ぐらいに思うようになっていたのだ。それに、流血の惨事というものを目撃したことがなかったので、他の人々を残らず殺氣立たせたような憤激の情は、私にはわいて来なかったのだ。私は、自分に同情心の足りないことを、心ひそかに恥じもした。けれども、このように落着いていられなかったとしたら、突然私自身がこんな恐ろしい死の危険にぶつかった場合にひとたまりもなく縮み上がってしまい、私が選んだこの生涯の経歴に全くふさわしからぬ人間になっていたかもしれない。暗殺を日常茶飯事と心得る習慣がついていたので、道徳的麻醉剤で感情が鈍っていない普通の人間なら、おそらく容易ならぬ危険と考えるような惨事に出くわしても、私は平気でそれに直面して行くことができたのである。そんなわけで、周囲の人々が口々にヴァイスを弁護したり、ニール大佐を誹謗したりして、興奮している間も、私は冷静な気持ちで勉強していたのである。

んど同様のものであった。私の「給仕」も英語を知らなかったが、私はこの給仕の世話で、以前は医者であつたが、現在遊んでいるから無報酬で日本語を教えようという男に来てもらった。われわれは、最初は漢字を書きくだして、互いに双方の思いを通じ合つた。この男の書いた最初の文章の一句を記せば、「君愛衆人、我亦敬君如主」というのであつた。私はあとになって、この君は汝の丁寧な言い方に過ぎないと推察した。彼は、ドルも一分銀もたくさん持っているから報酬はいらないと言つた。そこで、毎日十時から一時まで私の部屋へきてもらふことに決めたが、この最初の会合以来、二度と姿を見せなかつた。

私は、自分の「給仕」をなかなかの悪党とにらんでいたが、果たしてそうであつた。私は、かねてから片仮名という日本字のふつてある漢字の日本語辞書を一冊ほしいと思つていた。そこで、給仕を買いにやつたが、間もなく帰つてきて、この町には一冊もないが、神奈川へ行けばお望みの辞書がきつと見つかるだろうと言つた。彼は、一日中歩いて一冊の本を持参し、やつと一冊だけ見つかつたと言つて、私に四分、すなわち約二ドルを出させた。私が横浜に到着した直後のことで、まだ土地に慣れず、物の値段も知らなかつたときのことであつた。六週間後に、私は偶然その本屋に立ち寄り、あの本の値段はいくらかと尋ねて見た。すると本屋は、先日是一分半だけ頂きたいと申しましたと答えた。私の「給仕」はその本を持ち帰り、翌日また本屋へやつてきて、主人が一分以上出したいと言つていと言つたので、本屋の方でも仕方なく承知したというのだ。三〇〇パーセント以下の搾取では満足しないとは、なんという太いやつだろう！ 私はまた、数脚の椅子と一個のテーブルの代金として大工へ支払つた金の中から、この給仕めがうんと掠りを取つたのを知つた。彼は、その不法な利得を返すか、それとも他の勤め口を捜さなけ

するならば、勉強という大切な仕事を大いに妨げることになり、言葉を充分に覚える機会がなくなってしまうと思った。私は勇気を出して、大佐に抗議したが、これは友人のウィリスが私に力づけたからだと言つてよい。私はこの抗議によって何物をも得なかった。大佐は明らかに、私が大の怠け者だと考えたようだ。なぜなら、大佐に向かつて、役所の仕事は勉強の妨げになると言つたとき、一方だけ妨げられるよりも、両方怠ける方がずっと悪いだろうと答えたからだ。

大佐は、初めロバートソンと私に家を一軒借りてくれるつもりだったが、結局当時公使館になつていた広い二階家の一隅の部屋をわれわれ二人に当てがった。その建物は、海岸通りと堀割との交叉点にあつた。現在グラランド・ホテルのある場所で、ホウイという人の所有であつたが、この男は私の無経験と愛書癖の弱みにつけこんで、安百科辞書の端本を、本国で買う場合の完全な一そろいよりも高値で私に売りつけたのである。

私は時々、当時イギリス軍艦セントーア号乗組の少佐であつたアルバート・マーカム(北極で有名な)や、イラストレーター・ロンドン・ニュースの美術通信員チャールズ・ワグマンなどと球戯をやつた。十月の末ごろ、われわれは大佐を説いて、S・R・ブラウン師から週二回の教授をうけることに同意させ、また官費で日本人の「教師」を雇うことをも許してもらつた。ところで、もう一人必要だつたが、この方はわれわれのポケットから支払わなければならなかつた。大佐はまた私たちに、朝から午後一時までは自由に勉強してもかまわないと言つてくれた。断つておくが、「教師」と言つても「教える」ことのできる人をさすのではない。日本でも、北京でも、当時の私たちは一語も英語を知らぬその国の人間を相手にして勉強したのだ。文章の意味を知る方法は、小説家のポーが「黄金虫」の中で暗号文の判読について述べているのと、ほと

がら、それを日本語に訳し直した。この方法は、ロージャー・アスカムが推奨しているもので、また故人のジョージ・ロング氏も、私の学校時代の教科書であつた同氏の著書 *De Senectute* などこの序文でこの方法を勧めている。

私は、間もなく若干の成句をしつかり覚えこんで、それを書簡文の形式に継ぎ合わせる事ができるようになったが、当時の書簡文はただ挨拶の文句をやたらに集めて使えばよかったので、この方はむしろ容易であつた。私はまた、ある書道の老先生からその道の教授をうけた。この先生には、一定の時刻に私のところへ来てもらうことにしていた。先生は涙の出る眼病にかかつていたので、私に書道をやる強い決心がなかったら、その病眼から絶えず流れでる涙のしたたりに、私は到底我慢ができなかつただろう。その涙滴は、手本の上や、先生が私のまずい字を直そうとして、のぞきこむとき、私の書いた紙やテーブルの上に落ちるのであつた。

日本には書道の流派がたくさんある。当時は御家流ゴケリウが流行していた。運悪く、私はこの商人用式の書体を始めてしまった。数年後に、私は大変きれいな字を書く先生に乗りかえたが、この先生も御家流であつた。一八六八年（オクサイエンザン 明治元年）の革命後、これよりも雅致のある自由な唐様カンヤウが流行り出したので、私は高斎単山の教授をうけた。この人は多くの大名を弟子でしに持ち、東京の能書家六人の中の一人に数えられていた。

こうして三度も流儀を変えたため、あるいはそれだけ辛抱ができなかつたからでもあろうが、書道は少しも上達せず、普通の日本人ほどにも書けなかつた。私はまた七、八年の間、ほとんど毎日公文書の翻訳をやってきたのであるが、日本語で誤りなく物を書く力は、どうしても得られなかつた。こんな種類の仕事をやっていただけでは、正確な文章が書けるようにならないのだろ

ればならないかの羽目に立ちいたった。

間もなく、私は公使館内に自分の居室をもらって、思うぞんぶん勉強することができた。ブラウン氏の日本語の教授は大いに役に立った。同氏は、われわれが同氏の著「会話体日本語」の中の文章を復誦するのを聞きながら、文法の説明をしてくれ、また「鳩翁道話」(訳注 柴田鳩翁著の心学講談)という訓話集の初めの部分を一緒に読んでくれたので、私にもいくらか文語の構成がわかりかけてきた。二人の教師は、紀州和歌山出身の医師高岡要と、もう一人だが、後者の名前を私は思い出せない。この男は愚鈍で、ほとんど役に立たなかつた。一八六三年の初めにロバートソンが病気で賜暇帰国したので、私は高岡要を独占することができた。

日本政府との通信はオランダ語で行なわれていたが、オランダ語は当時日本人に知られていて唯一のヨーロッパ語であつた。オランダ語が日本の宮廷用語だと考えられたこともあるが、それは飛んでもない話だ。オランダ語は長崎のオランダ居留地付きの通事だけが習つたもので、神奈川や箱館の港が外国貿易に開かれた時、それらの港へ回されたのである。われわれの方でも、相当地骨折つてオランダ語の通事たちを集めた。イギリス人三名、南阿生まれのオランダ人一名、スウィス人一名、生粋のオランダ人一名で、これらは大変割りのよい報酬を得ていた。日本語を読み、書き、話すことを覚えて、これらの仲介者に取つて代わろうというのが、私の野望であつたことは言うまでもない。

高岡は、私に書簡文を教え出した。彼は、草書で短い手紙を書き、これを楷書に書き直して、その意味を私に説明した。私はその英訳文を作り、数日間はそのままにして置いて、その間に原文の写しのあちこちを読む練習をした。それから、私の英訳文を取り出して、記憶をたどらな

いつもひやひやしたものだ。あるとき、私が東海道をぶらぶら馬でやって来ると、背の高い、例の両刀をたばさんだ男が来るのに出会った。その男は、威嚇するような態度で私の方へ一歩踏み出した。その時私は、拳銃を持っていなかったのだからびっくりしたが、その男は外国人を脅かしたことに満足したものの、そのまま行き過ぎてしまった。街道で行き会った侍で私に危害を加える意図があったと思われたのは、私が覚えている限りではこの時だけだった。侍階級の者はみんな血に飢えていると大抵の人々は思っているようだが、これは全く根拠のないことだと思う。しかし、日本人がどうしても外国人の血を流そうと決心した時には、いつも周到な用意をして、かなり効果的にやってのけたことは認めなければならない。

私が初めて地震を経験したのは、この年の十一月二日であった。在住の外国人の間では、かなりの強震だと言うことだった。だれか、ひじょうに重い人間が、縁地の上靴で縁側や廊下を歩いてでもいるように、家がひどく揺れた。強震が数秒つづいて、次第に弱くなって行つたが、私は少々気持が悪くなった。こんなに長い震動は、自分の体内から生ずる震えに相違ないと、そんな気がしたほどだった。初めて地震を経験した人の気持というものは、大抵こんなものだろう。この現象をどんなに経験しても平気にはなれず、それどころか、最も長く日本に住んでいる者の方が地震の危険には最も神経質だと言われる。それには理由がある。あまり最近のことではないが、ひじょうに激しい地震があつて、家が倒れ、地面が裂け、またたく間に数千の人々が死んだことがある。前の揺れから次の揺れが来る間が長ければ長いほど、揺れ返しが今来るか今来るかと気がでないものだ。これまでは幾度ものがれたが、今度こそ自分の最期の時だと思つと、危険に対する不安な予想はいよいよ強くなり、初めのうちこそ相当長い震動にも我慢してすわつて

う。なぜなら、翻訳者としての注意は、立派な日本語を書くことよりも、原文を忠実に訳す方へ向けられてしまうからだ。日本で欧文の表現法をまね出した結果日本文の言葉に起こった変化については、あとで述べることにしよう。

私の書簡文の知識が役立った最初の機会は、一八六三年（訳注 文久三年）六月のことであつた。その時將軍の閣老の一人から短い書面がとどき、その文面の用語を正確に解く必要があつた。そこで、それは三通りに翻訳された。ユースデンはオランダ語から、シーボルト（訳注 フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの子）は同氏の先生に手伝つてもらつて日本語の原文から、そして私もまた日本語から翻訳した。私が自分の訳文を作ったとき、親友のウィリスが自分の事のように喜んでくれたが、そのときのうれしさは決して忘れられない。三つのうちのどれが一番忠実な訳であるか、だれも言ひうる者はなかつたが、ウィリスと私にはもちろんわかりきつていた。

私は以前、今は横浜にいない私の同僚あてに日本人から届けられた一通の私信を翻訳した記憶があるが、その時は全く逐語的に訳したようだ。と言うのは、「拙者」を「I, the shabby one」（拙い者である私）と訳した覚えがあるからだ。しかし、その時の訳は、私の日本語の進歩の程度を公試に試験したものではなかつた。

リチャードソンの事件の後、大君の政府は条約の制限区域内にある東海道沿いに多数の衛所を設けた。また、大名行列の道筋を別の方へそらして、厚木の町を通らせることを提言したのだが、この計画は失敗した。外国人は遠足によく東海道を通つたものだが、ロバートソンと私もブラウン氏宅で行なわれる日本語の稽古に往復するため、週に二回はこの道を通らなければならなかつた。曉病風に誘われまいと力んでは見ても、大名の行列をやり過ぐす時には生命が危い！と、

第六章 公用の江戸訪問

一八六二年（訳注 文久二年）の末には、伊藤軍兵衛（哨兵と佐長の殺害者）の事件とリチャードソンの殺害について、多数の文書の往復が行なわれた。ニール大佐は、將軍の閣老といろいろ談判をやった。これらの折衝の経過に関する史実については、フランシス・アダムズ卿がすでに詳述しているし、事件の成行きを私はあまり知らないのだから、ここに繰りかえす必要はあるまい。

重要な討論の会合地は江戸であった。大佐は、いつも護衛兵と公使館員の大部分を、江戸へ引き連れていった。ある時は砲艦で乗りつけ、ある時は騎馬で東海道を上って江戸へ乗りこんだものであった。その当時と、その後の数年間は、外国人の江戸へ行く特権は条約で外交使臣だけに限られていたので、どこかの公使館の招待客でもない、無官の外国人は神奈川と江戸の中間の六郷の渡し場を渡ることができなかったのである。

ところで、当時外国の諸公使は、江戸においては生命が危いというので、居館をそれぞれ横浜に移していた。そこで、われわれ若い館員は、江戸行きの番が回ってくると大喜びだった。十二月の初めに、長官の江戸定期参府の随行を命ぜられた時は、私もうれしくてたまらなかったのである。

ニール大佐、A・フォン・シーボルト、ラッセル、それにロバートソンと私から成る一行は、アプリン中尉に騎馬護衛兵を指揮させ、荘重な隊列を整えて午後一時ごろ馬で出発した。ひどく

いるが、家屋の木材の接ぎ目が荒々しくきしみ、棚の上で陶器が陽気に音をたてると、もうたまらないと椅子から飛び上がって、出口の方へ逃げ出してしまふ。

私は日本で、手に汗を握るほどの思いはしなかったが、残念ながら本当に危険だった地震には一度もあわなかった。現在でも日本で見られる、このありふれた地震の実例についてさらによく知りたい人は、地震学協会の定期刊行物や、有名な地質学者である私の知友ジョン・ミルン教授の書いた物を参照されるがよい。同教授は多くの自然の地震について観察し、これを記録しているばかりでなく、ほとんど探知できぬほど本当の地震そっくりの人工地震を起こすことにさえ成功している。

でもそれになじんでいる。妙にごつごつした木が一杯に立ち並び、葉は全く見られないが、かすかな芳香を漂わせる紅白の優しい花が枝を包み、地は一面に落花の雪でおおわれている。屋敷には黒い柵をめぐらしてあるが、この中へ入ることがどんなにうれしいか、驚嘆の喜びともいうべき感情は、実際に入った人でなければ理解できないだろう。二月の初め、日陰の隅はまだ地面が石のようにかたく凍りついているというのに、太陽がこの季節の常で輝かしく照りはえている、そんな穏やかな日和に、梅は今を盛りと咲きにおうのである。しかし私の好みから言うと、梅の花は曇った日に燻んだ色の杉木立を背景として、暖かい炉辺にすわりながら窓越しに眺めるのが一段とよいようだ。しかし、十二月にはまだ、去春の細い若枝をつたつてふくらみかけた蕾がずらりとついているだけだ。

さて、一行は途中別に変わったこともなく、色街で有名な品川の町はずれに到着した。家々の半ばが品のよろしくない建物、いや青楼だと言つてよい。品川で一人の酔漢が道路に立ちはだかり、何やらわれわれに向かってわめいていたが、騎馬護衛兵の一人がこれを引き倒した。こうして、一行は、日没近くになって公使館に到着した。海路江戸へ上った館員たちと護衛の歩兵は、それから一時間ほどおくらせて上陸した。

公使館にあてられていた建物は、広い墓地が背後に控えた東禪寺という仏教寺院の一部であった。しかし、われわれの占めた場所は、一度も礼拝に使用されたことがなかった。日本の大寺院には、イギリスで儀式用室と称するものに相当する室があつて、これは年に一、二回儀式の場合に使われるのだが、いつごろからか、それらを外国使節の宿所にあてる習わしになっていた。江戸では、外国使節に適当な邸宅といえ、これ以外になかったからだろう。日本人は労働階級

寒い日であった。ロバートソンと私は、神奈川を通る時にブラウン氏を訪問したので隊列からおくれてしまったが、寒さとたたかいながら馬を飛ばして、みんなを追いかけた。その間、一行は明らかに並足歩調で進んでいたのだ。

川崎で、われわれは頑固な渡し場の船頭にぶつかって、手間取った。船頭はイギリスの代理公使とは知らず、渡し船を拒んだのである。渡し場を監督する番所の役人は、一行中の数人が彼らの尽力を求めに来るのを見ると、みんな逃げてしまった。大佐は激怒したが、幸いこの時神奈川から騎馬の役人が一名息せき切って駆けつけてきた。この役人は、イギリスの代理公使が日本人の護衛兵を連れずに通ったことを聞いたので、気をきかせて一行のあとを追ってきたのであった。おかげで渡し守は人足どもを集めてくれたので、もはや何のいざこざもなく川を渡ることができた。

六郷川を越えて二マイル、梅屋敷ウメヤシキという有名な遊園地に着き、そこで数人のひじょうに美しい乙女たちの給仕をうけた。当時東海道を旅行する人で、少しでも見えを張ろうとする者は、季節のいかに問わずみなここに足をとどめて、麦蘂色むぎこしきの茶を飲み、煙草タバコをふかし、給仕女をからかったりしたものだ。いろいろな魚の料理や、あたたかい酒サケ(米のビール)もあった。赤い顔をした日本の紳士が、昼間の軽い遊興を終えて駕籠へからだを折り曲げて乗ろうとするところは、よく見かける図であった。

ヨーロッパ人は普通ピクニック用のバスケットを持参して、この梅屋敷で中食をしたものだが、たとえ遅く出た時でも何とか口実を作っては、この魅力に富んだ美しいお茶屋に立ち寄るのであった。日本の梅の木は器用な日本人の手で無数の美術品中に表現されているから、今ではだれ

来て威嚇して見たところで、現場まで来られぬ限り、どうして見ようもないことは言うまでもない。

さて、われわれの居る建物の背後には風致のよい小庭があつて、人工的な池には金魚が見られ、その向かいには松の木が生え茂つた丘が盛りあがつていた。公使の宿所からはど遠く離れた墓地のうしろに当たる場所に、上洞庵ジョウアンという名の小舎こやがあつて、それが先任書記官補の宿所になつてゐた。この辺とわれわれの住居との間は、高い竹垣ですつかり区切られてゐた。その垣の一端は建物の所まできてゐる。どの部屋も広くはなかつたが、ちよつとした手入れで住み心地のよいアパートに改装されてゐた。主な部屋には鉄製のストーブが一つ二つあつたと思うが、その他の部屋には赤熱した木炭を盛つた日本火鉢ひばが暖房用にあるだけで、それから発散するガスのにおいては、慣れない者にとつてははなはだ氣持の悪いものだつた。厚い綿入れを着こんで畳の上にする日本人は、この火鉢に指先をかざして、からだを暖めるのである。日本人は、自分の両腰りょうわを胴体の下に折りまげてすわるから、寒氣にさらされる面はヨーロッパふうに手足を伸ばして椅子にかけるとよりずっと少なくてすむ。背後に屏風びんぶを立てて、隙き間風の当たるのを防ぎながら、綿わたをつめこんだ暖かい座蒲團ざぶたんにすわるのである。

こんな設備でも、南向きの部屋なら冬でも窓を開けはなしてすわつていられるが、外国人がこの設備の中で生活するには別な工夫がある。ところで、日本でヨーロッパふうに生活しようとすれば、冬中適度の温度を保つために外側の障子をガラス戸に取りかえ、鴨居かみいの上部、すなわち部屋を仕切る障子の上方にある隙き間をよくふさいだ上で炉を作るか、あるいはアメリカふうのストーブを備えなければならない。しかし、すっかりそうしても、まだ充分に住み心地がよくはな

を除けば、一般に自分の持ち家に住んでいるので、ヨーロッパの首都の一般住民のように家屋の賃借をすることはない。イギリス公使と公使館の職員を宿泊させるに足る宗教関係以外の大きな建物といえ、大名の邸宅、すなわち大名屋敷ぐらいなものだが、大名の所有家屋を取り上げて外国官吏の収容に当てるというようなことは、おそらく全然問題にならなかっただろう。そこで、敷地が手に入って、必要な建物ができあがるまでは、どこかの広い寺院の「儀式用室」を仮の居館とするほかはなかった。したがって、少なくともある一人の筆者が外国公使を目的敵にして主張したような、外国人は神聖な建物を住宅化することによって日本国民の宗教的感情を侮辱したという非難は、何ら根拠のない言い草であった。

日本とヨーロッパ人の交際の始まった初期のころは、ヨーロッパ人が日本人から「侵入者」として嫌忌目で見られたことは事実であるが、しかし日本人の考えからすれば、外国人が住んで「汚れる」のは寺院ばかりではなく、外国人に割り当てられた住居はどんなものでもみな「汚れる」ことになるのだ。東神寺は海に面する高輪の町はずれにあつたので、艦隊との通信には好都合だった。艦隊の最小の船は、ちょうど台場の内側一マイル半ばかりの距離に碇泊することができたのである。しかし、湾が浅いので、干潮時にはボートは波止場に着くことができず、したがって一八六一年（訳注 文久元年）に起こつたような突然の襲撃に際し、砲艦の援助を期待することは絶対に不可能であつた。しかし、避難の場所があまり遠くない所にあるという気休めから、自然に安慰な気持ちにもなり、また外国艦隊の侵入防止のために築いてある砲台の内側まで砲艦が入つて来れるということが、確かに在留外国人に相当の精神的効果をもたらしていたようだ。だが、一八六一年七月に公使館の衛兵を襲つたような無法者の手にかかつては、いくら近くまで軍艦が

宮殿に見るような広さをもっていた。床は漆塗りで、壁面には風雅な図案を施した日本紙が張られていた。その建物のうしろの下手に日本係書記官の住む平家が建ち、もう一つの敷地に補助官や通訳生の家を建てることになっていた。構内の南側に、四十頭の馬を入れる厩と、牛舎が幾棟も立ちならび、その二階にはヨーロッパ人衛兵の屯所があった。

フランスやオランダの公使館の建築も、ある程度工事が進捗していた。しかし、こうした場所に外国人が居住するのを日本人がきらっていることは、われわれにもわかっていた。役人や武士の階級は、台場の後方を見渡せる、こんなにも見晴らしのよくきく場所に外国人を住まわせることに反対していたし、一般庶民も、以前自分たちの遊樂地であったこの場所が「外夷」の居住地に変わるのを憤慨していた。したがって、この建物を逸早く完成して、早急に引き移ってしまうことが、政策上必要と考えられた。周囲に深い壕が掘られて、その内側の縁に高い木柵ができていたが、これは一八六一年七月五日のような襲撃に再び見舞われるのを充分に防ぐためであった。この建物が完成し次第、イギリスの国旗が江戸の空に再び掲げられるはずだったので、われわれは活気のあふれる期待の感情をもって竣工の日を待ちわびていた。それに、私としては、横浜は混血児のような町で、全然自分の期待にそわなかったから、ことさらその日の到来を熱心に待ちわびていたのである。はるかヨーロッパのあなたから熱望の目を向けていたこの有名な都市に、やがては住むようになりたいと、かねてから望んでいた私だったのだ。

われわれは毎日江戸の近郊を馬で乗りまわし、ローレンス・オリファントの本にきわめて輝かしい色彩で描かれている王子のきれいなお茶屋や、甲州街道の十二社の池、そのほか丸子への途中にある洗足の池、あるいは目黒の不動さまへ出かけたが、こうした場所では茶屋の美しい娘た

らないだろう。足下には、薄くて接ぎ目の荒い板張りの上に、厚い藁の畳が敷かれているが、それを通して身を切るような北西風が床一面に吹き上げるし、木舞に土を塗った壁が縮んで、柱と壁の間にできた隙き聞から、冷たい風が吹きこんでくる。このような建物が公使館員の住居として不適当なことは、初めからよくわかっていたので、公使館の永久的な建物をつくるための談判が長い間行なわれた。そして、そのころまでには絶好の敷地がきまり、イギリスの設計、ただし費用は將軍の政府持ちで、完全な建物敷棟がその敷地に造られていた。隣接の敷地は、同様の目的でフランス、オランダ、アメリカに与えられていた。この一帯の土地は、かつて江戸市民の愛好の遊樂地であつた場所を分割したもので、それまでは春になると、あらゆる階級の人々が集まつてきて、灣内の青い海水を見ながら、桜花の下で楽しんだものである。

御殿山は、將軍政府の歴史上、実に有名な場所であつた。江戸の初期には、この国の元首たる將軍が雄藩の大名の年に一度の江戸入府を出迎えるために、この御殿山まで出向く習わしであつた。しかし三代將軍家光は、自己の覇権をもはや確固たる権利として主張しうろと思つたので、これにいつそう強い刻印を押すため、雄藩の大名をも他の家臣と全く同様に自分の居城内で迎えることにした。その時から、この御殿山は、一般公衆に開放されたのである。

しかし、諸外国の外交官が江戸に居を構えるに先だつて、御殿山はすでに本来の目的からいくぶん離れた用途に使われるようになり、その莫大な土塊が、品川から隅田川に通ずる和船の水路の外側に台場を築くために運び去られていたのである。

この敷地に建造中のイギリス公使館は、一棟の大きな二階建ての洋館で、海に面した高台に立ち、遠方からはそれが二棟のように見えた。大変見事な材木が工事に使用され、部屋はいずれも

は千名から千二百名をかぞえていた。彼らは、普通の両刀（左側の帯にさす長短のサーベル）をおび、士卒は藤の蔓であんだ円くて平たい帽子を、士官は漆塗りの山形の木帽子をかぶり、羽織と称する外套と、袴と呼ぶ幅の広いペティコートふうのズボンをはいていた。これらの人々と外国公使館員との間には、いかなる縁も結ばれなかった。と言うのは、彼らは多くの警吏の場合と同じく、十五日ごとに交代して、偏頗なくこの国の公使館の騎馬警護にも当たっていたからだ。私がようやくこの規則を打ち破って、特定の一隊を私に専属させたのは、一八六七年（訳注 慶応三年）になってからのことであつた。公使館の地所のあたりの所々に、彼らの泊まる小さな詰所があつた。外国人が徒歩や乗馬で外出するのが知れると、何はなんでも六人の隊士が特別に繰り出される。その見張りをのがれることはとてもできなかった。彼らは、私たちが一般市民の階級以上の者と話をしたり、日本人の私宅へ入るのを防ぐことになつていた。ある時イギリスの公使館員が、われわれと同居しながら英語を勉強していた小太郎という若侍の父親をたずねた。ところが、このことが当局へ報告され、その次に再び訪問した時には、その家族の者はもう江戸市中のどこかへ引き移つていた。

私たちは、商店の店先に腰かけて好みの品物を買うことは許されていたが、二つの品物、すなわち地図と、大名や政府の役人の公職名簿は厳重に買うことを禁止されていた。買物はどんな品でもあとで公使館に届けられ、館の構内に住んでいる外国係の役人に渡されて、支払いはこの役人にする事になつていた。ある時、プロシアの使臣マックス・フォン・ブラント氏が、断然この禁制に反抗の態度を示した。同氏は、われわれ外国人が本を買いつけていた神明前の岡田屋書店の店に入つて行つて、大名の名簿（訳注 武鑑）をもとめた。本屋は、品切れですと答えた。フ

ちが魅力の大半を占めていた。市内では、当時、そしてずっと後まで外人訪問客の興味をそそる名所になっていた浅草の観音堂、美しい娘たちが塩漬けの桜の花びらを湯にひたして出してくれる愛宕山、江戸市中を見渡すことのできる神田明神などへ遊びに出かけた。しかし、芝や上野の華麗な將軍家の霊廟は外国人には閉ざされ、一八六八年（訳注 明治元年）の革命まで立ち入りすることが許されなかった。

われわれは、浅草から馬首を返し、現在ヨーロッパふうの競走路がめぐらされている不忍の池のところを通って、池の蓮を通りすがりに眺めることは許されていたが、後に天皇の庭園で有名になった吹上の御苑や、桜田門から江戸城内郭の和田倉門へ抜ける近道は、日本の一般公衆と同様にわれわれにも立入りや通行が禁止されていた。お城に隣接している土地の大部分と、各住宅地区の広大な面積が大名や旗本の屋敷になっていたが、外からそれを眺めても、主人の住む母屋をいかめしい二階建の長屋が取り囲んでいるのが見えるほかは、ほとんど何も見えなかった。こうした屋敷の内部の様子は、ただ愛宕山の頂上から見ることができただけだが、そこから眺めたところによると、大名や旗本が御殿のような邸宅に住んでいるというのは、全く誤りであることと認めなければならない。そこには、低い褐色の屋根と黒い板塀の、不ぞろいな塊りが見えるだけだ。衆人がこれらの屋敷の家庭の様子をのぞくといけないので、愛宕山の上では望遠鏡の使用が厳重に禁じられていた。

われわれがどこへ行くにも、騎馬護衛兵の一隊が、表面はわれわれの身辺の保護という名目で、その実は日本人々と自由に話をさせないために、われわれを取り囲むようにして付いてきた。これらの隊士は、將軍の閣老が旗本の子弟の中から拔擢して作った部隊に属し、その部隊の人数

紙、小説などは、みなここで買うことができた。版木のまだ比較的新しくあったその時分に、版画の蒐集を始めなかったことを大変残念に思っている。北斎漫画の完全なそろいがドル二枚、北斎の富岳百景はシリング二枚ほどで買った。しかし、こんな贅沢品に使う余分の金は、私にはほとんどなかった。私の金はみんな必需品に消費されたのである。

江戸に到着した二日目に、われわれ一行は御老中と称する將軍の評定官を訪問した。御老中という言葉は、「高貴な長老たち」という意味である。外国の使臣が、老中のことを話すのに敬語の御を使うのはいささか不見識であるが、これは閣老の周囲の日本人から聞きおぼえたもので、私は長い間、御は五の意味だと思っていた。私はこの誤りを知って、その後公使館付きの通訳官になった時には、礼儀上敬語を必要とする場合、すなわち直接老中と話す場合のほかは、いつも単に老中と呼ぶことにしていた。

私は、制服のようなものは何も支給されなかったもので、やむなくアプリン中尉から金レースの略式帽を借用した。その後、われわれは金びか帽子を大いに輕蔑するようになり、「真鍮帽子」と呼んでばかりにしたものだが、一八六二年ごろは私もまだ身分を示す標徴を大いに自慢したがる若僧だったので、この接見直後はさつそく幅の広い金レースを少し買って、仲間の士官と同様に身に着けたものである。

行列は、六名の「真鍮帽子」と、きらびやかな服装をした中尉の指揮する十二名の陸軍護衛兵と、われわれの前後左右をまもる約四十名の日本人警護兵の一隊からなる、まことに堂々たるものであった。当今では、外国使臣が一人の随員をも連れずに、見すばらしい人足の引く粗末な人力車で外務省へやって行くのがしばしば見受けられるのだが。

オン・ブランド氏は、本があるのを知っていたので、自分の望むものを出すまではこの店にがんばるゾと言いつ放った。そして、同行の一人を公使館へやって昼食を持って来させ、挺でも動くものかと店先に腰をすえた。護衛兵は途方に暮れてしまい、とうとう使いの者を城内へやって、この外国人に譲歩させることの到底できないことを陳べさせた。夕方近くになって、ようやく、今回にかぎり外国人にその本を売ってもよろしいという命令がきた。ブランド氏は、この日の勝負に勝ったのである。しかし、實際を言えば、こんな極端な手段に訴える必要は決してなかった。地図や印刷本の中でほしいものは、日本人教師を使えば容易に手に入ったからである。

写本類の入手はいつも困難だった。日本では、許可なしには何も公刊できないので、政府の事柄に触れるものは、どんな本でも昔から写本で流布するほかはなかった。この種の物の中に「家康の百箇条」と称するものがあるが、それには日本政府の組織が具体的に書いてあるという。その本には家康以後に設けられた官職のことまで載っているが、この本の重んぜられる最大の理由は、おそらくその中に、家康の口から出た二、三の金言と、政務に参与する大官の任命について実際の運用から認められた若干の規定がのっているからであろう。これとは別に、行政上の多くの規定を書いた確かな本があり、私はこれの一部を維新後に初めて手に入れたが、その時にはもはや實際の役には立たなくなっていた。この写本は、現在大英博物館に保存されている。

監察官の目をのがれる別の方法は、禁書を組みこわしの自由な活字で印刷することであった。

幕府の末期や、天皇の新政の初期の記録、特に政治的事件の実録や政策関係の一、二の重要な論文などは、しばしばこの方法によって印刷されたのである。

神明前は、私たちが好んでよく行った盛り場の一つで、安価な刀剣、磁器、着色の版画、絵草

返事をするらしく、そのためにニール大佐の話すことは何度も反復され、通訳され、そして再び通訳し直さなければならなかった。

閣老たちは、しばしば当惑し切った様子に見えたが、そうすると「奉行」の一人が床几を離れて、摺り足で寄つてゆき、何やら閣老の耳にささやいた。そのやり方は、ラピュータ島の耳打役人（訳注 ガリヴァー旅行記参照）の一人を思い起こさせた。主要な討議の題目は、前に述べた東禅寺の、哨兵と伍長の殺害事件であつた。老中たちは、ニール大佐がラッセル卿の指示に基づいて提出した一切の要求に反対し、イギリス政府が二人の被害者の家族に対する賠償金として、黄金一万ポンドの支払いを要求していると聞かされた時には、本当に目を丸くして驚いていた。彼らは、三千ドルを出そうと言つた。ニール大佐も、とうとう堪忍袋の緒を切つたが、これは明らかに相手の思う壺だつた。大佐は相当強い言葉で、自己の考えの一端を述べた。その日の会見では、およそ三時間も腰掛けていたと思うのだが、何一つ解決を見なかつた。

シーボルトが「サン・オブ・ガン」（卑劣漢）という英語の形容語を、文字通りに「鉄砲の息子」と日本語に訳したのは、この時の事だつたかどうか、今思い出せない。その言葉の前にあつた形容詞は、日本語では文字通りの類語さえないので、シーボルトはそれを訳そうとはしなかつた。時々矛盾したことを言う閣老の態度は、いささか驚嘆に値したので、この「飛んでもない事を言う」人に対して、はなはだ穿つたアングロサクソンの言葉を用いたのは、まあ無理もなかつたのだ。

もちろんニール大佐は、私たちを川の向こう岸へ渡さずに逃げ去つた川崎の渡守や番人についても苦情を申し込むことを忘れなかつたが、ユースデンは通訳するとき、「彼らはみな逃走した」

会見は老中の邸宅内の、長い部屋で行なわれた。両側に小さい黒漆塗りのテーブルをならべ、外国人にはもちろん、日本人にも椅子が用意されていた。テーブルの上には、瀬戸物の火鉢、真鍮の火壺、灰落しのついた黒漆塗りの煙草盆、細かく刻んだ煙草を入れた小ぎれいな黒い箱、二本の長い煙管などが、それぞれ置いてあった。三人の老中が部屋の右側の椅子に腰をかけ、そのかたわらに一人の御目付が控えていたが、この職名はスパイの意味だと説明された。私の想像では、「監察官」とか「情報係」とか言った方が、もっとそれに近い意味だと思う。もっと下座の床几には、八人の外国奉行、すなわち外国事務関係の委員たちが腰かけていた。私たちは、この人々を外国事務の長官と呼んでいたが、これはおそらく神奈川の長官が同様に奉行だったからであろう。部屋の中央には一名の長官が床几に腰をおろし、二名の通事(その中の一名は森山多吉郎)が床にすわっていた。四人の日本の高官にだけテーブルと椅子が設けてあった。長官は袴の下に両手を入れたまま、床几にかけていた。

日本で嚴格な習わしとなっている天候や健康に関する一応の挨拶がすむと、うす青い麻の外衣(記注 袴)(われわれの間では上の方を「翼」と称していた)をまとった侍が、二列にならんで、カステラと芋羹(豆で作った甘い煉り菓子)を盛った黒漆塗りの箱を、また、そのあとから蜜柑と柿を盛ったのを、目高に捧げながら入って来た。それから二様の流儀でお茶が出された。ただ振り出すものと、粉末にした茶の葉に湯を注いで、泡立たせるものとであった。二人の通訳、すなわちオランダ語と英語を話す当方の通訳と、日本語とオランダ語を話す先方の通訳との間で会話のやりとりをするので、会談の進行はまことに遅々としたものだった。これは、いろいろ誤解の基にもなったし、また日本の閣老は時々この二重の障害をよいことにして、至って要領を得ない

ヤードソン殺害犯人の審問と処刑を行なうこと、ならびにリチャードソンの血縁者及びマーシャル、クラーク、ボラデル夫人などに分配すべき二万五千ポンドの支払いを要求することになっていた。

ユースデンは十日に江戸から帰って、外交文書の受領書と、鹿兒島藩主のもとへ役人を派して要求条項の承諾を該藩主に勧告する件は受諾不可能である旨の、閨老側の拒絶文をもたらした。閨老が折れるかどうかの目当てがつきかねたので、パール号を急派する件は一時中止となった。そして、彼らが頑迷度しがたければ、直ちに報復手段を開始し、わが方のあらゆる実力を発揮してまず大君の家臣を威圧し、そのあとで薩摩に対する措置を講じた方がよからうということになった。

そこで、大佐は二十六日まで待つていた。港内には、四月二十四日までに、キューパー提督の旗をかけた砲三十五門のユーリアラス号、砲二十一門のパール号、十四門のエンカウンター号（艦長は勇敢なロードリック・デュー）、十七門のラットラー号、六門のアーガス号、六門のセントーア号、それに三隻の砲艦が投錨していた。通報艦のレースホース号とリングダヴ号は、郵便物を積んで横浜と上海間を往復しており、またコケット号の香港からの来航が毎日待たれていた。ところが、予想されたように、閨老は猶予期間をさらに延長してくれと頼んできた。彼らは三十日間の猶予を求めてきたが、ニール大佐は、これに対して十五日間だけ猶予することにした。

紀州侯の屋敷と私的の關係のあつた私の教師高岡の言では、閨老は二週間以上の猶予が得られるとはもちろん考えていないのだが、イギリス代理公使が必ず要求の期間を削るに相違ないと思つて二倍の期間を求めたのであると言つた。猶予を求めたのは、ただ準備の期間をかせぐためで、

第七章 賠償金の要求、日本人の鎖港提議、賠償金の

支払い（一八六三年〔訳注 文久三年〕）

本国の外務省へは、リチャードソン殺害に関する詳細な報告と、この殺傷事件及び六月の公使館襲撃事件のいずれに対しても、日本政府が満足な賠償を行なわない旨の報告書が送られていたが、一八六三年三月にニール大佐は、大君と薩摩藩主の両方に対し十分な賠償金を要求せよという本国からの訓令を受取った。

四月六日、同大佐はユースデンを砲艦ハヴォックに乗せて江戸へ派遣し、スウィートとクリムプの妻子に対し黄金一万ポンドを支払うことと、その他の件についても充分な陳謝を行なうことを要求し、さらに大君に対しては、殺人犯人の逮捕に何らの努力も示さず、白昼自己の領土内でイギリス人が殺害されるのを放任したという罪で、罰金十萬ポンドを支払うことを要求する旨の外交文書を手交させた。彼は閣老に向かつて、もしこの要求を拒絶すれば、重大な災禍が日本に振りかかるであろうと警告し、回答について考慮するため二十日間の猶予をあたえた。このような長い期間の猶予を許したのは、大君と主な閣老が三日に京都へ出発して不在なためであった。もし、この指定された期限が過ぎても回答がなく、あるいは回答が不満足なものであった場合には、直ちに強硬手段に訴えるつもりであった。また、ハヴォック号が江戸から帰航し次第パール号を鹿児島に急派して、薩摩藩主に対し、一名ないしそれ以上のイギリス官吏の面前でリチ

江戸へ送ることを許さなくなった。政府は戸ごとに、戦争は起きないから驚くことはないという、気をきかせた触れ書を回した。それと同時に、横浜から二マイル以内に住む百姓には、軍隊に自分の家屋を開け渡す用意をせよという布令を出したのだが、兵士はまだ一人もその辺に姿を見せていなかった。

五月四日と五日には、イギリスとフランスの代表者と提督が、二人の外国奉行と長時間の会談を行なった。奉行は竹本甲斐守と竹本隼人正で、この二人は日延べをさらに必要とする理由を説明するため、閤老の代理としてやって来たのであった。奉行は、イギリスの要求に応じ難いのは、大名の反対があるからだと言ふべからしい。というのは、イギリスとフランスの軍隊で大君を援助して攘夷派の反抗を鎮圧し、条約上大君に履行の義務のある約束を遂行させようとする提言が、外国側から日本側に向かってなされた様子が見えるからだ。奉行の方からは、イギリスに注文して回航の途中難破した軍艦の代金だと言ひ繕って、賠償金を出すことにしようと申し出たという話だ。結局、イギリス側は、大君が二十三日までには江戸へ戻ると思われるから、イギリスの最後の通牒に対する大君自身の承諾を得るため、二十三日まで期限を延長することを承知したのである。

私は五日の午後馬で保土が谷へ行き、西方へ向かう大名の妻女の行列に出会ったが、近従の侍以外には武装した者をほとんど見かけなかった。この村とその近傍に一万人の兵士がいるという噂があつたが、明らかに根拠のないものだった。

五月五日の夜中のこと、外国人居留地に雇われていた日本人の総退去が行なわれた。彼らの多くは、どさくさに紛れて「エジプト人劫掠」(訳注 イスライル人がエジプト脱出の際にやった掠奪)を

戦争は必ず起こると高岡は信じていた。

日本人側では、イギリスが猶予を請うたから、閣老が仁慈の心でこれを聞き届けたもので、そうでなければイギリス人は期限の切れた翌日日本側から攻撃されたであろうと伝えられていた。江戸の住民は戦争の開始を予期して、大切な家財を田舎へ移しはじめていた。年少の小太郎は、二十日ごろ母親が連れ帰ってしまった。江戸湾の入口のちょうど外側に当たる浦賀の小港では恐慌が起こり、住民は持ち運びのできる家財を残らず持って、東海道の保土が谷へ移って行ったという。

外国人居留地の方でも、いささかびつくりした様子で、このために何度も会議が行なわれ、在留ヨーロッパ人の安全を計るのは当局者の義務であるという趣旨の決議を行なった。同時に商人連中は、ニール大佐の命令を待たずに自分の財産を捨て去れば、破壊されたあとで賠償金がもらえないと思ったので、大佐から特別の命令の出ないかぎりには居留地を引揚げないという意向を明らかにした。彼らは、一八三九年に広東でイギリス貿易監督エリオット海軍大佐に阿片を引き渡した先例があったので、抜け目なく責任を当局者に転嫁しようとしたのであった。

五月一日に閣老は、さらに十五日の日延べをもとめた。ユースデンは閣老への書面を携えて江戸へ派遣されたが、その書面には、日延べの件はとにかくとして、まず閣老の一人が横浜へ来て、大佐がぜひ渡したい重要な書面を受取るように、と書いてあった。

この土地の住民は、事の重大なのに驚いた。神奈川に店を持っている商人たちは、家財道具を保土が谷に運んで砲撃をまぬかれようとし、いざとなったら、さらに田野を横切っている間道伝いに奥地へ立ち退こうとしていた。五月二日以後になると、日本の当局は、横浜の住民が家財を

と一緒に少々の貸金を請求しに行ったところ、断わられたので、力づくで取ろうとした。そこで相手のフランス人はこの商人を拳銃で撃ち、また副領事ともう一人の者も拳銃を発射した。不幸にも、商人のからだに四発の弾が命中したが、死にはしなかった。フランスの提督は激怒し、直ちにその商人を捕えて旗艦へ送らせた。また、二人のアメリカ人も日本人の襲撃をうけた。その中の一人は八人の日本人のために沼地の途中まで拉致され、槍や鳶口で脅迫された。このアメリカ人は、わが公使館付護衛隊の例の長身の軍医に救われたが、そうでなければ殺されぬまでも、ひどく打ちのめされていただろう。なぜなら、日本人は外国人の国籍の相異を識別することができなかったのだから。

十一日に、私の教師がこう言った。自分のところへ江戸から身分の高い人の使者がやってきていて、イギリス代理公使の意向や、また三、四か月おくれる大君の帰還を同公使が穩便に待つ気持があるかどうかについて、内々に知りたがっていると。そして、それができるならば、閣老よりも地位の高いその人は、千日間(訳注 百日間の誤記か)の猶予が協定されたという布告を発することに同意し、その結果横浜の安寧秩序は回復されるだろう。だが、ニール大佐がたびたびの猶予にいや氣をおこして、交渉の場所を大坂へ移すことになれば、この身分の高い人は自分の提言を外国人に聞き入れさせることができなかった廉で、いやでも腹切をしなければならぬだろうと。私がこのことをニール大佐に通じると、三か月も待つのは不承知だという返事であった。

閣老は、前に大君の帰還を五月二十四日と知らせた。ニール大佐は、そういう事情なら「殿下」が帰還するまで猶予しようと答えたのであったが、十六日になると閣老から、ある事情が突発したので、大君の江戸帰着は何日とも定め難くなったという書面がとどいた。これは解決の

行なつた。ウィリスと私が朝起きて、朝飯を持つてくるように「ボーイ」を呼んだところ、なんの返事もなかった。台所へ行ってみたが、人影がなかった。召使や料理人は、ピストルや日本刀、また銀だと思つていたに相違ないスプーンやフォーク、さては昨晩の飯の残りまでも食卓布に包んで持つて行つてしまつた。その前々日、私はメキシコドルと両替するところに相当多額の日本貨幣を召使に預けておいたのだが、それを私にちゃんと返しているところを見ると、この盗みはまことに奇妙なものでつた。しかし、彼らは半月分の給料の前借を申し出て、しかも現在までの給料は満足に受取つていたのであるから、われわれとしては当然彼らの意図を疑つてもよいわけだ。

高岡と馬丁は二人とも忠実であつた。小使もそうで、私の預かつている小さな錢函ぜにぐんがなくなつたのを知つて、狂喜して祝つてくれた。他の者がすっかり外国人の主人を見捨てて行つたのに、馬丁や小使がこの難儀、しかも危険の際によく主人に仕えてくれたことは、こうした階級に対する信用を大いにつなぐものだ。

われわれは、ようやく数個の卵とカステラを手に入れた。それから私は税関へ出かけて行つて、この掠奪を報告した。もちろん役人は、盗人を捜し出すとは言つてくれたが、盗人のことも家財の方も、それっきりになつてしまつた。終日、町の住民の大部分が続々と立ち退いて行つた。日本人の町へ行つてみると、多くの家が戸を閉め、その他の家々でも、いつでも立ち退けるように家財道具を荷造りしてゐた。私の友達である弁天べんてん通りの角の本屋も、みんなと一緒に逃げ出してゐた。しかし、午後になつて税関から、戦争にはならぬことを人々に知らせる触れが出たので、多数の人々が戻つてきた。外国人も日本人も、町中をあげての興奮ぶりだつた。この殺氣立つた中で、あるフランス人の輕率のために悲しむべき事件が起つた。一人の日本の商人が他の二人

ことに對し大君ダイクーンの名において感謝したが、大君ダイクーンは自己の權威と兵力によつてのみ大名との間の疎隔の解決に努むべきであるから、この外国の援助は辞退せざるを得ないと言つた。

また、大君ダイクーンの政府は、賠償金についてはイギリス側の要求の至当なことを認めたが、即時にこれを支払ふことには躊躇ちゆうちゆうした。これは、大君ダイクーンの政府に對する大名の反抗を誘致する原因となるからであつた。しかし、日本側から、一般の注意をひかぬように分割して賠償金を出すことにしようという申し出があり、それ以上の詳細な論議はまたの機会に延期された。おそらくニール大佐としても、自分の受けた訓令を遂行できたことを本国政府に報告できさえすれば、事件がどのような形でまとまろうと、大して問題にはしなかつたであらう。これで大体の了解はついたが、さらに外国、すなわちイギリスとフランスの代表から、攘夷派の横浜襲撃に對する防禦策を講ずることを申し入れて、日本側の承諾を得た。

ニール大佐は上海の司令官ブラウン少將に書面を送つて、二千名の兵員派遣を要求していたが、この時少將から急信がとどいた。軍隊派遣は不可能であり、不承知でもあると言つてきたのだ。少將は、ニール大佐がこの要求を行なうずっと前から、日本に軍隊を派遣するという考えを嘲笑していたと言われる。しかし、横浜にイギリスの守備隊を駐屯させることは、少將のこの拒絶で単に延期されただけのことで、ラザフォード・オールコック卿が一八六四年の春帰任してからは、情勢の推移によつて、この少將の心境を変化させるだけの充分な理由が生じたのであつた。

この時分は、浪人という日本人の一種不可思議な階級がいだいている目的と意図について、よほど警戒すべきものがあつた。この浪人というのは、大名へ仕官をせずに、当時の政治的な攪乱かくらん運動へとびこんできた両刀階級の者たちで、これらは二重の目的を有していた。その第一は、

無期延期を意味するものだったが、大佐の忍耐はまだ失われなかった。これは、私の教師が私に語ったところと一致した。身分の高い人とは、尾張侯であることがわかった。ところで、高岡の言うには、ニール大佐の回答はすでに京都へ回送されているから、尾張侯としては外国人の強情に対し責任のないことを示しうるわけで、もはや自害の必要はあるまいとのことだった。

十六日までには閣老が譲歩するだろうと、一般に思われていたのだが、日本側がさらに回答の延期を要求したので、もはや平和的解決の望みはなくなつた。日本の友人は私に向かい、大君が諸外国の援助で大名を抑えることは到底できないし、また天皇の尊厳を滅却することも実際には不可能だと語った。わが方が薩摩を攻撃すれば、大君も大名も薩摩と行動を共にせざるを得なくなるだろう。一八六二年に、ルドルフ・リンドーはその「公開状」で、大君は日本の主権者と見なしうる資格があるかと疑っているのであるが、私の想像では、当時の諸外国の代表たちは、大君を援助して天皇と大名から成る攘夷派に対抗させ、もし必要ならば大君を単なる封建的支配者たるにとどめず、それ以上の支配者にしようと考えていたらしい。そう考えたのは、当時外国人の間では、名分上の君主という単なる名目中に存在する無限の権威についてはまだ全く思い及ばなかつたし、また外国人の有した日本歴史の知識では、日本の内乱の場合に天皇の身柄と神器を擁することのできた儼に常に勝利が帰したという事実がまだわからなかつたからだ。おそらく、世界のどの国にも、日本の歴代の皇帝ほど確固不動の基礎に立つ皇位についた元首は決してなかつたろう。

二十五日には、イギリスとフランスの外交及び海軍の当局者と、竹本甲斐守及び新任の柴田貞太郎との間に、またもや談判が行なわれた。日本側はまず、外国代表が物質上の援助を申し出た

で、われわれは断えず日本の兵士の厄介になっていた。私は、この別手組の中に数名の顔なじみの者がいるのに気づいたが、それは前述のように、私が江戸へ行っていた間に親しくなった者たちであつた。

レオパード号とパーシユース号の二隻の单檣帆船型軍艦が、新たにイギリスの艦隊に加えられた。軍事行動が起こるといふ噂は、すでに消失していた。薩摩に対し直接強硬談判をやろうというイギリス側の意向は、大君が善処を約束したため放棄された旨の公表があり、また目下の場合どこまでもこの要求を押し通せば、内乱の起こる恐れもあると信じられた。

六月十四日には、外国奉行の菊地伊予守と柴田貞太郎が横浜のイギリス公使館へきたが、これは四十四万ドル(十一万ポンドに相当)を七回に分割して六週間以内に支払い、第一回分は十八日に渡すという協定を行なうためだった。ところが、その十八日に閣老の一人から書面で、退引きならぬ事情が生じたので約束の履行はできないが、一兩日中に自分が横浜へ出向いて、イギリスの代理公使とこの件で相談したいと言ってきた。

ニール大佐が大君の閣老とこれ以上の交渉を重ねることを拒絶して、二日間の考慮の後に事件の解決をキューパー提督の手へゆだねたことは、当然の措置であつたと考えられる。この時提督は、採るべき手段に迷つたと言われる。彼は、一度も実戦で大砲の発射されるのを見たことがなかったのだ、日本人が最近購入した多数の汽船を直ちに拿捕するようという大佐の示唆についても、ほとんど了解しかねたのである。

さあ、江戸の閣老はすっかり驚いてしまった。何度も引き延ばしをやろうとして、とうとうイギリス当局者の堪忍の緒をすり切らせてしまったのだ。しかし、閣老たちは公然たる屈服を避け

天皇を往古の地位に復帰させること、否むしろ、大君を大諸侯と同列にまで引き下げることに。第二は、神聖な日本の国土から「夷狄」を追ひ払うことであつた。彼らは、主として日本の西南部の出身者であつたが、東部の水戸からも輩出してゐたし、その他のあらゆる藩からも多少は出てゐた。五月の末には、浪人が神奈川襲撃をたくらんでゐるという風説があつたので、神奈川にまだ居残つてゐたアメリカ人も何がしかの「騒動に対する補償金」をもらつて、余儀なく住居を横浜へ移さなければならなくなつた。

大君側では、一切の手段をつくして国内の敵を鎮圧しようとし、同時にまたこのような風説を利用して、横浜の外国人を往時の長崎におけるオランダ人の監獄屋敷のような一定範囲の地域内に押し込めることができないものかと思案した。また一方、こうした考えを実行に移させるような性質の事件もないではなかつた。イギリス領事館の書記官補の一人が神奈川の丘の上の茶店に立ち寄ろうとしたとき、二人連れの両刀を帯びた男に暴力で威嚇された。書記官補が拳銃を突きつけると、二人はあとずさりした。そのすきに乘じて、彼は波止場へ駆けつけ、舟で無事に横浜へもどつてきた。船頭が舟を出すのを、番所の役人が邪魔したという報告もあつたが、それとはかく、役人たちは半分刀を抜きかけていた凶漢どもをなだめた。侍は血を流さなければ、抜いた刀を鞘に納めぬということを当時聞かされてゐたから、この事件はその性質上大恐慌に値するものだった。

六月の初めに、六人の浪人どもがこの土地に潜伏してゐるという情報があつたので、別手組（江戸の公使館に護衛兵を出す団体）が、訓練された若干の部隊と共に横浜へやつてきて、野毛山の下に新築された建物内に駐屯した。その時から一八六八年の革命（訳注 明治維新）のずっと後ま

いて商人や銀行家が雇っている者)の全部を、貨幣の検査と勘定のため方々から借り集めた。記録室は、これらの知識的シナ人で混雑した。彼らは、貨幣と貨幣をぶつつけて見たり、いくつかに分けて積みあげたり、これらを箱につめて艦隊の甲板へ運ばせたりするのに、忙しく立ち働いた。この仕事は三日間かかった。ニール大佐は、すでに二十四日に手紙を提督におくって、強圧的行動に出るという好ましくない仕事の解除をしておいた。

賠償金が支払われた当日の日付で小笠原図書頭(略さず)に書くとは、諸港を閉鎖して外国人をことごとく国外に放逐せよという大君の命令をニール大佐に伝達したが、この覚え書は私が翻訳官としての能力を発揮する必要に迫られた最初のものであった。もちろん私は、教師の手助けがなければそれを読むことができなかったが、前に書簡文の稽古をしていたおかげで文の構造を理解することができた。そして、おそらく公使館で翻訳されたものの中で、最も原文に近い訳文を作ることができたであろう。私にとってこの上もなく大切なこの文書は、次の通りのものであった。

I communicate with you by a despatch.

The orders of the Tycoon, received from Kiôto, are to the effect that the ports are to be closed and foreigners driven out, because the people of the country do not desire intercourse with foreign countries. The discussion of this has been entirely entrusted to me by His Majesty. I therefore send you this communication first, before holding a Conference as to the details.

Respectful and humble communication.

ようと八方手を尽くし、小笠原(訳注 老中格、小笠原図書頭長行)が自身で横浜に出向いて、フランスの代理公使と司令官に調停を依頼した。ところが、司令官はこれを拒絶して、イギリスの要求に応ずるように勧告し、さらに横浜の防禦を自分たちの手にゆだねるように要求した。

小笠原はちょうど京都から帰ったばかりのところ、天皇と京都の攘夷派の指令によって大君が発した命令、すなわち全部の港を閉鎖するように外国代表者と協定せよという大君の命令書(ダイクイン)を京都から携えてきたところであつた！ 小笠原自身としてはこの命令をいやがつていたように、これに対する最良の回答内容についてフランス代理公使に暗示さえしたくらいであつた。この飛んでもない事が発表された時の横浜の外国人社会の驚きようときは、一頁にわたって詠嘆の文句を書きならべても、充分に表現はできない。しかし、彼らは連合艦隊が港内に碇泊しているので安心し、外交代表がどんな回答の仕方をしようとも少しも心配はしなかつた。

日本政府がフランスの当局者を説いて日本側のために仲裁に立たせようとしたことは、完全に失敗した。もつとも、この仲裁の依頼と同時に、外国人はみな直ちに横浜から退去すべしというばかげた要求が行なわれたのだから、仲裁のできるわけはなかつたのだ。日本政府は、六月二十四日午前一時にニール大佐に通知書をおくり、賠償金を支払うから受領の時刻を知らせてくれと言つてよこした。これに対するイギリス側の回答は、分割払いという先般の協定は、日本政府の方で破つたのだからすでに無効であり、今日中にその全額を支払わなければならぬといふのであつた。

これは、その通りに実行された。朝早くから、各二千ドル入りの箱を積んだ荷馬車が公使館に到着し始めた。公使館では、シナ人の貨幣検定人(貨幣が本物かどうか検査するため、極東にお

た。

何らの説明も付してないこの通告の大胆不敵な性質についてはさておき、この国の精神界と俗界の二人の元首が、開港場を閉鎖して、それらの土地から条約締結諸国の臣民を退去させようと決定されたことが閣下（ユア）を通じて伝達されましたが、これによって必ず日本に生ずべき不幸な結果については、両元首ともに全くこれを感じておられないものと本署名者は信ぜざるを得ません。

大ブリテン女王陛下下の代理である本署名者自身としましては、以下の所見を申し述べる必要があります。まず第一に、大ブリテンがこの国との間の条約上の責務を存続させ、これを励行する上に最も効果のある、嚴重にして断固たる処置に出すべきことは毫末も疑いありませんが、この処置を変更させ、あるいは緩和させることは、おそらくまだこの国の両元首の可能とするところかもしれない。そののみならず、条約上の責務を従来よりもはるかに満足な、そして強固な基礎におくために、その目的達成に向けられる何らかの合理的にして首肯することのできる手段をすみやかに公表させ、またこれを実施させることも、これまた両元首の可能とするところでしょう。こうした方策は、目下大君、または天皇陛下、もしくはこの両者によって、あるいは胸中に秘められているところのものかもしれませんが、そのままでは日本に重大かつ焦眉の危険をまねくことになりましょう。

それゆえに、閣下（ユア・エクセレンシー）の通告を受領した結果、女王陛下下の政府の決定がしかるべき手順によつて実施を見るに至りたる暁には、現在いかなる腹案を有せらるるとも、もはやそれを実現するに由無きことをこの国の両元首に嚴重に警告することは、本署名者の義務であ

(訳注)「今本邦ノ外国ト交通スルハ頗ル国内ノ輿情ニ戾ルヲ以テ更ニ諸港ヲ鎖ザシ居留ノ外人ヲ引上シメン
トス。此旨朝廷ヨリ將軍へ命ゼラレ將軍余ニ命ジテ之ヲ貴下等ニ告ゲシム。請フ之ヲ領セヨ。何レ後刻面晤ノ
上委曲可申述候也。」

文久三亥年五月九日

各国公使宛

小笠原図書頭

(続通信全覽編年之部)

この英訳文は、おそらく少々逐語訳に過ぎたであろう。冒頭の文句は単に“Monsieur le Char-
gé d’Affaires”(代理公使殿)という意味に等しく、この手紙の結語はフランス語からきた“assur-
ance of high consideration”とほとんど同じものである。しかし、その他は正確な逐語訳だ。日
本人の作ったオランダ訳からさらに訳された英文(青表紙文書を見よ)では天皇のことに触れてい
るが、この原文中には何らこれに相当する語が見当たらない。この「回想録」では、公刊された
手紙をできるだけ材料に用いないつもりなのだが、この時のニール大佐の回答だけは引用せざる
を得ない。それは次の通りである。

ニール中佐(訳注) 当時はまだ中佐より

日本の外国事務相へ

一八六三年六月二十四日

横浜にて

「大ブリテン女王陛下下の代理公使である本署名者は、閣下(ヒズ・エクセレンシイ)が大君の訓
令によって本署名者にあて発せられた法外な通告を、同僚と共に極度の驚愕をもって受領しまし

な妥協を妨害する運動を、抑圧しようと言うものであつたろう。この種の援助政策がうまく実行されれば、大君は祖先伝来の地位に安定し、その後継者を顛覆させたと一八六八年（訳注 明治元年）の革命は困難となり、おびただしい流血なしには成就しなかつたであらうし、また日本国民は、外国の援助で自己の地位を強化した支配者を憎悪するに至つたであらう。そうなれば、大君は苛酷さわるまる抑圧手段によらなくてはその地位を保ち得なくなり、国民は恐るべき永久の独裁政治下に屈服を余儀なくされたであらう。大君の閣老が、外国からの援助申し出を拒否するだけの充分な愛国心を持ち合わせたことは、まことに喜ぶべきことであつた。かくして、日本人は自己の力で自分の救済を行なうようになり、革命が勃発した時も、生命財産の損失をわずかの範囲に食い止めることができたのである。そして、この革命の達成によつて日本国民は、文明化された比較的自由的な制度を建設し、それにより利益をうけることができたのであるが、もし日本人がヨーロッパの某国人（訳注 フランス人）の提言を聞き入れたとしたら、それは永久に阻止される結果になつたかもしれない。

ります。

なお、この際本署名者は、閣下(ユ・ア・エクセレンシー)に対し次のことを申し添えなくてはなりません。ただ今閣下(ユ・ア・エクセレンシー)を通じて行なわれた軽率な通告は、文明国と非文明国とを問わず、あらゆる国の歴史に類を見ざるところであります。それは實際上、条約締結国全体に対する日本自身の宣戦布告にはかなりません。直ちにこれを取り止めなければ、その結果は最も苛酷かつ最も効果的な懲罰によって、その罪を償わなければならぬでしょう。この旨、閣下(ユ・ア・エクセレンシー)より大君陛下の上聞に達せられ、さらに大君によって確実に天皇に奏上せらるべきものと愚考いたします。敬意と謹言とをもって、

エドワード・セーント・ジョン・ニール。

第二、三、四節(訳注 第二、四、五節の誤りか)において、三人称から二人称に変わっている点を除けば、この文書の構成は巧妙だし、その句切りも見事に均整がとれている。その用語は現代的な好みから言うなら多分強きに過ぎるだろうが、ほとんど圧倒的な有力艦隊を背後に擁する場合には、自分の感情をぶちまけたくなる誘惑は、容易に抑えがたいものである。

この文書の筆者が言っているところの、日英条約上の責務を従来よりいっそう「満足な、そして強固な基礎」におくために、「合理的にして首肯することのできる手段」とは何を意味するものであったかは、ただ推測に任せるのはかはない。思うに、それはイギリス側から大君に与えようという物質的援助の計画を暗示するもので、この援助によって、日本政府の対外親和政策に反対する西南部の諸大名の運動を抑制し、また天皇の条約批准を阻害するために大君と天皇の正式

ニール大佐から私に至るまで、公使館の全員が軍艦に乗りこむことに決まり、ウィリスと私はリス・ムーアの指揮する外輪单桅帆船のアーガス号に搭乗した。

航海中は天候がひじょうによく、艦隊は八月十一日の午後鹿児島湾口に到着し、同夜はそこに碇泊、翌早朝湾を遡航して、鹿児島町の沖合へ達した。

こちらの要求を書いた手紙があらかじめ用意されていたが、これはシーボルトとその教師の手で、どうにか日本語に翻訳されたものだった。相当難解な文書だったので、この日本語の訳文によつては、意味がよく通り兼ねたであらう。

二名の役人を乗せた一隻の舟が、すぐ海岸から漕ぎよせてきたので、それに手紙を渡した。その翌日の午後、別の役人が数名旗艦へやつてきて、回答の期限については何とも言明はできぬと言った。その際ニール大佐を訪れた重役の名前は伊地知正治といった。私は後年、この伊地知と江戸で昵懇の間柄となったが、この男とこれに従う四十名の者が、イギリスの士官を急襲して重立った者を殺害せんものと、充分な計画の下に主君と別盃を酌みかわして来たのである。彼らは、こうした方法で、旗艦を奪取しようとしたのだ。それは大胆至極な考えではあったが、当方で前もって警戒していなかったら、あるいは成功したかもしれない。それらの者は二、三名しか提督の室に入ることを許されず、一方水兵たちは、後甲板に居残った者たちを警戒の目で注視していた。

これらの日本人がまだ艦上にいる間に別の船が到着したが、それは援兵を乗せてきたものか、計画的殺戮の取消し命令をもってきたものか、私には判断できなかった。

伊地知はあとからやつてきた連中と何やら相談していたが、やがて、自分は陸へ帰らなければ

第八章 鹿兒島の砲撃

こうして、本国からの訓令の一部は実行された。いまや、薩摩侯に対して賠償を要求する問題だけが残されていたのである。

この要求の中には、イギリス官吏の面前でリチャードソン殺害者の審問と処刑を行なうこと、リチャードソンの親族と襲撃された他の三名に対し薩摩侯は二万五千ポンドの賠償金を支払うこと、の二項が含まれていることを忘れてはならない。マーシャルとクラークの負傷はもうなおつてはいたが、しかしクラークの場合は肩に危険な刀傷をうけ、その傷ははなはだ重かったのである。傷を負わなかったボラデル夫人は、もうシナへ帰っていた。

もちろん大君側では、薩摩に対する問題の解決を任せてほしいと言ったが、ニール大佐がこれについて念をおすと、この事件については政府が無力なことを、小笠原自身が認めたらしかった。よつてイギリスの代理公使は、正式に提出せよと本国から訓令されている要求書を薩摩侯に突きつけるために、自分と幕僚を鹿兒島まで警護して行くことを、自己の責任をもって提督に依頼したのである。

提督は、最初二隻以上の軍艦の派遣には同意しなかったのであるが、結局イギリスの軍艦ユーリアラス号、パール号、パーシユース号、アーガス号、コケット号、レースホース号、それに砲艦ハヴオック号をもって艦隊を編成することにした。

興奮し、任務に従って各自忙しく立ち働いた。薩摩人の抵抗を予期したからだ。ところが、アーガス号がサー・ジョージ・グレー号（訳注 青鷹丸）のわきに横付けになったとき、その船の乗組員が反対側から用意の小舟に乗り移って、すばやく姿を消すのが見えた。われわれは、決して捕虜を獲るつもりはなかったのだが、二人の日本人がサー・ジョージ・グレー号に残っていて、私に向かつて五代（訳注 五代友厚、通称才助）と松木弘菴（トキマツ）であると名乗った。この二人は旗艦に移されてから、オタニ（Otani）と柏（カシワ）という変名を用いた。前者は氣品のある容貌のすこぶる立派な男子で、私の見るところでは船長だったと思う。もう一人は医者だったが、この方は一八六二年の第一回日本遣欧使節に随行してヨーロッパへ行き、ちょうど帰国したばかりであった。この兩人とも、後に有名になった。前者はいずれかと言えば投機的な実業家で、天皇の政府から借用した資金で大坂（オサカ）に製藍工場（せいあいこう）を設け、後者は一八六八年に一時神奈川県知事をやったが、後に寺島宗則の名で外務卿となり、現在もまだ東京で官職についている。

われわれは、拿捕した船を艦の舷側につないで、桜島の下にある碇泊所へ帰った。艦隊は、町の前方にある砲台の着弾距離外に出るため、十二日の午後同所へ移動していたのである。そしてユーリアラス号とパール号は、われわれの艦と砲台の中間、すなわち海峡の中央あたりに投錨していた。ここで私は事件の成り行きを見つめていたが、それは思ったよりも早くやってきた。しかし、日本側は何の気配も見せなかったのだ。陸上の動きを時々瞥見（べつけん）するだけでは、その意図を察知することはできなかったのだ。

しかし正午になると、突如一発の砲声（ほうせい）がきこえた。それと同時に、全砲台がわが艦隊に向かつて火ぶたを切ったのである。雨が降り、風が台風のように吹いていたのだが、提督は直ちに交戦

ならぬと言った。その日の夕方になって、先方の回答書がとどいた。それを持参した者に、この回答が満足すべき性質のものかどうかを知らせるから、明朝再び来るようにと告げて、引き取らせた。

回答書を調査した結果、受理することのできない理由のあることがわかった。回答書には、被害者は発見できなかったとあった。そして、大君が条約を結ぶに際して、外国人に大名の街道通行の邪魔をさせぬという条項を挿入しなかったのは不都合だと非難し、賠償金の問題は犯人が逮捕、収監、処刑されて後にはじめて討議さるべきものであるという遷延的な字句がならべてあり、その実イギリス代理公使に対し、江戸へ帰って政府に申し出たらよからうと言わんばかりのことが書かれていたのである。

十四日の朝使者が到着したとき、わが方は使者に向かつて、回答は不満足なものと考えられるから、もはや一戦を交じえたあとでなければ日本人との交渉には断じて応じられぬと告げた。それから提督は、湾の上の方を暫時遊べし、図面にあるウィルモット岬（訳注 大崎ノ鼻、図面省略）の沖台に投錨して、いる外国製の汽船数隻を偵察し、また遙かなたの湾頭で数回の測量を行なった。午後になって提督が戻ってくると、各艦の指揮官たちはその指揮をうけるために旗艦へ集まった。当方には砲台を即時攻撃するつもりはなかった。数隻の汽船を拿捕するという報復措置をとれば、薩摩人は前回持ってきたものよりも満足すべき回答を持参するに違いないと、提督は考えたようだ。

この計画にしたがってパール号のボーレス艦長は、コケット号、アーガス号、レースホース号と共に、十五日払暁汽船の拿捕を開始した。汽船に近づくにつれて、もちろん私たちは大いに

号のジョスリング艦長とウィルモット中佐が、第七砲台から発射された球形弾にあたつて戦死したためであつた。同艦は、知らず知らずのうちに、砲台と日本の砲手が平素用いていた練習目標との中間を進んでいたもので、正しく先方の射程距離内に入っていたわけだ。ほとんど同時に、十インチの破裂弾が艦の主甲板で炸裂したと見るまに、七名の水兵が戦死し、一名の士官が負傷した。こうして、十インチから十八ポンドの砲弾をもつ三十七の砲門の一斉射撃をあげ、この堂々たる軍艦もすっかり窮地におちいつてしまつたのである。また、レースホース号は第八砲台の向かい側で坐礁したので、コケット号とアーガス号が同艦の引き放しに戻り、一時間ほどかかつて首尾よくそれに成功した。この間も、レースホース号は絶えず砲撃を浴びていたが、先方の砲手は何らの損害をも同艦にあたえることができなかった。しかし、ある瞬間には、あきらめて艦に火をかけねばなるまいかとも思われたのだ。

とにかく、わが艦隊が抜錨しないうちに、碇泊中の旗艦のあたり一帯の灰色の空に向かつて、空中高く砲弾が炸裂したのだが、それから、わが艦隊が戦闘行動に入つて、パツと上がる煙の中から最初炎がほとばしり、次いで実に奇妙な丸くて黒いものがわれわれ目がけてまっすぐに飛んでくるのを見ることができたまでの、事件全体の興味と興奮を、私は決して忘れないだろう。しかし、このまっ黒いものは、まさに私たちに命中するかと思つた瞬間、急に空中高く飛び上がるように、頭上を通りすぎたのである。アーガス号には、三回命中しただけであつた。初弾は右舷門を、第二弾はちょうど主檣のところを貫通したのだが、主檣は倒れなかつた。三回目は、球形弾が吃水線近くに深さ約三インチの穴をあけたまま海中におちた。

ハヴォック号は、工場地帯の沖合にかかつていた五隻の琉球船に火を放ちに行つていたが、同

の命令を下し、また拿捕船を焼却せよとの信号をわが艦と、レースホース号およびコケット号に向けて発した。この信号をうけるや、私たちはみな拿捕船内に突進して、掠奪を開始した。私は日本の火繩銃と田錐形の軍帽（陣笠）をせしめたが、士官連中のなかには一分銀や渡金の二分金などの貨幣を見つけた者も数名いた。水兵たちは鏡、酒瓶、腰掛け、古筵の切れ端など、持てるものは何でも掠めた。およそ一時間もこうした乱暴が行なわれた後、汽船に穴をあけて火を放ち、それから命令をうけるために戦線へ馳せつけた。図面（訳注 省略）は、戦線のひかれた模様を示している。

しばらくしてから、わが方も日本側の砲火に応じた。日本側の最初の砲撃に対して旗艦の応戦が遅れた（二時間）わけは、艦上にまだ賠償金が積んであったため、ドル箱の堆積が弾薬庫の戸を開ける邪魔になったからだという。第九砲台の直下に碇泊していたパーシユース号は、錨を切つて逃げ出さなければならなかった。この錨は数か月後に薩摩の人々が捜し出して、わが方へ返してくれた。こうした遅滞のために、パーシユース号は戦列の最後方に位置しなければならなくなつた。

砲弾の下にさらされると異常な興奮を覚えるものだが、荒れ狂う天候がいつそう人々の落着きを取り乱させた。戦線はやや奥の方へ進み、それから左へ転回して、約四百ヤードの距離を保ちながら北岸に沿うて戻つたが、各艦は航走しながら、一連の諸砲台に向かって、舷側砲の一斉射撃をあげせかけた。

交戦を開始してから四十五分ばかりして、旗艦が艦首を転じたのが見えた。次いでパール号（これは少し遅れて、それに続いていた）が、戦線から離脱してしまつた。これは、ユーリアラス

がはるか後方に遠ざかるまでこれらに遠距離から炸裂弾をあびせながら、ゆるい速度で湾を下って行った。同夜は町から少し離れたところに碇泊し、十七日に横浜へ向かつて帰航の途についていたのである。アーガス号に乗り組んでいた私たちの多くは、この退去にはなほだ不満な気持ちをいだいたのであるが、他の艦の者もやはり同じだったと思う。

われわれが去るとき、日本の大砲はまだわれわれ目がけて発砲をつづけていた。弾丸は一つも、わが艦隊のところまで届かなかったのであるが。しかし、このようにわれわれを追い撃ちしたので、わが方が数か所の砲台を破壊し、また鹿児島^{はさき}の町を廃墟^{はいきょ}と化せしめたにもかかわらず、薩摩側では自分の力でイギリス艦隊を退却の止むなきに至らしめたと主張するのも無理ではなからう。もし、わが方が砲撃を続行して、敵の大砲を完全に沈黙させた上で上陸するか、または数日間町の沖合に碇泊を続けたならば、当方の要求が通ったのではないかという意見も多かった。噂^{うわさ}によれば、兵隊若干を上陸させて大砲数門を分取って来ることをニール大佐が大いに主張したのであるが、提督は一兵をも上陸させることを拒んだという。また人々は、ニール大佐が艦橋で旗艦の艦長や中佐と話をしていた最中に、砲弾が飛んできてこの二人の海軍士官の首をはねとぼしたので、大佐の意気が沮喪^{そさう}してしまったのだとも噂した。しかし、これらのことは、公文書には何も書かれていない。私の信ずるところでは、この外交官と海軍士官との間がおもしろくゆかず、つまり前者があまりに作戦行動に容喙^{ようかい}しすぎたというのが事の真相^{しんさう}のようだ。事件を提督の手に任せたとはい、当然ニール大佐の方で沈黙を守るのが礼儀^{れいぎ}なのだが、彼の性急な気質がそれを許さなかったのであろう。

また一方、石炭、糧食、弾薬などの供給不足が、わが方に退去の決心をさせるに至った一つの

艦をのぞいて、わが方は五時までには全艦が再びジョスリング岬に投錨した。工場は多分琉球船の火の粉を浴びて燃えたものだろうが、一般には薩摩人が故意に焼いたものと信じられていた。

町の背後にある大きな白い建物が薩摩侯の屋敷と思われたので、それを撃破するために全力を注いだのだが、あとになって寺院であったことがわかった。藩主とその父（訳注 島津久光）は、交戦の時に着弾距離内にいなかったことも判明した。わが方は鹿児島町の町を焼き払うため火箭をも発射したが、これは実際うまく行きすぎたほどであった。烈風が吹きつづいていたので、火炎を消そうとする町民のあらゆる努力も無益であったに違いない。尖った青白い炎の塊りによって下から照らし出された煙の雲は、空一面に広がって、恐ろしくも、また壮観であった。

われわれが以前の投錨地へもどってきたとき、拿捕船はまだ燃えていた。同船には百四十トンの石炭が積んであったので、炎々たる大霧火のように見えた。そして、その船はやがて急に傾斜して、海底に沈んでしまった。これは海軍の人々にとつて、大いに残念なことであったに違いない。なぜなら、これらの船だけでも三十万ドルの値打ちがあり、もしこれをさらって行くことができたなら、だれもが分捕船の場合にもらう莫大な賞金にありつけたからである。この拿捕船焼却はニール大佐の発議によって行なわれたという話だが、大佐はさすがに老練な戦士だけあって、手足まといなしに全艦がみな輟闘に参加できるようにと、大いに焦慮したのであった。提督のすぐれた判断に反して、当日は悪天候だったにもかかわらず戦うことを提督に対して主張したのは、あの気の毒なジョスリング艦長であったと言われる。

八月十六日、日曜日の朝、この戦いで生命を失ったジョスリング艦長、ウィルモット中佐、および九名の水兵の死体が海中に葬られた。その日の午後、艦隊は錨をあげて、砲台や鹿児島町の

面目を失つたのであるが、おかげで横浜の外国人たちは、再び自由な生活に立ちかえり、前のように近郊の散策をやりはじめた。

しかるに、十月十四日に、新たな凶行事件が生じ、われわれの平静を完全にひっくりかえしてしまった。カミユスというフランスの狙撃兵^{ソグベ}将校が、居留地からは二、三マイルしか離れていないが公道から大分隔たつてゐる場所で、午後の乗馬をやつてゐるところを凶漢に襲われ、殺害されたのである。その右腕は、手綱を握つたままで、胴体から少し離れた場所において発見された。一か所は顔のわきを、一か所は鼻のところを、もう一か所は斜めに頸^{あど}を切られ、おまけに喉笛^{のどぶえ}を刺されて右頸^{けい}静脈^{じやうみく}は切断され、背柱は完全に斬り割られていた。左腕は皮一重でつながり、胸の左わきは心臓のところまで切り込まれてゐた。どの切り口も全くあざやかで、腕の立つた剣士の手に握られた日本刀がいかにも恐るべき武器であるかを如実に示してゐた。この恐ろしい暗殺者の身元については何の手がかりもなかったのだ、外国人社会はひどい恐怖におそわれたのである。私たちはこの事件以来、遠乗りに出かける際にはみな必ず武器を携帯するか、または三、四人以上同行するようにした。しかし、護身用の拳銃にも大して信頼がおけなかった。なぜなら、外人を殺害しようと待ち伏せる侍は、相手を不意打できないような場合にはおそらく手を出すまいし、また大体において性質の穏やかな日本人と面と向かつて喧嘩^{けんか}をするようなことはなかったからだ。おそろくりチャードソンの事件を除けば、これらの殺人事件はみな初めから前もつて計画されてゐたもので、凶行者はあらかじめ自分の身の安全をはかることに注意してゐたのである。それから一か月過ぎて、薩摩の高官二名が公使館へやつてきたときには、われわれは驚きながらも、愉快な気持でこれを迎えた。この薩摩人は、二万五千ポンドの賠償金を支払うことを約束

要因であつたとも考えられよう。提督は、ロンドンの「ガゼット」に発表した報告の中で、鹿児島を破壊したのを自分の手柄にしているが、ブライト氏が下院でこの不必要な苛酷な行動に注意をうながしたのは、はなはだ至当であつた。これに對して、提督が再び筆を執つたのか、あるいはニール大佐が書いたものか知らないが、大火災は偶然に発生したものだとの釈明がなされた。しかし、砲台との交戦が終わつてからもパーシューズ号が鹿児島に火船を放つた事実から見ると、それが事の真相を正しく述べたものとは受取れないし、また砲撃によつて百万ポンドの値打のある財物を破壊したと報じている公信書の中の、あの得意氣な調子とも矛盾する。

艦隊が横浜へ帰航した後、われわれは再び平靜に立ちかへつた。貿易も大体平常通りに行なわれたが、やがて大君の閣老が、輸出に決定した生糸を全部差押えようとしたことから、悶着が起きた。この差押えで生糸の値段をつりあげ、イギリス政府によつて支払わされた賠償金を、外国人の懷中から再び取り戻す魂胆であつたことは疑いない。しかし、この輸出禁止の命令は、ニール大佐の強硬な抗議で撤回された。

京都の騷擾の風説も、われわれの耳へ達していた。京都では、長州の家来が皇居を乗つ取つて天皇の身柄を奪取しようとした陰謀事件があつたという。この計画が失敗したので、長州藩士は皇居警衛の任を解かれた。彼らは、陰謀に加わつた七人の公卿を擁して、郷国へ退去した。この七人の公卿の中には、三条実美(訳注 普通、実美)、東久世(訳注 通禮)、沢(訳注 宣嘉)などがいたが、この人々は後に王政復古の政府が成立したとき、それぞれ高い官職についた。

率先して外国人追放を主唱した一味である長州藩のこうした失敗は、一方大君に對し運命の好転をもたらした。この結果、開港場の閉鎖を提議した小笠原の布告は撤回され、このため同人は

第九章 下関、準備行動

ラザフォード・オールコック卿は、一八六四年（訳注 元治元年）三月早々ヨーロッパから帰任して、ニール大佐は去って行つた。公使館の職員は、大佐のために送別の宴をもうけた。彼はその席上、自分の下で働いていた人々の将来についての予想をのべた。私のことを、イギリスの大学の日本語教授になると予言したが、これは今までのところ実現していない。

帰任したオールコック公使はみんなから好かれたが、私には特に親切で、記録の仕事は一切免じてくれたから、私は自分の時間を全部日本語の勉強にささげることができた。ウィリスと私は、日本人町と外国人居留地とに挟まれた裏町の木造家屋に住み、その家で私は三人の教師を相手に一生懸命勉強した。

ラザフォード卿は帰任するに際し、実に大きな権限をあたえられてきていた。彼は、長州藩の敵対的態度に対し膺懲ようちやうを加えようと決心していた。われわれは、もはや薩摩の好意を獲得したと言つてもよかつたので、もう一方の攘夷派の首魁しゅかいである長州に対しても薩摩に対したと同様の手段を用いるならば、同じく有利な効果が得られるものと充分に期待していた。

長州の人々は、前年の夏に天皇ミカドから「攘夷」の詔勅を無理やりに頂き、その詔勅にしたがつて、下関海峡を通過したアメリカの商船や、オランダのコルベット型艦、フランスの通報艦などを砲撃した。コルベット型艦は砲火を開いて応戦し、またアメリカ商船とフランスの通報艦の場合は、

した。また、リチャードソン殺害の下手人をあくまで捜し出して、逮捕次第初めの要求通りイギリス官吏の面前で死刑にするという約束をもしたのである。しかしニール大佐は、薩摩の方にこの約束を実行する気のないことを見抜いていたようだ。実際のところ、外国人を斬り仆すように命令したのは島津三郎その人であると想像される確固とした理由があり、その島津三郎を薩摩の人々が捕えて、処刑するなど、全く考えられないのである。なるほど、実際の下手人はこれに扨に従った家来だが、下手人を死刑にすることを要求しながら、その主犯者を処罰せずにはうっておくのではしようがない。

そこで、イギリス政府の要求全部を首尾よく貫徹するには、まず圧倒的な兵力をもって薩摩に侵入し、藩士の大部分を殲滅して、藩主にまでこれを及ぼすことが必要だろう。もちろん、藩主が生きながらわが方のお手におちいるものとは、全く考えられない。すでにわが方は、砲台と町の大半を撃破した。そして、リチャードソンの殺害のことなぞ何も知らぬ多数の無辜の人々を、この砲撃で殺戮したに違いない。その結果、初めの理由は公安破壊の罪に過ぎなかったのを、開戦の理由にまで拡大してしまったのだ。そういうことをやりながら、さらに再び多数の人命を奪ってまでも贖罪を迫ろうとするのは、決して正当ではないと私には思われた。しかも、薩摩の使者は、その藩士が過誤を犯したことを正式に認めて、イギリス政府が要求した罰金をちゃんと支払ったのである。そこで、イギリスの代理公使がこの条件で講和をむすんだことは、だれも非難できない。だが、薩摩の人々が、この罰金を大君の財庫から借用したものだということは言うて置くべきだろう。そして、その後、私はその金が返済されたということを聞いていないのである。

ようと、知識を身につけて、日本へ帰って来たのであった。他の三名はイギリスに残留したが、それは遠藤謹助、井上勝、山尾庸三であつた。伊藤と井上はラザフォード卿に面会して、帰国の目的を知らせた。そこで卿は、この好機を直ちに捕え、長州の大名と文書による直接の交渉に入ると同時に、一方では最後の通牒ともいふべきものを突きつけ、敵対行動をやめて再び条約に従う機会を相手にあたえようと考えた。卿は仲間の諸公使の承諾を得た上で、伊藤と井上の二人を便宜の地点に上陸させようと、二隻の軍艦を下関の付近へ急派したが、その際この兩名に一通の長い覚書を託して、藩主へ提出させることにしたのである。

これと同時に、レイ工兵少佐、フランスの士官(レール少佐)、それにオランダの海軍士官一名が、砲台の現状について情報をできるだけ集めるために派遣されることになり、私もまた同僚のJ・J・インスリー君と一緒にこの一行に加わつたのであるが、これは私にとって大きな喜びであつた。

七月二十一日、われわれはW・M・ダウエル艦長のコルベット型艦バロサ号とバックル中佐の砲艦コーモラント号にそれぞれ分乗して出発し、豊後水道を通じて、二十六日の日没後に姫島沖に投錨した。われわれの乗つたコーモラント号は浅瀬に乗り上げたが、同艦の第二斜檣を打ちこわして、ようやく再び離礁させることができた。

翌朝早々、われわれは二人の日本の友人伊藤と井上(井上は当時志道の姓で通つてゐた)を上陸させたが、八月七日に周防沖の笠戸島で兩人と再会することをあらかじめ約束しておいたのである。この航海の途中で、私は彼らと大いに語り合つた。また、私の教師中沢見作(小笠原の家来であつたが、主人の不興を被つた結果、生計の道を捜す必要に迫られていた)の助力を得て、兩人

合衆国の単檣帆船型艦ワイオミング号とジョーレス提督のひきいるフランス艦隊が、報復的にそれぞれ不完全な攻撃を行なった。そこで、砲台は撃破したが、一度外国の軍艦がその場を去るや、長州人は直ちに砲台の修築、増設をやり、できるだけ多数の大砲を集めてそれに据えつけた。こうして、熊蜂の巢は間もなく充分に修復され、攻防ともに旧にも増した威力をそなえるに至った。

外国船は従来長崎に寄港してから、風波の高いチチャコフ岬（訳注 九州南端の佐多岬）を避けて、愉快に案に瀬戸内海を通って横浜へ回航するのを常としていたが、今や一隻も下関海峡を通ることができなくなったのだ。これでは、ヨーロッパの威信が失墜すると思われた。日本国内の紛争に頓着なく、いかなる妨害を排除しても条約を履行し、通商を続行しようとする当方の決意を日本国民に納得させるには、この好戰的な長州藩を徹底的に屈服させて、その攻撃手段を永久に破壊するほかはない。

そこで、ラザフォード・オールコック卿は、時を移さずフランス、オランダ、合衆国各代表との提携を実現しようと苦慮し、ついに完全にこれに成功した。そこで、大君の政府に対し、もし日本側が二十日以内に下関海峡を再開するという満足な保証をあたえなければ、外国艦隊を同地へ急派して、長州藩主の非を正すであろうと警告した。不思議な偶然の一致であるが、その時ちょうど、長州から洋行していた若侍五名の一行中、その二名が外国から帰朝したばかりのところであつた。この二人は、世界を見学して列強国の資源について多少の知識をうるために、前の年ひそかにイギリスへ派遣されたのである。その名前は伊藤俊輔（訳注 後、博文）と井上聞多（訳注 後、馨）。この二人は、煉瓦塀に自分の頭をぶつけるのは無益だということを藩の同志に警告し

へかけて、北岸沿いに号砲が発射されるのが見えた。砲台の射程距離内に入らぬようにと警戒しながら、田野浦の辺まで行つて、砲台の位置や大砲の数などを正確に偵察しながら暫時その辺を遊弋したのち、姫島へ戻つた。

われわれは、毎日この島の浜辺に上陸して、そこらを散歩した。ここの島民は物見高くはあつたが、親切にしてくれた。しかし、あるとき村を通つてボートへ戻つて来る途中、四人の侍に出会つた。彼らは、万一を警戒して、島を守備するために豊前の杵築から派遣されてきた分遣隊の者らしかった。私は丁寧に話しかけ、どこから来たのかと尋ねたが、彼らは突慥に、「遠くから」と答えた。見るからにいやな悪党面をし、われわれが船にのるまで海辺に立ち止まつて、こちらの動静を見守つていた。

八月六日に、偵察のため再びコモラント号で下関へ航行し、田野浦の方向へ前回よりも少し深くまで進んだ。この時、砲台からは号砲だけでなく、球形弾や榴弾まで警告の目的で発射されたが、それらは前方約一マイルの海中に落下した。夜の十時半にバロサ号のところへ戻ると、伊藤と志道がやつて来ていた。晩飯のあとで長いこと話しこみ、藩主からの返事を聞き取つた。彼らは従者を一人だけ連れて来ていたが、海辺までは藩主がつけてくれた一隊の護衛兵に守られて来たという。両人はまず、山口で主君に面謁して四か国外交代表からの手紙を直接渡したと述べてから、主君から託されてきた回答について語り出した。それによると、藩主は重臣と相談の末に、次のような結論に達した。すなわち、藩主は外国代表の手紙の趣旨がもつとも至極なことを充分に認め、また自分の力では西洋諸国の兵力に対抗できないことも承知しているのだが、大君から一回、天皇からは再三の命令を受けており、これに従つて行動している次第である。だから、

と私たちとの間で、ラザフォード卿の覚書をどうやら日本語に翻訳することもできたのであった。この二人は、甲板のない舟に乗って陸へ漕ぎ渡り、周防の富海に上陸する予定だった。八時には、二人が海岸から去って行くのを見た。中沢の考えでは、彼らは十中の六、七まで首をはねられ、二度と会う機会には絶対にあるまいとのことだった。

われわれは、この日おそく姫島に上陸した。住民はひじょうに親切であった。そして、たくさん魚をわれわれに売ってくれたが、野菜や牛肉や鶏肉は入手できなかった。家畜の類もかなり豊富で、よく肥えてもいたのだが、住民は貧しくて、栄養不良のように見えた。人口はおよそ二千。島は肥沃ではなかった。私は牛肉を買おうとしたが、病気の乗組員の薬用に必要だという口実(一名の日本人の思いつき)も役に立たなかった。住民の半ばは、製塩の仕事をやっていた。半ペニと一ペニの紙幣が通用し、銭貨は至ってわずかしが見受けられなかった。ある場所で、一人の男に約十ペンスに当たる一分銀をあたえたところ、その男はこれをひっくり返しながら注意深く眺めていたが、やがて「これは、まことに珍しい」と言った。

翌日はこの島の北側へ回って、そこに投錨した。ここでも上陸して、製塩所を見に行ったが、前と同様に親切な扱いを受けた。二十九日に、われわれは艦のボート一隻に乗って、伊予(訳注 豊後の誤り)の伊美へ漕ぎわたった。そここの村民は、われわれ外国人を相手にするのをいやがったが、しかし一、二マイル西方の竹田津では何の苦もなく、南瓜や茄子を手に入れることができた。八月一日の日の出前に拔錨して、下関海峡の方向へ航行した。バロサ号は下関の手前十マイルほどの所に投錨したが、われわれの乗ったコモラント号は豊前の沿岸に向かって蒸気力で航行し、それからさらに伊崎岬へ向かって進んだ。海峡の口を半ば過ぎたとき、長府からサホ(Saho)

話し合った最初であつた。当方に対して、直ちに天皇と交渉を開始せよという兩人の提言は、まことに大胆きわまるもので、その通りに実行したら、彼らの意図を助成するよりも、むしろ害することになったろう。時機はまだ熟していなかつた。なぜなら、將軍の權威は、今や大分弱まつてはいたが、大多数の大名はいまだに將軍を認めて、これに服従していたからである。將軍の軍隊は、その時分にはまだ武器の劣等さを暴露してはいなかつたし、またほとんど時を同じくして、長州藩主の軍勢は京都へ進撃し、会津、薩摩を味方とする大君の防戦にあつて惨敗を喫したのである。そのころ、われわれはひとまず横浜へ歸つていたのであるが、外国代表が事態の対策にかからないうちに、長州の主要な人物は逃亡、あるいは死亡し、ために大君は一時政界の主人公に返り咲いたのである。

伊藤とその僚友は、その夜のうちに再び立ち去つた。ヨーロッパからわざわざ歸つて来ながら、藩主への忠告が失敗に終わったことについて、私は同情の念にたえなかつたが、それは何とも仕方なかつた。われわれは翌早朝錨をあげて、十日に横浜へ着いたのである。

長州が到底屈服しそうもないことがわかつたので、かねて四強国の代表間で協定を見ていた決議を実行するための準備が、活発に行なわれた。代表たちは將軍の閣老と会談した。それは、今や下関海峡の封鎖を解く任務を海軍の力に任せる時機が来たことを、閣老たちの心に銘記させるためであつた。しかるに、この会談が終わらぬうちに、去る一月イギリスとフランスへ交渉のため派遣された使節の一行（訳注 横浜鎖港談判使節、池田筑後守の一行）がヨーロッパから歸朝したという通告が、雷電のように会談の席を襲つたのである。この使節は、フランスと締結した仮条約書を持ち歸つたのであるが、それには、フランスの砲艦を砲撃した件に対する賠償金のこと、將

自分の責任でやっているのではないし、また許可を待たずに外国代表に回答を与えることは自分の権限外に属する。よって、自分は京都へ上り、意見を具申して天皇の心を動かそうと思うが、それには約三か月を要する見込みであるから、それまでは列強諸国が行動を起こすのを待ってほしい、というのであった。

この兩名は、文書を何も持参せず、藩主の代理者であることを証明する信任状さえ持つて来ていなかったが、もし軍艦が二、三日待つていてくれるなら、その書面をもらつて来ようと、私たちに語った。われわれは二人に、諸君の持つてきた単なる口頭の回答だけでは、外国代表の満足を買うことはできないと告げた。すると、彼らは、大君と天皇の命令の写しを添えた回答書を、横浜へ送つてもよいかと尋ねた。ダウエル艦長はこれに対して、どうしようとも藩主の随意だと答えた。艦長の受けてきた指令によれば、意見を發表する権限はなかったのである。

後刻打ち解けて話し合ったとき、彼らは私に向かつて、従来藩主は外国人に好意をよせていたのだが、今ではあまりに逆の方へ走りすぎ、引つ込みがつかなくなっているのだ、この係争中の事件は戦争にならずに済みそうもないと語った。彼らはまた、外国の代表は大君を見限つて大坂へ行き、直談判と条約を結ぶために、天皇の大臣たちと会見するのが一番の上策であろうと言った。そして、きわめて痛烈に大君の政治を非難し、幕府が長崎とか新潟とかの、商業の発達しそうな場所をことごとく専有して、内外の交易を全部独占していることを責め、国民の大部分もこれと同じ考えであると言った。

彼らが使者として主君から命ぜられて来た言葉は、今彼らが当方へ伝えた言葉よりもはるかに非妥協的なものであつたろうと私は推測した。これは、私が反大君派の人間と腹藏なく充分に

ギリス外相)の意に反して行動したという廉で譴責され、そのポストから罷免されるに至ったが、公使としては、正当なことを行なったという確信をもって、自らを慰めることができたのである。七月十一日に、合衆国の汽船モニター号が、長門の北岸のある湾に碇泊中に発砲された。この事件によって、外国代表たちの起こした行動は、さらに新たな名分を得たのである。

軍の政府は三か月以内に下関海峡航行の障害を撤去すべきこと、フランス製品に対する輸入税率の改正、カミユス中尉の親族に対し三万五千ドルの賠償金を支払うことが定められていた。

この報知に接するや、ラザフォード・オールコック卿は、自己の計画が完全に崩壊する恐れがあると思った。もし、この仮条約の批准が行なわれるならば、フランス人は少なくとも連合から脱退せざるを得なくなるからである。しかし、その第二条は、大君の政府の到底実行不能なものであり、日本側に本気でやる意思のないことは、少なくともその場に居合わせた人々にはもちろんわかり切っていた。そこで、日本側でも、この条約の批准を行なわないという声明を出さざるを得なくなり、八月二十五日にその趣旨の通告が外国代表のもとへ届けられた。同日、外国代表たちは、武力に訴える必要のあることを声明した覚書に調印した。次いで、この覚書は海軍司令長官の手中に達し、それから四日後に、連合艦隊はその計画遂行の目的をもって出港したのである。イギリス公使がひじょうに努力してまとの上げた外交的連合も、一時は遣外使節一行の帰朝によって分裂の危機に見舞われたが、しかし、この計画は日本使節が帰朝する以前に、すでに決定を見ていたのであった。

我らの長官であるイギリス公使の責任は、まことに重大であった。当時、セイロン以東は電信が通じていなかったが、七月二十六日付の本国からの急信、すなわち日本内地においては断じて軍事行動をとることを許さず、日本政府ないし大名を相手に海軍が軍事行動をおこすのは、単にイギリス臣民の生命財産を保護するための防衛手段たる場合に限るという急信が、公使にあてて途中まできていたのであった。それが公使の手許に着いたころには、すでに公使の計画は最善の効果をおさめて、成就されていたのである。そして、公使はジョン・ラッセル卿（訳注 当時のイ

知った。しかしウィリスが、自分の日本語教師で、医学の方ではその弟子に当たる林朴庵ゼンフクアンを私に貸してくれた。この男は、学者としては遙はるかに中沢に劣っていたが、忠実な人間だったので、何とかやってゆくことができた。

イギリス艦隊は、次の諸艦をもつて編成された。旗艦ユーリアス号、砲三十五門、指揮はアレキサンダー大佐。コルベット型艦ターター号、砲二十一門、ヘイズ大佐。同バロサ号、砲二十一門、W・M・ダウエル大佐。二層甲板に砲を備えた軍艦コンカラー号、砲四十八門、ルアード大佐。外輪バドル・スループ単樁帆船型艦レオパード号、砲十八門、レッキード大佐。同じくアーガス号、砲六門、モレスビー中佐。コケット号、砲十四門、ロー中佐。砲艦バウンサー号、砲二門、ホルダー少佐。このほかに、フランスのフリゲート型艦セミラミス号（砲三十五門）が、ジョレース提督の幅広い艦旗をかがげて出動し、アメリカの傭船ターキヤング号は、合衆国のコルベット型艦ジェームスタウン号のパロット砲一門と乗組員とを搭載して、ピアソン少佐の指揮のもとに艦隊に加わった。

またフランスのコルベット型艦デュプレクス号（砲十門）と通報艦タンクレード号（砲四門）は、オランダのコルベット型艦メタレン・クルイス号（砲十六門、艦長デ・マン）、同ジャンピ号（砲十六門、艦長ヴァン・リース）、同アムステルダム号（砲八門）、同メズサ号（砲十六門、艦長デ・カセムブロート）と共に、八月二十八日に神奈川湾を離れ、その他の諸艦もその翌日出港した。

途中は天候が静穏で、風波が穏やかだった。九月一日に四国の西南端が見えた。午後五時ごろ、給炭船を引いて提督あての郵便物を搭載してきたキングストン中佐のパーシュース号（砲十七門）に出会った。この艦は、上海へ郵便物を取りに行くバックル中佐のコモラント号に途中であつ

第一〇章 下関、海軍の行動

私はキューパー提督付きの通訳官を命ぜられたので、わずかな必要品を荷物にまとめてユーリアラス号に搭乗した。これは、私を大いに満足させた。私は士官公室で食事をしたが、寝泊まりのできる室がなかったので、ソファアの上で寝た。

士官たちは、きわめて愉快な連中であつた。彼らの中で、今は両方とも大佐艦長ゴスト・キャプテンになっているトレーシイとマクリーアが特に私の記憶にのこっている。前者は大いに特色のある士官であつたが、格別私の心をひいたのは同氏が本を愛好したことで、近代の諸国語について広い知識を有していたことだ。それも、艦内の喧騒な、心の落着かない生活の中にありながら、全く強い根気力によって得た知識であつた。

コケット号は、付屬通訳官となつて赴任してくるラザフォード卿の継子フレリック・ラウダーを迎えに長崎へ派遣された。旗艦に搭乗したもう一人の非戦闘員は、有名な写真師のフェリックス・ビートーであつた。この男はクリミヤ戦争の時に初めてカメラ生活に入り、また一八五九年の英仏軍の北シナ遠征にも従軍した。その後日本に定住したのだが、社交好きな性質だったので、日本でも多数の友人があつた。

大君の政府は、私と一緒に姫島ヒメノへ行つた賺かどで、私の教師の中沢をひそかに私から引き離してしまつた。中沢のことを外国奉行に密告した某外国人の不信行為を、私はずっとあとになつてから

その中の一人だけが、つい誘われて口を開いたが、その男も明らかに同僚をはばかっていた。石炭舟の船頭とその女房が、二人のきたない、ちっぽけな村の腕白小僧を先に走らせながら、浜辺づたいに瀾歩（か）ほしているのは、素敵な見ものであった。両刀を帯した男たちの目が注がれている時を除いて、村民は一般に友好的であった。

九月四日九時に、われわれの艦は抜錨した。ユーリアラス号を先頭に立てた八隻のイギリス軍艦を中央に、フランス艦隊とターキヤング号がその左にならび、オランダの軍艦四隻が右にならんで、下関海峡へ向かつて航進をおこしたのである。無敵の強さをほこる連合艦隊が、紺青の山々を粹（や）とした鏡のように眼前に横たわるなめらかな内海を横断して、静かに進んでゆくのは見事であった。

三時半（訳注 午後）ごろ、われわれは海峡の入口から二マイルほどの所に投錨して、戦鬪の準備に入った。晩飯を半分食べかけたころには、すでに準備が万端整っていたのだが、一発も放たずにその場に停止しているのは、心の逸（は）る人々にはたえがたい思いであった。そんなわけで、自然だれもが、待望の合戦を遅らせるような面倒な交渉が新たに起こらぬようにと、大いに熱望していた。

翌朝早々、普通の兵士の格好をした二名の長州人が艦へ乗りこんできた。そして、なぜこんなに沢山の軍艦がこの海峡へやってきたのかと尋ねたが、提督は明らかに下級者と思われるこれらの人間には瞬時も会うことを断わって、すぐに陸へ帰れと告げた。彼らの一人は、ひじょうに無邪気な態度で、もし貴公たちがここを通り抜けるつもりなら、準備のため陸に行かねばならぬと、私に言った。何の準備かと尋ねると、その男は「戦鬪のためだ」と答えた。

だが、例の日本使節が帰朝した時分にちょうど横浜を出港したバックル中佐はキングストン中佐に對し、遠征は無期延期になったと知らせたのであった。そこでパーシユース号は給炭船と離れて、蒸氣力で全速力を出しながら横浜へ向かったのだが、間もなく長崎へ航行中のコケット号に出会って、遠征は無期延期どころか、話が全く違うことを知った。そこで、ぐるりと向きを変えて、再び給炭船のところへ戻り、これを曳航して来たところであつた。

その翌日、われわれは姫島へ達した。正午少し過ぎに投錨したが、すでにジャンピ号とメタレン・クルイス号が来着していた。それから間もなく、メズサ号と三隻のフランス軍艦も現われた。深更までには、連合艦隊の全部が到着したのである。しかし、この外にコケット号と、コーモラント号ないしはオスプレー号も来航する予定だったので、両艦の来着を待たなければならなかつた。

午後、提督とアレキサンダー大佐が士官たちを連れて散歩に上陸した。私は案内役をつとめた。氣の毒にも、村長は大恐慌の体であつた。異国人の性質をよく知らないし、あまり親切にし過ぎれば、自国の人々からあとで必ず罰せられるし、どうしようもない不安な立場にあつた。それでも「ごく内々で」若干の魚を送ると約束してくれたが、牛は絶対に売れないと明言した。村長は杵築に使いの者をやつて、島民が艦隊と交渉したり、または手持の食糧を供給してもかまわないかと、伺いを立てておいたのである。

夜の間に、われわれの艦は石炭百五十トンを積みこんだ。その他の諸艦も、九月三日の一日間を炭庫の補充に費やした。午後、私は村長宅を訪問するため上陸したが、同家には杵築からきた三名の守備兵がいた。この兵士たちは被面と言うほどでもなかつたが、全然黙りこくつていた。

三門を備えた砲台から撃ち出す砲弾が、イギリスの旗艦のかなり近くまで飛来するようになったと思う間に、軽艦隊がこの砲台を沈黙させてしまった。やがて、錨網に発条ばねの取りつけをやっていたセミラミス号が、後甲板砲の恐るべき威力をもって砲撃を開始した。その弾丸はほとんど全部命中した。ターキャング号は、たった一門の砲で最善の効果を發揮した。コンカラー号は三発の炸裂弾を發射したが、その中の一発は多人数の密集している砲台群の間で見事に炸裂した。

ユーリアラス号は、午後四時十分から五時十分の間に、百十ポンド砲から十六発の弾丸を發射しただけであつた。しかし、火門軸套が一度詰まって、挺こで掘りあけるのに相当時間がかつたのだから、それでも相当よく働いた方だ。また一度は、火門軸套が充分に固くねじこんでなかつたために、それが吹き飛んで、前橋部へとびこんだ。

南方に投錨していた六隻も、やがて対岸の砲台と激戦を開始したが、その間に北岸の砲台を沈黙させてしまった軽艦隊が応援にやってきて、砲四門、七門、九門の各砲台に向かってそれぞれ縱射した。ユーリアラス号の發射した最大距離の砲弾は四千八百ヤードのところに達して、砲台の一つにうまく命中した。

五時十分までには主要な砲台がみな沈黙してしまったので、撃ち方止めの信号が出た。前田村砲台の建物に火災が起こり、弾薬庫が爆発して、午後のうちに三回目の「噴炎」があがつた。わが艦は、六時まで散発的に砲撃をつづけた。後甲板の四十ポンド・アームストロング砲は目的の距離にほぼ達せぬとわかつたので、一回発砲しただけであつた。主甲板の滑腔砲は一門も戦鬪に参加しなかつたが、このことは、戦友中に鹿児島でやられた者のいることを忘れかねて、復讐の念に燃えていた水兵たちにとっては、おそらく大きな失望であつたろう。

それから、私はボートで二隻の帆船ジャンの点検にやらされたが、この帆船は今しがたこの海峡へ入って来て、わが方に停船を命ぜられたものだった。その一隻は平戸ヒラトへ石炭を積みに行く伊予松山の伊勢丸、もう一隻は筑後の久留米の船で、雑多な荷物を積んで大坂オサカから帰航の途中であった。それらの船は、われわれの敵、長州の所有物ではなかったので釈放した。

午後二時ごろ、先刻艦を訪れた二人の男が再びやってきて、奉行イサナ、すなわち一種の委員が井上聞多（この時は志道とシジメ）という名前ではなくを連れて到着したと告げた。しかし、もはやこの時分には、砲台を砲撃するため各自部署につけという信号が、各艦長へ発せられていたのである。私の友人の井上と、その同僚が旗艦へやってきた。そして、一応の談判を行ないたいから戦闘の開始を延ばしてもらいたいと懇願したが、彼らが受取った唯一の回答は、平和的協定の時機はもはや過ぎ去った、ということだった。

われわれは、四時十分（訳注） 午後二に戦闘を開始した。バロサ号、ターター号、ジャンピ号、メタレン・クルイス号、レオパード号、デュプレクス号は、漏斗形（漏斗）の海峡入口の南岸に沿って進み、田野浦（訳注） 豊前、小倉藩領の前方に停止した。一方、パーシユース号、メズサ号、タンクレード号、コケット号、バウンサー号からなる軽艦隊は北岸（訳注） 長州藩側）に沿って進み、アムステルダム号とアーガス号は予備として待機した。ユーリアラス号、セミラミス号、コンカラー号、ターキヤング号は、前田村にある砲台の中央群から約二千五百ヤードの間隔をとって、敵の砲台の着弾距離外（この間に）に投锚した。これは、前甲板の百十ポンド、後装式アームストロング砲をもつてすれば、充分に弾が敵に達する距離であった。

ユーリアラス号から第一弾が発射された。田野浦側の艦隊全部がこれにならった。串崎岬（クシサキ）の砲

目前の陸地へ向かつて一直線に漕ぎすすみ、九時かっきりに上陸した。アレキサンダー大佐の部隊に与えられた任務は、前田村砲台のすぐ東方の断崖をよじ登って、備砲一門の砲台を占拠するにあった。けわしい、草深い小山を辛苦して登攀するのだが、水兵たちは遊山にでも来たように、めいめい勝手に、がむしゃらによじ登った。土造の砲台に登って見ると、すでに運び去られたのか、隠匿されたのか、大砲は見当たらなかった。台地に二十名ばかりの敵兵がいたが、味方の先頭が胸壁の上に鼻先を出すや否や退却し、丘の向こう側から曲射をつづけた。このため、わが兵の一人が脚部に銃弾をうけ、もう一人は背後の水兵のため、あやまって身体を撃ち抜かれた。われわれは砲台を通りぬけ、羊歯や蔓草の足からむ中を駆けぬけて、砲台の後の丘へはいのぼった。暑気がはげしかった。すべる草地の、狭い山径を、足を踏みしめながらよじ登るのだが、それは容易のことではなかった。水兵たちは敵兵に遭遇することをしきりに望んだが、一兵も見当たらなかった。

丘の向こう側へおけると、狭い谷の縁に沿っている一種の覆道ふくどう（訳注 築城語）へ出た。谷のはるか上の方にかんりの敵兵がいるという報告があったが、わが方はこの敵を追跡せずに、覆道に沿って左の方へ折れた。すると、道は弾薬庫のところを通って、主力砲台群の中央の砲台へ出た。あとになって、それが幸運にも背進であったことがわかった。もし、われわれが別の方向に進んでいたら、三門の野砲で守られた柵壁につき当たって、それがわが小人数の部隊に対し「悪魔」の役を演じたことであつたらう。

われわれが最初に達した砲台は、すでにフランスの上陸部隊と若干のイギリス海兵隊が占領していた。これらの部隊は断崖の下に上陸し、なんの障害にもあわずに海浜にそって進んで来たの

日本人が頑強に戦ったことは、認めてやらねばならない。日本の砲手は一回の発射ですぐに新手と交代すると聞いていたのだが、事実は全くこれと相違したからだ。わが方の砲弾は、最初のうちはあまり届かなかったが、着弾距離がはつきりしてからは、絶えず砲台に命中していることが、打ち上げられる土煙から見て明らかだった。撃ち方止めの信号が出てから、パーシユース号のキングストンとメズサ号のデ・カセムブローの両艦長が上陸して、前田村砲台の砲十四門に鉄釘てつくぎを打ちこみ、発射不能にしてしまった。串崎岬の小砲台は、三門の砲のうち二門までがわが方の砲撃で破壊した。第一日における当方の死傷者数は全部で六名だったが、これは砲火的になったターター号の艦上でやられたのだ。

翌早朝、前田村砲台群の一砲台が、田野浦沖に碇泊中の艦隊に向かって再び攻撃を始めたが、応戦して、これを沈黙させた。この砲台の背後にある兵営は火災を起こした。この砲戦でデュプレクス号は死者二名、負傷者二名を出し、ターター号の海軍大尉は球形弾に臀部でんぶをやられ、重傷を負った。軍医はもうだめだと言ったのだが、この大尉は危うく生命をとりとめた。

私は、この砲戦の最中に眠っていたのだが、だれかに起こされた。ユーリアラス号乗組の小銃隊員二百名を指揮するアレキサンダー大佐に伴なって上陸せよ、という伝達書が届いたのだ。コンカラー号からは、全員百名のほかに、サザー陸軍大佐の率いる海兵隊四百五十名の一隊が上陸した。また、艦隊中の他の諸艦からも、少数ずつ分遣された。フランス軍は三百五十名を上陸させた。オランダ軍の上陸兵は二百名だった。別の計算によると、上陸した人数は千九百名で、そのうち、イギリス艦隊からは千四百名であった。

われわれは、權イーストがようやく動かせるくらいに人間がいっぱい詰まった小艇カッターや、端艇ピボスを連らねて、

たが、わが方には一人もこれにやられた者はなかった。敵の射撃を阻止するために、一部の兵士を派遣したが、わが方の狙撃も敵のそれに比べてあまり大差はなかった。戦争で大切なことは、できるだけ大きな声を出して、接戦にならぬうちに敵を尻ごみさせる、換言すれば、敵の士気を沮喪させるにあるようだ。恐れる必要もないのに、わが兵の多くがひよいと頭を下げては、弾丸を避けようとしたのは滑稽^{こっけい}だったが、白状すると、私も理性の助けをうけるまでは、同様のことをやっていたのである。

メズサ号は海岸へずっと近寄って行つて、敵の中へ数発の砲弾を撃ちこんだ。また一方、パースュース号、アムステルダム号、アーガス号は、田野浦の前面の部署から丘越しに砲撃した。これで、勇敢な敵の士気もややくじけたので、われわれは兵士たちに食事をさせるため、先刻とりこわした最初の砲台へ引き返してきた。機関将校のクラウディ、旗艦の軍医補マクビーン、それに私の三人は、一塊のパンと一個の鰯^{いわし}の罐詰^{かんじつ}をクラウディの剣でこじあけて、それらを分けあつた。防壁内にある弾薬庫の階段に腰をかけた時にはナイフもフォークも手もとになかったが、われわれの当然の食欲を満たすのに不自由はなかった。食後、われわれはフランス軍に手伝つて、この砲台の大砲を顛覆させた。その数は四門。ひじょうに砲身の長い三十二ポンド砲で、砲車にのせてあつた。敵は、なおも谷の上の陣地から射撃して、われわれを悩ました。こちらでも、数名の兵士がこれに向かつて気まぐれ半分に小銃を撃ちはしたが、どちら側にも大した損害はなかった。

もう、午後も大分過ぎたので、ユーリアラス号から帰艦せよという信号が発せられた。フランスとオランダの分遣隊と若干のイギリス陸戦隊、それにコンカラー号の小銃隊が、すでにボート

であつた。この砲台は土で造られ、胸壁の幅は約二十フィート、周囲はとがつた竹杭^{たけくわい}の矢来で固めてあつた。第七砲台では、大砲が大きな車輪の砲架にのつたまま砲座の上に装備され、旋回軸で操作されるようになっていた。砲身は青銅製で、ひじょうに長く、二十四ポンドの記号がついていたが、その実三十二ポンドの弾丸を発射していた。これらの大砲には、一八五四年に相当する日本の年号が記されていた。江戸で鑄造されたものであることは明らかだつた。これらの大砲のほかに、短身の三十二ポンド砲が一門あつた。小さい弾薬庫のある防壁の向こう側にも、青銅製の十インチ砲が一門だけあつた。

われわれは、これらの大砲を残らず顛覆^{てんぷく}させ、砲架をこわし、弾丸や炸裂弾を海中に投げこみ、火薬を燃却し、さらに大砲二門を海辺まで引きずりおろした。こんなことで、午後の三時から四時までにかかつてしまった。この間も、わが兵は絶えず丘上の敵兵に向かつて銃火をあびせた。敵も時々姿を現わし、一、二発発砲した。

九門砲台には、十一インチの青銅の重砲が二門あつた。それから次の砲台へと進んだが、それはほとんど水ぎわのところにあつた。この砲台は火薬庫を囲む防壁で二つに区切られ、その片方には十インチ榴弾砲一門、三十二ポンド砲二門、二十四ポンド砲一門があつた。別の側にも同数の大砲と、その外に二十四ポンド砲が一門あつた。これらも同様に顛覆させ、砲架や弾薬も前と同様に処分した。

谷の上の方にあつた日本の野砲列は、前田村から壇ノ浦、下関の方へ通ずる徑^{みち}に沿う防柵の少し前方まで進出してきて、砲弾を発射したのだが、それは長射程で飛んで来ては頭上をこえて海中に落下し、この作戦中大いにわれわれを冷や冷やさせた。一方、敵の小銃隊もかなり射撃をし

砲して逃げ込んだ柵囲いの兵舎が、すぐ目の前にあった。やがて私は、黒の鎧の上に白の陣羽織を着た別の一隊が、大急ぎで左手の道をどんどん退却して行くのを見た。エドワーズ少佐と機関将校のクラウディは、軍旗を持って勇敢に進むD・G・ボーイズという海軍少尉候補生と共に、部隊の先頭に立って進んだ。このボーイズは、年少ながら大変勇敢な働きをした廉で、この戦争がすんでからビクトリア十字章をもらった。

私が柵囲いの兵營の前へ達したとき、その辺に三、四名の日本兵が死んでいた。わが方の兵士の一人が、心臓を撃ちぬかれた。その兵士は見るも無惨な格好でその場にうち倒れた。見る見るうちに顔色が蒼白になっていったが、致命傷を思わせるような血痕は外部へ現われなかった。私はすぐ、そばにあった大きな長方形の籠に死体をおさめて運び帰るように数名の者に命じ、日本人がすでに逃げ去った柵の中に入って行った。日本人は退却に際して、われわれを爆殺しようという子供じみた目的から弾薬庫のそばの家屋に放火し、これから弾薬庫に通ずる導火線で爆発をたくらんだが、すぐに発見したので、難をまぬかれた。

われわれは、付近を隈なく歩きまわって、戦利品として持ち帰える値打ちのある物、たとえば甲冑、弓矢、刀、槍、外国の製造者の名前の入っている銃剣など、手当たり次第に運び出したのち、建物に火を放ち、整然として退去した。敵の死者は約二十名で、負傷者の方は全部運び去られていた。わが方の死者は五名で、負傷者は十三、四名、うち二名は重傷だった。

この間に海兵隊が何をしていたか、私は知らない。前方の事態の進行にばかり気を取られて、他方へ目を配るだけの心の余裕がなかったからだ。しかし、海兵隊は、覆道をたどりながらきわめて堅実な前進をつづけたのだが、ようやく現場に到着したときには、これよりも敏活で性急な

に乗り込んでいた。その時、六時ごろだが、サザー大佐の海兵大隊が、日本軍の猛射をうけながら前田村の十五門砲台から戻ってくるのが見えた。日本軍は、その部隊を発見するや球形弾を撃ちこんだのだが、別に損害はなかった。イギリス軍の兵士がこれに応戦した。十五分間、両軍の間に、びゅう、びゅう、びゅうという音だけが聞こえていた。ついに、大佐はアレキサンダー艦長のところへやってきて、「われわれを悩ます敵兵はどこにいるのか。私はいかなる砲台をも奪取する充分な兵力を持っている」と言った。「よろしい」と、アレキサンダーは答えた。「私はあの谷の左側の砲台を奪取しましょう。貴下はその右側を」。そこで海兵隊は、先刻フランス軍が占拠した砲台（最東端のもの）によじのぼり、そこから覆道テラドにそってずんずん進んだ。一方、コンカラー号の水兵も再び上陸して、前進を開始した。ビートーと私はアレキサンダーのそばについて、水兵たちのあとから狭い「堤道」にそって稲田の中を進み、それから谷間の西側の小径を前進した。水兵たちは、道端の松並木に隠れては敵にねらいをつけ、撃つと、また再び前進した。そして、各自が勝手に大声をあげて突進するなど、とても元氣旺盛おうせきだった。こうなると、命令も訓練もあつたものではない。中には、山腹に敵兵が潜んでいると勘違いして、むやみに弾薬を浪費する手合いもいた。私は登り道で幾人かの負傷兵のそばを通ったが、ある者は重傷を負っていた。また、矢にあたつて死んだ一水兵の死体もあった。

われわれは、とうとう砲台にたどり着いたが、砲手はすでにわが方の銃火に追い払われていた。そこで、砲架を破壊し、大砲を引きずりおろして、そばの稲田へ投げこんだ。

この時、アレキサンダーは右の足首の関節に貫通銃創をうけ、担架で後方へ運ばなければならなかった。この場所から、谷は急に狭まっていた。多数の日本兵が再三引き返してきては、発

の砲台の大砲十五門を破壊した。

昼の間に、オランダの軍艦所屬の一隻のボートが、二人の人間を乗せたまま海中を漂い、潮のために町の方へ流されていった。彼らはすぐに日本側から射撃されたが、全く防ぎようがなかった。また、フレデリック・ラウダーと弟のジョージが、「おもしろいものを見物」しに長崎から一緒にやってきて、日本の小舟で漕ぎ回っているうちに、漕ぎきれなくなり、やはり町の方へ流されたが、ようやく九死に一生を得た。二人は海中へ飛びこんで、敵と反対の方の岸へ泳ぎついたが、それでもしなかったら、おそらく前者と同じ運命をたどったことだろう。

下関（もつと正確に言うると赤間関^{アカマヅミ}）の町の東端に火災が起こったが、焼失家屋は至って少なかった。日本兵がその辺からフランス兵に発砲したので、フランス軍がそれをやつつけるためにやったのだそうだが、それが事実なのかどうか、私は知らない。パーシユース号は、同号から一番近いところにあつた砲台の向かい側で坐礁し、潮がひいた時には艦首を水面から高く突き出し、翌日まで離礁しなかった。

私は、泥まみれになつていた。くたくたに疲れ、腹がへつて、喉^{のど}がかわき、七時半に再び艦上の人となつた。

九月七日に、大砲を鹵獲^{ろくかく}するため水兵の工作隊が海兵隊の擁護^{ようご}のもとに上陸し、大砲十門をボートに積みこんだ。また、柵^{とりで}砦へ登って行って、野砲数門を発見し、これを破壊したり、顛覆させたり、持ちかえつたりした。わが方は全部で六十門の大砲を鹵獲したが、ほとんどが青銅砲で、そのうちの二門は臼砲^{きゆうぽう}、六門が小白砲であつた。火薬は残らず爆発させ、砲弾は海中へ投げこんだ。もはや手向かう日本人は一人もいなかった。パーシユース号は、大砲や石炭を全部おろして

ジヤツク

「水兵」たちが仕事を片づけてしまったあとだったと、私はそう考えている。事務的な態度で、てきぱき各自の任務を遂行した点では、どちら側にも非難の余地はない。もし、われわれが軽率で向こう見ずな前進をしていた際に、大きな障害物に突き当たったとしたら、海兵隊はわれわれを破滅から救ってくれたであろう。しかし、あのような小競り合いですんだのは幸いであった。日本兵が頑強に大砲を固守したならば、または、われわれが谷間を駆け登る際に、敵の射撃兵が丘の方からわれわれの側面を突いたとすれば、わが小銃隊の死傷者はさらに大きな数にのぼったであろう。その時の敵は七門の小野砲を有し、地の利を得ていたが、わが方は、六百と想定された敵兵の数より、少なくとも二百名を上回っていた。しかし、私は後日、当時従軍した一長州人の口から、日本側の兵力はわずかにその半数だったということを聞いたように思う。

水兵は敵の射撃線を突破して、角型の谷（それは東方に湾曲していて船舶の方からは見えない）の外縁にそって前進しなければならなかったので、敵の矢おもてに立ったのだが、日本軍はこの前進を食い止めることができず、小銃の猛射をあびて混乱し、ついに遁走しなければならなかったのである。一回だけ、白兵戦になろうとしたことがあった。一人の敵が、刀を振りかざして戸の後ろに隠れ、入って来る者を斬り仆そうと身構えていた。しかるに、その敵は案に反して相手のためにかえって横腹を突き刺され、その場に仰向けにひっくりかえってしまった。そして、この小さい勝負はそれっきりに終わった。フランスの戦友はこの戦鬪に居合わさなかったもので、気を悪くし、「要するに、くだらぬことサ」と鼻であしらったが、それは武運と言うもので、われわれはこのフランス兵士たちに心から同情した。

第一線に立つて前田村へ進んだ海兵隊員は、死者一名、負傷者二名を出した。彼らは、前田村

で、また自分の責任以外のことで女王陛下の文官使臣から命令を受ける気持は少しもなかったのだ、自分の権限内の手段では長州のいかなる土地をも永久に占拠することは不可能であると考えていた。そして、砲台を破壊して、海峡の交通を打開すれば、もう自分の任務は達成されたものと考えていたのである。

小笠原の侍はわれわれを畏れて、すこぶる丁寧であつた。村民たちも、きわめて友好的だった。私は二、三のつまらない冗談をとばして、相手をきげんよく笑わせはしたが、彼らを口説いて食糧を売らせることには成功しなかった。役人たちは、村中をすっかり捜しても、これだけしか見つけることができなかったと言ひわけしながら、鶏卵を八つか十持ってきた。

水兵たちは、柵砦とりでの内部で拾つた数通の書類を私の許へ持参したが、その中には天皇ミカドに対する長州の密謀の証拠物件となるべきものがあるように思われた。そのほか、熊の肝からつくつた、または、つくつたと称する多量の丸薬と、あらゆる大名の領内で一般に通用する少額紙幣などもあつたようだ。銀貨は、当時大君オウゴンの直轄領土内だけで通用していたものと見える。

八日には、大砲をもつと分取つて来るため、労役隊が再び上陸した。砲台群の大砲の中から、二門だけを残して、あとの全部の十九門、そのほか前田村から十五門、海峡西口の大きな島である引島ヒクシマ（訳注 一名彦島ヒコシマ）の砲台からそれと同数を運んできた。前田村の海岸へ行つて見ると、そこには巧妙に造られた砲台があつた。海に面して石で疊んだ幅二十フィートの胸壁があり、防弾壁で砲台を四つに区切り、その間に大砲が三々五々据えつけてあつた。その後方に石造の弾薬庫があつたが、屋根は球形弾に撃ちぬかれて、めちやめちやになつていた。背後の谷の片側にある、これも石造の火薬庫は、前日すでに爆破されていた。もつと上の方へ行くと、そこには前に柵

艦体を軽くし、正午までにはどうやら浮かび上がることができた。

二日間にわたる作戦で、わが方の死傷者数は死者八名、負傷者三十名だったが、負傷者のうちの一、二名は助かりそうにもなかった。われわれは味方の死者を埋葬するため、一時半に田野浦（訳注 豊前、小倉藩領）側に上陸したが、午前中にフランス軍が二名の戦死者を埋葬していた。墓を掘っているとき、わが軍の兵士が、きらきら光る物質のかけらを幾つも見つけた。最初は砂金かと思ったのだが、雲母であることがわかった。

私は両刀を帯した小笠原（訳注 豊前、小倉藩主小笠原忠幹）の家臣の一行に出会ったが、彼らは私たちに向かって、何名の死者があったか、昨日の戦の模様はどうであったかなどと尋ねた。柵砦の敵兵を完全にやっつけたと知らせると、大いに満足の様子であった。彼らは、昨年長州兵が海峡を渡ってきて、農作物を荒らし、家畜を奪い、農民を追ひ払って、暫時田野浦を占領したが、ついに世の非難に屈し、また長州が自領の防衛に備える必要からやむなく兵を撤退させた顛末を、詳しく物語った。そして、彼らは、もし外国人と豊前の人々との間に交渉があったことを長州藩の者が知ったら、艦隊の退去後に再び襲来しはせぬかと案じていたが、私は彼らに、わが軍は砲台を破壊した上、長州の領土を占領するつもりだから、何も恐れることはない、はつきり言つてやった。これは、ラザフォード卿と仲間の公使たちの間で、適当な額の賠償金を長州に支払わせるための物的保証として下関附近の充分な土地を占領し、しかるべき機会にこれを大君の政府に引き渡すまで占領をつづけるという計画のあったことを、私は承知していたからである。

ラザフォード卿は、長州藩を完全に屈服させようと、ただそれだけを念頭においていたので、長州の大名の本拠と見られる萩を攻撃する必要を提督に説いた。しかし、提督は用心深い司令官

第一章 下関、長州との講和締結

正午に帰艦すると、例の伊藤俊輔^{シムシスケ}が来ていた。長州は講和を希望し、全権を委任された家老^{カロー}、すなわち世襲の顧問官が談判に来るとのことであつた。そこで、その偉い人を迎えに、すぐに一隻のボートを出した。まもなく、家老が旗艦の後甲板に到着した。

家老は、黄色の地に大きな淡青色の紋章(桐の葉と花)のついた大紋^{ダイモン}と称する礼服をきて、絹の帽子をかぶっていたが、中部甲板を通るときそれを脱いだ。すると、チョン髭^{チョンヒ}が房^{ふさ}のように頭の後方へゆるくたれているのが見えた。白絹の下着は、目がさめるように純白だった。家老より一階級下の身分の二名の同伴者も同様に結髪していたが、袍衣^{ほうい}は着ていなかった。

彼らは、船室へ案内された。ジラール師とラウダーと私が通訳することになって、提督の面前へ出た。彼らはまず、長州藩主は敗北を認めて、友好関係を開くために講和を望んでいると言った。そこで提督は、信任状を見せてくれと言ったが、何も持って来てはいないので、藩主の書状を持つて来るまで四十八時間の猶予を与えることにしようと言った。そして、その書状には、藩主は外国船に発砲した重大な非行を認めて和睦^{わくぼく}を申し込むという、家老が今申し述べたような内容のことを書いて、藩主自ら署名捺印^{なういん}し、その文書のあて名は四か国の各海軍長官にしなければならぬと言ひ添えた。

先方に課した条件は、第一、わが方は大砲の撤去と砲台の破壊を続行する。第二、先方で敵対

いの兵舎があつたのだが、これはフランス兵に焼かれてしまっていた。私は町の近くにいる前哨隊の方へ行こうとしたが、敵が姿を現わして、撃ちかけてきたので、大事をとって後退した。

ーロッパ人を夷狄に等しいと思つていた長州人のだれもが、みんな忠実に協定を守つた。この点から見て、彼ら長州人は信用に値すべき人間だと言つてもよからう。

九月九日に、二人の提督はコケット号に搭乗し、海峡を通つて引島ヒキシマ（訳注 一名彦島ヒコシマ）の砲台におもむいた。私は例によつて、通訳のため同伴した。この海峡は、樹木の生い茂つた高い丘と丘との間にはさまれて、東側の方からわずか六百尋ひろの幅にまで狭まり、それから急にまた広がつている。北岸には下関の町の長い家並みがつづき、左方の海岸は、門司モジの村と小倉コクラの町を通つて、南へ向かつている。起伏のある大きな引島ヒキシマが前方に見えた。

われわれは海峡を通りぬけて、その島の北西隅に達した。それから再び向きを変えて島の岸にそつて進み、帆船セイルの群らがつている小さい入江を過ぎて、ついにライム岬（訳注 彦島東岸の岬）に到達した。

大砲のある場所を視察するため、この岬に上陸したが、それはわが方の兵士たちによつてすでに取り払われていた。前に六門の砲のあつた一砲台は、崖がけを開掘したものだが、完成させる暇がなかつたらしい。胸壁直下の凹所に大砲が一門残つていただけだつた。もう少し東の方には、八門の大砲を備えた砲台が水ぎわにあり、そのすぐそばには、四つの砲眼のある割合に小さな砲台があつたが、大砲はまだ取りつけてなかつた。これらのほかに、この島の砲台の跡と見るべきものは、ライム岬の西方にある、やはり大砲のない古い土塁だけであつた。小倉コクラには堅固な防塞工ぼうさく事がほどこされている様子だが、噂うわさによると長州側から、外国人と戦うため砲台を築かせてもらいたいと申し込んで来たが、この申込みは不成功に終わったという。ターター号、デュプレクス号、ジャンビ号、メタレン・クルイス号の四隻が、主として砲台を撤去する目的で、七日からこ

行為を中止すれば、わが方もこれを中止するが、もし一発でも発砲すれば、長州領内を手の届く限りことごとく焼き払う。第三、六日に長州人の手におちたオランダの水兵とボートを、無事に引渡すこと。第四、村民に鶏と新鮮な野菜を売りに来させるように取り計らうこと、などであった。なお、わが方の態度が平和的である証拠として、回答の猶予期間が満了するまで、艦の主樫に白旗を掲げることにした。

彼ら三名は、その姓名を、長門の家老穴戸備前の養子穴戸刑馬（歌注 実は高杉晋作）、参政の杉徳輔、渡辺内蔵太と名のつた。やがて、連合艦隊の各司令官にあてた書状を置いて陸へ帰って行ったが、それは、砲撃の始まらぬうちに姫島で渡すように、託されてきたものだった。彼らは、提督の希望により渡しはするが、その内容を見ればもはや無用のものであることがわかるだろうと言った。

伊藤はまた私に、天皇と大君から受取った、外国人を日本から放逐せよという命令書の写しをくれたが、それには穴戸の自筆で、これは本物の写しだという証明がしてあった。この文書の英訳文は日本関係の青表紙文書の中で後日発表されたから、見たい人はそれを参照されたい。その文書が充分に信憑すべきものであることは疑いない。

日本の使者の態度に次第に現われてきた変化を観察すると、なかなかおもしろい。使者は、艦上に足を踏み入れた時には悪魔のように傲然としていたのだが、だんだん態度がやわらぎ、すべての提案を何の反対もなく承認してしまった。それには大いに伊藤の影響があったようだ。

休戦協定ができると、田舎へのがれていた人々が、危険な砲台付近の道を通って、どんどん下関の町へ入ってきた。もちろん、戦争の終結を心から喜んでいた。伊藤と井上の二人以外は、ヨ

その翌日、長州藩主の使者が、決めた時刻にユーリアス号の艦上に到着した。しかし、宍戸と杉は姿を見せなかった。この両名が来れないのは、睡眠不足と暑気あたりで病氣になったからだと釈明した。キューパー提督は、そんなことがたびたび起こるのはおかしいと言った。そして、談判が一回切りで妥結されないなら、代表の諸君は万事が解決するまで健康に注意してほしいと、皮肉に頼んだ。使者の姓名は、家老の毛利出雲イヌモ（訳注 実^{イヌモ}は毛利登人）、参政の山田宇右衛門、波多野金吾（波多野は後年広沢兵助ヒロシスケという名で有名になった）、渡辺内蔵太、長府の参政磯谷謙蔵、原田隼二、それに志道聞多であつた。

その間に、われわれは日本の青表紙文書ブリュールブック（訳注 外交関係文書）を調べ、前回の使者は身分を詐称したものではないかと考えたが、彼らは、そうでないことを充分に説明することができた。その文書に宍戸美濃と記されている役人は、最近宍戸備前と改名して公生活から隠退し、現在宍戸家の家長たる刑馬ギョーマに家督を譲つたものだった。

彼らは、藩主からの手紙を差し出したが、それを見ると、和を請うている旨が満足すべき語句で明記されていた。そこで、提督は言つた。

「われわれも、平和を望む点では貴藩の主君と全く同様です。貴藩の人々と戦うことは、決してわれわれの本意ではなかった。われわれは、日本と外国との間の友好関係を固めて、通商を存続させたいと考えているに過ぎないのです」

毛利は、藩主も全くそれと同意見ですと答えた。

キューパー提督「この海峡の自由な航行について、諸君の方から以後決して反対を申し出ないものと、はっきり了解してもいいですか」

ここに碇泊していた。

われわれは、これらの諸艦を残したまま串崎岬^{クシマキ}へ航行したが、そこには三門の真鍮砲と四門の木製砲が置いてあった。後者は長さ約四フィートで、簡単な丸太で作られ、約一ポンド半の火薬を入れることのできる薬室^{薬室}が後方に付いており、砲径は約八インチであった。この大砲には、砲尾から砲口へかけて竹の箍^{くわ}が巻きつけてあり、その上を木の層で固め、その上にまた竹の箍^{くわ}がかけてあった。木材そのものの厚さはわずかに三インチ半ぐらいだった。弾丸と言っても、木製の円盤に小石の小袋をくくりつけたもので、上陸部隊との接戦に葡萄弾^{ぶどうだん}の役目をするようになっていた。これらの奇妙な武器は、ただ土の胸壁の上にのせてあっただけで、一回以上使用できるものとは到底考えられなかった。

日本人は作業隊に対して、きわめて親切だった。自分たちの手で大砲を運びおろして、引渡してくれた。自分たちをひじょうな苦境におとし入れたこの玩具^{おもちゃ}を、喜んでお払い箱にしようとする日本人たちの気持も、容易にうなずけた。

旗艦へ帰ると、二艘の舟が鶏と野菜を積んで来ていたが、これは志道^{シジ}聞多^{ブンタ}が贈り物だと言って舟で届けてくれたものだった。志道の短い手紙には、一般に外国人をひどくこわがっているのに、人々は食糧を売りに行きたがらぬとあった。また、一隻の軍艦が再び発砲したことに抗議して、このような行動は、結んだばかりの新たな友好関係を危うくする恐れがある、とも書いてあった。しかし、発砲の事実はなく、これは先方の誤解であった。食糧品を持ってきた舟の連中は艦上を見物させてもらい、珍しい不思議な光景^{きやうけい}を嬉々^{きき}として眺めていた。われわれは、志道の贈り物の半分をフランスの提督に届けさせ、あとの半分を旗艦の士官や水兵たちに分配した。

時として風波ともに荒れることがあるから、難船した外国人に対しては上陸を許可することしようと言った。

そこで提督は、碇泊中に必要と思われる品物を購入するため、下関に上陸したいと告げて、町民にいろいろの品物を持ってきて売らせる、つまり艦隊のために市場を開かせるように取り計らうてほしいと要求した。これに対し、最初は、町民たちがごとく町を立ち退いていっているという理由で反対したが、ついにこの要求をもいれることになった。毛利は立ち上がり、私の方へ寄ってきて、まことに心配なことがあると小声で言った。そして、自分たちの獲得した和親は至つて貴重なものだが、もしも何か不幸な事件が突発して、両者の友好関係をそこなうようなことがあつては実に遺憾である、質の悪い人間が待ち伏せして、外国人を襲うようなことがあるかもしれないから、こうした事件を未然に防ぐために、上陸する人々には護衛を付けてもらいたいと言つた。このことをキューパー提督に通訳すると、提督は即座に、われわれは絶対にそのような悪漢を恐れないし、もしヨーロッパ人が一人でも殺傷されたら、町を残らず焼き払うまでだと答えた。そして、日本の役人はわれわれの上陸を阻止したいばかりに、こういう事を言いたがるのだと付言し、いささか相手に疑念をいだいた様子であつた。

毛利は、このような注意をした自分の気持が、何か不純のように取られるのは心外だと答えた。そして、日本側当局者は、不幸な事件を防止するために進んで万全の策を講じようし、自分としても、ただ間違いが起こらぬようにと思つて、こんなことを言つたに過ぎないのだと強弁した。キューパー提督「よろしい。われわれは、決して田舎の方へは行かないようにしましょう。しかし、町には必ず奉行がいるでしょうから、不心得者を近づけぬように奉行に命令して下さい。

毛利「さよう」

キューパー提督「われわれは、藩主との会見を大いに望んでいます。それは、おそらく諸君に對しては譲歩できないものも、藩主に對しては譲歩できると思うからです。われわれは、本国では身分の高い者ですが、藩主と下関で会見するためなら上陸しましょう」

彼らは、互いに相談の上、藩主が藩都から出向いて、下関の町で二人の提督と会見すべき日取りを、九月十四日と決めた。

キューパー提督「藩主に会ったら、われわれはまず、ただ今述べる当方の要求について藩主の承認を求めます。そのあとで、将来間違いの起こらぬように、外国の風習について藩主にいろいろ説明しましょう。とにかく、藩主と会えば、事の運びも容易になり、時間も節約されましょう。どっちみち、協定された約定には、藩主の承認が必要なのですから」。

「第一、大君オウゴンの政府と江戸にいる外国公使との間で、外国人と日本人との間のあらゆる問題が解決を見るまでは、絶対に下関海峡に砲台を築いてはならない」

「第二、わが方の人々が人家から発砲されているので、この町を焼く権利は充分にあったのだが、あえてそれをしなかった。ゆえに、下関の町に對する代償金は、戦時における外国の慣例によつて支払つてもらわなければならない。その額は、きたるべき会談に際し藩主に直接申し入れる」

「第三、この海峡を通過する外国船が石炭、食糧品、水などが必要とする場合は、何によらずそのほしい物を購入する許可を与えてほしい」。

使者はこれらの条件を快諾した上に、さらに付け加えて、この海峡は至つて潮流がはげしく、

糾して、何事も果たすことができなかった。

志道は、長州藩が天皇に対して反逆の意図を有したものと思われては困る、長州藩士は自分たちの受けた仕打ちについて釈明を求めようとしただけで、他意はなかったのだと言った。そして、外国人が小倉藩士や帆船の船頭たちから聞いたことは、一切信じてはいけない、これらの連中は、江戸、肥前、その他の国々からの寄り集まりで、長州の敵であると付け加えた。

それから、この訪問者たちは艦上を案内してもらい、楽隊の奏する音楽をきいてから、艦を下って行った。互いに親密を誓って別れたのである。

アダムズの著書(訳注 The History of Japan)の第二十五、二十六章に書かれている、その年の夏京都に起こった事件(訳注 一八六四年八月二十日明治元年七月十九日、蛤門事変)の記事と日付を照合して見るに、ちょうど伊藤と志道がバロサ号から上陸して、藩主に外国代表の書信を伝達するため山口に到着した時分に、長州藩士は大坂から京都へ向かって進発しつつあったことがわかる。長州の他の諸部隊も、これに続いて上京した。鬱積した内乱の要素が、八月二十日にととうと爆発したのである。長州の若い世子が、背後に新たな敵の迫っているのを知らせて藩士の激昂を鎮めようと、実際に国もとを出発したのであったが、ついに間に合わなかったらしい。だから、連合艦隊が下関海峡に現われたときには、最も精鋭な戦士たちは不在であったわけだ。したがって、それらの戦士たちがいた場合よりも、大いにたやすく勝利をおさめることができたのであった。しかし、京都から敗走してきた藩士たちが、郷国に到着して陣地の防衛に参加するのに間に合ったかどうかは確かでない。

翌日、ターター号のヘイズ大佐、レイ工兵少佐、それに私の三人は、下関の町を散歩するため

もし、奉行に町の防衛ができなければ、われわれが上陸して、代わってやりますよ」

毛利「奉行に命じておきます」。

これで談判上の事務的要件はすんだが、提督は最近京都で起こった事件について、それを詳しく知れたがった。京都で長州藩士と会津藩士の間に戦争があったという噂があるからだ。そこで志道は、これについて長々と話してくれたが、話の要点は次のようなものであった。

長州は天皇と大君の両方から「攘夷」の命令をうけ、極力それに従って行動した結果、得たものは大きな罵詈に過ぎなかった。こうした仕打ちに驚き、かつ気を悪くした長州藩主は、その理由を問うたたびたび使者を京都へ遣わしたが、かえって長州藩士は京都から追放され、藩主は二度と京都へ上ることを差し止められた。藩主はこの不法な処置に憤慨し、家来も主君の苦境に痛く同情した。ついに家来の一隊は、もはや我慢がならぬと、天皇の大臣に釈明を求めるために、京都へ向かつて出発した。家来たちは手に手に、刀、槍、その他の武器を携えた。なぜに？ それは、前に、否すでに二回にわたって、会津藩が京都にいた長州人たちをみな殺しにしたことがあったからだ。そこで、長州藩の家来たちは言った。「今度も、会津はわれわれを襲撃するかもしれない。その場合に、われわれは身を守らなければならない。むざむざと死にはしない」と。藩主はたまたま家来たちの発足を耳にし、三人の家老をやって呼び戻そうとしたが、彼らは帰国を承知しなかった。すると、京都の長官は長州の留守居役を呼びつけて、上京の兵士たちを帰国させるように説き、「もし命令をきかなければ、当方で彼らを襲撃する」と申し渡した。留守居役がこれを拒絶したので、戦闘が開始された。最初バロサ号が外国代表の手紙をもって姫島へ行ったときには、藩主はその世子を上京させて天皇との連絡をとらせようとしたのであるが、事態が紛

翌日、私は二人の提督について上陸し、門司モリという清潔な感じのする小村へ行った。途中、数名の小倉コクラの人たちに会ったので、海峡に取り巻かれていて、砲台への登り路を教えてくれと頼んだところ、彼らは、番所の許可をもっているかと訊ねた。番所はすぐそばの寺院にあったのだが、この妙な質問に対して、われわれは許可をもとめる必要はないのだと言ってやった。

「あれが道ですか」

「さよう。あれが道です」。そこで、松林をぬけ、苦勞して小山に登り、左へまがって、砲台へ下りた。その砲台は、砲三門を据えるように造られていた。そこからは、満珠島マシジマ（訳注 まんじゅ島）から引島ヒキシマ（訳注 一名彦島ヒコシマ）の方まで、海峡のあちこちを、よく見渡すことができた。この砲台は、大砲を据えつけるには格好な場所だが、丘の中腹を切りぬいただけだから、砲列の内側へ撃ち込まれた弾丸は、ひじょうに高過ぎないかぎり、必ず砲台に落下するだろう。その辺には、大砲を据えるために切り開かれた場所がいくつもあつた。そこから砲撃すれば、船舶に対して強力な効果があるだろう。密生した叢林ソウリンになつていたので、梯子はしこは絶対に利かない。また一門の砲といえども、容易に敵弾を受けないような場所に据えてある。現代の砲術ではどんなものかわからないが、わが方の機関将校はみな口をそろえて、戦争当時の日本人が地の利を心得ていたら、ここを難攻不落の要害地とすることも容易にできたであろうと言つていた。

その日の午後二時に、長州の代表者が到着した。当日は前もって打ち合わせが行なわれた結果、次ぎの人々が藩主の名代となつたのである。この人々の話によれば、藩主は自発的に引きこもつて、天皇の思召おほしめしを待つてゐる。彼らの用語によれば、恭慎な態度をとつてゐる（ツツシンデオール）のである。これは冗談だと思われるといけないから説明しておくが、往時は侍階級の者で、自

上陸した。町の東端は、九月六日におびたらしい球形弾をうけて、若干の家屋はほとんど粉砕されていた。長州人が一、二門の野砲を持ち出してきて、この地点から田野浦前面の艦隊を目がけて発砲したらしい。そのために、わが方から散々に砲撃されたのだ。

町民は群れをなして、ぞろぞろ帰って来た。人心はようやく落着きを取りもどしていたが、店はまだほとんど開いていなかった。町の人々が大勢私たちのあとからついてくる。たいへん親切な様子であったが、商人たちは法外な値段を要求した。骨董品店の数の割合が横浜と比べて至って少ないのには、いささか驚いた。と言って、別段驚くほどの理由もなかったのだが。数人の兵士に出会ったが、ある者は小銃を携え、ある者は刀や槍を持っていた。もちろん、この連中は今までの敵に対して親しみの目を向けるわけはなかった。

十二日に、波多野と二人の町奉行がやってきて、南部浜という波止場で午前十時から十二時まで市場が立ち、新鮮な食料品が販売されると、提督に知らせた。われわれはすぐに、役人が一切を統制して、できるだけ物価をつり上げるためにこのような手配をしたのだろうと疑った。提督は、市場を開く時間を六時から八時にするように要求した。このため大分言い争いがあったが、ついに役人たちにそれを承知させた。私の教師から聞いたところによると、役人は干渉しないと約束しておきながら、外国人に高く売りつけるように町民に言い渡したという。役人たちは、町民のために用意してある食糧を、外国人が全部買い占めはせぬかと心配して、普通の店では決して買わないように命令を出してくれと、わが方へ頼んでいたのである。

十三日に、ダウエル大佐が旗艦の艦長になって、ユーリアス号に移乗した。艦長代理をやっていたアレキサンダーは、病弱のためその地位を退いた。

ともできなかった。藩主は心中、大いに提督と会見したがっているのだが、と彼らは言った。

両提督は、この問題をあくまで追求して、外国側では藩主自らの了解を最も重視するものだということを納得させてから、次の要求を切り出した。

第一、この海峡を通行する外国船に対しては、親切な取り扱いをすること。石炭、食糧、水、その他の必需品の購入を許し、また、乗組員が悪天候になやむ場合は上陸を許すこと。

第二、今後砲台は一切新たに築かぬこと。旧い砲台を修築せぬこと。大砲を一切これに据えつけぬこと。

この第二条には多少の異議があつたが、それは、前回の場合には残されていた逃げ道が、今度の場合には無くなるからであつた。しかし、何の目的で砲台を築くのかときくと、彼らはただ一つ——「外国人と戦うために」という返事しかできなかった。「それなら、砲台を破壊して大砲を分取った外国人としては、同じ場所に大砲を据えつけることを許さない。この条項は不可欠のもので、譲歩することはできないのだ」と言うと、彼らは、それに同意した。

第三、下関の町はわが方の船に対して発砲したのだから、当然破壊してもかまわなかったのだ。しかるに、町をそこなわずに残したのだから、その代償金を支払うべきである。さらに、藩主は、今回の遠征の費用を支弁しなければならぬ。その金額は、江戸にある諸外国の代表たちによって決定されるであらう。

この条項には、日本側の使者は頑強に反対した。長、防二州は二つとも至って狭小な国なので、米の収入はようやく三十六万石に過ぎない。そのうち二十万石は家臣の扶養に使われ、その残りは砲台、大砲、その他あらゆる種類の武備に当てられている。要求額が当方の財源以上のものな

身、もしくは代理人が上司の怒りをまねくような行為をした場合には、直ちに恭愼な態度をとり、いわば自分の手足を縛って、主君の思召に身をゆだねたのである。これは第一種非行者の場合の、一種の任意自己監禁である。

しかし、われわれとしては、藩主が下関まで出向く面倒を免れるための作爲的な口実と思ったので、これを聞き入れなかった。だが、今から思うと、この老藩主は、皇居の守備兵を不敵にも襲った自分の家来の暴挙に恐懼して（また、その失敗を後悔して）、至尊の命ずるいかなる刑罰をも甘受する用意のあることを——家臣が了解して、あえてこれに反対しなければ、声明し、および限りの事をして、反逆の罪を償おうとする気持ちに駆られていたのだろう。

代表として来た人々の名前は、家老の末戸備前、毛利出雲、宍戸刑馬、井原主計と、楢崎弥七郎（訳注 弥八郎）（目付、秘書）、伊藤俊輔、波多野金吾で、このほかに私が名前を書き漏らした人がもう一名いた。これから見ると、備前は完全に公務から隠退したものではなかったらしい。こちらは、岡提督が出席した。

会談に入るや、直ちにキューパー提督は、休戦を認めたのは一に藩主が下関に到着するまでの時間を与えるにあつたが、藩主が蟄居していることをなせもつと早く知らせなかつたかと問うた。彼らは、舟の進行がおそくて、そのために昨夜遅くなつてようやく着いた次第であると述べ、提督の質問に対しては、長いことかかつて藩主に下関へ来るように勧め、全力を尽くして説得につとめたのだが、藩主は終始、これは免れることのできない古来の慣習であると言って、動かなかった。藩主は天皇の不興を被り、腹心の家来にさえ会うことができない状態にある。いわんや提督と会見するなどは、到底できないのだ。自分たちもはなはだ遺憾に思つたのだが、どうするこ

ていた料理屋へあがった。料理屋の人たちは私を丁寧^{ていねい}に迎え、二階の部屋へ案内してくれた。部屋の一方はすっかり開けはなたれて、小さい中庭に面していた。次の間に、両刀を帯した数名の長州人がいた。木の濡縁^{ぬれえん}にもたれていた一人が私に向かって、あっちへ行けと手を振った。私は声を荒らげ、「何を言うか!」とどなりつけた。すると、彼はすぐにおとなしくなった。われわれの戦勝の威光が、こんなにも大きかったのだ。

林がやってきた。二人は鮑^{あづ}を注文した。料理ができてくる間に、熟した西瓜^{すいか}一つをほとんど全部平らげてしまった。鮑は砂糖で味つけてあつたが、おそろしく硬^{かた}かった。二種類の酒がでた。部屋をにおわすために、女中が始終香をたいた。二人はすっぱいの吸い物と米飯を喫した。その後、約一か月の下関逗留中に絶えず上陸したが、町民との間に一度も悶着^{もんぢやく}は起きなかった。彼らは、いつも丁寧で、親切だった。

協定書は十六日に届けられたが、間違いなく署名調印してあつた。これと同時に、日本側では、士官および乗組員は一定の制限区域の外に出ないこと、特に夜中は上陸しないことを約束させようと、一通の書面を持参し、両提督の署名をもとめた。この文書のことと大きな誤解が生じた。ジラル師の日本人教師が、これは長州当局の覚書ないしは口上書だと主張したが、私は若輩^{わくはい}でもあり、同師のような日本語の權威でもなかったもので、これに譲らなければならなかった。とにかく、みんなで回答書を作り、私がそれを清書して、奉行^{ぎやう}のところへ届けるため上陸した。回答の内容は、「日本側から同意を求めてきた制限事項の主なもの、すでに当方によって聞き入れられている。その他の事は、前回奉行が来艦した際、イギリス人は番所や寺院に立入るもさしつかえないと言っているので、今さらこのような要求は無用だ。それに、諸君がこれから何か言っ

ら、それに対する支払い能力はないのだ。この領内には、主君への忠義のために身命を捨てるのを何とも思わぬ者が大勢いる。講和を望んでいるのは藩主自身であり、藩主は家臣たちの熱狂を抑えるのに多大の困難を感じているのだと。

提督はこれに対し、諸君はあらかじめ代償額を計算に入れた上で、事を構えるべきであつたと答えた。そして、諸君が自ら好んで戦争をしかけたのだから、出された勘定書は支払わなければならないと言った。日本側は、結局これにも同意したのであるが、驚いたことには、彼らの唯一の目的は長州人の士気がまだ沮喪し切っていないことを私たちに知らせるにあつたのだ。そして、わが方の要求があまり過大である場合には、屈服よりも、むしろ戦うことを望んでいたのである。われわれは最後に、これは一時的な停戦協定に過ぎないのだから、今後外国の代表と日本の政府との間で解決されなければならない長州問題とは全く別個のものだという声明を、草案の中へ入れた。これは、私の想像するところでは、フランス、オランダ、合衆国から要求が出るかもしれない賠償金との関係を考慮して挿入したものだろう。とにかく、この条項は異議なく同意された。一通を清書し、二名の家老がそれに署名捺印した。それから、山口へ行って、藩主の署名捺印を取つて来るため、二日間の猶予があたえられた。前回軍艦を見物しなかった人々は、例によって下甲板や機関室などを案内してもらい、やがてそろつて退去した。

十五日に、私の教師を連れて、瑣細な私的踏査のために上陸したが、そんなことができるほど、事態は静穏に見うけられた。まず、前日の協定に参加した使者の一人井原主計を訪問し、艦へ来て、ビートーに写真を撮ってもらわぬかと誘った。髪を二週間も伸ばしたまま、月代が黒くなつていた教師の林が灰屋へ行っている間に、私は一人で市街をぶらつき、林と待ち合わせる場所にし

奉行の宅へ行つて、熱心すぎて融通のきかぬ番所の番人について苦情を言つた。奉行は叱責しつせきすると約束して、その通りに実行した。その結果、他の士官連中が上陸して、その番所を通つたときには、日本の役人が道路へとび出して来て脱帽しようとし、逆に士官たちの方から、その必要はないと言われる始末であつた。

町民たちは、一八六三年（訳注 文久三年六月、アメリカ軍艦ワイオミング号、フランス軍艦セミラミス号、およびタンクレード号が下関海峡で砲撃され、長州側と砲火を交えた）のアメリカ人やフランス人の手柄について大いに腹藏のないところを話してくれたが、それによつて、ワイオミング号のマクドウガル艦長は敵船を撃沈して人家を焼いた自分の業績をひじょうに控え目に語っているのに反し、フランスの方は、自分たちの勇敢さを大いに誇張していたことが容易に判明した。ワイオミング号は砲台全部の砲撃をあびたが、町のすぐ近くにいたランスフィールド号（訳注 壬戌丸じんじゅつまる）と一隻の二檣帆船（訳注 庚申丸こうしんまる）を撃沈した。しかるに、セミラミス号は、危険を冒して田野浦より先へ出ようとは、どうしてもしなかつたのである。

一般の人々はみな、外国人追放の命令を下したのは大君オイクンであると確信していた。私は市場で、一人の男が、「幕府は二股政策をやつてゐる」と言つたのを耳にした。幕府バクフとは、事実大君オイクンの政府をさす、当時の最も普通な称呼であつた。私は、長州へ行つて砲台を破壊するように大君オイクンから頼まれたのではないかと聞かれた。私は、「いや。大君オイクンは、海峡を開くことは自分にはできないと言つた」と答えた。それから私は、その間の事情について自分の意見をのべ、大君オイクンは大名と外人との間に板ばさみになつて、両方に矛盾した言質をあたえなければならなかつたのだと言つて聞かせた。すると、人々は異口同音に、「ホンマダ」（真実だ）とさげんだ。

くる場合は、井原主計が署名捺印した書面を持参する必要がある」というのであった。奉行はこの回答書を読むと、「これは間違いだ。私があなたへ届けたのは、海軍の司令官がわが方へよこすべき手紙の草稿だった」と言ったので、私は、わが意を得た思いがしてうれしかった。

海峡における海軍の軍事行動の目的が、砲台の破壊と、長州藩主との間の充分な了解の成立によって完全に達成されたので、連合艦隊の主力は間もなく撤退の準備に取りかかったが、万一にも海峡に再び砲台の築かれるのを防ぐ目的で三隻だけは残すことになった。私はあとへ残るように命令され、パロサ号に移乗した。

提督が発する前日、奉行のところから、家老一名と役人二名を横浜まで便乗させてもらいたいという手紙がきた。この依頼はすぐに聞き届けられたが、この三名の乗客は指定の時間までに到着しなかったので、一日遅れて出発するフランスの提督に頼んだらよろうと言ってやった。ところが、彼らはイギリスの軍艦に便乗を頼めと指令されていたため、これを拒み、どうしても他国の軍艦で行こうとしなかった。そこで結局、あとでパロサ号が彼らを送りとどけることになったのである。

このようにして、二十日に、パロサ号を除くイギリスの軍艦全部と、ジャンピ号を除くオランダの軍艦全部が、内海を航行して大坂^{オザカ}へ向かい、フランスの軍艦はあとに残った。

その後私は、パロサ号の士官数名と散歩しに上陸した。番所を通るとき、そこにいる者に大声で、「帽子をとれ」とどなられた。私は、「なにを言うか」と言いかえた。再び、「帽子をとれ。ここは、もったいなくも下関の番所だぞ」という。こちらは、「なにをばかなことを。もう一度言ってみろ、奉行に言いつけてやるぞ」とやりかえた。こうして、われわれは町へ入って行き、

て行った。われわれ数名は上陸して本陣^{カウジン}へ行き、艦船に牛を供給してもらえぬだろうかと尋ねた。役人は、できるだけのことはすると約束したが、しかし当方は一匹も牛を殺したことがないから、それはむずかしいだろうと言った。また、若干のメキシコドルを日本の貨幣と両替してくれと頼んだところ、長崎の相場で両替すると約束してくれた。そして、現金の必要に實際迫られているなら、横浜にいる長州藩の代理人へ返済してもらうことにして、一分銀^{イブ}一千を貸すことにしようと言ってくれたので、そうすることに話をきめた。このように長州人は至って親切にしてくれるので、彼らに友誼^{ゆうぎ}を強いるためとは言え、あのように互いに撃ち合ったことを大いに遺憾とせずにはいられなかった。そして、薩摩人にせよ、長州人にせよ、われわれの行為に対して何ら恨みをいだく様子もなく、そのころから引き続いて生じた擾乱と革命の幾年月の間、常に、われわれの最も親しい盟友であったという事実は、少なからず注目に値する。

その日は一日中、一人の護衛をも連れずに町中を歩き回り、海峡のかなたに横たわるシナ海をも瞥見^{くわんけん}した。ところで、われわれは両刀を帯した二人連れの男に、いささか無礼な態度を見せつけられた。この男たちはわれわれの方に向かって、ボートに戻れと、手まねきしながらどなったのである。私が日本語で言いまくると、すぐに黙ってしまったが、ピストルを出して見せたことも多少の効果があったようだ。

ある日のこと、伊藤が商人と称する男を二人連れて、艦へやってきた。そのうちの両刀を帯した男に伊藤が敬意を払っていたことから見て、この二人は高級な階級に属する役人らしく思われた。彼らは艦内を一めぐり案内されたあとで、いろいろな酒を馳走された。伊藤は、今度の戦争を通じて日本側の死者はわずか七、八名に過ぎず、負傷者の数はその約二倍だと明言したが、こ

その日の夕方、汽船ビクトリア号が長崎から、同地の副奉行と通訳をのせて到着した。船が下関の町の前を通りかかったとき、副奉行はフランスの提督を訪問し、ついで同船は田野浦湾内に碇泊中のわれわれの付近へ来て投錨した。彼らは、戦争当時の様子を聞くために米艦した。長州は敗けたのかと聞いたので、そうだと答えると、長州藩主が和睦を乞うためにアメリカ人にあてて書いた最初の手紙の写しを取り出して、小倉の人々から手に入れたものと言った。私は、それは嘘だと、ぶっきらぼうに言ったが、相手はその文書をどこから実際入手したのか言わなかった。彼らは、長州の方では大君から外国人追放の命令をうけたと言いつつ触らしているが、それは嘘だから信じないように提督に頼みに来たのだと言った。また、長崎の奉行は艦隊が大坂へ向かったことを聞き、下関砲台の破壊の直後に強大な艦隊が大坂の前面へ現われたら、同地に恐慌が起こりはしまいかと心配し、提督と大坂の奉行の間に紛争の生ずるのを防ぐために、わざわざ自分たちを派遣したのであるとも言った。

彼らは、下関を外国貿易のために開くという条約を長州と締結しなかったかと、大変心配そうに尋ねた。そんな事になれば、長崎の商業が破滅する恐れがあるからだ。われわれは、情報を与えることを一切拒んだ。長州人を破ってからは、われわれは長州人が好きになつていたので。また、長州人を尊敬する念も起こつてきていたが、大君の家臣たちは弱の上に、行為に表裏があるので、われわれの心に嫌悪の情が起きはじめていたので。そして、それ以来、私はますます大名の党派に同情を寄せるようになったが、大君の政府はわれわれを大名たちから引き離そうと、いつも躍起になっていたのである。

二十一日に、セミラミス号とデュプレクス号が、タンクレード号をあとに残して、海峡を去つ

れるわけにはゆかぬと言ったのだ。小倉人のために敵を破ってやったのに、あとで、こんな不親切な取扱いをするとは忘恩もはなはだしいと、私は散々文句を言ってやった。住民が集まってきた。上陸すれば、寄ってたかつて乱暴を働いたであろう。われわれとしても、無理に入るつもりはなかった。

この月の終りごろ、艦内から天然痘が出たので、ダウエル大佐が旗艦に転じて以来臨時に指揮をとっていたW・H・カミングズは、必要な準備ができ次第横浜へ向けて出港することに決めた。そこで二十七日に、長州の当局に対し、軍艦の内海通行に要する水先案内人を一名頼み、また三艦の艦長らが明日井原を訪問する旨を通告した。この訪問は、横浜への航行の打ち合わせをするため、井原、その他二名の役人との間にあらかじめ約束しておいたのであった。私はその通告書を持って上陸したが、用をすませたあとも陸にのこって、伊藤と会食した。伊藤はわざわざヨーロッパふうの食事を用意しようと、大いに骨折っていた。まず、長さ七フィート、幅三フィート半の食卓をつくり、外国ものの生地で、少々粗いが少しは見れるような布をその上にかぶせ、よく切れる長いナイフと、凹みの少ない、平べったい真鍮のスプーンとを置き、一対の箸をそのわきに添えた。四品の皿がでた。最初の皿は煮たロックフィッシュ（くろはぜ）の料理で、切るのに大変苦労した。その魚の頭にとがった箸をさしこみ、スプーンで肉を剥がして、まあ何とかやってのけた。食卓には、醤油、米飯を盛った大丼、荒ら塩を盛った小皿などがあった。二番目に出たのは鰻の焼いたやつ、それにつづいてすっぽんのシチュー。その両方とも、大変にうまかった。だが、鰻の煮たのと、そのあとに出た鶏肉の煮ものは全くお話にならなかった。切っ先のないナイフで鶏肉をどうして切るかが問題だった。それにナイフの刀身は今にも柄から抜けそうだ。私

の連れてきた男の話では、死者は二十名に近かった。

伊藤はわれわれに、下関では長州産の綿、蠟、生糸などはもちろん、北部地方や大坂の産物もすべて同様に貿易できるし、多分イギリス市場向けの紙も製造することができると言った。また、藩主は外国貿易のために下関を開港することを大いに望んでいるのだが、今大君と大名全部の連合軍が長州へ侵入しようとしている際だから、長州人の注意は目下ことごとく防備の面に向けられていると付け加えた。

一八六三年（詠注 文久三年）にワイオミング号に撃沈された二隻の船は、その後引揚げられ、萩へ回航されていた。私は、串崎岬の砲台はもちろん、前田村の砲台まで長府の大名の領地に属しているのを知って驚いた。この長府の大名も、一族の当主が戦争へ臨むに際して、拱手傍観が許されるほどの独立した力を持つてはいなかったのだ。

前年、オランダのコルベント型艦メズサ号が海峡を通過の際砲撃をうけたときには、町のうしろの低い丘と、町の前方海上の二つの岬に砲台があったが、同所の大砲はその後壇の浦と前田村に移され、これらがわが方の手中におちいる運命に立ち至ったのだ。小倉領である門司の岬の小さい三門砲台も、長州人が建造したものだった。彼らは、土地を平らにして、兵營の造築をやりだしたが、藩主が京都の画策に失敗して、自領の防衛のために領内へ兵を撤収しなければならなくなった時に、小倉の人々によって破壊されてしまった。

ある日、われわれはボートに乗って、小倉へ出かけた。上陸して町の中を歩くつもりだったが、門のところで一時間半も待たされた。何度も門を開けると言いながら、ついに入ることを拒絶された。実際、門を開けるには開けたのだが、二人の男が出て来て、小倉は条約港でないから、人

かった。卿の主要な目的は、敵意を有する諸大名が開港以来天皇の名をもって絶えず行なってきた外国との通商反対の運動を終熄させるため、天皇の条約批准を獲得するにあったのだ。そして、今や反対運動の二大張本人である薩摩と長州が正氣に戻ったのであるから、大君の政府が条約の實務遂行を衷心からねがうなら、大君の權威で日本全国を強制的に新しい対外政策に従わせ、することも容易であると考えたのである。賠償金の取り決めたことは、一に大君の政府を経済的に圧迫して天皇の条約批准を行なわせ、その結果として通商関係を拡張させるための一手段たるに過ぎなかったのである。

井原の一行は十月十日に横浜に到着した。そして、その日にラザフォード・オールコック卿と合衆国公使のプリュイン氏に面会することができた。外国代表が彼らに面会を許したことは、長州の大名に対し、諸外国は何らの敵意をも有しないことの確証であると思われた。また、一行は、外国代表が賠償金の支払いを大君に要求するつもりであることを知って、安堵の思いをしたに違いない。そして同時に、長州が下関海峡の永久的武装解除と外国船厚遇に関して締結した協定を誠実に守ることが、両者間にはつきり了解されるに至ったのである。この問題に関する長州のその後の行動には、何ら不都合なことはなかった。天皇の反逆者、大君の敵と宣告された藩主の家臣たちが、大君の領地である横浜の港に上陸したことは多少奇妙ではあるが、彼らの訪問は私の記憶するかぎりでは、何らの干渉や妨害も及ばぬ外国人居留地内に限られたのであった。そして十四日には、ターター号が出港したので、それに便乗して郷国へ帰って行ったのである。

はそれを断念して、鶏の胸からとった薄い肉片を連れの者にすすめた。つぎに、半でつくった甘いピール(味酥)につけた未熟な柿を、皮をむいて四つ切りにしたのが出たが、これは素敵にうまかった。この饗応は、日本のこの地方で洋風の食事を出した最初のものだったに違いない。あるいは、日本の国内で最初のものだったかもしれない。

横浜へゆく日本人の一行は、井原と、参政の杉徳輔、一名の秘書と伊藤、それに四人の召使ということに決定し、一行はバロサ号とジャンビ号に分けて収容された。われわれより先に出発するはずのタンクレード号は、一行の半数しか収容する余地がなかったし、それにこの連中は長く離れ合っていることを望まなかったので、われわれと同船することになったのである。十月四日にボクサー中佐のレースホース号が、わが艦と交代するため到着した。井原と、その秘書の山県圭蔵(訳注 山県半蔵)と、われわれとが、その翌朝出帆したのである。

わが海軍の軍事行動の大成功と、長州藩主との間の協定成立の報は、直ちに横浜にいた諸外国の代表へ伝えられた。代表たちは直ちに大君の政府を訪うて、伊藤からもらった京都の命令書の写しを証拠に、大君の政府が長州と共謀していた明らかな事実について弁明を要求した。その弁明が薄弱だったので、外国の代表たちは難なく聞老を説伏し、長州が当然支払うべき戦争の賠償金はその額を問わず大君側で支払うか、さもなくば瀬戸内海の一港を通商のために開くというところで、大君の政府の承諾を得たのである。わが方は後日に至り、実際に賠償金を受取ったのであるが、それはむしろ大君側から四か国およびその外交代表者に無理に押しつけた形のものであった。R・オールコック卿に関するかぎり、敗北した長州の大名、あるいは代わって責任をとった大君の政府に対し賠償金を強要したという非難は全くの冤罪であり、そして確かにそれに違いな

のである。また、他方においては、ヨーロッパの戦争方式の優越性が実証された結果、われわれにとって最も手ごわく、最も決定的な敵であつた薩、長二藩を、われわれの確固たる味方に改変させることができたのである。オールコック卿の措置を弁護するのは、さして困難なことではなかつた。卿の採つた行動の経過に関して卿自ら釈明した書信は、即座に人々を平静ならしめ、また心服せしむるような文体で書かれていた。ラッセル卿はそれを読むや、この出先使臣の正しかつたことを直ちに認めて、オールコック卿に対し、女王がその行為を全幅の満足をもつて承認した旨を伝達したのであつた。ラッセル卿の名誉のために記す次第である。しかし、オールコック卿の感情を慰めるラッセル卿の書信は、卿がイギリスに向かつてすでに出発した後に、ようやく横浜へ着いたのであつた。

將軍の政府は、長州の藩主が支払うべき賠償金は額のいかんを問はず政府自らその責任をとることを自発的に引き受けた。十月二十二日、將軍の副閣老の一人（訳注 若年寄酒井忠毗なかつ）と四か国代表の間に協定書の調印が行なわれた。それによれば、一切の要求に應ずるために三百万ドルの金額を支払うか、もしくは、大君オクシンの方から提案して諸強国がそれを受諾することを欲するならば、三百万ドルの代わりに下関、もしくは瀬戸内海のどこかの港を開くというのであつた。この金額をそれぞれの国に分配することは、四か国政府間の調整にまつことになった。また、大君オクシンの閣老が外国との宥和ゆうわを声明したので幸いに、横浜における各種の改善を約束させて、居留外国人の慰楽と福祉の一段の増進をはかつたのである。こうして、勇氣と不屈の精神によつてあらゆる成果を収めたラザフォード卿が、ラッセル卿の指令で日本退去の準備にとりかかつていた際、全く思いがけない事件がもち上がつて、しばらく卿の出発を延期させるような事態になった。

第二章 バードとボールドウィンの殺害

ラザフォード・オールコック卿が外相ラッセル卿から本国召還の急信を受取ったのは、このころのことであつた。表面上は、オールコック卿と現地の事情について協議したいといふのであつたが、このロンドンへの召還命令には、瀬戸内海の通行は外国人の通商に必須な要件ではないといふ意見の表示が付帶してゐたので、それはオールコック卿の行爲を譴責したも同然のものであつた。

大体、外務省の出先使臣は、事件の処理がうまく行かなかつたから召還するなどという、言葉数の多い文句をもつて通告されることは滅多にないのである。賜暇は通例として、大使、特派使節、または使節団長など、その肩書が何であろうとも、請願に基づいて許されるものであるから、帰国せよという要請は、とりもなおさずその外交官を任務から罷免することを意味するのである。しかし、これは、ちやうど卿の政策があらゆる点で成功をおさめ、日本に在留する外国人が異口同音にその精力的な活動に感謝してゐた際のこととて、卿をはじめ公使館のだれもがジョン・ラッセル卿の不興は大した問題ではないと考えていた。

長州は、その部隊が京都の皇居の門から退却した直後に外国艦隊の来襲をうけて惨敗したが、これは大君の政府をして大いに自信を取り戻させた。大君の政府は、外国人を日本から追放して貿易を閉鎖するなど到底実行不可能なことを、天皇に対して頑強に弁明し得る立場に立ち歸つた。

負傷したバードが殺害犯人の検証の手がかりを同胞にあたえるのを防止しようとする魂胆から出たものに違いないと、人々は想像した。しかし、私としては、官民のいづれを問わず、そのような不信行為をやる者が日本人の中にいたとは信じられない。バードの死は、彼のうけた多数の傷口からの出血によったもので、脊髓の傷は軍医が充分な注意をはらわず探針か何かの器具で切断したものと信ずる。そして、イギリス公使館のウィリス博士と、当時横浜で一般内外科医を営んでいたジェンキンズ博士がこの説を主張した。この二人の医師は、検視の立会いには呼ばれなかったのだが。

バードの傷の原因を至急調査して、因^よつてきたる結論を見越すことなく一定の見解を表明したこの二人の外科医は、当然のことながら、そしておそらく全くの誠意から、その後も自分たちの見解を固執して譲らなかつたのである。ことに、この二人にしたところで、こんな忌まわしい暗殺をやった男と血を同じくする日本人のことだから、それ自体は全く卑怯な行為ながら、外国人を憎悪している日本の役人の目からは疑いもなく正当視されているところの行為を、実際にやり兼ねないとは、思わなかつたわけでもないらしいのだが。議会の文書には、この件に関する報告によって暗示された多くの付加的な考察がのっているが、それらについて私が討究すべき紙面を有するならば、それによつて私は、ここに提出されている見解を確証するであらう。だが、私はこの本を私自身の経験と記憶に基づく記録にしようと思つており、すでに発表されている諸般の資料の編纂^{へんさん}をやるつもりはないから、この場合、これらの一切の顛末^{てんまつ}について詳述しないことにする。

大君^{グレート・プリン}の政府は、全力をあげて暗殺犯人の捜査につとめた。そして一か月たたぬうちに、清水清^{セイ}

下関でわが方が成功をおさめ、大君の政府が条約存続の必要を率直にみとめて以来、在留外国人は付近の治安について完全に信頼を取り戻し、条約で定められた範囲内をものは何の懸念もなく出歩きのようになっていた。ところが、十一月二十日の夜、神奈川の奉行がイギリス領事ウインチェスター氏のもとへやってきて、第二十連隊のボールドウィン少佐とバード中尉の両名が、横浜から約十二マイルを去る鎌倉という有名な行楽地で惨殺されたということを知らせたのである。外国人たちは、突然恐怖に襲われた。

ボールドウィンの方は即死だったが、住民の証言によれば、バードは倒れてから数時間はまだ息があつたというのである。この二人の士官は有名な大仏を見物に行つて、それから八幡宮への道を騎馬で通行中、ちょうど大通りへ出るところで、二人の男に鋭利な刀で斬りつけられた。そして、ほとんど抵抗するひまもなく重傷を負わされて、地上に仆れてしまったのである。外国人社会の恐怖がいかりであつたかは、想像するに余りがある。さらに、検視の結果、バードの致命傷は、暗殺犯人が現場を立ち去ってから数時間後に受けたものらしいとわかつたとき、恐怖はいっそう深刻なものとなつた。

軍医の意見によれば、致命傷は第二と第三の頸椎の間で脊髓が完全に切断されている傷で、これが明らかに死因となつたに違ひなかつた。そこで、この若い犠牲者が午後の十時まで息のあつたことを示す、あらゆる証明が行なわれた。そうだとすると、だれがこの致命傷を、どんな動機であたえたのだらうか。連隊付軍医の報告を頭から信じこんだ人々は、殺傷の知らせで直ちに現場へ派遣された奉行の手下の一人によつて行なわれた、という決論へ飛躍した。それは、奉行自身ウインチェスター氏へ伝えに來た三時間ないし四時間前に行なわれたもので、その動機は、

と思ひながら、大急ぎでその場を立ち去つた。

死刑は当時の日本にあつては、現在の人道的な刑法の施行以後にくらべて至極普通のこととなつてゐたのだ。これには、槍で突き刺す磔刑くわくけいもふくまれていた。刑場に集まつた外国人の多くは、自分たちの同胞の血を流した罪人に対する、法による刑罰の実行を見たいという当然な理由を念頭におかずに、単なる好奇心からこの血なまぐさい見せ物を見ていたに違ひない。

このボールドウィンとバードの実際の殺害者の一人である清水清次が逮捕されたという報知は、ラザフォード卿がイギリスへ向かつて乗船する前の晩に卿のもとにもたらされた。日本では、專制的政府の下では常に有力な存在である探偵警察の優秀なことが外国人の間に評判になつていたので、日本の政府がそうしようと決心さえすれば、いつでも外国人に対する襲撃者を逮捕するのとが可能であると私たちは信じていた。たとえば、数年後に判明したことだが、一八六一年にイギリス公使館を襲撃した一味徒党の多くは、その名前が世間一般に知られていたにもかかわらず、大君ダイクニンの顧問官アドバイザーたちは自分たちの困難な政治上の立場から、あえて外国人殺害者を有罪として告発しなかつたのである。今度の事件は、このような犯罪について、凶行者にその犯罪たることを的確に思い知らせた最初の例であつた。イギリス公使ラザフォード卿が、自分の政策の正しかったこの証拠に大いに満足したのも至極もつともで、卿が自分の懷中時計と鎖をはずして、この吉報をもつてきた使者の頸くびに投げかけたことも、まことに自然な動作であつたのだ。

十二月二十八日の午前十時に、清水清次はイギリス守備隊の分遣隊の面前で処刑された。蒲池と稲葉が清水の外国人殺害計画の共犯者であつたということには疑いがあつたとしても、この清水という男がボールドウィンとバードの実際の殺害者の一人であつたということには、何の疑い

次^ジ（訳注 元、谷田部藩士）という名前の犯人を逮捕した。蒲池^{ガワイケ}（訳注 蒲池源八、二十六歳）と稲葉^{イナバ}（訳注 稲葉丑次郎、二十三歳）という二名の共犯者は、外国人殺害の陰謀のため清水と組んで金持の農民から金を強奪した罪で告発され、すでに十六日に処刑されていたが、この両名は鎌倉の犯行に直接の共犯関係はなかった。

私はこの二人の男の処刑場に臨席した。処刑は、一八六四年十二月十六日（訳注 元治元年十一月十八日）の午後、日本の牢獄の外囲いの中で執行された。外国人や、日本人の見物が大勢集まっていた。三時少し過ぎたころ、罪人が来るといふささやきが伝わった。扉が開かれて、目隠しされた一人の男が、縛られたまま、群集の間を引かれてきた。その男は、荒むしろの上にひざまずかされた。背後の地面には、血をうける穴が掘つてあつた。付添いの者が、この男の着物を下へ引つぱつて頸部を露出させ、刀のねらいを充分よくするために、罪人の髪の毛をなであげた。刑吏は、刀の柄に綿布を巻きつけて、刃を充分に研ぎあげてから、罪人の左に位置をしめた。それから、双手^{うみで}で刀を頭上に高くふりかぶつて、これを打ちおろすや、首は胴体から完全に切り離された。刑吏は、その首を持ちあげて、立会いの首席役人の検視に供した。その役人は簡単に、「見届けた」と言った。首は穴へ投げこまれた。それから、次の男が引き出されてきた。付添いの者は、罪人をちょうどよい位置にひざまずかせるのに少々手こずった様子だったが、ついに人々の満足するようにやりおわせた。前回のように頸部が露出されるや、前と別な刑吏が進みでた。そして、罪人の左に立ち、刀を振りあげ、前と同様なあざやかな手並みで振りおろした。付添いの者が首のない死体を穴へかかえこんで、それをもみながら、なるたけ速く血を流し出そうとしているのは、身の毛のよだつ凄惨^{せいぜん}な光景だった。それから私は、二度と物好きにこんな処刑を見るものか

自分は彼らを襲わなかったであろうと答えた。それが真実かどうか、私には判断するすべもないが、とにかく、これは犯人の供述書とは一致しない。それにしても、考えねばならぬのは、日本では犯人のしゃべることを全部そのまま記録するのではなく、取調べに際し、それぞれ異なった場合に行なったあらゆる陳述の終審的結果を、法廷の一役人が縮約して書きまとめるのであって、イギリスの刑事裁判で裁判長が行なう証明の約説と大いに似ている。

清水は、日本の役人に目隠しをしないでくれと頼み、一篇の詩を吟誦^{ぎんしゅう}した。それを訳すと、次ぎのような意味になるだろう。

「私は捕えられて、死刑になるとも悔いるところはない。なぜなら、夷狄^{ペリヤンズ}を殺すことは、日本人の真の精神であるから」。

付添いの者が清水の着衣の衿^{えり}をうしろへ引っぱって、刑吏が斬りおろせるように用意していたとき、うんと斬りよいように縄目をゆるめてくれと、清水が言った。そして、「後世の人々は、清水清次は実に立派な男だったと言うだろう」と付け加えた。彼はまた、「ゲンパチ（訳注 蒲池源八）の首を斬った刀では、おれの首は斬れまい」と言って、多分自分の頸の太いことをしゃれたのだろうが、刃をよく研^といでくれと頼んだ。そして、「どうか、すっぱり斬ってくれ」と言いながら、自分の頸を刀の下にさしのべた。これが、彼の最期の言葉であった。だが、刀がおりようとした瞬間、彼は役人に何か注意をしようとしたらしく、頭を左へむけたので、切っ先が大分目的をはずれた。そこで刑吏は首をたたき切らなければならなかったが——それは実に気味の悪い光景であった。

最初の一撃と同時に、イギリス陸軍砲兵隊の砲兵によって大砲が発射され、暗殺者の処刑が終

もない。私は命ぜられて、刑の宣告を聞くため、処刑の前日代理領事のM・O・フラワーズ氏と一緒に牢獄をたずねた。われわれは、清水が屈強な護送者たちに守られながら江戸から到着するまで、数時間待った。この犯人は直ちに事件の目撃者と対決させられた。参考人たちは、黙って、この男の容貌をしらべた。それから、別々に審問されたが、みなこの男に間違いがないと言った。その中の最も重要な証人は、襲撃の現場を見ていた少年だった。

そのあとで、われわれは別の部屋で犯人に質問したが、彼はかなりはつきりと自分の犯行を自白した。この男は、何かもつと言おうとしたが、日本の役人に黙るように命ぜられた。だが、彼が真犯人に間違いない一番よい証拠を握ったのは、領事館勤務の一員であるフレッチャー氏であった。同氏は、殺害者の清水が罪状を書いた幟のぼりの前に立てて町を引き回されたのち（これは刑罰の一部である）、その行列について刑場へ行ったのであるが、清水が、「外国人を殺したとき、その一人は領事だと思った」と言ったのを、ふと耳にしたというのである。そして、われわれの同僚であるこの人物を知っている者は、同氏が全く正直な人で、このような事で間違ったことを言う人では絶対ではないということを認めるであらうし、また、この場合日本政府が、アジア人が進退に窮した場合に常套手段じょうそうしゅだんとして用いる不信行為、すなわち下手人の替え玉を絶対に使用しないと信じきっていた人でもなかったことを認めるだろう。

二十八日の午前に、守備隊は刑場へ向かって行進し、刑場の一方に整列した。十時ごろ、罪人が引き出された。その男の口から出た最初の言葉は、酒をくれというのであった。改めて訊問されると、彼は率直に自分の犯行をみとめた。私はこの男に、前の日に私たちに言おうとして止められたのは何かと訊ねた。それに対して彼は、もしバードとボールドウィンが道を避けたなら、

第一三章 天皇ミカドの条約批准

ラザフォード卿が日本を退去してから、ウィンチェスター氏が代理公使として事務の管理に当たった。間もなくラッセル卿から、イギリス政府は前公使の遂行した政策に充分満足している旨の急信がとどいた。そして、われわれは、ラザフォード卿の功績が報いられて、卿が北京ペキン駐劄の公使といういっそう重要な職に昇格したことを知ったのである。

ラザフォード・オールコックの後任公使は、ハリー・パークス卿であつた。この人は、人一倍豪毅ほうぎな気質で、死に直面したこともあり、威信のある人物として評判が高かつた。極東へ来ているヨーロッパの全居留民の目には、極東諸国へ来ているイギリスのどの官吏よりも高い地位にある人のように映うつっていたのである。晩年のパークスの欠点や失敗が特にどのようなものであつたとしても、かつてイギリスはパークス以上に献身的な公僕を代表として派遣したことがなかったということ、そして日本自身としても、パークスのおかげを被かつており、日本はこれに報いることができず、また充分にパークスの努力を認めてさえもないということを知る必要がある。もし、彼が一八六八年（訳注 明治元年）の革命の際に別の側（訳注 幕府側）に立っていたならば、あるいは、彼が多数の公使仲間と一緒に単純な行動に組していたならば、王政復古の途上にいかんともなし難い障害が起こつて、あのように早く内乱が終熄することは不可能だつたであらう。パークスは疲れを知らない精勵家で、その職務に全く没頭し、周囲の事情に正しく目をくばつて、倦う

わったことを一同に知らせた。そこで、私たちはできるだけすみやかにその場から立ち去った。

罪人の首は横浜の北口の橋（訳注 吉田橋）のところへ持つてきて、三日間梟架（うしぎ）の上にさらされた。処刑の宣告文の写しが、戸塚と、殺害の現場に掲示された。一、三日して、私は公使館の騎馬護衛兵をしたがえ、日本の当局者によって約束された通りのことが充分に履行されたかどうかを見に行った。そして、日本側が約束を残らず実行したことを知った。こうして、私の日本に滞在中のあらゆる経験の中で最も劇的であつた事件の一つが終了したのである。

この暗殺者を憎まずにはおられないが、しかし日本人の立場になつてこの事件をみると、正直のところ私は何としても、この明らかに英雄的な気質をもつた男が、祖国をこんな手段で救うことができると思ふまでに誤つた信念をいだくようになったのを遺憾とせずにはいられなかつた。しかし、日本の暗殺者の刃に仆れた外国人の血も、またその報復として処刑された人々の生命も、やがて後年その実をむすんで、国家再成の樹木を生ぜさせた大地に肥沃（うづく）の力をあたえたのであつた。

ことに間違いないと思った。もし、大君の政府が、真犯人を逮捕できないために替え玉を使ったものなら、その真相は必ず露顕したであらう。この時分、われわれはいかなる狡計をも直ちに看破できるような情報の出所を持っていたからである。

ハリー・パークス卿は、七月早々横浜に到着し、ウィンチェスター氏は上海へ向かつて去って行った。同氏は、上海の領事に任命されたのだ。これと同時に、F・S・マイボローが長崎から横浜の領事館へ転任してきた。

ハリー卿は、長崎を通過の際、某々諸大名の代官たちの口から、近く内乱が起きるが、その目的は大君打倒にあるということを聞いた。

卿は、すでに九月に大君の閣老に対して、天皇の条約批准を得たい旨を伝えたのであるが、実を言うと、このことに考えた功名は、ウィンチェスター氏に帰すべきものだった。同氏は、すでに四月ごろから（私は当時知らなかったが）イギリス政府に対し、大君の閣老は協約の規定にある一回五十万ドルずつ四回にわたっての支払いを続けることは不可能だと言っているから、この際下関賠償金の一部を放棄すれば、その代わりに文書による天皇の条約批准の約束と、輸入税を価格の五パーセントまで一率に引き下げさせることが可能になるかもしれないことをほのめかしていたのである。事実、ラザフォード・オールコック卿にしても、下関砲撃のほとんど直後に、天皇の条約批准の必要なゆえんを力説していたのであった。外相のラッセル卿はこの提言をいれて、直ちにその旨をオランダ、フランス、合衆国の諸政府に通告し、同時に同じ趣旨の書信を日本へも送った。これは、十月の末ごろハリー・パークス卿の手許へとどいた。

パークス卿は直ちに諸公使と相談した。そして、各国の公使が一致して、相当数の軍艦からな

むことを知らなかった。そして、少しも骨身を惜しむことがなかったが、また部下に対しても自分と同様な熱誠と勤勉を求めたのである。私は後に、彼の勇氣について顕著な実例を目撃する機会を得た。インドにおけるイギリスの多くの文官の功績も輝かしいものだったが、危機に際してのパークスの冷静と勇氣は、軍人以外のだれにも決して劣るものではあるまい。勤務については厳格で、やかましくもあつたが、私的の關係では、助力を求めるすべての人々に情け深く、彼の好意をがち得た人々に対しては、どこまでも誠実な友として尽くしてくれた。私は不幸にして、こうした人々の一人ではなかったので、パークスとは終始親密というほどの仲ではなかった。しかし、それにしても、私の仕事が遅いとか、てきぱきしないとか、苦情を言われる筋合いは絶対になかったので、間もなくパークスの輔佐の一人として起用されるに至り、一八六六年末に横浜の領事館（一八六五年初めに私が通訳官に任命されたところの）から、ついに江戸の公使館へ転任するようになったのである。

バードとボールドウインを殺害した清水清次の共犯者間宮一（イチミヤ）という男が、一八六五年十月三十日（（記注 慶応元年九月十一日）に処刑された。私は、その犯罪について明白にしなければならぬ点を追究するため、じしや降りの雨の中をフラワーズと一緒に、朝早くから出かけた。間宮は共犯者の清水と同じ判罰を宣告された。そこで、この男の斬首に立ち会うため、われわれは一時に再び出かけて行つた。沛然たる雨と、頭上の鈍い鉛色の空が、この陰気な場面にふさわしかった。

間宮はまだ年若く、清水よりも小胆な男だった。刑吏の前へ出そびれないように、酒に酔うことを許してもらった。この男の首は、たった一撃で胴から離れた。この間宮が真犯人であるかどうかは例によって疑わしいと、その地方の外国新聞が書いたけれども、私は暗殺者の一人である

ス号(十二門)、キャンシャン号(四門)で、オランダ側からコルベット型艦のズートマン号が加わった。イギリスの提督はきわめての好人物で、われわれ三名の文官のために正甲板の船室をあてがってくれた。最近セヴァーン号から旗艦へ転じて来たばかりの海軍士官で、私の友人であるA・G・S・ホーズが同じ艦にいるのを知って、私はうれしかった。

天皇の条約批准と関税率の引下げ以外に、外国代表たちは一八六六年一月一日(詠注 慶応元年十一月十五日)を期して、大坂と兵庫を外国貿易港として開港させようとしているという風評があった。一八五八年の条約(詠注 安政五年の条約)によると、この両港は一八六三年一月一日に開かれるはずであったが、列国は一八六二年に至り、開港の準備期間として五か年延期するという日本側の提案に同意したのであった。この両港を今直ちに開くならば、四か国は下関の賠償金の三分の二を断念する用意があり、どれを採るか、その選択を大君の手にゆだねる、という噂がとんだ。この噂は、外国公使館の職員の間で大いに問題となった。局外者は、最後の通牒を日本側に突き付けて、二か所の新しい貿易中心地の開設を、有無を言わず承諾させることになっていると言った。昇進を期待する公使館員は、あらゆる外交上の計画に付きものであるはなはだし「不確実性」がないとしたら、この話を大いに信じたかったに違いない。

江戸の政府は、諸外国代表の決意のきわめて強硬なのに驚いた。水野和泉守(詠注 老中水野忠精は、大君が京都に滞在中江戸に残っていた唯一人の老中であつたが、ハリー卿の行動を極力思いとどまらせんものと、若年寄の一人である酒井飛騨守と同道してやつてきた。老中のことき身分の高い役人が外国公使館へ自ら足をはこんだのは空前のことだったが、このような憂慮の表示も、事態を一挙に解決しようとする外国側の決意をなおさら強めたに過ぎなかった。それに

る艦隊の支援の下に大坂^{オース}へ押しかけ、大君^{シグキン}の閣老の主要人物と膝詰^{ひざづめ}めの談判を行なうことを提案した。話は前後するが、大君^{シグキン}は、僭越^{せんえつ}な謀叛^{めくはん}人たる長州藩主^{（訳注）毛利慶親}の軍隊を自ら指揮するといふ表向き^{（訳注）}の名目で、六月に京都へ上ったが、その後いろいろな陰謀が起つたり、また軍容が充分整わなかつたために、そのままずっと京都に滞留をつづけていたのであつた。フランス公使は、初めは賠償金を放棄して開港に替えることに強く反対していたのであるが、本国政府の訓令を受取るにおよんで、イギリス代表と意見を同じくするに至つた。イギリス代表は、合衆国の代理公使やオランダ理事官も、進んで自分の主唱に追隨してきたことを知つた。後者について言えば、私たちはハリー卿が常にオランダ理事官を「懷中に丸めこんで」いると思つていたし、またアメリカ人は、「老廢したヨーロッパの君主政治」と別な線で行動するという従来^{（訳注）}の性向を、当時はいくぶんなくしていたのである。

このように行動の一致が確保されたので、出動準備の内命が海軍の司令官に伝達された。公使館員は、大判洋紙、絹ひも、羽ペン、インキ壺^{つぼ}などを、どつさり用意した。そして、四か国の外交代表が意見や計画を記した条約草案に署名した翌々日、それぞれ軍艦に乗り込んだのである。ハリー卿は、ジョン・マクドナルドとアレキサンダー・フォン・シーボルトと、この私を帯同^{（訳注）}した。

こんどの艦隊は、前年下関の砲台を破壊した時のような圧倒的に強力なものではなかつたが、それにしても堂々たるものだつた。イギリスの軍艦は、セント・ジョージ・ウインセント・キングの提督旗^{（訳注）}を翻したプリンセス・ロイヤル号（砲七十三門）、レオパード号（十八門）、ペロラス号（二十二門）、バウンサー号（二門）。フランスの軍艦は、グエリエール号（三十六門）、デュプレク

はこの依頼に対し、約束は一切できないと、はっきり言つた。しかし、彼らとしても、規則によつて奉行に報告する義務があつたので、こうした拒絶は大して意味がなかつた。

今度は、前年下関でジョレース提督付通訳として活躍したジラール師に代わつて、フランス公使館付きの耶蘇ヤソ会員メルメ・ド・カシオン氏が通訳に当たつた。翌日、カシオン氏は、イギリス公使館のマクドナルドとフォン・シーボルト、およびオランダ理事官の秘書ヘフト氏などと一緒に、外国代表の書面を携えてキャンシャン号に搭乗し、大坂へ出かけた。バウンサー号がイギリス側の人々を乗せて行くはずだったが、同号の指揮官が定刻までに蒸気を起こすことができなかったので、その結果フランスの国旗だけが**大坂港口の洲上**に翻るひるがへことになり、最初の得点はフランス人によつて記されたのである。メルメ氏は抜け目のない男で、日本語で書いたフランス公使の書簡を用意していた。同氏は、四か国の代弁者になりたがり、大君ダイクニの閣老に外国代表の目的の大略を述べる役目を自ら買つて出た。そして、その書簡の末尾には、他の三か国のものには付いていない長文の一節が挿入そうじゆうされていた。

河口に達するや、二名の町奉行(その当時、役人は二名ずつ組になっていた)の出迎えをうけ、接待所として用意されていたらしい、すぐ手近の建物へ案内された。奉行は、メルメ氏とその一行が直接閣老の一人に面会を望んでいるのを知ると、四時までに閣老が来るように取り計らうと約束して、すぐに閣老を迎えに行つた。

そうこうするうちに、マクドナルド、シーボルト、ヘフトなどの連中は、こちらから大坂の町に出向いて閣老に会おうと言ひ出し、徒歩で出かけて行つたが、長い道をさまよつたあげく、ようやく町が見える所へ来たときには、もう三時になつていたので、急いでボートへ引き返すとい

しても、水野とその部下の酒井が、自己の努力の成功を期待してやって来たとは、どうしても受取れない。実際のところこの兩人は、外国代表の兵庫到着後の最善の対策について若干の意見を述べただけで、大体当方の主張に満足したのである。

われわれは十一月一日に出発し、海岸にそつて至極のんびりした航海をつづけ、四日の午前八時に和泉灘を通過した。その際、砲弾が装填され、兵員はみな部署についたが、由良の砲台の守備兵は何ら妨害の気配を見せなかったので、再び平時の姿勢にかえた。

十一時半に、淀川河口の低地に横たわる大坂が視界に入った。ここから見渡すと、湾の両側を取り巻いている山々がはるか陸地の奥深くまでつづいていて、ついには霞の中に消え去っている。大君の城（訳注 大阪城）は、幾層と知れぬ白い櫓が市の背後にそびえているので、すぐにそれとわかった。しかし、大坂の市は家が低く、われわれの航行している湾外の深海からはほど遠いので、ほとんど見えなかった。連合艦隊は、プリンセス・ロイヤル号を先頭にして一列につづき、航路を次第に兵庫の方向に転じた。われわれの乗艦は、一時半に兵庫の港に投錨した。ついで他の諸艦も一隻ずつ入港して、それぞれ所定の位置についた。

湾内には大小さまざまな帆船が群がり、七隻の日本の汽船が碇泊していた。大君の征長総督府に所屬する一隻の船から、役人が二名慣例の訊問をやるために艦へ乗りこんできた。また、しばらくすると、ばかに穿鑿好きな沿海見回りの役人が数名やつてきて、艦隊の来航した目的や、出港地など、いろいろの質問をして引き上げた。こちらは、それらの質問にはほとんど応ぜず、明日数名の官吏が大坂へ行くから、上陸地点までだれかを出迎えによこすように大坂の奉行に伝えてほしい、また、二隻の軍艦を大坂へ派遣したいから、水先案内を出してくれと頼んだが、先方

このような住民の好意的態度は、大君タイクワンの役人があらかじめ当方に警告していたものとは、全く違つたものだった。大君の役人たちは常に、大名たちは外国人に敵意を持ち、一般の住民もまた外国人を嫌悪し、これに恐怖の念をいだいてしていると語っていたのだ。ところが、われわれは、いずれの階級の人々からも好意的態度以外の何ものをも示されなかったのである。

將軍の政府は、その直接支配下でない部類の日本人が外国人と自由に談話を交じえることによつて、この二百六十年間少なからず徳川氏の擁護に役立ってきた諸制度の權威がくずれはせぬかと心配している。したがつて、今や衰頹すいたいしつつある徳川の権力の尻押しをやるのは、イギリスにとつて好ましい策ではない。そして、この傾向は、日と共に明らかになつてきている。大君タイクワンの役人が外国人との交際の邪魔をしようとした一例として、市民の外国船へ近よることを禁止する告示を大坂オザカで行なつたという事実があげられる。これは、人民を外国人に近づければ近づけるほど、人民と外国人との仲がますます親密になるということを充分に知るに至つたからだ。

その後の数日間、外国人の居留地設置のために敷地の選定をする仕事に当たり、もつぱら大坂の近郊の踏査をやつていたが、その間も、大坂の閹老へ信書を届けるための海路往復は実に頻繁だったのである。阿部は、木曜日には来ることができなかつた。代わりの閹老をよこすという申し出があつたが、その日になると二人の大坂奉行がまたも言いわけにやつてきた。ハリー卿は奉行に向かつて大いに語気を強め、おそくも土曜日には閹老のだれかと会見しなければならぬと言ひ張つた。しかし、同卿としても、この要求がそのまま受け入れられるとは思わなかつたので、シーボルトとヘフトと私を翌早朝大坂オザカへ急派することにしたのである。

ところが、われわれが碇泊所に近づいたとき、反対の方から一隻の日本の汽船がやつて来るの

うような始末であつた。

奉行は約束をよく守つて、こちらから要求した一名どころか、小笠原忠岐守(訳注 老中格小笠原長行)と阿部豊後守(訳注 老中阿部正外)の二老中を連れてきた。メルメ氏の一行は、書簡を閣老に手交した。閣老はいとも丁重な態度で、愛想さえ交じえながら、メルメとマクドナルドの述べる外国代表の伝言に聞きいったが、もちろん何らの回答の用意をも持ち合わせてはいなかった。しかし、この時に、次ぎのような取決めが行なわれた。すなわち、大君は目下京都に滞在中であるから、九日に阿部が大君の全権委員として兵庫へおもむき、プリンセス・ロイヤル号上で四か国代表と会見するといふのであつた。

私自身は、地方の役人との折衝という、あまりありがたくない役目を当てがわれ、W・G・ジョーンズ艦長に同伴して、牛肉、水、石炭、その他の艦の必需品を買い入れる交渉のために上陸した。私たちはまた、士官が上陸するから、丁寧な待遇するように市民に布達してもらいたいと役人たちに頼んだ。彼らは、必ずそうすると約束した。そして、長官たる大坂の奉行に対する責任上、士官の一団ごとに一、二の警吏をつけて、上陸者の安全をはからねばならぬだろうと付言した。年のころ十九か二十の若い警吏頭を相手にしばらく話したが、やがて数名の、もっと高級な役人が現われて、この場の指揮に当たり、こちらから出したすべての要求をいれると約束して、忘れないように委細を筆記した。こうして、午後には全艦に上陸の許可が出た。多数の士官が、この機会を利用して、当時ヨーロッパ人にとってまだ一般に未知な土地であつた大坂の市を見物したのである。堤督とハリー卿と私は、この市の端から端まで歩いて見た。住民の群れがついて来たが、私たちに対してはなほだ好意的であることがわかつた。

にかこまれたが、しかし住民の態度はきわめて穏やかだった。城に向かつてまっすぐ流れている河の最初の橋である安治川橋を渡ったのち、ある寺院へ案内された。だが、この寺院も宿泊所としては充分でないことがわかった。案内者の態度があまりよくなかったので、奉行のところへ行くゾと嚇してみたが、この嚇しも全くきかない。これには、われわれも参つてしまった。そこで、ボートを置いてきた場所へもどり、河水の上から市中をよく見物することにきめた。われわれはボートに乗って、川を漕ぎのぼった。

やがて、何隻かの船を一方の岸から他の岸へ並べてつながり合わせた防塞にぶつかったが、これは明らかに、これ以上われわれが漕ぎのぼるのを妨害しようとするものだった。岸の番小屋から数名の役人が出てきて、引き返せと叫んだ。われわれは岸にボートをつけ、段々を上って行って、なぜ邪魔をするのかとなじった。役人は、奉行の命令だと言った。それから、かなり激しい言い合いとなった。私は、通行を許すか、それともすぐに奉行の邸へ案内するか、そのどれかを選べ、と言った。彼らは、とうとう折れて出た。一、二隻の船を除けて、ボートがようやく通れるだけの道を開いてくれた。われわれは、人口四十万の都会の小役人根性をへし折ったので、大いに愉快になった。断然まっすぐに城のところまで漕ぎのぼることにきめ、番小屋の役人の一人をボートに乗りこませて、再び漕ぎ出した。

橋の上は、黒山のような人だかりだった。群集は口々に叫んだり、ののしったり、時には石を投げたりした。ヘフトは癪癪をおこした。ピストルを出して、射つゾと嚇したが、私はそれを元の皮囊におさめさせた。別に危険な状態にあつたというわけでもないで、こんなつまらぬことで人を殺すようなまねはさせられなかったからだ。

が見えた。われわれは、ボートでその船へ乗りつけた。同船は、外国の公使と会見するために兵庫へ行く阿部豊後守を乗せて来たものだった。そこで、シーボルトが阿部と同行して兵庫へ帰ることになったが、ヘフトと私は、阿部が連れてきた二名の役人と一緒に航行をつづけることにした。ところが、錨をおろす段になると、この両名の役人は上陸の邪魔をして、港の役人が船へやって来るまでは、外国人と一緒に上陸することはできないと言い張った。われわれは、場合によってはこの二人を残しても上陸する決心であることを示すと、彼らはいやな顔をしながら、ようやくボートに乗り移った。

われわれは、腕ききの水兵四名の漕ぐ艦用ボートで、つい数日前までは強い西風のために通行不能であつた港口の洲を難なく漕ぎわたつた。そして、天保山岬の砲台の背後にある小さな入江から上陸し、役人どもの止めるのもきかずに、マクドナルドとシーボルトが前に泊まつたという家へのりこんだ。役人は、この家には病人がいると言つたが、そんな古い手には乗らなかつた。そしてもちろん、病人などはいなかつたのである。

やがて、再びボートに戻り、三十分も河を漕ぎのぼって、町はずれまで達し、そこから上陸して、外国代表の宿泊所にあてられた一軒の家屋を検分した。代表たちは最初大坂の市中で談判するつもりだったが、あとになってこの考えを捨てたのである。この家屋一軒だけでは代表たちや随員を入れるには明らかに不足なので、私は奉行のところへ行つて、別の宿泊所にしてほしいと言つた。役人たちは、これを聞いてびっくりした様子だったが、すぐに舟で別の家へ案内しようと言つてくれた。われわれは、少し市を見物してやろうと思つたので、舟で行くのを断わり、堤にそうて歩きだしたが、それは役人たちをひじょうに心配させた。私たちは、黒山のような群集

ある日、その船長の有川^{アスカ}弥九郎^{ヤクヱウ}が数名の部下を連れて旗艦へやってきたのである。彼らの中の一人は鹿兒島で私に会ったことを覚えていたので、すぐ兄弟のように親しくなった。彼らは、たらく酒を飲み、喫煙したあとで、陸上で一緒に日本式の晩飯を食べたいから、明日迎えの舟をよこすと、私に約束して帰った。だが、彼らは、この約束を忘れてしまった。大坂^{オセカ}へ行ってきた翌日、シーボルトと私が有川の船へ行って見ると、ちょうど抜錨しようとするところだった。有川は、われわれを見て大いに喜び、「オンナゴチソー」(女御馳走)の約束を果たすことのできなかったわびをくどくどしたのち、馳走の支度のしてある船室へ案内した。この紳士は、あまり丁寧すぎるくらい腰が低かったが、大君^{オウキミ}の役人たちの「愛想のない」のにくらべると、大いに気持がよかった。私が鹿兒島や琉球^{リュウキウ}へ行きたいと言えば、喜んで私を渡航させてくれそうだった。私たちは生卵^{カマムラ}を食べ、酒を飲みながら、しばらく船上で歓談に時をすごした。たしか、私はここで初めて川村^{カワムラ}に会ったと思う。

数日して、この汽船が再び戻って来たとき、私はまた出かけて行って、もつとおもしろい人物と知りあった。小さいが煙々^{ケイケイ}とした黒い目玉の、たくましい大男が寝台の上に横になっていた。この男の名前は島津左仲^{シマヅサナエ}というのだと、おしえられた。私は、その男の片腕に刀傷があるのに気がついた。それから幾月もたつてから、私は再びこの男に会ったが、その時には本名の西郷吉之助^{セーギョウキチノスケ}を名のっていた。西郷のことは、後章でもつと述べなくてはならない。

阿部豊後守は、十日にハリー卿と五時間の会見を行なつてから、さらにグリエール号へおもむいて、フランスの公使ロッシュ氏と会談した。シーボルトから聞いたところによると、この会談は満足のゆくようなものではなかった。諸代表の提出した三か条の案に対する阿部の回答の内

一、二回砂洲（さしづ）にボートを乗りあげたが、とうとう、城の真下にある京橋（きやうきやう）の下へ達した。われわれの左手の方に、役人どもが乗っている小舟が控えていた。役人は、ここへ来て届けをしろ、と舟から声をかけた。また、草の生えた右手の岸に、半ば洋装の兵士が群がっていたが、その中には一見貴族の家来とも思われる平服の男も数名いた。その中の一人は、岸へ寄せたわれわれのボートと間近なところまでおりてきて、われわれと同行して来た日本人に向かつて、名前や役柄を言えとどなった。どなられた男は、「お前こそだれだ」と言い返し、五分間ほど互いに言い争った。その間、われわれは付近を歩らついている兵士たちを油断なく警戒していた。

敵意をもつ武装した群集の中へ上陸するのは明らかに無謀だったので、やむなくボートの舳（へそ）を下流へ向け、こんどは流れにしたがつて、急速に漕ぎ下った。橋のところでは、まだ前の群集ががんばつていて、われわれが通るとき罵声（ののしり）をあげせかけた。漕ぎ上ったときの、あのヘフトのすごい剣幕に恐れをなしていた日本の役人は、こんども驚いて、喧嘩（けんか）になりはせぬかと、びくびくしていた。

その朝倉のわれわれと近づきになつて以来、目に見えて弱く、おとなしくなつてきていた気の毒な役人たちを上陸させたのち、われわれは砂洲を横切つて、バウンサー号の方へ近づいた。だれよりも充分によく大坂の市街を見物して、大勢の役人どもの憤激をはねかえして来たのであるが、それから数分後には無事に兵庫へ向かう船中であつたのである。わずかのヨーロッパ人にかくもたわいなく囁（ささや）しつけられた意気地のない日本の役人たちに、私は侮蔑（ぶべつ）の感をいだきはじめた。

珍しい邂逅（かいこう）たつたが、私たちの兵庫滞在中に、やはり同港に一隻の薩摩の汽船が碇泊（ていぱく）していて、

わが方が京都行きを強行するには、連合艦隊の兵力が充分ではなかったし、よしんば充分であつたとしても、ハリー卿が本国政府から与えられた権限では、こうした手段は取り難かつただろう。そこで、ただ日本側の回答を待つよりほかに手がなかつたわけだ。

会津と細川の家臣数名が、政治問題を論じるため、あるいは自分の藩主のためにできるだけ情報をあつめる目的で、ひそかに来艦したのは興味ある訪問だつた。会津藩主(訳注 京都守護職松平容保)は、京都にある大君の守備兵の指揮者であつた。細川は九州の大きな大名の一人で、名分上は大君の味方であつたが、反対派へ寝返つた方が得策ではないかと、そのころすでにそう考へていた。この時分にはもう、大君の幕府と天皇の朝廷との間に、はつきりした対立が起こつていたからだ。大君は外国人の友であり、勅許を得ずに条約を結んだ、いわば臣にして大権を侵犯した者だが、これに対する朝廷の鬭争標語は、「尊王懷夷」であつた。私の訪客は、「人心不穩の状態」について大いに論じた。彼らの言葉によると、天皇は大体においてすでに条約を承認しており、長崎、箱館、下田を外国貿易港とすることに異論はないのであるが、神奈川の開港には承認を与えたまわず、下田をこれに代えられたのであるという。しかし、外国の商人が兵庫で取引することは、現在のところ到底勅許にはなるまいと、彼らは堅くそう信じていた。また、排外的感情が国民の間はかなり広まっていると主張したが、しかし、長州などは大君の権力を奪うのが主目的で、そのための単なる党派的標語として排外思想を利用しているのだとも考へていた。

五日おいて、立花がまたハリー卿をたずねてきた。立花の報ずるところによると、大君は頭痛のため大坂に滞在中であり、天皇の条約批准を請いにまだ上洛してはいなかつたのだ！ 阿部と小笠原は、微恙のためイギリス公使を訪問することができなくなつたという。ハリー卿は、この

容は、要するに、「不可能」ということに帰した。大君は、わが方の要求に屈伏して世の不評を招くよりも、むしろ賠償金の第二回分を支払った方が増しだという考えであつた。「ジンシンフオリアイ」（人心不折会）、すなわち一般の人氣がきわめて穩やかでないというのが、当時およびその後長い間の先方の逃げ言葉だつたのである。ハリー卿は阿部に対して自分の意見の一端をのべた上、帰って他の閣老とも相談し、回答について再考したがよからうと述べたという。

阿部は十三日に再び来ることになつてゐたが、微恙（これは、日本では役病、すなわち役目上の病氣であるが）という偽りの口実をもつて、副閣老の一人立花出雲守（訳注 若年寄、立花種恭）を代わりによこした。立花は、大君は従来一度も条約勅許の件を天皇に奏請したことはなかつたが、今度はそのことに決心した、と諸代表に告げ、ついては、それまで十五日間の猶予をほしいと付言した。公使たちは、この時まで、大君の閣老が一八六四年の下関事件のあとで約束したことをそのまま信用してきていたので、天皇はかなり以前から条約勅許の問題を採り上げておられ、阿部がそのために京都へ使者に立つたものとはかり思いこんでいた。そこで、びっくりしたり、腹を立てたりしたのも無理ならぬ話だが、それでも十日間だけ猶予することを承諾したのである。談判の前途は、まことに暗澹たるものであつた。大君には条約の勅許を得る力がないのか、あるいは得ることを好まないのか、そのいずれかに違ひない。そこで、わが方としても、もはや全く大君を見捨てなくてはなるまいと考えるに至つたのである。もし大君が自分より上位の権力に支配されているならば、列国はこの権力との直接の交渉に乗り出さなければならぬ。そうすれば、大君は明らかに、列国にとって相手とすべき適当な人物ではなくなるだろう。しかし、現在のところ、大君の意を無視して天皇に直接この問題を提起することは、明らかに時期尚早であつた。

習的な策謀家にとつては、どんなつまらぬ事でも、真正直に行動することによつて策謀の練習を怠るのは危険に思われるからである。われわれは、大君が天皇に建白書を提出して、一般国民のために、はもちろんのこと、天皇自身のためにも条約を批准するようにと、奏請したことを知つた。そして、それが朝廷に拒否されるや、大君は江戸へ立ち帰ることを決意して大坂へ向かつたが、その途中に朝命が下り、江戸へ帰るのを差し止められたという。

外国親善派の閣老が罷免されたことは、抗争の開始と戦争勃発の予告であるかのように思われた。大坂に碇泊中の日本の汽船は、蒸氣をおこして、各方面へ出動して行つた。その途中、兵庫を通つて行つたのも何隻かあつた。シーボルトと私は、これらの船の中から薩摩に属する一隻を見つけて乗りつけた。そして、その船は紀州の由良へ行くこと、それは、天皇が大君に発せられる訓令の結果連合艦隊が戦争手段に訴えるに至つた場合、それに巻き込まれないようにするためだとわかつた。

二十四日、すなわち約束の最後の日に、わが方から兵庫の奉行に対し、明日諸艦は大坂へ出動し、同地で大君政府の回答を待つことになろうと通告した。奉行からは、実は明日小笠原が回答を持つて行くはずだったが、こんどの談判中にもたびたびあつたように、彼はからだの具合がよくないので、松平伯耆守(訳注 老中本莊宗秀)がこれに代わつて行くことになろうと言つてきた。

ところで、外国代表と伯耆守との会談は数時間つづいたが、その要点は次のようなものであつた。すなわち、大君(訳注 徳川家茂)は天皇に対して自己の所信を力説し、大君の従兄一橋(訳注 禁裏守衛総督徳川慶喜)の切なる献言もあつて、天皇もついに条約批准に同意されたが、その際一橋は、天皇がこれに応じなければ、自分は腹を切るつもりであると明言した(ということである)。

哀れな曲言者に対して身にこたえる忠告をあたえ、またきわめてはつきりした態度で、「閣老には、天皇の承認を得る見込みがなく、また得ようとする熱意もない。今新たに港を開く件で天皇の承認を得ることができないならば、条約遂行の能力が大君にはないという事実を閣老が認める結果になり、結局動きがとれなくなるし、列国としても、直接天皇に条約の批准を要請するの余儀なきに至るであろう」と言った。大君の役人は、このような仮借のない、きびしい論法によって、哀れにも窮地に追い立てられた。彼らは、とことんまで追い詰められ、這々の体で立ち去ったのである。

外国代表の提出した要求は、京都に相当大きな衝動を与えた。このために、大君の重臣たちの間に意見の衝突が起こった。数日にして、阿部と松前伊豆守(訳注 老中松前崇広)が老中の役職を免ぜられたことを、われわれは知った。

そこで外国代表は、先に直接大君にあてて提出した要求をさらに反復する同文の通牒を発するという重要手段をとることに決し、先にあたえた十日間の期限内に回答がなければ、当方の提案を拒否したものと見なす旨の警告を付した。メルメ氏と私の二人は、銘々の長官の書簡を日本の役人に手交するため、一緒に上陸した。私は、疲れを知らぬ小男のメルメ氏がフランス語の原文を日本語に翻訳して、公使に署名させたことを知った。メルメ氏は、私にはそんなことはないと言ったが、書簡のあて名を大君とはせず、閣老あてにしたのである。奉行の宅へ着くや、メルメ氏はそのあて名が私に見えないようにして、一枚の日本紙に持ってきた書簡を包んだが、あとでそれを受取った役人にきいてみると、大坂にいる閣老にあてたものに相違はないと言った。メルメ氏の目的がどこにあったかわからないが、自分の腕だめしにやったにすぎないのだろう。常

たことを、大いに祝福しなければならなかった。一八六六年一月一日に兵庫を開港する件は譲歩することになったが、実を言えば、それを心から樂觀して期待していた者はあまりなかったのだし、それよりも、もっと直接の効果のあるものを確保することができるようになったのだ。すなわち、一八六二年のロンドン協約（訳注 先に遣欧使節竹内下野守らによって行なわれたいわゆる「開市開港延期談判」）によって、兵庫の開港は一八六八年一月一日（慶応三年十二月七日）までに実施することに定まっていた）の条項を遵守する（じゅんしゅ）という約束を、閣老は嚴肅に再確認したからである。また、前年十月のラザフォードの協約が、全部完全に履行されるだろうという期待も、今や充分な根拠を持つに至った。翌日の晩餐の席上で提督は一場の演説を行ない、ハリー卿の健康のために乾杯を申し出て、獲得した成果をすべて卿の功績に帰した。ハリー卿はそれに答えて、功績は何ら自分のものではなく、成功はひとえにロッシュ氏のおかげであると言ったが、「しかし、要するに、それを成功させたのは、提督のあなたですよ。あなたと、あの堂々たる軍艦がなかったら、われわれは、ほんのわずかな圧迫をも相手に感じさせることができなかったでしょう」と言いそえた。

横浜へ帰ってみると、流言蜚語（りゅうげんぷご）が乱れとんでいた。合衆国の代理公使ポートマンが殺害されたのだ、ハリー卿が監禁され、シーボルトや私が今度の事件で殉職したというような噂（うわさ）がとんでいたのだ。チャールズ・リッカービーの主宰している新聞「ジャパン・タイムズ」は、今度の事件について全く冷笑の態度をとり、天皇（ミカド）の布告の權威を否認して、そんなものは封印して置いたがよい、とまで言った。私はその新聞に、彼の議論を反駁（はんぱく）する手紙を送ったが、彼を説伏（せいぷく）することはできなかった。けれども、それについて、当時私たちが気がつかないでいた一つの事実がある。それは、現存の諸条約は、明白に裁可されたものではなかったということだ。天皇（ミカド）が大君（ダイクニ）に与え

天皇も遂に屈して、「よろしい。朝廷の高位者に諮らう」と言われたという。ところで、兵庫の開港は一八六八年一月一日（訳注 慶応三年十二月七日）までなお延期されることになったが、しかし関税率は改訂され、また賠償金の残余の分割支払はきちんと行なわれることになったのである。こうして、外国代表は何一つ放棄することなく、三つの条件中の二つ、しかも最も重要なものを獲得することができた。しかし、大君は賠償金の支払いを完遂しはしなかったし、またこの問題は、維新後も絶えず天皇の政府とイギリス公使との間で憤激と悪感情のもとになっていたということを知らねばならない。

伯爵守はプリンセス・ロイヤル号を立ち去る際に、これらの協定を具体的に書き示した覚書をその晩の中に発送しようと約束した。しかし、この覚書は、大坂にいる閣老二名の署名を得るため同地へ回送しなければならなかったので、翌朝の二時半になって、ようやくわが方に届いた。それが来るのを待ちながら私は起きていたが、やがて船室へ呼ばれて、それをハリー卿とロッシュ氏に読んできかせ、そのあとで翻訳した。この覚書と同封で、天皇がその大臣たる関白に下した、外国事務の処理を大君に委任するというわずか三行ほどの短い布告文書が届けられた。伯爵守はハリー卿の要求によって、この布告文書を全国に公布するという条項を加えていたのである。私はフランス公使の面前で、日本語の書面に関する自分の知識を発揮したわけだが、この夜は私にとって誇らかな一夜であった。フランス公使の通訳メルメ氏でさえも、自分の教師の助けなしには一つの書類さえも読むことができなかったのである。

前日まで実をむすぶ様子もなかったこの談判も、こうして首尾よくまとまった。外国の諸代表は、日本国内を平静ならしめ、同時に日本国民と諸外国の国民との関係を強化する手段を確保し

第一章 横浜の大火

帰ってきた翌日、私は長官の命令で江戸へ行った。兵庫での行動に関する世間一般の感情がどんなものであるかを探知するためだったが、重要なことは何一つとして、うまく探りだせなかった。

一般的な好奇心は広まっていたけれども、談判の結果についてはまだ知られていなかった。閣老二名が罷免されたとの報がつたわるや、諸藩の江戸詰役人の会合が行なわれた。また、大君は引退を願ひ出たが、それが却下されたとの噂もあった。

私は、ハリー卿が一時借りていたことのある大中寺ダイチュウインという寺に滞在した。この寺は、以前の宿所東禅寺よりも市の中心部に近く、便利な場所にあったが、部屋が暗い上に、その数も少なかった。公使とその家族のほか、さらに館員を入れるには狭かった。

そこで、この二つの寺院のほば中間に当たる泉岳寺の前に、家屋が新築されていた。この建物は、攘夷派の旗打ちの危険をさけるために、イギリス公使館とは呼ばず、接遇所セツグジョ、すなわち「外国人と会見する場所」と名づけられることになっていた。

また、世評によれば、仙台侯（詠注 伊達慶邦）は、今回の事件で相談を受けなかったのがその癪（イラ）にふれ、大いに立腹して居城へ立ち退いたという。泉岳寺は有名な寺で、名高い「四十七士」の墓と像がある。私は、この首都で二日すごして、横浜の領事館の勤務先へ帰り、その通訳官の

たのは、外国と条約を結びうるという一般的な権能に過ぎなかった。しかも、天皇は、今度の場合大君ダイクニンに対して、兵庫と大坂オオサカを貿易港として開く案の削除を命ずる修正条項を加えたのである。しかるに、閣老は、このことを外国代表に用心深く秘密にして置いたので、私たちもあとになつてようやくそれと知つたような次第であつた。しかし、これが現条約に対する天皇カミの批准であると言つて外国代表に提出されたこの文書が、批准の意味を持たないものであつたとは、實際にそれを見なくては推量でしなかつたであらう。なぜなら、日本語には定冠詞というものがなく、英語では、“The treaties are sanctioned,” といふのと、単に “Treaties are sanctioned,” いうのではひじょうに大きな差異があるが、日本語では両方とも同じ表現の形式をとるからである。そして、私たちは、大君ダイクニンの閣老がわれわれをベテンにかけて、時間をかせぐために、責任のがれのあいまいな用語を使用しようとは、全く思いも及ばなかつたのである。

基づく関税率の改正の仕事に着手した。一八六六年一月ごろから始まったこの談判は、当時の慣例にくらべて大いにはかどおり、六月に新協約の調印が行なわれた。私は、その件にはあまり関係せず、文章を日本語に翻訳する仕事を手伝っただけであった。二月に入ってから、ハリー卿は私に、領事館の仕事のほかに翻訳係の仕事までさせるようになっていたのだ。

一八六五年四月に横浜の領事館付通訳官となつたときの私の俸給は、年額わずか四百ポンドであつたが、兵庫事件で日本語の知識を発揮して以来、自分は五百ポンドもらっているオランダ語通訳のそれと全く同じ価値があると思うようになった。日本の閣老と会見する場合には、オランダ語通訳が公使の言つたことをオランダ語に訳し、それを日本人のオランダ語通訳が日本語に訳すのが習わしとなつていた。返事をする場合も同じ方法で、二人の人間を通じてやらなければならなかつた。しかし、シーボルトや私が通訳する場合には、直接日本語に訳すのであるから、仕事はずつと速く、そして正確に行なわれた。公的な通信をやる場合も同様だった。私は日本人書記に手伝ってもらうか、あるいは手伝いなしで、公文の手紙を直接日本語に翻訳することができたのだ。それに、私は、オランダ人の通訳者では手のつけようのない秘密の政治文書をも、読んだり、英訳したりすることができたのである。そこで、私とシーボルトは、思い切つた手段をとることを決心した。一八六六年八月に、ハリー卿は私にたくさんの政治上の文書を渡し、これらを翻訳するように命じた。われわれは卿に手紙を書き、年額百ポンドの増俸を外務省に頼んでくれるように要求した。すると、彼の激怒が雷のようにわれわれの頭上に落ちたので、私は自分の念願が拒絶されたと思ひこんでしまった。そこで、父にあて、こんな勤務をつづけても仕方がないと言つてやつた。当時の電報はロンドンからセイロンまでしか届かなかつたが、父からは至急

任務にいたのである。

私は、日本語を正確に話せる外国人として、日本人の間に知られはじめていた。知友の範圍も急に広がった。自分の国に対する外国の政策を知るため、または単に好奇心のために、人々がよく江戸から話をしにやってくる。私の名前は、日本人のありふれた名字(訳注 佐藤)と同じなので、他から他へと容易につたわり、一面識もない人々の口にまでのぼった。両刀を帯した連中は、葡萄酒や、リキュールや、外国煙草をいつも大喜びで口にし、また議論をとて好んだ。彼らは、論題が自分にとって興味のあるものなら、よく何時間でも腰をすえた。政治問題が、われわれの議論の主要な材料であった。時として、ずいぶん激論することもあった。私は常に、日本の現在の制度の弊害を攻撃した。諸君には大いに好感をもつが、専制制度はきらいだと、よく言ったものだ。訪問者の多くは、大名の家来だった。私は彼らの話から、外国人は大君を日本の元首と見るべきではなく、早晚天皇と直接の關係を結ぶようにしなければならぬ、という確信を日ごとに強くした。これらの人々を通じて入手した公文書の写しからみても、大君自身が自分を単に天皇の第一の臣下以上の何者でもないと考えていることがわかった。その一方、大君の閣老たちは、外国事務の処理をあくまでその手中に握るための努力をつづけ、ウィンチェスター氏を説いて、これは徳川家古来の侵すべからざる特権であると思いこませてしまった。ところが、ハリー卿は初めから明らかな洞察をもつて、この特権は到底持続し得ないものであるという見解をいだき、日本の元首と列国との直接の交渉へ事態をみちびいて、問題の明確な解決を迫ろうと決意していたのである。

ハリー卿は、夫人と子供たちに出会うため上海へ行ったが、帰って来るとさつそく兵庫の協定に

大いに少なくなっていたので、われわれは気楽に周囲の地方へ遠出をはじめた。

私はある機会から、「ジャパン・タイムズ」のチャールズ・リックカービーと一緒に数日間の旅行をやったが、そんなことからリックカービーと懇意になり、私のつたない原稿を彼の新聞へ寄せることを許された。その最初の寄稿は、日本国内の旅行記だったが、やがてある事件が起こるや、私は政治問題について執筆する気になった。こういうことは、はなはだ規則を無視したもので、実によりしくない行為であることは言うまでもないが、そんなことには私はほとんど無頓着だった。

薩摩の貿易船が一隻この横浜の湾内へ入ってきたが、日本側の当局は、外国人の社会とこの船の人々との交際を防ぐために、神奈川寄りのはるか遠くに碇泊するように命じた。私はこの問題を採りあげ、大君と締結した条約が不満足なものであることを述べた。その条約は、外国人との貿易を大君の直轄地の住民にだけ局限して、この国の大部分の人々を外国人との交渉から断ち切るものであった。そこで私は、条約の改正と日本政府の組織の改造とを求めたのである。私の提案なるものは、大君を本来の地位に引き下げて、これを大領主の一人となし、天皇を元首とする諸大名の連合体が大君に代わって支配的勢力となるべきである、というのであった。それ以来私は、現存の条約の改良と修正について、いろいろの提言をするようになった。阿波侯（訳注 蜂須賀齊裕）の家臣である沼田寅三郎という、いくらか英語を知っている私の教師に手伝ってもらって、これらを日本語に翻訳し、パンフレットの形で沼田の藩主の精読に供したところ、それが写本されて方々へ広まった。その翌年、私が旅行の際に会った諸大名の家臣たちは、この写本を介して私のことを知っており、好意をよせてくれた。しまいには、その日本人が英人サトウの

電報で、すぐ帰国しろ、そうすれば、大学へ通わせて弁護士になれるだけのことは充分してやると言ってきた。これに力を得て、私は再びハリー卿に掛け合い、郷里からすぐ帰れという電報がきているから、辞職を許してもらいたいと言った。卿は、しばらくの間、フーとか、ハーとか言っていたが、数日間入ればなしにして置いたクラレンドン卿(訳注 外相)の書信を引出しから取り出した。それには、シーボルトと私の願いを許すとあつたので、私は退職を思いとどまった。一八六六年三月六日ごろ、十二天(ジュニア)と本牧(カミダ)の間の乾いた田圃(たんぼ)の中で、イギリス守備兵と窪田泉太郎指揮の日本伝習兵(訳注 伝習兵) フランス式訓練をうけた幕府陸軍の兵士との連合親兵式と模擬戦が行なわれた。敵は全くの仮想で、観衆の位置が敵の位置とされた。日本人の行進はともよかった。実地の教練を少しも受けていなかっただけに、よい大きな賞賛を博した。日本の士官はそのやり方を書物からおぼえ、むずかしいところだけをイギリスの士官に説明してもらったのである。イギリスの兵士は、いくら矮人(こびと)じみた日本人とならべると、堂々と、立派に見えた。艦隊からきた水兵は、とても滑稽だった。一、二名が酔っぱらって、仮想敵の面前でホンパイプ(訳注 単独で踊る陽気な舞踊で、往時外国水夫の間で行なわれた)を踊った。指揮官の若い中尉が、けしからんと言つて、かんかんになって怒った。空砲をいつもの数だけ発射したのだが、一方だけから撃つ場合は、だれでもきわめて勇敢に敵に向かつて突撃したがるものだ。櫓杖(さくしやう)が発射されたこともなく、まただれ一人としておく(訳注 銃口をふさぐ詰め物)に当たつた者がなかったのは、珍しいことだった。当日の催しは、一般に大成功だと言われた。

第二十連隊第二大隊は、三月二十日ごろ香港(香港)に派遣され、第九連隊第二大隊がこれと交代した。外国人に対する危害は、バードとポールドウィンの殺害者処刑や天皇(カミヤマト)の条約批准があつて以来

人たちは、どうしても言うことをきかない。靴をはかないでも身の丈六フィート三インチあり、体重が当時二十ストーン（訳注　一ストーンは通例十四ポンド）ほどあったウィリスは、とうとう業をにやし、馬の脚で門を蹴破ろうと身構えた。番人たちは、何もかも蹴破ろうとするウィリスの剣幕に大いに驚き、びくびくしながら門を開いたので、われわれは馬にまたがったまま、意気揚々とこの関所を通ったのである。

これと同様のことが、ほかの場合にもあった。それは、私がフランシス・マイボローや旗艦のW・G・ジョーンズ大佐、チャールズ・ワーグマンなどと一緒に遠出をした時のことだった。横浜から江戸方面への遠出に許されている限界は、ロゴ（六郷のなまり）川と条約書に記されている多摩川までであった。一行は溝口で一泊し、馬で関戸までのぼり、そこで渡し守を難なく口説き落として、川を渡り、有名な神社を訪れるために府中の町へ馬を乗り入れた。それから、多摩川の対岸にある連光寺へ行ってその夜を過ごすつもりだったが、それにはもつと上流へ行って、川を渡って連光寺へ出なければならなかった。だが、川べへ行って対岸の渡し守をよぶと、こんな所へお前たちが来るとはけしからんと言って、素気なく断わられた。「それはわかつている。だから、さしつかえのない場所まで戻りたいのだ」と言うのと、「そんなことはできません。外国人を渡してはならんのだ」との返事。そこで、法律違反の手伝いを断わるのは当然ではあるうが、違反を後悔して改めようとしている犯人は助けてやる必要があるだろう、と言って、聞き入れてくれない。いよいよ、自分の荷物とも離れて、石の上で冷たい一夜を明かさなければならんのかと思つた。渡し場より少し上流には、ぬれずに馬で渡るには深すぎるが、しかし割合に浅いところがあつた。チャールズ・ワーグマンと私はズボンを脱ぎすて、シャツをうんとたくし上げて、対

「英國策論」、すなわちイギリスの政策という表題で印刷され、大坂や京都のすべての書店で発売されるようになった。これは、勤王、佐幕の両党から、イギリス公使館の意見を代表するものと思われた。そんなことは、もちろん私の関知するところではなかった。私の知ったかぎりでは、このことが長官の耳に入ったことはなかったようだが、その後一八六八年（明治元年）の初めに樹立された新政府とイギリス公使館との関係に、その影響が無いでもなかったことは充分に想像されよう。同時に、大君の政府が存続していた間は、政府がそのために多かれ少なかれ「疑惑」の目をもって私たちを見ていたことは、疑いもない事実である。

関税協定の署名をすませてから、七月にハリー卿は薩摩と宇和島の大名を訪問するために旅立ったが、その留守中に、われわれ公使館員数名が、第九連隊の士官三、四名と一緒に八王子と厚木の方面へ旅行に出かけた。当時は、どの街道にも一定の場所に嚴重な関所があった。旅行者はいずれも、関所で通行券を見せなければならなかった。

八王子を過ぎて西へ数マイルゆくと、高尾山という高さ千六百フィートばかりの山があった。頂上までよい道がついていて、ちょうどそのふもとあたりに関所があった。私たちは、脚の強い馬にまたがって山を登った。亭々とした杉の木陰で弁当を食べ、再び街道へおりてきたのだが、間違つて関所の裏側の街道へ出てしまった。他の役目と異なつて、おのれの任務を過大視するくせのある関所の番人たちは、門を閉ざしてわれわれの通過を拒んだ。道を間違えたのだと弁解したが、だめだった。外国人を通すことはならぬという命令をうけていたのだ。関所の裏側へ出てしまったのを、改めて内側へ戻りたいと言うのだから、こちらは過失を改めようとしているのだ。だから、その願いをかなえてくれてもよさそうなのだと、だれしも思うだろう。ところが、番

ありさまで、乗った者も恐ろしきで夢中になり、向かい岸へ着いても、舟を返して他の人々を救おうなどという考えは頭に浮かばないのだ。

この地区の住民の大部分は女であつた。私は、その中の数人が哀れにも水中に飛びこんで、逃げようとするのを見たが、その人々はこちらの岸までたどりつくことができなかった。火災は土堤道の家々の屋根に向かつて突進し、まだ充分に燃えあがっていない場所のあちこちへ火を噴きつけるのは、見るも恐ろしい光景であつた。突然、すぐ近くの街の半分が、ものすごい閃光を発して、パッと燃え上がった。油商人の店に火がついたのだ。もう、一刻も猶予できる場合ではなかつた。私は踵をかえして、わが家の方へ駆けだした。私の家はちょうど風下に当たつていたので、もうだめだと思つた。激しい風が北西から吹いていた。私は、せまい庭を突つ切りながら、ウィリスに「しつかりしろ」と声をかけ、召使を呼んで、家財の荷造りを手伝わせた。最初に私の頭に浮かんだのは、辞書の原稿のことだつた。それが焼失すれば、二年間の労苦が水泡に帰するのだ。私は原稿を小さい箆筒の中へ押し込んだ。洋服箆筒から、手当たり次第に衣服を取り出したが、それらを運び出すには、庭のまわりの高い板塀をぶちこわさなければならなかつた。この時、数人の友人が駆けつけてきた。てんでに書物を持ちだしたり、箆筒を運びだしたりして、忙しく家へ出入りした。そして、懸命に働いて、しまいに絨毯や窓掛や比較的重い家具のほかは、家中の物をすっかり運び出してしまつた。かさばつた私の小オルガンも、道路へ持ち出された。守備隊から駆けつけた数名の兵士が、それらを安全な場所へ運んだ。

運び出した家財をかなり遠くへ移したところには、とうとう火の手は家まで達し、五分後にはまっ赤な余燼の山と化してしまつた。居留地の背後の家々にも火がうつつたことは、もはや明らか

岸へ徒渉した。渡し小屋までゆき着くと、渡し守はわれわれの無法なのにびっくりした。そして呆然としてゐる間に、二人は舟へとび乗り、小屋の番人どもが口々に、「コレハ乱暴狼藉」〔泥棒や人殺し〕とほぼ同じ意味〕と叫ぶなかを、友人たちの待っている対岸へ棹で渡り、この舟で一行全部を渡してしまつた。

十一月十六日（訳注 慶応元年十月十日）に、横浜に未曾有の大火があつた。外国人居留地の四分の一と、日本人町の三分の一が灰燼に歸したのである。半鐘が朝の九時ごろ鳴りはじめた。ウィリスと私は屋上の物見に上がった。およそ半マイル先の、ちょうど風上に当たる方角に、火炎が天に沖しているのが見えた。

私は、あわてて長靴（運わるく私の一番古いやつ）をはき、帽子をかぶつて、急いで火災の場所を見にかけつけた。私の召使たちは、火事は数軒向こうだと言つたが、その辺まで行つてみると、もつと遠くの方であることがわかつた。それから十五分ほどして、火災の現場へ着いた。

いつも相当の人出で混雑している狭い往來は、今や群集で全く身動きもできないありさま。興奮しきつた人々は、身近に迫つた猛火の中からやつと持ち出した家財道具をかつぎながら、狭い通りの下手の端からなだれをうつて押し寄せてきた。私は、燃えている家のそばへできるだけ近づこうとしたが、火脚の速いのにびっくりして、いそいで退却した。

居留地の背後の空地へ出ると、ここでも、ごつた返し、の、すさまじい光景が現出してゐた。日本人町の一帯火勢の激しい場所は、周囲が泥沼でかこまれてゐる小さい島であつた。木の橋一つで横浜の他の町につながつてゐるのだが、その橋はもう避難民でいっぱい、歩いて、泳いで、安全な場所へ渡ることはできなかった。使える舟が一、二艘はあつたが、それらは超満員の

私は、自分の財産がすっかり焼けてしまつてからは、他人の家財の救出や火災との闘争に奔走し、バケツの手渡しをしたり、水をくんで来ては、燃えそうな物にぶっかけたりした。イギリスの兵士の中には、面汚^{めんご}しな行爲をやった者も数名いた。彼らは、どこからか酒を手に入れて来て、われわれ文官が彼らの出動目的の仕事をやっているというのに、酒を飲んだり、他人をからかったりしながら傍観していた。日の暮れるころには、背負っていた数着の衣服が残っただけで、私は帽子までなくしてしまつていたが、ひどく興奮してもいたし、それに、すべて新規にやり直したと思うと、むしろ気持がさっぱりした。しかし、当時石橋(訳注 石橋政方)と私とで編纂していた英和辞書の原稿と、印刷中であつたR・オールコック卿著、日本語會話書 Colloquial Japanese の注釈版の原稿は、もはや絶対に日の目を見ることのできぬ運命にあつたのを、ようやく救い出すことができたのである。私の損害は三百ポンドないし四百ポンドだったが、イギリス政府が後日その一部を補償してくれた。保険会社の損害は二百八十万ドル、すなわち約七十万ポンドにのぼつたという。保険にかけてなかつた物の価格は、大したものではなかつたようだ。

火災は激しい勢いで外国人の倉庫、住宅などの間を荒れ狂い、午後四時前には俱樂部ハウスだけを残して、海岸通りの半分を焼きはらつた。一時は、夜に入らないうちに居留地の全部が烏有^{うゆう}に歸するのではないかと思われたが、そんな事になつたら、ヨーロッパ人はみな船に避難しなければならなかつただろう。幸いにも、こうした事はなくてすんだ。このような激しい火勢には、われわれの微力では、いかんともなし難かつたであろう。

火勢の進行方向に当たつた家屋を打ちこわすという破壊消防も行なわれたが、これも大した効果はなかつた。破壊した場所へは火が来なかつたり、破壊物の取り片づけができなかつたために、

だった。私の家財は、外国人町と日本人町との中間の空地に置いてあったので、もつと遠くの方へ移さなければならなかった。ここで大損害が生じた。書物の大部分は数個の箱に詰めて運んだのであったが、あわてて毛布にくるんだままの若干の書物は、そのままうっておかなければならなかった。また付近には、たくさん火事場泥棒がうろついていた、手伝うふりをしながら、衣類を詰めた箱を持ち逃げしたのだ。そして、それらは二度と見つからなかった。そのほかに、満洲語やシナ語に関する掛け替えのない数冊のノートや、かなり沢山の洋書や和書がなくなつた。家財を安全と思われる場所へ移したのだが、また火の手が追つてきたので、居留地三号にある友人のウィルキンとロビンソン所有の倉庫へ再び移した。そのころには、日本人町の大通りまで火が広がっていた。私たちの家はもちろん、A・B・ミットフォード、A・フォン・シーボルト、ウォルシュ、ヴァイダルなどの住んでいた家々も、とくに焼失していた。木材で手輕に建て、ガラスの代わりに紙を張つた日本の家屋は、焼けるのに手間はかからない。火は、次いで外国人居留地のすぐ近傍の家まで広がってきた。途方もない大きな火の粉や、まっ赤に燃えた木片などが、中間地帯の空地を飛びこえて、アメリカ領事館を燃え上がらせ、ジャーデン・マゼソン会社の屋根に燃え移り、さつに居留地の二つの通りにそつて燃え広がった。「耐火性」があると思つて、私たちの大部分の荷物を運び込んでいた倉庫にも火が入つたので、持ち出した品物はほとんど全部が焼失してしまつた。

あまりにも、ひどい混乱ぶりだった。水兵が船から上陸し、陸兵が兵營から出動して、さかんに消火ポンプを動かした。人々の間には、もはや規律も何もなく、それに、災厄を処理すべき何らの機関もなかった。

た。歩兵守備隊も、ブラッドショー中尉に指揮されて、そこに駐屯していた。妻子を連れて来ていた一等書記官のシドニー・ロコックは、まだ通訳見習生をしているH・S・ウィルキンソンと同じく、横浜に住んでいた。建物はいずれも、ただ窓と出入口がついているだけの「がたがた」普請で、暖炉らしい暖炉もなかった。建てつけも悪く、四方から隙間風がやたらに入ってくるので、おそろしく寒かった。しかし、私はそこには長く住んでいなかった。

一八六六年秋に横浜の領事館から公使館へ転じて来てから、私が新しい長官(訳注 ハリー・パークス公使)のお役に立つことができた最初の仕事の一つは、条約文の用語に関するものだった。英文では、大君の場合は“His Majesty”(陛下)の敬称が用いられて、わがイギリスの女王と同格におかれていた。しかし、日本語の訳文では、これは「ハynes」と同意義の「殿下」となっている。大君とイギリスの女王を同格とすれば、イギリスの元首は天皇よりも下位に立つことになるわけだ。のみならず、“queen”という言葉は、天皇の曾孫にあたる女性の称号と同じ「女王」という言葉に訳されていた。そこで私は、日本語の新しい訳語をつくることを提案した。そして、その案では、“Majesty”にそれ相当のふさわしい日本語の同義語をあて、“Queen”の方はコーテイ(皇帝)という訳語を用いるというのであった。皇帝という語は、すべてのシナ・英語辞典に普通“Emperor”と訳されており、實際上「至上の君主」を意味し、男女の両性にあてはまるのである。こうした新しい訳語をつくる仕事が私の手にゆだねられた。私は自分の教師の助けをかりて、一か月ばかりでどうやら正確な訳語をつくり上げ、それが採用されて、公式に用いられるようになった。そして、それは、天皇を日本の君主と認め、大君をその代行者と認めるという新しい政策の基調となったのである。また、私は書物を読むことによって、大君という言葉は本

かえって向かいの建物へ燃え移るのを助けたりしたに過ぎなかったからだ。百七人のヨーロッパ人とアメリカ人が宿無しになった。耐火倉庫なるものを信頼していた多数の人々は、着のみ着のまま、全くの無一物となってしまったのである。商品を保険にかけていなかった商人たちは、心痛のあまり、ただ呆然として、なすところを知らなかった。なぜなら、一番堅牢と思われた石造の倉庫が、日本の木造家屋よりも、あまり耐火力がなかったからだ。

風はおさまったが、焼け残った物が無事かどうかと、人々は大変心配していた。ホースが破損したので、消火ポンプはどれも役に立たなくなり、くすぶり続けている余燼をなんともすることができなかった。衣類の値段は途方もなく騰貴した。貸家もまた同様だった。当時の横浜には、帽子屋、洋服屋、靴屋などが現在のように沢山なかったし、大抵の人々はそれらの品物を本国から取り寄せていたのだ。したがって、それからの二年間というものは、私の筆筒の中味は至って貧弱であつた。私は、ハンカチ五枚を買うのに四ドル、すなわち十八シリングを支払わなければならなかったのである。

罹災後、私は当時ギルマン会社の横浜支店支配人をしていた友人のトム・フォスターの家に同居していたが、十二月九日か十日に、江戸の公使館へ移った。泉岳寺前に新築の公使館の建物は、そのころすでに完成していたが、高い黒板塀にかこまれて、いささか牢獄の感じがした。長い木造の建物二棟で、その一つは公使の居館にあてられ、他の一つは記録室の職員の宿所になっていた。ニースデンは代理領事として箱館へ行っていたので、職員は二等書記官のミットフォード、会計官補兼医務官のウィリス、通訳官のシーボルト、私、それに通訳生のヴァイダルなどであつ

第一章 鹿兒島および宇和島訪問

私が新しい任務について、これなら当分落着いて勉強がつづけられると思つてから数日たつと、ハリー卿が私に、瀬戸内海を経由して長崎へ行くプリンセス・ロイヤル号で長崎へ向かい、兵庫、その他の土地で政治上の情報を集めて来てほしいと語つた。帰途は、アーガス号に乗つて、鹿兒島と宇和島を通つて来るようにということだった。

大君ダイクニ（訳注 徳川家茂いともち）は先ごろすでに死去し、その従兄カズシの一橋（訳注 徳川慶喜しのぶ）が將軍職をついでいたが、一橋の地位は、まだはつきり確定していたわけではなかった。彼は、徳川家の頭首になる前は、当時人口に膾炙かいしやしていた「王政復古」の味方と見られていた人物であるから、この將軍が大体どのような政策をとるかを、できるだけ知つておく必要があつたのだ。江戸では、政治の中樞となつていた京都からあまり隔たつていたので、政治の動向を知ることができなかったのである。

長崎訪問は、私にとって大いにうれしいことだったが、それを熱望しすぎてはかえつて事が破れる恐れがあつたので、この命令された派遣をあまり希望してゐると思われないうちに注意した。その翌日私は、当時主として横浜に住まつていたハリー卿から、自分はまだ提督と会つてはいないが、君をぜひ行かせるように考慮しているという手紙をもらつた。そこで、私は数着の衣服を、日本人が旅行の際に用いる柳行李やなぎこどもに詰めこみ、江戸横浜間のわれわれの主要な交通手段であ

来天皇ミカドと同義語であることをも知ったので、日本政府とわが方との間の通信文には「大君ダイクニン」という語の使用をやめてしまった。もつとも、混乱をきたさないようにするため、外務省との通信文書においてはそのままにしておいたが、最も重要な成果は、天皇ミカドが条約締結の権能を有するという政治理論を、従来よりも一段とはっきりさせたことであつた。条約が天皇ミカドの承認を得られなかつた間は、われわれは公認された地位を有しなかつたのであるが、天皇ミカドの条約批准を得てからは、諸大名の反対には何らの論拠もなくなつたのである。

山腹一帯に点々とともる、おびただしい洋灯に照らされた長崎の市街と外国人居留地の夜景は、五年少し前にインダス号の甲板から眺めたジブラルタルの市街を私に思い起こさせた。

長崎で、私は数名の宇和島の藩士と知りあつた。その中の最も重要な人物は、後年天皇の治世の初年に横浜の知事になった井関齋右衛門であつた。井関は私をたずねて来て、京都でやることになつてゐた大名会議の招集は、当分延期になつたと告げた。しかし、いつかは行なわれるに相違なく、その会議の第一の議題は長州の始末をどうするかにあるだろう、また四国ではおよそ半分の藩が兵庫開港に賛成であるが、九州の人々は長崎の衰微を憂えて、反対していると語つた。井関はまた、提督とハリー・パークス卿がプリンセス・ロイヤル号で前年宇和島を訪問したことは、一般の人民に外国人の様子や、外国人が艦船や戦争道具の製作に巧妙であることを周知させるのに大変役立つと言つてゐた。宇和島の大名と、その兄にあたる前大名(藩の指導的人物)(訳注 伊達宗城)は、病氣を理由に京都の会議に出席することを断つた、一橋は、將軍職と、それに付随する宮中の位階を、朝廷からまだ授けられてはいない、それは多分、彼が長州に対する難局を解決する日まで見合わされることになろうが、これは明らかに、一橋の身にとって大きな苦悩の種であらうと言つた。

その翌日、私がまた井関に会つたとき、話がわれわれ外国人と長州との関係におよんだ。私は井関に、イギリス政府は長州と大君との間に戦争が継続している間は、下関海峡を頻繁に往来している商船を守護するため、下関に軍艦一隻を配備することにしているが、イギリス政府としては日本人の内輪喧嘩に一切干渉することを好まない、また、イギリスは長州と和解しているし、長州人も外国船の通行を妨げないことに同意し、また薪水、その他の必需品の購求を保証し、同

った砲艦にのつて、横浜へおもむいた。その日の夕方になって、プリンス・ロイヤル号は用意万端ととのえて、明後日出航するということがわかった。私はウィリスに手紙をだして、彼の教師の林を情報集めのため兵庫へ上陸させたいから、よこしてくれるように、それから文房具を入れたブリキ箱と、現金を少々送ってほしいと言つてやつた。だが、そのどちらも、時間までには届かなかったので、私はそれを断念し、フォスターからイチブ一分銀数百枚を借りて、それで両切りの葉巻煙草を一箱買い、大判洋紙ダイパシを数枚新聞紙につつみ、十二月十二日にやつと間に合つて乗艦した。

出航の際は上天気だったが、港外へ出てから強い西風にあつた。そのために、フリース島（訳注 大島と本州との間の航路を通ることができなかった。私は、四日間というものの、食物が全く喉へ通らず、吊り床ぶらこに横になつたままだったが、以前に経験した同じような船酔いと思いくらべて、自らを慰めた。最後に私は、キング提督が届けてくれた一皿の脂肪の多いビステキ・プディングと、一杯のシャンパン酒のおかげで、やつと生気を取りもどした。

強風はやまなかつた。巨大な二層甲板艦が、ひどく横ゆれした。一時は、ひとまず香港（ハコン）に入港して投錨したつよいという意見が強かつたので、兵庫へは全然行けないものとあきらめた。箱館（箱館、横浜、長崎なども、次々に入港地として都合のよい位置にあると思われた。私たちは、全く日本の海軍の域外へ吹きながされていた。何日間も、あちらこちらと波浪に翻弄（はんろう）され、艦首を風上に向けたら、風下に向けたらしたあとで、ようやくリンスホーテン諸島（Linschoen Islands）の見えるところへ来た。そこで、われわれは北方に向きを変え、出せるだけの速力をもつて四百馬力、三千五百トンの軍艦を走らせ、二十三日の夕刻長崎へ入港したのである。

な見通しであった。

私がハリー卿から受けた指令では、長崎から鹿児島と宇和島へ渡り、帰途兵庫に立ち寄れというのであった。そこで私は、野口富蔵^{トミゾウ}と安^{ヤス}という二人の召使をつれて、一八六七年一月一日(訳注 慶応二年十一月二十六日)にラウンド中佐を艦長とするアーガス号に搭乗した。野口というのは、会津の若い侍で、英語を学ぶために郷里を出て、初め箱館^{はこ館}のイギリス領事ヴァイスについたが、一八六五年秋、その勉強をつづけるために私と同居するようになったのだ。こんど長崎まで私について行き、そこから旗艦の指揮官アレキサンダー・ブラー付きの船室給仕をやりながらイギリスへ渡ることになっていたのだが、来る途中に経験したひどい船の動揺に閉口したためか、それとも下僕という低い地位がいやになったからか、にわかに心境の変化をきたし、江戸へ連れて帰ってくれと、私に嘆願^{たんぱん}しだした。ブラーは、それは困ると言ったが、私としては何ともすることができなかった。野口は結局、一八六九年(訳注 明治二年)に、私に付いてイギリスへ渡り、私は二年間この男のために学費を出してやった。私が日本へ戻って来てからも、彼は日本政府の費用でしばらくロンドンに留学していたが、しまいに東京へ帰ってきて、軽微な公職についた。彼としては、割合に高い地位だったのだが、一向にもつたいぶった顔もせず、私の厄介になったことを決して忘れなかった。一八八五年初めごろ、私は野口が死んだことを聞いて、ひじょうに残念に思った。彼は、あくまで正直で、誠実な男であった。安^{ヤス}の方は、もっと下層の階級に属した餓鬼っ子で、なんの取り柄もなかったように記憶する。

ラウンドは、私をあまりよく待遇してくれなかった。艦底の、共同部屋のような、負傷者収容室に私を寝かせた。そこは、候補生たちが自分の行李をおいたり、ハンモックをつつたりする場

時に今後砲台の築造をやらないことを約束していると告げた。

大君ダイクニンの政府は、長州藩主に課せられた賠償金を自ら支払うことを引き受けていた。しかし、諸外国は金銭を欲してはいなかった。もし、日本との関係の改善に役立つならば、いつでも喜んで賠償金を放棄したであろう。大君ダイクニンの家臣たちは、残余の分割支払金の支払い猶予を乞うた。そして外国の公使たちは、これに同意する代償として、日本人民の海外旅行許可の承認を得ていた。

ところで、この国の人民は、すでに海外渡航の古い禁令の廃絶を望んでいるので、幕府としても固執すべき口実を失っていたのだと解することも、難くはなかった。兵庫は、大君ダイクニンの行なった約束にしたがって、一八六八年一月一日には間違いなく開港されるであろうが、諸外国の意図するところは、条約の全部を日本の元首に確認させて、これを履行させるにあつたのだ。大君ダイクニンの權威は、下関のような遠隔の地にまで及んでいない。そのため、従来の条約では、下関の開港の要求ができなかつたのだ。長州に対しては、別の条約が必要である。従来の条約がこのままであるかぎり、諸大名の領土内にある港の開放は望まれない。

われわれは、前に兵庫で大君ダイクニンの閣老と談判したが、後日わかつたことは、閣老はあの時、大坂と兵庫を外国貿易の地とすることを取りやめるように談判せよという天皇ミカドの勅令を秘匿して、われわれを欺いたことであつた。私たちが、大君ダイクニンの閣老を見捨てて直接天皇ミカドの宮廷と折衝することをしなかつたのは、今にして思えば遺憾であるが、天皇ミカドの廷臣から聞いた話によると、公卿の一人が外国代表者を訪問するように勅命されていたという。

長崎に滞在中、私は土佐と肥後出身の役人たちと知りあつた。後者の一人は、もはや再び將軍が出現することではなく、天皇ミカドが帝位を回復するであろうと語つた。これは、将来に対する明らかな

いて、われわれ一行をとある家へ案内した。われわれは、島津三郎の次男で島津図書といふ美青年と、イギリスへ行ったことのある家老の新納刑部、同じく家老の島津伊勢の迎接を受けた。この家は、もっぱら訪問者の接待のために使用されていた。藩主の弟は年齢こそ二十九歳だったが、知能の点では、まだほんの子供のように思われた。会談はすべて、その右側にすわっていた重役たちによって行なわれた。私は手紙の内容を通訳した。ついで、それが島津図書の手へ渡された。こうして式は終わつたが、全体で五分以上はかからなかった。

それから、饗応の宴席についた。ごちそうは、酒と二、三品の日本料理ではじまつたが、飲みものにはシェリー酒、シャンペン、ブランドイなども出され、次ぎ次ぎと洋食の皿が運ばれた。

私は、日本語であざやかな会話をつづけた。しかも、それを一語も通訳しないで、ラウンドに復讐してやった。そこで氣の毒にも、彼は所在なさを紛らすため、そばにあつた皿の蜜柑の数をかぞえていなければならなかった。

宴がすむと、士官たちは市街へ散らばつて行つたが、私はあとに残つて、提督の手紙の翻訳を手伝つた。新納も、あとに残つた。われわれは、無期延期になつてゐる例の問題、すなわち大名會議のことを話した。それから私は、数か月前に薩摩の藩主の名前で天皇に提出された上奏文の文体をほめ上げた。

「あれをご覧になつたのですか。あれは、ずいぶんつまらないものでした」と、新納は言つた。「どうして、そんなことはありません。立派なものでした。あの文体は、万人の賞賛に値するものです」と、私は答えた。

「それは、兵庫のことに関係したものではありませんでしたか」

所だった。個室は全然なく、共同部屋に詰めこまれて、きわめていやな思いをさせられた。私は就寝用の吊り床を手に入れたが、蒲団も枕もないので、艦長室の寢床からクッションを借りてきたり、あるいは外套を丸めて枕まくらにしたりしなければならなかった。

私たちは、翌日の午後早く鹿児島に着いた。投錨するとすぐに数名の役人が岸から舟を漕がせてきて、先方の礼砲に対し答礼砲を発射する間こちらで掲揚するようにと、旗を持ってきてくれた。

松岡十太夫ジュウゴウが艦へ来て、藩主（訳注 島津久光）の父の母堂が最近死んだため、藩主とその父（訳注 島津久光）が服喪中であることを説明した。そして、この両者とも訪問者を迎接することができないので、貴殿らが持参した提督の手紙を受取る役目は、藩主の次弟と二名の家老によつて行なわれるであろうと言った。この手紙というのは、難船の水夫に寄せられた薩摩藩の親切な取扱いに對し、提督から藩主に謝意を表したものであった。ハリー卿と提督は、前年夏の訪問の際に藩主とその父の島津三郎（訳注 久光）に会つて、交歓したのであった。ところで、事務の処理は大体重臣たちの手に任されていたので、この両者に面会できなかったとて、私の訪問の成果に大きな影響の相異があるとも思えなかった。私は上陸して、サトクリフ、ハリソン、シリングフォードという三人のイギリス人と一緒に、同地の工場に滞在した。シリングフォードの職業は技師で、この藩の大名に雇われ、目下建設中の幾つかの紡績工場に関係していた。他の二人は、仕事を捜しに鹿児島へやって来ていたのであった。

三日に、ラウンドは、提督の手紙を手交するため、士官の一行をつれて上陸した。私は通訳として、同行した。数名の重役が、波止場まで出迎えにきていた。彼らは、半マイルばかり町を歩

があると思つた。

ちやうどこのころ、鹿児島湾内に「オテントサマ」という、長州の小汽船が碇泊していた。この船は、長州藩の指導的人物で、後年維新のころ木戸準一郎（ノジキチヂロウ）として名を知られた桂小五郎（ヲゴロウ）を乗せて来ていた。私は新納に、桂をたずねて、下関にいる私の友人（訳注 伊藤、井上など）の安否を問うてみたいと言つた。新納は、桂は今夜十時に島津三郎と会見し、そのあと朝の三時に薩摩の家老数名と会談するはずになっているから、特に桂に会いたいなら、彼の宿舎へ泊まって、その帰りを待つがよろしいと言つてくれた。私は当時、まだ後年の私のように日本ふうの起居に慣れておらず、ヨーロッパふうの寝台で寝たかったので、新納の勧めを断つてしまった。これは、私としては、まずかつた。しかし、新納の話の模様からして、西国（さいごく）の諸藩の中で最も有力な薩、長二藩の間に目下和親の相談が進められており、今後薩摩と長州は提携して大君（ダイクニ）と対決するであらうということがわかつたのである。この二藩が共にイギリスと親善関係にあつたことは幸いだった。また、諸外国の一般的な利益から見ても、これは結構なことだった。イギリス公使館は、後年、諸外国と維新政府との間に立つて、斡旋者（あせんしゃ）として行動したのである。一方、フランス公使館は、大君（ダイクニ）の側を支持していた。ロッシュー氏は横須賀に兵器廠を設立して、徳川氏の軍事組織を新しいすぐれた基礎の上に置こうとし、また大君（ダイクニ）の軍隊を教練するために優秀なフランス士官を周旋した。このロッシュー氏は、一橋（訳注 慶喜）に物質的援助をあたえた、いや、あたえようとしているとの風評さえあつた。彼は、この政策を、事実による否応なしの証明によつて、ついに自らの愚を悟るに至るまで続けたのである。そして、北ドイツの代理公使フォン・ブランド氏やイタリア公使ラ・ツール伯も、このロッシュー氏の政策に追隨したのであつた。一方、オランダの外

「否^イ。大君^{ダイクニ}の長州征伐に協力するため薩摩が出兵することに反対した覚書でした」

「ああ、そうですか。今日、私の次ぎにすわっていた島津伊勢があの上奏文を書いたのです。当時、あの人は京都にいました」

「長州の事件は、どんなふうになっていますか。大君^{ダイクニ}は、軍隊の大部分を撤退したそうですが」と、私はたずねた。

「長州は、ひじょうに強い。それに、正義は長州側にあるのです。大名は、だれ一人として大君を支持しないでしょう。もはや、大君には長州を破る見込みはない」と、彼は答えた。

「それにしても、もし大君^{ダイクニ}がその最も精鋭な部隊を戦場に送って、最初から一気に攻撃したら、長州を征服していたに違いありませんが」

「いや。決して。大君^{ダイクニ}の側には正義がないから」

「あなたは、長州と大変に親しいようですね」と、私は一言した。

「いや。親しいということはありませんが、われわれは、われわれと同じ階級の者に対して、生まれつき同情を有しているのです」。

新納は、私が薩摩藩主のあの上奏文を見たというので言及したのだが、それによって、薩摩藩が兵庫開港に反対したという重大な事実が明らかになった。そして、条約を勅許する代わりに兵庫開港の中止を取り決めることを天皇に進言し、この旨を大君^{ダイクニ}に提示させたのは、一八六五年十一月に外国代表が兵庫を訪問中に天皇に提出された、あの薩摩藩主の上奏文そのものであったのだ。そこで私は、諸外国としては、兵庫の開港、その他条約にあるいかなる事項をも断念する考へは毛頭ないということを、薩摩藩の人々に知らせるためにも、新納の心に銘記させておく必要

せている、彼は外国人の援助を得て大君としての自己の権力樹立をねがっているのではないかと、疑いの目で見られているという。

新納は私に、自分たちはフランス人に対して相変わらず憎悪と不信の念をいだいているが、イギリス人に敵意を持たれては大変だということを悟ったので、当藩はイギリス人との親善に努めている、この点は了解してほしいと言った。

私たちには、薩摩の人々が文明の技術に長足の進歩を遂げつつあるように見うけられた。そして、ひじょうに勇氣があり、性格が率直であるという印象をうけた。私は、薩摩人がやがては日本中ではるかに他をしのぐであろうと思ったのである。

すでに前述したように、大君ダイクニンというのは、条約において世俗の主権者を指した称号であつたが、日本人は大君ダイクニンという言葉を決して用いてはいなかつた。征夷大將軍セイイダイシヨウグン、すなわち「夷狄を征服する大元帥」が公式の名称であつたのだが、閩老連は慎重にも外国代表との公式の往復文書にこの名称を使用せず、また一般人民もこれを公方様コウヘイザマとよんでいたのである。ところで、「反対派」の大名たちは幕府バクフという言葉を用いていたのだが、これは厳密には「ミリタリ・エスタブリッシュメント」(軍政部)と翻訳すべきものだろう。私が友人たちとの会話で用いたのは、この言葉であつた。これと同じ具合に、日本の東部において大君ダイクニンの閩老会議を呼ぶ敬称である御老中ゴロシユウ(高貴な老人たち)に対しては、閩老カウロ(老人たち)という言葉をもつて替えた。反対派の人々は、自分たちの顛覆テンフクしようとする政府が、いかなる尊称をもつて呼ばれることをも承知しなかつたのである。

一月五日に、われわれは鹿児島を出発して、翌日の十一時に宇和島灣に投錨した。美しい灣が、ほとんど陸に取り巻かれており、二千フィートまでの高低さまざまな山に囲まれていた。町の東

交理事官はハリー卿の側にくみし、新任のアメリカ公使ファルケンブルグ將軍は中立の態度をとっていた。

われわれイギリス人は、これらの競争国よりもいつそう注意深く日本国民の脈をとって、政治上の容体をよく診断していたので、一八六八年、一八六九年（訳注 明治元年、同二年）におけるイギリス公使の威信は全く素晴らしかった。

藩主の返書は一月四日にアーガス号の艦上で渡される約束だったが、正午に新納がやってきて、まだできていないと言った。そこで、私たちは上陸して、磯にある藩主の庭園にほど近いガラス工場、弾丸工場、大砲鑄造所、鍋釜製作所などを視察した。

やがて、藩主の返書が松岡の手で届けられた。型のように授受が行なわれてから、私たちはまたもやヨーロッパふうの宴席についた。前日より簡単だったが、料理はかえってよかった。だが、われわれが賞賛したのは、料理のうまさよりも、接待がきわめて丁寧であつたことだ。いや、本当のことを言うと、ごちそうはそんなにうまくなかつたし、料理の取り合わせも感心したものではなかつたのだが。

新納が朝から姿を見せないで、私は五時ごろサトクリフと一緒に、彼を訪問に出かけた。一時間ばかり歩いて、彼の家へ着いたころには、あたりはもう暗くなっていた。新納は、手厚く、そして心から親しく迎えてくれた。茶、蜜柑、ビール、菓子などが出て、一時間半も話しあつた。彼は私に、最近兵庫を通つた時の噂によると、フランス公使が皇帝ナポレオン三世の書面を携えて近く兵庫へやってくることであり、また同地で外国代表全部の集會が行なわれるそうだが、と言つた。一橋は徳川氏の統領の後継者となることを承諾し、彼に期待をいだいた人々を失望さ

藩主が陸へ帰るとき、私はボートで同行したが、海岸には侍女たちが、主君の子供をつれて待っていた。その中の年かさの子供は、七歳になる少年だった。ほかの子供はまだ赤ん坊で、乳母の腕に抱かれ、その下役の女が金色の錦にしきにくるんだ小刀をささげて、それぞれの赤ん坊に付き添っていた。日本の侍は、ごく幼少の時から武器を友として暮らす習わしになっているのだ。

藩主は、大変に愛想がよく、明日また艦を訪問するが、その時は隠居、すなわち前大名をも連れて来ると約束した。私は別れを告げて、町へ行った。町では、「骨董ボンドウ」あさりをしている艦の士官三名にあつた。黒山のような群集が、どこへ行っても私たちのあとからついてきて、衣服にさわったり、いろいろな質問を発したりしたが、それらの態度は至って丁寧だった。私は、日本人に対する自分の気持が、いよいよあたたかなものになってゆくのを感した。

一月七日は終日風雨が激しかったが、この悪天候をおかして、大名と隠居が艦へやってきた。

隠居は顔だちのきつい、鼻の大きな、丈の高い人物で、年齢は四十九。大名階級の中でも一番の知恵者の一人だと言われていた。彼は伊達イダ（宇和島の大名の姓）家の生まれではなく、江戸の旗本の家から養子にきたのであるが、その後今の大名が生まれたので、両者は義兄弟の間柄であつた。しかし、養子の取消しをすることはできなかったのも、自ら家名と領土を継いだのであるが、生得権を失った義弟への代償方法として、これを自分の養子にした。したがって、一八五八年（詔安政五年の將軍継嗣問題）に不興を被つて隠居したとき、本来の世嗣たる今の大名が相続したのである。隠居イノキ（生きながら隠退した者）とは、貴族であれ、平民であれ、実際上の家長的地位と財産の管理を息子みづこにゆづつた者に対する一般的な呼び名である。これは、「旧日本」時代には、六十代に達した父親にはありふれたことであつた。しかし、この宇和島の隠居の場合は、明らかに支配的

側の直ぐ後ろに、鬼が城、すなわち「悪魔の城」として有名な高い峰がそびえて立っている。藩主の城塞は、町の右手にあたつて、きわだった目標となつていた。海岸に近い、樹木の生え茂つた低い丘の上にあつて、三層の城櫓しろぐらからなり、二重の石垣に囲まれ、垣の上は白壁になつていて、それがほとんど樹木の奥にかくれていた。その南方に武家屋敷があるが、町人の居住地は、町が山にさえがられて背後へのびる余地がないため、東北の方へかなり長く延びていた。海岸付近はひじょうに浅いので、それを利用して塩田を作り、また堤防をきずいて稲田としてゐる。灣の両側には小さな砲台があつたが、それは実際の防禦よりも、むしろ見せかけのものだつた。

投錨してから一時間半もすると、一艘の小舟がやつて来て、艦尾のあたりを漕ぎまわつた。舟尾の方に一人の男がすわつていて、しきりにオペラグラスで軍艦の方をのぞいてゐるのが目に入つたが、それが藩主(訳注 伊達宗徳)であるとかつたので、ラウンド中佐はすぐにボートを出して、艦上へ案内した。藩主は、何分微行のことゆえ、気づかれなくなつたのだと語り、自分の奇妙な行動の言い訳をした。新年の祝賀をのべた提督の書状が藩主に呈せられた。私がその内容を通訳してから、藩主はそれを受取つた。彼は三十二歳、やや中背で、少しかぎ鼻の貴族的な顔をしており、全体的に見て立派な容姿をしていた。彼は、もちろん艦内を案内された。その間に、私は首席家老の息子で松根内蔵という、一見二十歳ばかりの紳士然とした青年と話をした。松根は私に、薩摩と宇和島はたいへん親睦な関係にあるが、それは宇和島の前大名(訳注 伊達宗城)と島津三郎が、最近逝去した大君(訳注 徳川家茂)擁立の際に反対したかどで相共に不興を被つた少数の大名の中に列しているのだから、当然のことだと言つた。一橋はまだ將軍には任ぜられず、おそらく将来も任ぜられることはないだろうとのことだつた。

諺を沢山吐いたが、これは聞き手を限りなく喜ばせた。そして、西洋人の哲理に対し、少なからぬ敬意をいだかせることができた。十一時半に最後の客が帰ってから、飯を少し食べて、日本式の寢床に入った。シートなしでも気持ちよく眠ることができのを知って、私は意外に思った。

翌朝、日本式の結構な朝食をとってから、私は艦へ帰った。それから、ラウンドと、これまで名前をあげなかったが、長崎で乗船した第九連隊のライトとダンの両名と連れだつて、前日の約束にしたがい小銃の射的場へと出かけて行つた。二十五名からなる儀仗兵の一隊が私たちを波止場に出迎え、宇和島の海軍の一士官が随行した。途中、別の衛兵も一行に合した。彼らは、かなり険しい小山を登つて、私たちを射的場へ案内した。イギリスの小銃隊員数名も、手並みを見せんとものと上陸していた。私たちは、しばらく歩いてから、また山を登らなければならなかった。宇和島には射的場として適当な広さの平地がないので、標的は七百ヤードほどの谷間を隔てた別の小山の中腹に設けてあつた。

射的場には、私たちのために天幕が設けられ、隠居とその実子、それに藩主が私たちの到着を待ちうけていた。イギリスの兵士は、深さも幅もわからぬ谷を隔てた射撃には慣れていなかった。土地なれのしている宇和島の射手よりも手ぎわがよくなかった。

射撃は一時半までに終了した。それから一同は、城外にある御殿、すなわち藩主の御屋敷へおもむいた。五百年も前からの古い建物だったが、建築の様式には特に取り立てていうほどのものもなかった。大玄関からではなく、庭園から直接縁側に上がる仮階段から招き入れられた。松根老人はここで私たちを出迎えて、一つの長い部屋へ案内した。部屋には、金箔の立派な折りたたみ式の屏風が四方に立てまわしてあつた。部屋の一隅に特に大きな屏風があつたが、これは偉大

な人物であり、ただ名義だけの藩主がこの隠居に限りない尊敬をはらっている様子には、感動すべきものがあつた。現藩主は常に隠居のことを父と呼び、隠居はこの大名を伴（たが）という軽んじた言葉で呼んでいた。二人は互いに語り合いながら、私が長崎で手に入れてきたモゼルの葡萄酒を飲んだりして、二時間も艦内にとどまっていた。

この隠居は、大君の政府（幕府）とフランス公使との間に、きわめて怪しい親交がむすばれていることを熱心に私に話したが、首席家老の松根老人は、主人の不用意な発言に気がつく、と、札砲をうつのに遅くなるからと言って、隠居をせき立てた。それから、藩主親子は十七門の艦砲が殷々（いん）とどろく中を帰っていったが、それに対して砲台の一つから答礼砲が放たれた。

隠居が立ち去ってから、この二人の君侯の妻子たちが艦へやってきた。彼女らは少しも私たちを恐れる気色がなく、ヨーロッパの淑女と同じくらしい心安さで、気持よく話をした。艦へやってきた人々の中には、後年に至り提督林謙三（ケンサイ）として知られた日本の役人もいた。

入浴と髭（ひげ）そりのため上陸してきた野口は、砲兵隊長入江（いづみ）からの会食の招待状を私のもとへ届けた。そこで、私はボートに乗って、風雨の中を出かけて行つた。私を招待した主人公は勤め先からまだ帰っていなかったが、その妻女が私を招き入れた。十五分ばかりすると、主人公が姿を見せた。やがて、森という砲兵士官と、そのあとからさらに二名の下級者がやってきた。すぐに食事が出された。それは、数え切れぬほどの皿数の魚肉と吸い物とからなり、食事は六時から十一時までつづいた。

私たちは、互いに談じあい、熱い酒を酌（しやく）みかわし、また順番に歌った。私は、あらゆる問題について、多くの質問に答えなければならなかった。その際、私は機会をとらえては適切な金言や

私はこう答えた。思うに、フランスの政策なるものは、日本には承認された元首が必要であり、將軍は一般の目から見て最も強力な政治上の人物であるから、これとフランス人が条約を結んだ以上、將軍をできるだけ強くした方がよいという見解に基づいている。イギリスの政策は、これとは異なる。イギリス人は、条約は日本と締結したもので、特に將軍と締結したものではないという見解をとっている。もし將軍が条約の相手とすると、現在のところ實際上の將軍はまだ存在しないのだから、われわれの条約は中絶の状態にあると見なければならぬ。しかし、われわれは日本の内政に干渉したくないので、日本人が日本人同志の国内紛争を自ら解決するならば、それで何も言うことはないのだと。

「だが」と、隱居は言つた。「もし内乱が長く続くようなら、貴国の貿易は損害を被ることになるから、貴国としても、貴国自身のために、内乱が早く治まるようにせねばならぬでしょう」

「いや」と、私は答えた。「われわれが内乱に干渉して、どちらか一方に味方することになれば、事態はさらに十倍も紛糾するでしょうし、外国貿易は何もおしまひになるでしょう」。

それから隱居は、自分の考えでは、日本を天皇（ミカド）を元首とする連邦国（confederated empire）にした方がよいと思うし、これには薩摩も長州も同意していると言つた。そこで私は、それはむずかしい事だが、しかしそれ以外には何らの方法もないと考える。そして、私はその趣旨の論文を横浜の一新聞に発表したことがあると言つた。

「おお」と、隱居は声を放つた。「私はそれを読みましたよ」。それは、前に述べた、私の論文の翻訳を指したものだつた。

「女どもをよんで、何か音曲をやらせようじゃありませんか。艦長は、自分の帰つたあとで、

な太閤様タイコウサマから自分の祖先が拝領した品であると、藩主が説明した。部屋の中央にテーブルが置かれ、その右側に隠居と藩主と松根のかける肘かけ椅子があり、その左側にラウンドとその部下の士官連が着席した。私は会話をうまく取り運ぶために、テーブルの上席についた。

見事なごちそうが用意されていた。料理は一皿ごとに美しく装われていたが、中でも一番趣向をこらしたのは、羽毛がそっくり生えたままの野鴨ノカモであった。その鳥は、泳いでいるとも、また飛んでいるとも思わせるような仕組みになっていて、びんとはね上がつた両翼の間の背の上に、焙ほった肉の細かく刻んだのがのせてあった。別の皿には、大きな伊勢蝦イセエビや、儀式には付きものの大きな鯛の焼き物がついていた。

私たちは磁器製の大きな盃で酒を飲んだ。燗カをした酒が、平たい急須ツグスのような、長い口のついている白鐵製はくその容器で注がれた。前藩主は、ラウンド、それから私、次いで二人のイギリス士官と、かわるがわる盃の交換をした。そのあとで、藩主と家老の松根老人との間で、同様の儀礼が行なわれた。

食物と酒がうんと出たあとで、隠居は赤塗りの浅い大盃を私にすすめた。私は一気に飲みほさなければならなかった。私の同伴者は早く辞去したが、私は隠居の頼みであとへ残り、彼と若干の政治問題を論じた。隠居はまず、兵庫の問題から切りだした。この問題で、彼は昨年七月、ハリ・パークス卿に自分の意見を開陳したことがあったが、今では兵庫開港に賛成しており、一橋もこれと意見を同じくしていると語った。そして、フランスと幕府の間で、きたる九月に開港する相談がすすめられているそうだが、自分としてはきらいなフランス人よりも、イギリス人との間に協定が結ばれることを希望すると言った。

根の息子、それにもう一人の日本人が私と一緒に部屋に寝た。

翌朝、出港の用意のできたことを知らせるアーガス号の号砲をきいて、まだ夜明け前ではあったが、私は目をさました。急いで服をきて、松根の息子と共に艦に行き、記念に私のオペラグラスを贈った。野口と私の給仕の安は、これも陸で泊まったのだが、まだ姿を見せなかった。ラウンドは、この兩人を待つことを拒んだ。そこで私は松根に、この兩名の者をなんとかして横浜まで送ってくれるように、そして、江戸に駐在する宇和島の用達人に返済するから、彼らの要求するだけの金を立替えてやってくれるように頼んだ。わが艦は六時半に抜錨して湾を出たのであるが、私は親切に気持よく待遇してくれた宇和島の友人たちと別れなければならぬ名残り惜しさで、胸がいっぱいになった。

途中、瀬戸内海のちよつとした所に寄港して、一月十一日の正午ごろ兵庫についた。私は、石炭、牛肉、野菜などを手に入れることができるかどうかを知るために上陸した。若干の必要な品物を艦へ届けてくれるようにこの地方の役人と話をきめてから、私は兵庫の町をぶらぶら歩いて見たが、ここの住民はもはや外国人を見なれていた。途中、外国貿易に兵庫を開港することには断じて反対だと唱えていた両刀をたばさんだ男たちに出あったが、彼らは冗談でそう言っていたということが判明した。私が会った肥前の男は、これまで一度も面識がなかったくせに、私とは昔なじみだと断言した。そのあとで、林謙三と私は港内に碇泊していた薩摩の汽船へ乗りつけ、船長の井上新左衛門と懇意になった。この船は、鹿児島から薩摩の指導的人物の一人である小松帯刀オサワキを乗せてきたもので、小松は薩摩の指導者中の第一人者たる西郷に会うために、ここから上陸して大坂オサカへ行っていた。私もすぐに大坂オサカへ行つてこれらの人々に会いたかったので、その旨を

私が貴方のために女を出したと聞いたら、さぞうらやましがらうから、あの人には言いなさんなよ。しかし、もしあの人が知ったら、酔っぱらって何も知らなかったと言うんですね」。

そのとき、人妻や、そうでない女も交じった美しい女性の一群、ハレムの美女たちが入ってきたので、話は中断された。子供たちも、みんな入ってきた。私は、全部の婦人を相手に酒を飲まなければならなかった。しまいには、頭がどうかなりはせぬかと、心配になりだした。楽器がはこばれた。どんどん酒が出て、親睦と歓楽は大いに増したが、おかげで政治的意見の交換はふつ飛んでしまった。隠居は歓楽に有頂天になって、もう話をしようとはしなかった。しかし、あとでふと気づいたように、「私がアーガス号へ行ったということを新聞に出してはいけませんよ。病氣という理由で京都の集会にも出席を断わっているのだし、また、幕府の耳へ入れたくないから。私は今のところ、京都へ行きたくないのです」と言った。音楽がはじまった。一座を見まわすと、鑑長を送り出して戻ってきたアーガス号の一士官が日本の踊りをやっているのが目についた。私がホーンパイプを踊ってくれと言うと、彼はさっそくやり出した。すると、四十九歳という分別ざかりの前藩主が立ち上がって、ふらふらと士官の前へゆき、袴はかまを両手でたくし上げて、足取りをまねようとした。この戯れは、二人の家老にまで伝染した。この二人が前藩主に加わって、三人手を組みながらリール踊り（訳注 スコットランドの舞踏の一種）。この場合は、千鳥足でふらふら踊るの意か）をやり出した。

二人の殿様と、婦人たちを相手に酒をしこたま飲んだあとで、私は松根老人に彼の私宅へ運ばれ——いや案内された。そこでも、また酒が出て、松根一家の人々とも近づきになった。一時間ほど話しこんでから寝についたが、熱い酒が頭にききかけていたので、気持よく眠った。林と松

は今外国代表の全部を大坂^{オースカ}へ招くつもりだから、その機会に問題の書簡を受取るつもりであるというのであった。一橋は、日本暦の十七日(一月二十二日)には是非大坂^{オースカ}へ行くつもりで、その後まもなく諸外国の代表を大坂^{オースカ}へまねく考えでいたのだ。そこで、われわれ(薩摩人)は吉井幸輔の手を通じて、一橋のその上奏文の写しをハリー・パークス卿のもとへ送ったのであるが、卿からは、その件では直接にまだ何も聞いていないから、大君の招請に応ずるかどうかも未定であるという回答があったというのだ。

「しかし」と、私は問うた。「一橋は、どうして將軍あての書簡を受取ることができるのですか。一橋は、將軍ではないじゃありませんか。それとも」

「さよう。一昨日、將軍職を拝命しました」

「おや!」と言って、私は声をのんだ。「それは実に意外だ。私は、一橋が長州事件を解決することが先決問題だと思っていたのだが。しかし、それを何とかやり遂げたとなれば、彼の勢力も素晴らしく強くなってきたわけですね」

「さよう。実際です——(力をこめて)——昨日は乞食のような浪人大名に等しかった男が、今日は征夷大將軍です」

「だが、それを仕組んだのですか」と、私はきいた。

「板倉周防守(新任の老中)(訳注 老中板倉勝靜)です。一橋は今、大いに天皇の寵をうけています。彼は、望み次第で関白(大宰相)にもなれるでしょう。水戸家^{みと}の出である自分の弟、まだ若年の民部大輔^{みんぶだいほ}を、継承者のない清水家の当主とし、それをフランスに全權大使として派遣しようとしています」

話すと、井上と林は五代才助（一八六三年に鹿児島でわが軍の捕虜になった男）にあてて、必要なら手はずを頼む旨の手紙を書いてくれた。ところが、その翌日、私は西郷自身が兵庫へやって来るだろうということを聞いたので、それまでの間、林の案内で上陸して、入浴し、日本式の昼食をとることにした。

浴後、私は木綿のガウン（浴衣）に着換えたが、涼しい感じがして、浴衣の着心地のよいのを初めて知った。私たちが食事の席につくや否や、西郷が到着したとの知らせがあったので、急いで飯をかつこみ、すぐに薩摩人の別の定宿へかけつけた。前から、もしやと疑っていたのだが、西郷は、一八六五年十一月に島津左仲と称して私に紹介された男と同一人物であることがわかった。そこで、私が偽名のことを言うと、西郷は大笑いした。型のごとく挨拶をかわしたあとも、この人物は甚だ感じが鈍（はな）そうで、一向に話をしようとはせず、私もいささか持てあました。しかし、黒ダイヤのように光る大きな目玉をしているが、しゃべるときの微笑には何とも言い知れぬ親しみがあった。

私は、薩摩における外国人の雇傭のことや、またある事情、すなわちイギリスの臣民が条約の制限区域外に、または領事館の役人の管轄区域外に居住することによって生ずると思われる紛争について話をはじめた。しかし、これは西郷の応答をあまり引き出さなかったもので、私はもっと彼の心をひきつけそうな別の話題を捜しだし、最近一橋が、フランス皇帝からの書簡を受取りはしなかったか、とたずねてみた。西郷は、「さよう」とうなずいて、こう答えた。

一橋は、先般、天皇に上奏した。その趣旨は、フランス皇帝から將軍へあてて書簡がきていたが、故大君が当時長州征討のことで京都に滞留していたために、その受領が延引していた。自分

うに、大名は政治の改革について幕府と相談せよというのです」

「ほかの討議題目の中には、長州事件や兵庫開港の問題も入っていたことと思いますが。長州の件はどうなっているのですか。われわれ外国人には、とんとわからないのですが」と、私はきいた。

「それは、全く合点がゆかないのです」と、西郷はこたえた。「幕府は正当な理由なしに戦争をはじめ、同じく理由なしに、それを止めたのです」

「和睦ですか。それとも何か」

「いや。ただ敵対行動をやめて、軍隊を撤退させたというだけです。事態はまだ解決されていません」

「われわれ外国人には、幕府がなんの理由で長州征伐をやり出してたか、大きな謎です。まさか、長州が外国船を砲撃したからではないでしょう。また、長州が天皇に対して実際に罪を犯したものでなければ、「サン・オブ・ヘブン」(天子)を深く尊崇している貴藩の主君は、きっと幕府に力を貸したことでしょうが」

「幕府は、常に長州を憎んでいたと思います」と、西郷はこたえた。

「この国の紛争は今年中に解決されることが最も必要ですから、京都の会議が行なわれなかったのは、大いに遺憾に思います。われわれイギリス人は日本と条約を結んでいるのであって、ある特定の個人を相手にしているわけではありません。また、われわれは、貴国の国内紛争について干渉するつもりはありません。日本が天皇に統治されようと、幕府にされようと、あるいは個々の州が寄り集まった連邦国家になろうと、われわれには関係のないことです。しかし、われわれ

「何のために？」

「われわれにも、さっぱりわからない」

「では、一橋は、何のために外国代表を大坂へ招集しようとしているのですか」

「それも、一向にわからない」と、西郷はこたえた。

「諸大名に相談なしに、そんなことができるとは、なんたる奇態なことでしょう」

「大名たちに相談すべき事柄です。今後は、あらゆる政治問題について相談があるものと、われわれは考えていたのだが。近來、幕府のやりかたが非常に悪いので、わが主君は、幕府が勝手な事をやってこの日本を滅ぼすのを座視するに忍びぬと申しています。天皇が大名中のある人々を京都に召集されたとき、それらの人々は政治にあずかるものとばかり考えていました。今になって、幕府にそんなつもりのないことがわかったのだが。大名たちも、もう愚弄されることを欲しない。そこで、今度は一人のこらず出席を断りました。越前（エチゼン）福井前藩主松平慶永（よしなが）はできるだけ長く京都にとどまったが、とうとう退去しました。」

「では、現在のところ、何もかも終わったのですね」と、私は言った。

「さよう。しかし、おそらく三年後には、一橋がどうなるかわかるでしょう」

「三年は長い。しかし、京都における会議の目的は、天皇が將軍に条約締結の権能を授けられた勅書の後半部で、『現存の条約には、諸大名と相談の上で修正してほしい諸点がある』（訳注）『是迄の条約面品々不都合の廉これあり、勸慮に応わず候に付、新に取調相伺申すべく、諸藩衆議の上御取極め相成るべきことと言われていることと、関係のあるものではなかったのですか』

「いや、決して」と、西郷はいった。「その点は、全く貴殿の考え違いです。私が先にいったよ

方で開港されるならば、藩の財政は大混乱をきたすでしょう」

「なるほど。あなた方がなぜ兵庫をさほど重視されるかがわかりました。兵庫は、あなた方の最後の切札カードなんですね。しかし、兵庫が開港される前に貴国の内紛が解決されないのは大いに遺憾なことです」

「われわれが、吉井ヨシイをハリー・パークス卿のもとへやったとき、吉井は卿に、大坂オザカまで来て、われわれをたずねてもらえないだろうかと思ねました。われわれは、疑惑を招くのを恐れて、こちらからハリー卿を訪問するのを差し控えたのでした。ところが、ハリー卿からは、薩摩侯一人だけでなく、すべての大名たちに会いたいとの返事がありました」

このとき、酒サカと肴サカナ(酒の添え物)が運ばれて、五代ゴダイの情婦といわれる美貌の若い女性が酌をしてくれた。西郷は言いわけをして、連れの林と一緒にしばらく座をはずしたが、林は明らかに薩摩の人々から機密の用務を託されていたのだ。二番目の膳ぜんが配られた。西郷は帰りを急いでいる様子なので、私も引き上げようとして立ち上がったが、西郷は私をおしとどめて、早く帰ることを許さなかった。私は、西郷が遠方へ旅立たなければならぬことを知っていたので、私に遠慮なく、いつでも好きな時に退席してくれるように言った。数分のうち、西郷は立ち上がり、「ハリー卿が何かわれわれに知らせたいことがある場合には、江戸の薩摩屋敷に通知していただきたい。そうすれば、われわれは京都から、だれでも望みの人を卿に会うために差し向けましょう」といって、別れをつげた。私は、遠路はるばる私に会いに来てくれた西郷に厚く礼を言つて、別れの言葉をつげた。

酒宴が再び始まった。何度も料理が運ばれたのち、林と私は七時半ごろアーガス号に戻った。

としては、だれがこの国の本当の元首であるかを知りたいのです。私は、正直なところをあなたに言いますが、われわれイギリス人は幕府に対して重大な疑惑を感じております。われわれは、幕府が兵庫の開港を容赦してくれるように頼んで来たとき、彼らが主権を有せず、いや、むしろ全能の力を有していないことを知りました。それからリチャードソンの殺害事件で、幕府に殺害者を処罰する力のないことから、幕府の權威が齒摩にまで及んでいないことを知りました。また、われわれの友邦国の軍艦が長州の砲撃をうけたとき、幕府には処理の能力がなかったのも、われわれが出かけて行つて鷹懲ようちやうしなければなりませんでした。こんどの長州戦争では、長州が見事に幕府に勝つたことを知りました。こんなふうだから、われわれはこの国全体に対する幕府の主権というものを疑うようになり、したがつて大名會議がこの難問題を解決することを望んでいました。われわれが、当方の予定通り来年になつて兵庫開港を要求する場合に、大名たちがこれに反対するならば、幕府の立場はまたしても苦しくなるでしょう」

「私の主君は、兵庫の開港そのものには反対でないが、兵庫を他の港と同じようなやり方で開くことには反対しています。われわれとしては、兵庫が日本全体の福利となるため開港されることを希望しており、幕府の私利のために開いてもらいたくないのです」

「だが、あなた方は、どんなふうな開港の仕方を望んでいるのですか」と、私はたずねた。

「兵庫に関する一切の問題は、五名ないし六名の大名よりなる委員会の手にゆだねることにする。そうすれば、幕府が利益を独占するために勝手に行動することを防ぐことができるでしょう。兵庫は各藩にとって大いに重要な港です。各藩はみな、大坂オザカの商人から金を借りている。この借財の支払いに、毎年郷国の産物を大坂オザカへ送らなければなりません。もし、兵庫が横浜と同じやり

第一章 最初の大坂訪問^{オザカ}

一八六七年一月十五日(訳注 慶応二年十二月十日)に横浜へ到着すると、私はこんどの旅行で見聞したり、口外したことを一切正確に長官に報告し、その翌日、居を江戸に定めた。江戸で私が最初知った新しい事件は、將軍が外国代表を全部大坂^{オザカ}へ招いて会見することになったということ、そして外国代表も多分これを受諾するであろうということだった。將軍のこの目的は、側聞するところによれば、過去八か年にわたる日本の因襲をすべて打破して、諸外国との間に結んだ友好条約を、従前よりもいっそう現実的なものにするにあつた。しかしハリー卿は、今や日本国内の政治情勢を充分に理解し、將軍の権力が急速に衰退しつつあることを確信していたので、將軍の招請には依然として応じかねていたのだが、各国の代表が多数参加することになったと聞いて、ようやく自分も仲間入りをすることに決めたのである。

ところで、ハリー卿の提案によつて、宿泊設備の具合をあらかじめ調査することになり、そのためミットフォードと私が、アーガス号で大坂^{オザカ}へ派遣されることになった。第九連隊第二大隊のカーデュー大尉もわれわれの一行に加わつた。一行は、二日間の航海のち、二月九日に兵庫へ到着した。將軍の外国係に属する二名の役人も、必要な手はずをするため江戸から同行して来たが、これらの役人は直ちに上陸し、われわれがすぐに大坂^{オザカ}へ行けるように手配した。

兵庫港にはプリンス・ロイヤル号、バジリスク号、サーペント号、ファーム号などが碇泊し

その翌日、われわれは横浜に向けて出港した。兵庫に滞在中、われわれは自由に町を散歩したのであるが、住民は至って私たちに丁寧であった。兵庫の人々は外国人を見慣れてきていることが、はつきりわかった。私たちが街路を通る時に、ほとんどこちらへ注意を向けなかったことからしても、それがよくわかったのである。

訳をした。私は、氣持よく兩人を許してやつた。

われわれ一行は、十一日の朝出発した。アーガス号からデンマーク士官のソールビツァー少佐が加わったので、人数は四名になった。日本の当局が馬を用意してくれ、また江戸の外国公使館に護衛兵を差し出す部隊(訳注 別手組)の中から、刀を帯びた九名の兵士を付けてくれた。馬は小さくて、榮養も悪く、調教もされていなかったが、一頭ごとに立派な馬丁がついており、彼らは堂々とした足取りでついてきた。一行の警護のため、沿道には兵隊が配置されていたが、その数は総体で千五百名を下らなかった。あまり大げさなので、妙な感じがし、また少々きまりが悪かった。途中の道路は、全く平坦(へた)だった。大坂(オザカ)の近くへ来るまでは、かなりまっすぐな道だったが、その辺から曲がりくねっていて、よいいな回り道をたどった。こうした道のつくりは、往時はほとんど日本国中の大名町の近郊で、戦略上の目的から採用されていた。そして、このような道路は、大体水田地帯を通っているのので、敵軍は攻撃地点へ向かってまっすぐ前進することができず、曲がりくねった道をたどりながら進まなければならない。そのため、前方の稜線(りょうせん)の防禦軍から、たえず側面射撃をあびせられることになるのだ。

尼ガ崎を過ぎると間もなく、大坂(オザカ)の城が見えてきた。輝くばかりの白壁と、幾層もの櫓(やぐら)が周囲の風景を圧して、ひととき目立っていたので、幾リーグ(訳注 一リーグは約一里八丁)も遠方から見えたのである。

とうとう、大坂(オザカ)の町に着いた。初め案内者が道を間違ったので、狭い街路に配置されている兵士の列が途絶えたが、往来の人々は静かに道をよけてくれ、見物の人々も無言で家々の軒先に集まっていた。道の角(かど)は、どこも黒山のような人だかりだった。街路の両側は、目のおよぶかぎり、

ていたが、これらは福岡で筑前の領主を訪問し、また三田尻で長州の領主を訪問して来たところであった。プリンセス・ロイヤル号のウォルター・カー侯は、四人の長州の貴人（訳注 二人の誤りか。藩主毛利大膳大夫（慶親）とその世子毛利長門（広封）と、一人の頭領株の参政官（訳注 桂小五郎、吉川監物）を撮った写真を、親切にも私にくれた。それを本書に載せたが、前に述べたことのある桂小五郎もうつつている。

私は、プリンセス・ロイヤル号の甲板で日本の貿易商人数名に会ったが、彼らは近迫した兵庫の開港に大いに関心をもち、外国人の居留地として適当な場所について大いに意見を吐いていた。また、彼らは、天皇（訳注 孝明天皇）の崩御を知らせてくれ、それは、たった今公表されたばかりだと言った。噂によれば、天皇は天然痘にかかって死んだということだが、数年後に、その間の消息に通じている一日本人が私に確言したところによると、毒殺されたのだという。この天皇は、外国人に対していかなる譲歩をなすことにも、断固として反対してきた。そのために、きたるべき幕府の崩壊によって、否が応でも朝廷が西洋諸国との関係に当面しなければならなくなるのを予見した一部の人々に殺されたというのだ。この保守的な天皇をもつてしては、戦争をもたらず紛議以外の何ものも、おそらく期待できなかったであろう。重要な人物の死因を毒殺にもとめるのは、東洋諸国ではごくありふれたことである。前將軍（訳注 家茂）の死去の場合も、一橋のためには毒殺されたという説が流れた。しかし、当時は、天皇についてそんな噂のあることを何も聞かなかった。天皇が、ようやく十五、六歳になったばかりの少年を後継者に残して、政治の舞台から姿を消したということが、こういう噂の発生にきわめて役立ったことは否定し得ないだろう。

野口と給仕の安は、宇和島から送られてきて、この兵庫に姿を見せた。二人は、さかんに言い

けられていなかったのである。

翌朝、私たちは宇和島藩の役人である鈴木の訪問をうけた。彼は、大坂詰めの家老から託された、宇和島の屋敷にはたずねて来ないようにと書いた手紙を持参したのであるが、同時に、それとは反対の印象をあたえるような事をもしやべった。私は野口を薩摩の屋敷へやって、小松（訳注 家老小松帯刀）に宿舎まで来てくれるように頼み、また宇和島の屋敷へも使いをやつて、先般二人の召使がうけた親切に対して礼をのべさせた。

午後、われわれは、心斎橋筋へ散歩に出かけた。ここは大坂随一の盛り場である。一本の刀を差した数人の男が先に立ち、「カウ・カウ」と鳥からすのような声をだして、人々に道をあげろと注意した。数年前に長崎からオランダ使節が来たのを最後に、その後まだ一人のヨーロッパ人も来たことがなかったので、黒山のようにたくさんの人々が異国人の姿をぜひ一目見ようと、すぐ後ろからぞろぞろついてきた。こちらも、これに劣らぬ穿鑿心せんさくしんを働かせて、暗くなるまで本屋や呉服屋などを一軒一軒ひやかしながら、町を歩きまわった。

第二にたずねて来た人物は、前にも述べた吉井幸輔ヨシイ スケであつた。吉井は、私が最初に西郷に会つた一八六五年秋に、同じく兵庫の船中で会つたことのある人物で、彼の訪問は私に当時のことを思い起こさせた。この男は小柄だが、ひじょうに快活で、薩摩なまりを丸出しにしてしゃべつた。われわれは毎日、一日中の大部分を市中の見物に過ごしたが、役人たちは何かにつけて親切に扱ってくれた。こちらが、やりたいと思うことは、ただ口に出しさえすればよかった。言つたことはすぐになえられた。一日、二日してから、小松と吉井を昼食に招いた。小松は私の知っている日本人の中で一番魅力のある人物で、家老の家柄だが、そういう階級の人間に似合わず、政

熱心に見つめている顔、顔でいっぱいだった。

われわれは、大坂市を貫流している川の大きな木橋を渡り、堤にそって左へ折れ、また右へまがり、それから果てしもないような長い街路を通って、ようやく宿所に指定されている本覚院という寺に到着した。ここには、数名の外国係の役人が来ていたが、二、三の地方官吏もわれわれ一行を見舞った。宿舍の居心地をよくするために、あらゆる手が尽くされ、また場所柄から言っても最上と思われた。私は、この盛んな歓待ぶりを、一八六五年（訳注 慶応元年）の訪問の際の、ほとんど敵意に近いような接待ぶりと比べずにはおられなかった。新しい将軍が政権の座についてから、時勢は明らかに変わったのだ。最近の天皇の死去も、融和政策の遂行に対する将軍の意図と目的には、少しも変化をもたらさなかったようだ。

役人たちは最善をつくして、われわれの宿泊準備をととのえていた。私たちは、長い騎馬旅行の塵埃を気持のよい浴室で洗い流してから、西洋式をまねた食卓についた。卓上にはフランスの葡萄酒もつき、また、残念ながら一本だけではあったが、ラローズ（Larose）の瓶もあった。

しかし、座席が四脚の木製の腰掛けだったので、滞在中を通じて、これにはひじょうに苦痛を感じた。食後、寢室の模様をしらべて見たが、寝台はほんの間に合わせに作ったものらしく、寝具は綿布の敷き蒲団と絹布の掛け蒲団で、これはたつぷり用意してあった。

トイレットに設備された物と言えば、おかしいほどの、小さな二つの洗盤と、洗面台の下の大きな水壺、そのそばにアルモンド石鹼一個、それにオー・デ・コロン一瓶だった。しかし、特に異様にさえ感じられたことは、われわれが接した役人の態度と言葉使いが、ばかにうやうやしいことだった。私はこれまで政府の役人から、無作法とも思われるような慣れ慣れしさしか見せつ

rich)がこれを執行するのが習わしとなっていた。この関白職には、朝廷の特定の貴族五家の中から選ばれる。名分上はもちろん天皇によって任命されるのだが、実際には大君と重立った大名たちがこれを選ぶのである。現在の関白(訳注 二条斉敬は、賢明、かつ善良な人物ではあるが、あまり幕府の勸告を入れすぎるきらいがあつた。

新將軍の慶喜が外国代表を大坂に招く目的は、ハリー・パークス卿が薩摩と宇和島の大名からうけた招待に対する対抗手段にすぎないのだと、小松は考えていた。將軍は、おそらく、友誼の絆をいっそう緊密ならしめるなどということを大いにしゃべるだろうが、兵庫開港に関する処置については言及をさけるであろう。幕府が、兵庫開港の実現を本心から欲していない理由は、兵庫の開港によって天皇や廷臣の知性が急に光明をあびるに至ることを恐れるからだ。小松の言によれば、幕府が兵庫の土地引渡しを遷延したり、昨年六月の関税協定の告知を延期したりしたことにについて、薩摩から幕府に抗議を申し込んだところ、幕府は、これらの問題についてはまだ決心がついていないと答えたとのことである。小松はまた、薩摩は神戸付近の土地を蔵屋敷の敷地として購入しているが、その大部分を外国人の居留地として、喜んで貴方たちの使用に供しようと言った。そして、薩摩は兵庫が外国貿易のため開港されることを希望するが、しかし、ただ適切な方法で開港してもらいたいと語った。朝廷の貴族もまた、適切な方法による開港には賛成している。これらの人々は自由主義的傾向を有していて、幕府には好意をよせていない。その中の何人かは幕府のために幽閉されており、天皇に接近することを許されないのだと。

事態は危機に瀕しているので、將軍は時局を收拾するため長く京都にとどまることになるだろう。もし、將軍が江戸へ戻れば、彼は天皇を左右する力を失って、長州が再び朝廷を動かすよう

治的な才能があり、態度が人にすぐれ、それに友情が厚く、そんな点で人々に傑出していた。顔の色も普通よりきれいだつたが、口の大きいのが美貌をそこなっていた。彼は、脂肪の多い肝のバテや、薄い色のビールをうまそうに、ぱくつき、飲みほし、しまいにはあまり上きげんになり過ぎたので、この宿舎には徳川の家臣も多勢いることとて、うっかり秘密をもらしはせぬかと、はらはらした。

翌日、ミットフォードと私は、河岸近くの薩摩の蔵屋敷、すなわち物産扱所に、答礼の意味で小松と吉井をたずねた。吉井は玄関にわれわれを迎えて、一室に案内したが、そこには藩の留守居役である小松と松木弘菴がいた。松木は、一八六三年の鹿児島砲撃の際にわが方の捕虜になつた二名中の一人であつた。この男は、一時大君の御用をつとめていたそうだから、信用してよいものかどうかと、私は疑念をいだいた。そこで、挨拶をかわしたあとで、小松と吉井に、内談したいことがあると言つた。しかし、松木に対する私の考えは、私の誤解であることがわかつた。彼は、その後寺島陶蔵と改名(あるいは本名に復したのかもしれない)し、一八六八年の革命以来、主として外国事務関係の職に携わつて、長いこと在任していた。

そこで、とにかく、小松、吉井、ミットフォード、私の四人は、一緒に奥の別室へ入つた。小松と吉井が私たちに語つたところによると、天皇の崩御は二月三日と公表されているが、実は一月三十日であつた。十五歳の年少の身をもつて、天皇の息子(詔注 睦仁親王が即位した。この新帝は、外国と日本の政治に関する学問をしかるべき教育によつて正しく修めるならば、賢帝となる素質を有すると思われていた。ところが、不幸にして、幕府は新帝の知性を増進させる教師を付けることを決して許さなかつた。新帝が若年の間は、公事の処理は天皇の名によつて関白(関白

われわれは、ハリー卿の公式の来坂について、外国奉行の一人である柴田日向守（訳注）柴田剛中（トモ）に会い、あらゆる詳細な手はずを、穏やかに、そして友誼的な話合いで取りきめた。だが、將軍との接見の式のこと、困った問題が起こった。柴田は、イギリス公使が將軍の着座している部屋の外でお辞儀することを望んだが、われわれは、これを容認するわけにはいかなかった。われわれの主意は、礼法をできるだけヨーロッパの宮廷のそれにならわせるにあった。

前にも述べたように、野口は京都にある戦鬪部隊中で最も精鋭な部隊を出している会津藩の間だった。私は野口を、会津藩の人々に会わせるため京都へ出張させたが、彼は帰ってきて、数名の会津藩士が訪問にやってくると話した。十七日の晩おそく、梶原平馬（イサ）（家老）、倉沢右兵衛（ヘイ）、山田貞介（マサキ）、河原善左衛門の四名がたずねてきた。彼らは、贈り物として数巻の淡青色の絹の紋織と、ハリー卿とミットフォードと私にあとから届ける刀剣や、その他の品物を記した目録を持参した。公式な贈り物の場合、奉書紙（カインゴシ）という淡いクリーム色の厚い和紙に書いた目録を品物にそえるのが習わしになっているが、品物の用意のない場合には、前もって目録だけ渡すことがあった。私たちはお返しの品物の持ち合わせがなかったので、できるだけのもてなしをした。梶原は、シャンペン、ウィスキー、シェリー、ラム、ジン、水で割ったジンなどを、またたきもせず、尻ごみもせずに飲みほし、飲みっぷりにかけては、他の人々をはるかにしのいだ。彼は色の白い、顔だちの格別立派な青年で、行儀作法も申し分がなかった。この人々は、外国の軍艦を見たがっていたので、バジリスク号のヒューエット艦長への紹介状を書いてやった。これが機縁となって、私は会津藩の人々とも親密な間柄になったが、こうした友誼は、革命戦争によって日本国内の政治問題に関する彼我の意見が全く反するに至ったあとまでもつづいたのである。そして、この場

になるかもしれない。大名の中には、將軍の叙任の式にわざわざ京都まで出向いた者はなく、いずれも出先の留守居役を主人の代理として参列させたという。

小松はわれわれに、幕府を倒すことは、薩摩および薩摩と行動を共にしている諸藩の本意ではない。ただ幕府の権力乱用を防ぐに過ぎないのだから、この旨をハリー卿に伝えてほしいと言った。しかし、彼らは同時に、天皇が日本の實際上の統治者に復帰することを望んでいた。薩摩の計画と希望のすべては、この国の幸福を計るにあつて、將軍に反抗して革命をおこすことが目的ではないのだ。もし、ハリー卿がやつて来て、天皇に条約の締結を申し込むならば、諸大名は直ちにこれに同意の旨を通告して、この大計画の遂行に協力するために京都へ参集するだろう。ハリー卿が、この程度の力を諸大名にかしてくれさえすれば、それで足りるのであつて、それ以上のことは自分たちの力でやり遂げよう。

この四者会談はすいぶん長くかつたので、疑惑をまねく恐れがあるから、これくらいにしてやめよう、ということになった。そこで、もとの部屋へ戻つたところ、素晴らしく上等な日本食の弁当が出ていた。それに、びつくりしたことには、下関砲撃以来絶えて会わなかつた井上聞多が来ていたのである。彼の顔は、藩内の党争で被つた大きな刀傷のあとで醜くなつていた。井上は、今や長州藩の人心が激昂し、將軍に対して一撃を加えようとしていると言つた。そして、最も早い機会にハリー卿に長州を訪問してもらいたいという、藩主からの伝言を持ってきた。先般ハリー卿が下関を通つた際、偶然にもフランス公使がそこに来ていたために、計画していた会見が妨げられてしまったと言つた。薩摩の人々も、ミットフォードと私に向かつて、できるだけ早く鹿児島を訪問してほしいと述べた。

くなるし、また自分たちも市中の様子を眺めることができない。徒歩で行けば、宿所からほんのわずかな道のりなのに、狭くて、薄暗くて、あまり感じのよくない堀割かすんを幾つも通りながらポトで連れて行かれるのは、やり切れたものではない。

もう、すっかり暗くなっていたのに、波止場はとばには私たちを見ようとする人々が、いっぱい集まっていた。

私たちは、この市に一週間以上も滞在し、各方面を歩きまわり、一日として遠出をせずに過ごしたことはなかったのだが、それでも市民の好奇心は少しも減退した模様がなかった。宴会の場所を捜しに会津の人々と一緒に出かけた野口がまだ戻って来ないので、てっきり役人どもに阻止されたものとあきらめ、すっぽんのスープと、その煮たので晩飯を食べた。ところへ、飯めしの途中に野口が戻ってきて、万事用意ができたこと知らせた。外出の際にいつもあとからついて来る護衛たちが、みんな夜の休息のため引き下がっていたので、私たちは提灯ちようちんをもった男を一人つれただけで、外へ出た。夜もおそかったので、道路の人影は全くなく、何か冒険にでも出かけるような気持がして、悦に入った。まだヨーロッパ人はだれ一人として、日本の町の夜の街路へ自由に外出することのなかった時代であった。私たちは、二マイルの道を歩かなければならなかった。道を曲がって、川にそって下り、ようやく大きな橋のたもとにある一軒の料亭についた。会津の友人たちが、私たちの到着を待っていた。われわれの席として、部屋の一番上座のところへ毛布が敷いてあり、まん中に一列にならんだ高い燭台しよくたいをはさんで、向こう側の座蒲団に会津の連中がすわっていた。ばかに年増の女が茶をつぎに出たので、再びがっかりした。なぜなら、この招待では、大坂オサカきっての有名な芸妓たちを見せてくれるという約束だったからである。ところで、約束

合でも会津藩の友人たちは、イギリスの望むところは一つの国民としての日本人全体の利益であつて、国内の党派のいずれにも組みするものでないことを、はっきり見抜いていたので、われわれの演じた役割を少しも恨まなかつた。

この新しい友人たちは、二日後に昼食にやつてきたが、その時もシャンペンと罐詰かんづめの肉を平らげて、意気大いに軒昂けんきやうたるものがあつた。ちよつと言つておきたいが、当時は正餐めいいていの会で酩酊めいていするのはごく普通のことと、お客がしらふで帰ると、主人側は充分相手を満足させなかつたのではないかと、氣をもんだものである。彼らの一人は、べろべろに酔つて、子供や女たちの耳に入れたくないような話をやり出した。また、一人の男は、一束の猥画わがを差し出して、われわれ四人に氣前よく分けてくれた。

梶原は、この馳走の返礼に、今晚一緒に酒を飲みにゆこうと、私たちをさそつた。さつそくこれに応じたが、江戸から派遣されて来ている外国係の役人から文句が出た。これらの役人は、外国公使館の館員が大名の家臣の招宴にのぞむことは、たとえ会津のように將軍派に属する場合でも、前例のない、穩やかならぬ違法行為だと考えたのである。そこで私たちは、この招宴を断念させようと、役人たちが裏面でいろいろ工作するものと思つた。

午後は、イギリス公使と隨員たちを仮公使館まで乗せて行くボートの視察に行った。長いこと歩いて、すっかり疲れてしまい、ようやくのことで軍艦のボートを繋留けいりゅうする場所へ着いた。さつそく乗つて、私たちで試験的に漕ぎ出して見たが、その結果はどうしても思わしくなかつた。第一、ボートでは距離がたいへん遠くなるし、上流へ向かつて漕ぐので、途中の時間がとてもかかる。第二、ボートで行くとなると、公使やその属僚は市民に自分たちの姿を見せることができない。

ら言えば、みな等しく退屈である。

江戸から同行して来た役人たちは、私たちが料亭にいるのを見つけ出して、どうしても帰ってくれと言つてきかなかった。そこで、その執拗しつとつさに負けてしまい、少時間いただけで、十一時に主人役の者にさようならを告げなければならなかった。おそらく、会津の連中はずつとおそくまでやっていたことだろう。これは、大坂オウザカを去る前夜のことであつた。

の女たちはまだ二階でお化粧をしていて、酒が出るころになって下へおりてきたのである。その中には、たしかに美しいと思われる女も数人いたし、また、どう見ても醜いと思われる者もいたが、何にせよ、彼女らの容貌は、黒くそめた歯と鉛の白粉で台なしになっていると思つた。あとになって、私もこの黒光りのする歯にだんだんなじんできたのであるが。当時、黒い歯は既婚女性であることを示し、また年増としまになつて蟲負客だんごのできた「芸者」のしるしでもあつた。後年私は、こうした歯に全くなれ切つてしまつたので、皇后がこの習慣をやめて、新しい習俗のさきがけとなられた時は、大抵の日本人と同様に、かえて新しいスタイルになかなかじめなかつたのである。

私はいつも、日本の舞踊、というよりもその身振りに、はなはだもつて感心しないのだ。日本の踊りは、多少とも優美な（あるいは不自然に）気取つた肢体しだいの動作によつて、三絃のリユートの伴奏で唄うたわれる唄の文句を表現するのである。前もつて唄の文句を知っていると少しは助かるが、この文句が唄うたわれるときには、イタリアのオペラ歌手の発する音声が大多数の聴衆にわからないと同じように、さっぱりわからない。ところで、どんな外国人の場合でも、特に熱心な人でもなければ、こうした形式の芸術を鑑賞するために苦勞して修養しようとする者は決してあるまい。それほど時間をかけて精神的な努力をしなくても、他の方法でいくらでも美の享樂ができるからだ。また、音調の十中の九までが調子はずれと思えるような、西洋の音曲とは全く異なつた一連の音程からなる日本の音楽にヨーロッパ人の耳をなれさせるには、よほどの長い年期を必要とするだろう。こんなふうな饗應のしかたは、それぞれ地方的な相異はあつても、インド、ビルマ、シヤム、シナ、日本など、東洋のどの国でも一般に行なわれているものだが、私の粗野な好みか

ンスを支払った。当時は箱根の村の東端に関所があり、旅行者はみんな番所の役人に旅券を見せなければならなかった。番所の掲示板には、死体、怪我人、あやしい風体の者などは、旅券を提示しなければ通行を許さぬということが、その他の規定と並べて書いてあった。われわれ一行中の一人婦人は、この峠の頂から小田原に通ずる険しい、でこぼこした石だたみの通路を、日本の馬に乗って下るといふ困難な芸当をやつてのけた。

私たちは官用の旅館（訳注 本陣）に泊まつたが、旅館の主人は礼を厚くして、心から丁寧に待遇してくれた。かなりの広い面積をとつてゐる平家で、大きな台所と玄關を別にして、普通の広さ、すなわち十二フィート四方の部屋が十か十五もあった。われわれは、この旅館で一泊した。

翌日、野口が公定料金で駄馬や人足を雇つてきてくれたが、十マイルの距離ごとに一駄が四百六十四文、荷を背負う人夫一人の賃銀が二百三十三文だった。ところで、六千六百文は一両、すなわち一分銀四枚にあたり、標準相場の約五シリング四ペンスに等しかったので、人夫の公定料金は、全距離で約二ペンス五分の一、すなわち一マイルについて五分の一ペンスと、ちよつとになるわけだった。

人夫は、賦役として、どうしてもこの種の労役に服さなければならず、人数の足らぬ場合には、宿場の住民は普通の賃銀で男どもを雇い、これらを公定賃銀で提供しなければならなかった。これは一種の重税であつたが、革命後に樹立された新政府の最初の改革の一つとして、この制度は廃止された。

私は、保土が谷で一行と別れた。一行中には、横浜へ帰つた者もあり、また神奈川まで行つた者もある。私は神奈川の本陣、すなわち官用旅館の、大名や政府の高官用の一番上等な部屋に泊

第十七章 タイクーン 大君の外国諸公使引見

江戸へ帰つて来ると、後進の通訳生のヴァイダルが、可哀想に自殺したということだった。それを聞いて、私はぞっとした。

この恐ろしい行為の動機は、彼の不健康以外には考えられなかった。精神の異状のためでなかったことは確かだ。彼よりも、健全な理知をもった人間を見いだすことは困難だと思われるからだ。彼には、きわめて程度の高い才能があったが、気の毒にも慢性の肝臓病にとりつかれていて、それが常に彼の生存を苦しめていたようだ。ヴァイダルの最初の任地はシャムであったが、就任しないうちに北京へ転任させられた。同地に一、二年いたが、氣候がからだに合わないのを知つて、日本へかわらせてもらった。しかし、ここでも自己の運命に満足ができなくて、自殺の道を選んだのである。

江戸へ帰つてから数日間、横浜から来た数人の友人と一緒に、熱海や箱根などを見物してまわったが、これらの旅行については、熱海をのぞけば、別に書くに足るようなこともなかった。

熱海には、当時旅館がわずか二軒しかなかった。今では（一八八七年^註 明治二十年^註）、少なくとも十二軒あり、東京（江戸）に住まっている上流階級の人々がしげしげ訪れる上品な避暑地となっている。当時の運賃は、現今よりもずっと安かった。われわれは、約十マイル（^註 数字の誤りか）ある箱根まで荷物をはこびせた人夫に、一人前^ブ一分と四分の三、すなわち約二シリング四ペ

てなかつた。三、四人の別手組別手組の者たちが守っているだけだ。彼らは、門のわきの小屋に詰めていた。

この寺の下手にある公使館の構内では、一晚中巡視が行なわれ、時刻になると歩哨ほしやうが互いに合言葉をかわすというのに、私たち二人がこのような場所で、深夜の暗殺の危険を何とも思わずに住まっているのは、まことに勇ましいかぎりであつた。ここでは、数か月の間全然日本食で過ごしたのだが、食事は、われわれの友人である薩摩の人々が繁しげく通っている、万清マンセイという料理屋から日に三度ずつ運ばせていた。

ミットフォードは、彼が以前到北京ペキンでシナ語を勉強した時のように、絶えず日本語の勉強に没頭して、著しい進歩をみた。私は、彼の役に立てようと思つて、一連の文章と対話を編纂へんさんしはじめたが、これは数年後に会話篇カワイワという標題で出版された。

このように公使館の構外に住んでいると、自由に大名の家臣たちの訪問をうけることができるので、その点都合がよかった。私は、柴山良介しばやまらうすけ、南部弥八郎なんぶやちらうという二人の薩摩藩士から政治上の情報を得るため、しばしば三田の薩摩屋敷に出入りした。柴山は、この年の終りごろ、非業の最期を遂げた。この薩摩屋敷は、大勢の浪人や乱暴な政治的人物の隠れ家として評判が高かつたので、ついに將軍の警吏の包囲するところとなり、焼打ちされた。乱闘の末、大勢の者が殺され、柴山は捕われの身となつた。審問に引き出されたとき、彼は大胆にも自分が一味の頭目であつたと明言し、やおら懷中から拳銃を取り出すと見るまに、おのれの頭部を撃ちぬいた。彼は、私の親しい友人で、一度ならず一緒に愉快な冒険をやつたことがある。

四月の中ごろ、外国の外交代表がそろつて大坂オサカへ向かつた。フランス公使のロッシュ氏は、自

まった。私は、保土が谷からちようど五マイルを駕籠、すなわちプランキンに乗ったが、この短い道のりに二時間を要した。だが、これが当時の旅の普通速度であった。竿の先に、太い竹と紙で作った提灯をぶら下げた男を先に、日本人の公使館付護衛が一人駕籠に乗って先導し、そのあとから私の駕籠が行く。荷物を、棒につるした二個の柳行李(両掛)で運ぶ人夫と、もう一人の護衛が私のあとを追う。野口は、徒歩だったと思う。

翌朝、私は一行全部の部屋代や、酒、肴、夕飯、朝飯代など、一切の勘定を支払ったが、その額は約八シリング六ペンスであった。一分銀一枚(約一シリング四ペンス)を茶代、すなわちティ・マネとして主人に与えたが、それで全く充分らしかった。

日本では、旅籠とよばれる夜の宿所の料金、すなわち旅籠代には、米、茶、寝具、燃料、蠟燭、風呂の使用料などが一切含まれる習慣で、別勘定となるものは、酒と肴だけであった。鷹揚な旅人は、「旅館の利益のため」にそれらを注文したが、経済を考える人ならば、充分食欲を満たすに足る規定の二食だけですませた。肴(魚)は、食べるというよりも、むしろ見て楽しむもので、酒の添えものに過ぎない。蠟燭、燃料、風呂代などを別に請求するヨーロッパのホテルの勘定書とは、著しい相異がある。また日本では、チップはだれももらうことを考えてはいないから、やる必要はない。茶代は、室料の代わりに出すのである。

ミットフォードと私が、公使館の構外の小さな家に引越したのは、私がこの旅行から帰って来てからのことであった。東海道から横道へそれて、泉岳寺へゆく往来にのぞんでいる高台の、りっぱな庭園の中にあつたが、この家というのは、実は小さいお寺で、その名を門良院(モンリョウイン)といった。二人はお客様の部屋を借り、それぞれ寢室と居間を占有していた。家の周囲には、柵がめぐらし

人々の同行が大きな邪魔になることも確かである。

大坂^{オザカ}滞在中のイギリス公使館には、寺町^{テラマチ}という、市街のずっと端にある四つの広大な寺院が割り当てられた。ほかの国の代表の宿舎には、イギリス公使館の門前に近くて、いくぶんそれよりも劣ると思われる建物が当てられた。ところで、イギリス公使は前もって館員二名を大坂^{オザカ}に派遣して、一切の手はずをきめておいたのだが、ほかの国の連中は、日本政府が用意した宿舎に簡単に満足したのである。

ミットフォードとワグマンと私は、大坂^{オザカ}の市中を見渡せる寺院^{チヨウホウジ}（長法寺）の一隅に部屋をとり、他の一角にはハリー卿の「事務室」と仮記録室が設けられた。一行は、長法寺から街路を隔てた向こう側の寺院と一緒に食事をしたが、ハリー卿とパークス夫人は、その寺院を宿所としていた。その隣の寺院の建物は、護衛隊の士官と二名の通訳生のために、そして、第四の寺院は賓客用にあてられた。

私は、一階、二階、三階の各階にある、立派な、いくつかの部屋をあたえられた。一階には、日本人の書記と私の従者が泊まり、二階は二室あったが、一つは私の寝室、他の一つは「事務室」に用いられた。三階の部屋は、来客に接する際に用いる一種の客間だった。縦十二フィート、幅九フィートの小室ではあったが、家具一つ置いてなかったのだ、それでも十二人ぐらい入れるだけの広さはあった。

多忙だった。私は、朝から晩まで翻訳と通訳の仕事をやらされた。ある時は、昼食の時間にも、晩飯の時間にも、長官のところへ日本人の来客が詰めかけていたので、十一時間ぶつつづけに日本語をしゃべらなければならなかった。そんなわけで、私は日記をつける暇もなく、つぎに書く

分の打ち出した特殊の政策を推進するために、すでに三月ごろ大坂へ行って、將軍に会っていた。同氏が、將軍に支持を約束していたことは疑いのないところだ。いずれにしても、將軍に対して助言はしていた。実際、あとからわかったことだが、幕府が全く崩壊し去ったあとは、もはや一日も日本にとどまり得ないと自ら悟るに至ったほど、深入りした言質を幕府にあたえていたのであった。

他方、イギリス側では、ハリー・パークス卿は將軍を支配者の代理以上のものではないとして、今後はそのように取り扱うことにきめていた。それ以後、われわれは、將軍のことを殿下と呼ぶことにし、一方イギリスの女帝には、全く天皇と同格にあることを示す日本語の称号を用いたのである。

ハリー・パークス卿は、アプリン大尉の指揮する騎馬護衛兵と、ダウント大尉およびブラッドショー中尉指揮の第九連隊第二大隊からの五十名の分遣隊をひきいて、大坂へ向かった。パークス夫人も、一行に加わった。属僚としては、公使館書記官のシドニー・ロコック、ミットフォード、私(日本語の書記として)、ウィリス、アストン、ウィルキンソンなどが随行した。われわれは、ハリー卿に説いて、画家のチャールズ・ワーグマンをも一行に加えてもらった。同勢は、ヨロップ八人約七十名、シナ人、日本人書記、下僕、馬丁など約三十名をかぞえた。

大君の政府は、必要な一切の新鮮な食糧をあたえてくれた。この特典から除外されて、大いに立腹した者もあり、リッカービーのときは「ジャパン・タイムズ」の紙上で、私たちの友人である画家(訳注 ワーグマン)の頭上に、鬱憤をぶちまけた。商業団体の代表が一人も公使の一行に加えられなかったことは、商業家の側から見れば理由のない不満ではなかったろうが、これらの

なうことに決まった。第一回目の会見は、私的なものであった。ハリー卿は乗馬で、一行の全員をしたがえ、騎馬の護衛兵を先頭にたてて、歩兵分遣隊に前後を守られながら、城中へ向かった。別手組と呼ばれる大勢の日本人護衛兵が、われわれの左右を駆けまわって、雑沓する群集を制した。大坂城の前の広場に堵列していた兵士が、護衛兵を指揮する士官のきらびやかな軍服姿を見て公使と間違え、この士官に向かって捧げ銃をしたのは、いかにも滑稽だった。城の壕を横切っている堤道の手前には、常時「下馬」と漢字で書かれた木札が立っているが、あらかじめ先方の承認を得ていたので、一行は乗馬のままで門をくぐり、そのまま御殿の玄関まですすんだ。私の記憶が正確とすれば、御殿は門のすぐそばにあったが、これは一八六八年二月（詠注 明治元年正月）の初め、敗北した幕府の軍勢の退却の際に火を発して、灰燼に帰してしまった。そんなわけで、現在では残念ながら見る事ができない。その建築は、当時の日本の最も豪華な建物の見本だったと言われている。京都の天皇の御所よりも、確かに、ずっとすぐれていた。幅が広くて、天井の高い廊下には敷物がしかれ、廊下と部屋の間は、日本杉の良材を彩色した板戸で仕切っていた。その廊下は、広い部屋が幾つもならんでいる前を通って、右へまがり、三つの広い部屋をおち抜いた大広間、すなわち謁見室のところへ出るまで、長々とつづいていたのである。ほかの部屋にも、それぞれ特別の名前がついていた。諸大名は、格式にしたがって、別々の部屋へ伺候し、各々拝謁を許される順番を待つのである。これらの板戸の上方には、葉形飾で取りかこまれている、鳥や獣を木彫りにした大きな鏡板がはまっている。これは、日光にある家康の靈廟を訪れた者にはきわめてなじみのある様式であるが、日光のものに比べて、色彩がやや濃厚であった。

私たちは、外国奉行の案内で、敷物をしいた廊下を静かにすすんだ。外国奉行の面々は殿中の

ことは全く記憶だけにたよつたものである。ただ日付だけは、印刷した資料を参照した。

われわれは、兵庫と大坂に居留地を設けるための規定、外国人が土地を借りる場合の条件や、それぞれの土地における自治区域の設定などの仕事で、時間の大部分を費やした。それに、ハリ―卿は外国代表全部の間でも一番実行肌の人であつたから、勢いそれらの仕事の大部分は卿の双肩へかかつてきたのだ。

日本政府は、明らかに外国代表の歡心を買おうとしていたので、談判もいつになく円滑に行なわれ、意外に迅速に事がはかどつた。江戸で行なわれる公式会見で目立つたような、怒気を含んだ議論や、のぼせあがつた論争（長官の激昂と痛憤が、日本の閣老の物に動ぜぬ、しぶとい冷静さと対照的であつた）は、少しも見られなかつた。新將軍慶喜の発言によつて、全く新しい一つの方針が打ち出され、友好的な条約をいつそう實際的なものに改善しようとする真剣な努力がうかがわれた。

その間に私は、薩摩、阿波、宇和島などの藩士の訪問をうけた。私たちは、これまで十三年もつづいてきた政治運動の成果がどんなものか、それを見とどけたいと思つた。しかし、大体において、將軍の方が反対派に対して勝利をおさめた形であつた。將軍が外国諸公使を大坂に招いた主要な目的の一つは、諸公使と親しく会見して、諸外国との間に友好的關係を結びたいという、將軍自身の希望を表明するにあつたのである。だが、こうした策を將軍に授けたのか知らないが、外国代表のある一人によつて、外国の諸公使館と將軍との間にいつそうの親密性を加うべきことが提言されたことは、あり得ぬことではないようだ。

將軍に謁見する際の礼法については、長時間の議論の後に、全くヨーロッパの流儀によつて行

二、三の言葉をかけることになっていた。これらは、Eotien(訳注 アレキサンダー・ウィリアム・キングレークの書いた旅行記)の中に出てくる有名な会見で外国人案内者が訳したトルコの総督(パシヤ)の言葉に若干似ていた。たとえば、將軍は極地探險に行ってきたハスウェル大佐に向かつて、「あなたは長い旅行をしましたネ」という意味のことを實際言つたのであるが、私はそれを、もつと儀礼的な言いまわしで通訳した。

私は、西郷やその一派の人々の訪問をうけたことを覚えてゐる。彼らは、われわれと將軍との接近について、大いに不満であつた。私は、革命の機会がなくなつたわけではないことを、それとなく西郷に言つた。しかし、兵庫が一たん開港されるとなると、その時こそ、大名は革命の好機を逸することになるだろう。

外国代表の泊まつた町の道路の両端には頑丈な木造の門があつて、そこには別手組(ベツテグミ)の者が夜となく昼となく、大勢詰めていた。そして、それらの者は私たちがどこへ行くにも尾行を命ぜられていたので、これらの護衛なしの外出は仲々できなかった。ミットフォードと私は、これがいやでたまらなかつたので、寺院の塀の破れ目を見つけて、そこから、従者の野口を連れては、町へ夜遊びに出かけた。何かの危険にあうかもしれないぬという一種のスリルと、ずるけた学童のような気持もまじつて、こうした日本の夜の探險はきわめて楽しかつた。

あるとき、松根(マツネ)青年も一緒に、唄妓や舞妓のいる色町へ遠征した。ちょうど月夜だったので、それだけ護衛兵に見つかる危険も多かつた。私たちは、例の塀の破れ目をくぐつて、あともどりをし、それから公使館の後ろを通り、私たちの宿所前の往来に平行している下手の道路へ出て、家のかげに身を寄せながらしばらく走り、さらにそれと直角をなしている別の道路へとびだし、

掟にしたがい、膝行しつこうしているように見せかけるために自分の脚よりずっと長い、幅びろな袴はかまをつけていたので、歩き憎くそうに見えた。

私たちは、こうして、將軍が待ちうけている奥の広間へ着いた。將軍は、ハリー卿と握手をして、長いテーブルの上座に腰をおろした。その右側にハリー卿、左側に総理大臣ともいべき板倉伊賀守イハガミ（訳注 老中板倉勝静）が席をしめた。属僚は、ハリー卿の次ぎにそれぞれ着席し、私は卿と將軍との間の腰掛けにかけた。

將軍（訳注 徳川慶喜）は、私がこれまで見た日本人の中で最も貴族的な容貌をそなえた一人で、色が白く、前額が秀で、くっきりした鼻つき——の立派な紳士であった。私は、殿中の礼式にふさわしい言葉を使いこなせるか、どうか、自信がなかったもので、いささか不安だった。イギリスと日本の過去の関係についておもしろくなかった事柄は、今一切水に流しました、というハリー卿の言葉を伝えるのに、自分でもおかしくなるほどの失態をやったのを覚えている。この時には、何も用務上の話は出なかった。

会談が終ってから、一同は洋式の晚餐が用意されている小室へ席を移した。將軍は、食卓の上座にいたが、その態度はきわめて慇懃きんきんであった。周囲の壁に、三十六歌仙の絵がかけてあった。ハリー卿がそれをほめると、將軍はその中の一枚を卿に贈った。食事のあとで、ウィスキーと水がでた。私は、この偉い人のために、それを調合する光栄をになった。われわれが退出したのは、もう夕暮れ時だった。

二、三日して、正式の謁見が行なわれた。これには、軍艦の艦長らも列席した。ハリー卿の挨拶と將軍の答辞についてあらかじめ打ち合わせがあった。將軍は、自分の面前へ進みでる人々に

いるものとは趣きの全く変わつた活気と特徴が満ちていたし、おまけに、大坂特有の方言と衣裳は、女たちに独特の魅力をそえていた。

われわれは、大坂で丸五週間を過ごしたが、その間一日として退屈な日がなかった。寺や芝居を見物したり、凝った茶の湯の作法とかしこまりながら茶を飲んだり、また大坂のすぐ近くになぜそんな町があるのかわからない、堺という大きな商業町へも遠出をしたりして、公務の合い間には、そんな所へよく出かけたものだ。われわれの居館の近くには、蘭を集めているので有名な花屋があった。蘭は日本では、花よりも葉ぶりを見るために栽培されている。こうした趣味は、琉球やシナや日本にはすぐれた、あるいは立派な花の咲く種類のものが少ないという事実に基づいているが、素人の愛好家は何でも手に入り次第、できるだけ手をかけている。

ヨーロッパ人にとって、もっと魅力的だったのは、私たちの滞在中に開催された牡丹の展示会であつた。この花は、今ではイギリスで流行しているが、当時はあまり知られていなかった。淡紅色や白など、さまざまな色をした美しい牡丹の花には、しばしば直径九インチもある大輪がある。その美しさは他に比類がない。シナで、「花の王」と呼んでいるが、全くその通りである。シナや日本の装飾的な美術品では、牡丹は常に獅子と組みあわせてあるが、ヨーロッパの文人たちは、しばしばこれを薔薇と間違えている。

私たちは、骨董店や絹物店へずいぶんよく行ったが、当時の機織物はまだ後年のように高級な芸術的発達の域には達していなかった。また、この市のどの方面でも両刀を帯びた階級の者にしばしば出くわしたが、一度も乱暴な目にあつたことはなかった。一般市民も、みんな私たちに親切であつた。

またもや右へ曲がつて、もう大丈夫、どんな追手にも見つかるまいと思つてから、はじめてゆつくりと歩きだした。やがて、川にかかった長い橋を一つ渡ると、目ざす場所へ出た。

部屋は、松根の名前でとつてあつたので、白粉をぬつて紅をつけた妓女たちは、日本人のお客が来るものと思つて、待ちうけていた。ところへ三人のヨーロッパ人が彼女たちのまん中へ案内されて現われたから、キャアツと言つてすくんでしまった。当時、われわれは大坂の女たちにとつては、興味というよりも、むしろ驚愕の対象になつていたのだ。美しい妓女たちは、肝をつぶして飛び上がるや、みんな逃げ出してしまった。友人の松根がいくら大丈夫だと言つても、どうしても戻つて来なかつた。

その家の亭主が、人だかりしては困るし、騒動でも起きたら迷惑がかかるから、ぜひ歸つて下さいと、懇願した。私たちは、がっかりしながら、それに従わなければならなかつた。しかし、日本の美人たちをちよつと見ただけでも、この冒険の甲斐があつたような氣持がした。なぜなら、大坂のこの区域には、外国人はまだだれ一人として入ることができた者はなかつたからだ。

これとは別な機会であつたが、その時は数名の護衛に付き添われて出かけた。政府の役人が承知の上で、しかも私たちのために口まできいてくれたので、もつとうまく行き、数名の芸者を相手に数時間の遊興をした。松根は大名の家来なので、そんな時には大いに疑いの目で見られた。長い時間を私たちと一緒にすごすばかりか、現在造幣局のある土地の向かいにあつたお茶屋へ白昼外国人を案内するのは、彼としても勇気を要したであらう。

大坂では、見るもの聞くものすべて物珍しく、私たちを楽しませてくれた。政治も、外交も、たえず興味と刺激をあたえてくれた。街路や、店、劇場、寺院などには、江戸や横浜で見なれて

基礎とした大きな公立学校を江戸に設けるために、英語の教師を周旋してほしいという申し出があった。イギリス政府からは、公使館にいる私たちの目から見ても至極適当と思われる俸給で、充分な人数の教師を世話してやってくれとテムプル博士に頼んできたのだが、博士はこの件について骨を折ろうとしなかった。そのために、日本の高等教育にイギリス的な傾向をあたえる機会を逸してしまったのである。

外国代表と日本政府の代表との間の談判は、若干遅々とした感じはあったが、それでも満足に進行し、五月の半ばごろには、まずこれ以上は望めまいと思われる段階にまで達した。そこで、諸公使も、みな江戸へ帰る用意をした。この大坂を退去する前に、ハリー卿は、新潟の港に代用できる場所と言われていた敦賀^{ツルガ}まで、長途の旅行をして来たのである。新潟は、河口の砂洲が邪魔になり、それに北西の強風が間断なく吹くため、海が荒れて、危険が多く、一年の半分は實際上貿易が不可能になるだろうと言われていた。そこで、われわれと日本代表の間では、もし必要ならば、佐渡が島の夷^{エビス}を船舶の補足的避難所として開くが、その場合は単なる碇泊港としてのみ使用する、という約束ができていたのである。ところで、視察の上、もし新潟と夷^{エビス}の二港を連繫して使用するという上記の協定が実行不可能となった場合は、どこか他の港、すなわち敦賀^{ツルガ}か七尾^{ナナオ}のいずれか一港を、これに代えることになっていた。ハリー卿は、この旅行に夫人と数名の公使館員を帯同した。卿は、伏見をへて、琵琶湖に沿って北上し、帰途は湖水の東岸を通過して南へ下った。將軍反対派の人々は、この旅行に大きな不満をいだいた。伏見^{フシミ}が実際上京都の郊外にあるところからして、聖なる都にかくも近づくことを「夷狄」に許したという理由で、彼らは政府を攻撃した。薩摩人は、この問題について上奏文を提出したのであるが、こうした薩摩人の行為は、われわれに対する敵意の表明と言うよりも、実際には大君^{ダイキミ}の政府を苦しめようとするものだった。もちろん、私たちはこのような理由を、ずっとあとになるまで知らなかった。私は、江戸へ帰るに際して、陸路をとる許可を得た。そして、ワーグマンが私の道連れになって、行を共にすることになったのである。

大君^{ダイキミ}の政府からハリー卿に対し、川勝^{カハシ}近江守^{オミ}(訳注 外国奉行川勝広運)を通じて、当時の開成所^{カイセイショ}を

の東海道案内記もあつた。日本の本州には二本の大きな街道があつて、それが東西の二つの都をつないでいる。その一つは中仙道、すなわち山の中を通っている街道で、その名のように中部の国々を貫通している。もう一つは東海道、すなわち東方の海に沿っている街道で、これは通行のできるかぎり海岸伝いに通っている。この名称は街道の初めからの名前ではなく、元来はこの街道の通っている地域の行政区画上の名前なのだが、実際には同じように使われている、日本第一の街道である。宿屋の設備も一番よいと、この国の役人が私にすすめてくれたのが、この東海道であつた。徳川三代將軍(詠注 家光が参勤交代の制度をつくつて以来、大きな街道は日本内地の交通の重要な手段となつた。人夫や駄馬を供給するために、数マイルごとに宿場があり、大名や政府高官の泊まる本陣という官用宿舎がどの宿場にも一、二軒はあつた。

この本陣の付近には、大名の家臣や旅商人などの泊まる普通の旅館や料亭などがたくさんあつた。東海道に沿つて領地を持っている大名はもちろんのことだが、京都以西のあらゆる大名にとつても、この街道は公認の通路となつていたのである。それに、毎年伊勢神宮にお参りする大勢の人々にとつても、東海道は主要な通路になっており、そのほか、数多くの有名な寺院の参詣者もこの街道を通るのである。

そこで、あらゆる点から見て、東海道は日本国中の道路の中で最も往來の頻繁な、そして最も重要な道路であつた。日本の色刷りの版画を蒐集している人々の中で、東海道の風物を描いた挿絵のある数多くのおもしろい連続物を知らない者があろうか。これらの絵には、日本人の生活がとても真に迫まるように描かれている。日本の小説の中で最も有名なものの一つに、二人連れの愉快な男の、江戸から京都へ上る道中の珍談を扱つたもの(詠注 十返舎一九の「東海道中膝栗毛」が

第一章 陸路、大坂から江戸へ

日本の国内は、数世紀の間すべてのヨーロッパ人に対して鎖^とされていたが、長崎のオランダ商館長だけは例外であった。オランダ商館長は、一定の時期ごとに陸路江戸へ上って將軍に敬意を表し、將軍と閣老に高価な贈り物をするのが慣例となっていた。これらの捧^{もた}げ物をする使者についての最も興味ある記事は、ケンペルの書いた本の中に見られるだろう。ところが新条約(訳注一八五八年 安政五年の修好通商条約)には、諸外国の外交代表に日本全国の旅行権を与えるという一か条が加えられた。ラザフォード・オールコック卿がその著書「大君の宮廷と首都」(Court and Capital of Tycoon)の中で詳述しているように、卿は数年前にすでにこの旅行の特権を行使したのであった。しかし、オールコック卿のこの旅行記が、それ以後の旅行者に案内書として大いに役立つとは言えない。

ところで、実に日本人は大の旅行好きである。本屋の店頭には、宿屋、街道、道のり、渡船場、寺院、産物、そのほか旅行者に必要な事柄を細かに書いた旅行案内の印刷物がたくさん置いてある。それに、相当よい地図も容易に手にはいる。精密な比例で描かれたものではないが、それでも実際に役立つだけの地理上のあらゆる細目にわたって書いてある。

そのほか、マレー(Murray)(訳注 イギリスの有名な出版業者 Murray のことか)に親しんでいるイギリス人が欲するような、伝説的、または歴史的な、いろいろの民間説話をのせた見事な絵入り

つたので、引戸駕籠ヒキドカゴという役人用の駕籠の中古を二挺ちやう買って、これを修繕させた。一挺の値段が一分銀三十二枚、すなわち四ポンドもしない少額だった。棒は松材の長いやつで、上品な言葉で桐棒キリボウ（訳注 切棒きりぼう）と称せられるものだった。綿わたを厚く詰めた絹緞子こんすの敷き蒲団ふとんをしき、ちようど両脚を楽に組んですわれるだけの余裕があった。前に面した窓の上に小さな棚たながあり、窓の下にテーブルの用を足す小さい折り板がついていた。また、引き戸には、寒気をふせぐために障子戸をつけた窓と、換気の際に塵埃じんあいの入らぬように紗しやのおおいをした、もう一つの窓がついていた。雨天の時には、細い竹で作った簾すだれが窓におろされた。また、駕籠の胴体は黒い油紙のおおいで包まれるようになっていて、駕籠の中から外がのぞけるように、これに小さな穴がついており、また油紙の垂れたが外側へ張り出されていた。しかし、こうした装備は、雨の降りつづく日に用いられるだけだった。

われわれの旅の場合には、各自が両掛リョウガケと称する衣類を入れる一対の長方形の柳細工の籠かごを用意し、一人の男がそれを黒い棒の両端につるして、肩にかついで運んだ。私の寝具は、白縮緬しろちりめんのおおいに大和錦ヤマトニシキという普通の錦で広く縁へりをとった日本の敷き蒲団二枚、それから夜着ヨザという、ピロートの襟えりのかかった、模様のある縮緬の大きな綿入れの寝衣が一枚、それに西洋式の枕まくらが二つで、これらを明荷アケニという柳行李やなぎざしにつめ、男が二人でそれをかついだ。

荷物ごとに、私の名前と肩書を大きく漢字で墨書した松の板切れが結びつけてあった。公使館付きの日本人護衛兵ベツテグミ（別手組）から選抜された十名の男と、日本の外務省カイコクガタ（外国方）に属する二名の役人が警護に付き添ったが、この外国方の役人は同時に道中の宿泊の手配をする役目をもっていた。伏見ふしみから三百二十マイルの旅は計算上十六日を要するが、まず途中の昼食地や宿泊地の選定

あるし、また東海道五十三次の宿場表は、日本の子供たちが読み書きを習う際に教えこまれる第一課の一つになっていた。途中の有名な景色はいうまでもなく、歴史上、伝説上の連想によつて、この東海道が日本人の空想の中に占めている地位は、ライン河がその昔イギリス人旅行者の心を捕えていたのと等しいものがある。今ではローレライの巖にトンネルができて、無頓着な旅行者の群れがこの大河の岸を鉄道で数時間のうちに疾駆してしまふのであるが、昔は四頭だての馬車で、もったいらしく「やる」のが流行したものだ。どんな地図で細心に研究しようとしても、徒歩で実地に研究するにまさる地理学の勉強法はない。徒歩によれば、愉快、疲労、天候などの、多くの連想を伴ふことにより、地形学上のきわめて些細な事までが心に残つて離れないものだ。また、歴史の研究者に対しては、戦争のいろいろな変遷をも理解させてくれる。

日本は、数世紀の内乱の中から特殊な政治組織が生まれた国であるから、国内の各地方を丹念に調べれば調べるほど、当時の敵国同士が互いに攻め合つた戦術上の問題などについて、正しく理解がゆくというものだ。私は、何かこうした考えから、陸路をとつて江戸へ帰ることを長官に許してもらおうと決心したわけではない。日本のあらゆる事物に対する貪欲な好奇心、冒険心、あるいは軍艦内の生活に対する嫌悪の情が実際の動機だったのだ。そして、多分その最後のものが一番強い原因だったと思う。カレーからドーヴァーまで行くのに、船なら一時間と十分以上はかからぬのだが、できたら一日がかりで歩いて行つた方が、船中で荒天に身をまかせるよりもよいというのは、多数の人々が思いを同じくするところであらう。

ワーズマンと私は、だいぶ日本食にも慣れてきていたので、食糧は何一つ携帯せず、またナイフ、フォーク、洗指鉢、テーブル・ナフキンなども持つて行かぬことにした。馬は手に入らな

われわれの船は、客を満載して川を下ってくる多くの船や、米俵を積んだ十艘の荷船とすれちがった。六時半に、吹田村よりはいくらか大きな枚方の村に船をとめた。ここに上陸して、旅客の食事に付きもののスープ（吸い物）と魚とで飯を食べた。私たち三名と従者三名の食事代は、一分銀一枚にもならなかった。これに、一分銀一枚を茶代として置いた。野口が会計役であったから、彼が適当と思っただけの茶代を幾らでも出すことにしたのだ。この食事代はめつぽう安いと思つたが、公けの資格で旅行する人々は普通の額の四分の一という、旅館の規則があるのだと説明された。私たちは月明りをたよりに、再び出発した。夜のふけるにつれて、薄い霧が立ちこめ、あたりの景色を神秘的にぼかしながら、広々とした川面を一面におおった。こうした情景は、実に日本の特色ともいふべきものだった。幼い時から見慣れている、この国の美術家でなければ、これを捕えて筆で描き現わすことのできぬものだった。

日中熱かつた大気も、だいぶ冷えてきた。私たちは荷船から毛布を持ってこさせ、船の両側の隅に互いにからだを横たえて、眠つた。

朝の二時に目をさますと、船は橋本の対岸、そして川の右岸にある番所から、かなり離れた川中にあつた。この番所は大君の閣老の一人である松平伯耆守の部隊が守っており、その対岸は伊勢の大名である藤堂の受持ちになつてゐた。船は遠く淀の辺まできていたが、旅行免状に査証がなかつたので、そこからあと戻りさせられ、再び淀まで上つて来た時は、もう四時も過ぎていた。月は夜のうちに沈んでしまつて、あたりはまだ暗かつた。淀川はここで木津川に合し、川筋にある島々にふさがれて幾つかの水路に分かれています。船は右岸に沿って進み、六時ごろ伏見についた。伏見では、ちょうどハリー卿が敦賀へ出発しようとしてゐるところだった。卿の一行中の気

をやつて、最後に旅宿表が作られた。

外国奉行と別れの挨拶をかわして、五月十八日朝九時に、私たちは宿所であつた寺院を出発した。ハリー・パークス卿の一行と伏見で落ち合うことになつていたウリスが、同地まで行を共にすることになった。私たちは、河岸の八軒屋波止場で屋形船に乗った。護衛と外国方は別の船に乗りこみ、そのあとから一行の荷物をつんだ二艘の無蓋の舟がつづいた。流れが、ひじょうに激しかった。船の進みもそれだけ遅かつたが、しかし威儀を正しての旅だと思つて、生来の短気な性質をおさえていた。

岸に近づけるだけの水量のある場所では、船頭が上陸して、船の前部の帆柱の先につけた綱で引き船をしたが、その際も船が岸に衝突するのを避けるために、舵手は持ち場に残つた。引き船の水路が反対側の岸に変わると、船頭は船にもどつて、棹で向こう岸へ船を渡し、また前のように綱で引つぱつた。

川はずいぶん曲折してゐる上に、高い堤の間を流れてゐるので、広い川面と河岸の上から見える山脈の頂のほかには、眺めが少しもきかなかつた。この日は、天氣がよかつた。箱根までは全然未知の道中だつたから、私たちの頭の中は途中の物珍しい風景に対する熱烈な予想でいっぱいだった。それに、私にとっては過去五週間の劇務のあとでもあつたので、これから二週間の休暇がとれると思つと、別して心が浮きたつのであつた。

一時ごろ、大坂の上流約五マイルの右岸にある小村の吹田村に着いたので、昼食を食べに上陸した。米の飯と豆腐のほかは何も食べる物がなく、これだけではいかにしても飯が喉へ通らなかつた。しかし、「戦争の時は、戦争の時のように」と思つて、我慢した。

れた規模のきわめて小さい、いくつかの茶焙じ場があった。まず茶の嫩葉を湿し、漆喰の炉の火室に薪をくべ、下から加熱される平盤の上にその葉を広げて、一々手で擦るのである。こうして作った新茶は、それよりも一段と良質な茶の場合と同様に日本流のやりかたで微温湯をそそぐと、うまくて、爽快な飲料となる。これらの作業場では、いずれも一個所に二人以上の人間は働いていなかった。

一時に大津に着いた。弁当をつかつてから、名高い琵琶湖の景色を眺めようと、良善寺という寺院へ出かけたが、真昼の暑気のため湖面に鈍い灰色の霧がかかっていたので、湖水の景色は全然見えなかった。私たちが昼食のため休んだ高島屋は、接待がよく行きとどき、また護衛や外国係の人々も、先を争って私たちの用を足してくれた。

大津から先は、湖水の岸に沿った平坦な道路になっている。本多隠岐守(訳注 本多康継、主膳正)の「城下町」膳所を過ぎてから、駕籠からおりて歩くことにした。瀬田の大きな二重の橋を渡るとき、二人の男が小舟に乗って鯉を釣っているのが見えた。この辺の浅瀬には、罾、すなわち泥のなかに蘆を突き立てて作った不規則な形の罾がたくさん仕掛けてあり、暴風が水面をかき乱すと、びっくりした魚が騒ぎまわって罾の中へはいる仕組みになっている。

その夜は草津泊まりであったが、その手前で駕籠のなかへ引っこんだ。群集に圧倒されないようにするためもあり、また徒歩の姿を見られぬようにして、一段と威厳を保つためでもあった。町の境界のところまで来ると、町役人の代表者と官用旅舎の亭主が出迎えにきていた。彼らは、好奇心にかられる群集を追い払いながら、行列を大いに花やかにして、一行を護衛してくれた。駕籠舁は歩調を速めたが、これは本当にいやなものだった。ただでさえも乗り心地のよくない駕

前のよい男が、取つて置きの葉巻を私たちにくれた。こちらの持ち合わせは、大坂の長逗留（ながとまりゆう）一本も残さず吸つてしまつていたのだ。これから先の旅行には、小さな煙管（きせつ）で煙を小さく吹きだす日本煙草で我慢しなければならなかった。これは、強い煙草に慣れている私たちの渴望を満たすには不十分だった。金屬の雁首（がんび）と吸い口とを固い竹の管で連結した日本の煙管の最大の欠点は、すぐに脂（あぶら）が詰まることで、少なくとも日に一回は、強靱（きょうじん）な桑の木皮で製した紙撚（こより）で掃除をしなければならぬ。

ウィリスは伏見で私たちと別れて、長官の一行に合した。幕府は、ハリー卿を京都へ立寄らせまいとして、特に嚴重な警戒を行なつていた。ハリー卿の冒險好きな性質からみて、京都へ立ち寄りたい気持ちにかられることもあろうかと思われたからだ。

朝食をすませてから、われわれは駕籠（かろう）にのつて陸路の旅をはじめた。町役人の一階級ともいふべき町方（マウダ）の一群が、一張羅（かよう）を着こんで、私たちを町はずれまで警護してくれた。宇治川の岸と、優雅な竹の藪（かぶ）でおおわれた低い樅（ひま）（訳注 松あるいは杉）山との間の道が、一マイルもつづいていて、それから、右手に宇治（ウジ）の茶畠（ちば）を見ながら、小山の間を曲がりくねっている道を通つて追分（オイツケ）に達し、ここで東海道へ出たのである。

京都から、次の休息所である大津までは、治道にずっと石を置んだ、一種の軌道（トラムウェイ）になつてゐた。これは、重い荷物を積んだ、幅のひろい車輪のついでに、牛車の通行にそなえたものだ。われわれの駕籠は、京都にゐる大君の守備隊へ供出する米俵をのせた四十台の牛車を追いこした。追分は、煙管（きせつ）、計算盤（算盤）（さんばん）、鳥羽（とり）絵（え）という一種の漫画などで有名で、山城（やましろ）の国と美しい琵琶湖（びわこ）との境界をなす一連の小山のふもとにある町だ。道路のかたわれには、当時の製造業によく見ら

宿の衆は、われわれが米の飯を食べるのを見てびっくりしていた。寝る時には、やわらかな絹蒲団がたつぷりと床にのべられ、座敷女中が寝しなの一服にと、まっ赤におこった炭火の一片をきれいに白い灰に埋めた火鉢と、入れたてのお茶の瓶びんとを持ってきて、蚊帳かやのなかに置き、「オヤスマナサイ」(どうぞお眠りください)と言ったが、これが第一日の旅の終わりであった。

日本では、旅客は朝早く出立するのが習わしである。この国の人々は、夜の明けないうちに起き、台所の流しの上につるされた箒はらから一つかみの塩をつまんで、急いで歯をみがき、石鹼せっけんなしで手と顔を洗い、朝飯を急いでかつこみ、太陽の昇るや否や、あるいはそれよりも早く道路へ出る。そんなに朝早く出立するのは、その夜の泊まりの宿場町に一刻も早く到着するためである。これは、泊まり客の全部に対して宿には一個の風呂桶ふろおけしかなく、水も一回入れるだけなので、まっ先によい部屋をとって、一番先に風呂に入ろうとするためだ。へんびな場所になると、風呂を毎日たて替えるということをしなない。時には、風呂水が日数をへて全く青味がかり、それに応じて臭気がぶんぶんしているのに出くわすこともある。われわれ外国人は、庶民のまねはせぬものと思われていたので、七時半よりもあまり前には出立しなかった。一行の平均速度は一時間約三マイルで、一日の行程は二十マイルをこえなかったが、それにしても途中いろいろな都合ができたので、ようやく六時にその夜の宿泊地に着いたのである。

一日の旅程のなかには、まず第一に昼食(オヒルヤスミ)というのがあって、少なくとも、これに一時間はかかる。つぎに、われわれのような身分の高い者は、少なくとも午前には一回と午後には一回は足を止めて、休息(オ小休コヤスミ)する必要があった。また、あらゆる眺めのよい場所に立ち寄って、お茶をのみ、皿に盛った菓子や、いろいろな食べものを味わうのであるが、これは昔から

籠だが、駕籠舁に足ばやにやられると、乗っているのにたえられなくなるからだ。

駕籠は、とある町角を曲がった。それから、門柱の手前二か所にきちんと盛り砂をして、そばに水桶みづかの用意してある黒い門をくぐり、官用旅舎、すなわち本陣の広い玄関先へおろされた。この旅舎は、この種のものの中では、私がこれまでに見た最も立派な建物の一つであった。ごく上等な木目のある材木、目ざわりにならぬ落着いた色合いの壁、金箔きんぱく仕上げの風雅な模様のある紙を張って、それに黒光りのする漆塗りの木柵もくさくをつけた引き戸、刷り込み模様の綿布で縁取った、青々として堅牢な厚畳、と言った具台の上等な建物であった。一番大切な部屋は、広さわずかに十二フィート四方ではあるが、ほかの部屋にくらべると床が六インチほど高くなっている。寢床の役目をする二枚の厚畳が敷かれていて、高貴の客が、きちんと正座するようになっている。荷物は、部屋の両側の廊下に置かれた。窓からの眺めは少しもきかず、不愛想な黒板塀に取り囲まれている狭い内庭が見えるだけだった。偉い人というものは、見てもいけないし、見られてもいけないというものが、一つの作法になっているのだ。この宿の亭主が、ささやかな進物を持ってはいつてきて、額を敷居にすりつけた。数分後に、再びやってきて低い物腰で、茶代として受取った一分銀二枚の礼をのべた。私たちが順番に浴室へゆくと、取り澄ましたというほどではないが、すこぶる控え目な若い娘が、「お」背中を流させていただきましたようかと聞いた。私たちは、子供の時分から沐浴いそぎの際に美しい女性を侍らすような躰しづけはされて来なかったもので、この娘の手助けを断わった。

晩飯のとき、私は肴一皿と酒一本をあつらえたが、わが芸術家のワーグマンは、お代わりを何度もやらなければ堪能たんのうしなかった。ヨーロッパ人の食物は牛肉と豚肉だけだと教えこまれていた

さまは、見るも微笑ましい情景であつた。

どこへ行つても、女中の必要以上の遠慮が無くなるまゝには、相当の時間を要した。これは、偉い人々にはそれぞれお供の者が付いているので、普通の場合女たちは上役の間に近づくことを許されないからだという。私たちは、急場の必要からとは言え、高い身分に成り上がっていることを今さらながら後悔し、大名が始終人前で品行方正に、しかつめらしくしていなければならぬのに同情した。

これもまた、身分が高いと思われた結果なのだが、多くの町で、私たちの通過の際に住民が路傍に土下座をしたのである。これは、われわれの先頭に立った町役人が役人根性を出して、「シタニロ、シタニロ」「down, down」と叫んで、さういう姿勢をとるように強制したからだ。このような敬礼の仕方は、当時大名に対しては普通に行なわれていたのである。自分の大名の領土内であろうと、他の大名の領土内であろうとおかまいなしだ。また、将軍政府の高官、たとえば神奈川奉行に対してさうも土下座しなければならなかったのも、ヨーロッパの居留民は憤慨していたのである。これまでに一度だけ、外国人でこの侮蔑的行為に屈促した者があると言われているが、それはユージン・ヴァン・リード氏の屈促だった。同氏はリチャードソンが気の毒にも落命した当日、島津三郎の行列に出くわし、その場でこの国の習慣に従つたということだ。おそれなく、この習慣の起こりは、起立の姿勢を無礼と考える日本の礼儀作法から出たものだろうが、同時に貴人が不意の襲撃にあつたことを防ぐ必要から生まれたものであろう。前者の実例として、私が侍の子弟の公立学校を参観しに府中へ行つたとき、強く肝に銘じたことがある。私は靴を脱いで、入口の床の上に帽子を置いてから、一室へ丁寧に案内された。そこには三十名ばかりの少

荷車の格好をした、それも驢馬ではなく、人間が引く小型で無蓋の乗合車に人が乗っているのを見た。一八六九年に流行り出した人力車の先驅をなすこの小型の乗り物には、大人が六人ほど乗っていたのである。自分の威厳ということにあまりにも無頓着なワグマン（彼は芸術家としてではなく、役人、すなわち政府の官吏の資格で旅行していたのだが）は、この車に乗ると言いだした。そして、富田から桑名まで、少なくとも五マイルの道のりを天保銭三つ、すなわち二ペンス半で乗り通した。小向の茶店では、亭主が私たちに至って下等な万古焼の急須をいくつかくれた。万古焼は、手で捏ねあげて型をとる珍しい素焼の陶器で、内側にも外側にも一面に指先の跡がついている。

二十二日に、徳川氏譜代の重臣（訳注 松平定敬）の所領である大きな町、桑名に到着した。住民の大群集がわれわれ一行の来るのを見物しようと待ちかまえていたので、雑沓を押し分けて進むのに苦勞した。行列は、急にわき道へそれて櫓の下を通り、城の外郭を横ぎって、ようやく入江の岸にある官用旅舎についた。万古焼や美濃の奇石、名古屋の扇などを売りに、大勢の売子がやって来たので、その晩は買物で時をすごした。

桑名から宮までは、尾張瀧頭を船に乗って横断した。今（一八八七年）なら汽船で通るところだが、一八六七年（訳注 慶応三年）にはまだ板屋根の至ってきたない帆船で我慢しなければならなかった。七時半に出帆して、十一時少し過ぎに海路の終点へついた。しかし、この距離は七里、すなわち十七マイル半なので、その日はそれ以上先へ行くことを止められた。そこで私は、午後は名古屋を見物することにしたと言った。宮は、ほとんど名古屋の郊外と言ってもよいのである。名古屋の誇りは、十六世紀末ごろ信長が最初に築造したというお城である。この城は天守閣の

年が床の上に正座し、漢文の書物を前にして、六人の教師の監督のもとに、先輩生徒の暗誦するあとからこれを復誦していた。私は立ったままでお辞儀をしたが、意外にもだれ一人として私のお辞儀にこたえた者がなかった。日本の礼儀作法を知らなかったために、私はみんなに無礼と思われるような態度をとっていたのだ。護衛の一人に注意されて、私は始めて自分の至らぬことに気がつき、すぐにすわってお辞儀をし直した。すると、教師たちもこれにこたえて、本式に頭を床へくっつけながらお辞儀を返えたのである。

私は、きわめて短時間しかすわっておれないのだが、それでもいくぶん硬い脚の関節が許すかぎりには、その後日本式の作法にしたがうことにしていた。だが、私が畳に額を押しつけている間に、もしや対座の男が頭を下げずにすわっていて、この機会を利用して「夷狄」を軽蔑しはしないかという不安な気持は、どうすることもできなかった。実際、日本人自身も同様の不安は免れないらしく、互いにお辞儀をする間も、相手が自分と同じくらいに低く頭を下げているかと、横目でにらみながら確かめるのを時々見かけたものだ。

私たちが、ちよつと大きな町を通ると、熱狂した住民がこの時とばかりにお祭り気分が集まって来るのが常だった。たとえば、大名の城下町亀山では、侍や、うれしそうに晴れ着をきた子供たちが、道路に大勢待ちかまえていた。若い娘のなかには、風習として白粉をうんと顔に塗っていたのはいるが、すこぶる別嬪と思われるのもいた。

この地方では、二、三の奇妙な乗り物の風習が見られた。すなわち、二人の子供が一人の男のかつぐ棒の両端につるされた荒縄のもつこに乗っていたのを見たし、女たちが二人組んで駄馬に乗っていた。関と桑名との間の平地では、ロンドンの街路を果物の呼び売りをして歩く行商人の

て、オランダ人が購入した品物の記載してある台帳を見せてもらった。昔からの由緒ある先例にしたがうのは外国人の一種の義務でもあったので、私たちも数反の織物を買った。ずいぶん変な話だが、この織物は、作られる土地の名前で呼ばれずに、最寄りの宿駅鳴海の名でよばれていたのだ。野口と外国係の役人二名が値段をかけ合っていたが、ワグマンと私は値段のことなど全く眼中にないと言ったふうに傍観しながら、威厳をつくって黙々と煙草をふかしていた。この店の主人は、明らかに町役人の役柄を持っている有力者で、家に数挺の火縄銃をおくことを許されていた。この町の家屋の多くは普通以上にがっしり作られていたか、それは製産品のおかげで土地が繁昌している証拠であつた。

知立では、宿屋で昼食を食べたが、その亭主が内々で野口のところへやってきて、一八六一年にオールコック卿から四分の「茶代」をもらつたからと言つて、それと同額の茶代を要求した。野口はこれを拒絶して、私たちが他の場所で払つた額、すなわち一分の半分で我慢させた。このような事は、いつも野口の考えにまかせておいた。彼は公正にやつたに違いないと思う。

その日の午後、立場という途中の茶店で例のように駕籠舁を休ませるため行列を止めると、店の者が蕎麦をだした。ここは蕎麦で名高いのだと立場の者は言つたが、よそで食べたものよりも味がよくなかつた。ワグマンの評判がもう伝わっていて、紙や絵筆や黒汁が持ち込まれた。ワグマンは、私たちが蕎麦を食べながら、彼が気をきかせて宮から仕込んできた酒を瓢箪から酌んでいる図を描いて、傑作をものした。

矢作川の橋が落ちていたので、渡し船でわたつた。町役人と警吏が町の入口まで出迎えに来ていた。警吏はこの地方の大名がわざわざ差し向けてくれたもので、その役目は行列の先頭になつ

上にある二つの巨大な黄金の鰐カメで日本中に名高く、また現存しているこの種の建造物の中でも一番立派なものの一つである。だが、外国係の役人は、われわれ一行を東海道の本道からわきへそらせせてもよいという指令をうけてはいなかったので、余計な手配をわざわざ自己の責任によつて行なおうとはしなかった。尾張侯のような大きな大名の城下に外国人を連れて行くには、前もつて許可を得ておく必要があつたのだ。もちろん、町奉行に会つて許可を願つてみるとは言つたが、それは全然ごまかしだつた。

商人が、罌罌、金属細工、漆器、縮緬ちぢみなどを持つてゐつて来たので、私たちは商人を相手に名古屋の役人からの立事があるまで時間つぶしをしていた。ワーグマンは、絵筆に巧みだという噂が流まつていたおかげで、唐紙や扇子などをどつとり持ちこまれて、閉じられていた。亭主が、ワーグマンの芸術の見本を要望する町の有力者から特に頼まれたというので、私は、彼の描いた絵に賛を書いてゐた。彼の想が、それに必要な靈感を私たちに与えてくれたのだ。だが、このようにして依頼された扇子が、結局では一本一分で売買されることがわかつたので、それからは一割減ることにした。

一方、物名のある者を選び、私たちは日本の着物に着換えて、外国係の書判二名と護衛数名を家裏に招いた。護衛の連にはくもくときびんになつて、すすんで道へ送り出さず者もあり、一掃身体がなまなくて、暑気よくなが、野郎が有名な屋敷の物まねをゐつた。われわれは、九時までこれらの宴の順序をこなしたが、その時刻には、彼らも十分に酔がまわつてゐた。

翌日、インペールのバノグ・ア・バウハナBanque d'Indeと通うことに決める。この街の勢で有名な人々を逢つたとき、昔から影絵のオランダ舞踊場が江戸参府の道すがら立ち寄るをきくになつてゐた。また、それ

する美しい娘さんなどでにぎやかだった。宿の亭主が礼服を着て現われ、低く頭を下げながら、干した白魚の揚げ物を差し出したが、これは焼いて醤油しょうゆをつけると実に美味である。寢室には、きれいなトルコ絨毯じゅうたんが敷いてあった。行儀の正しい、十歳ばかりの可愛らしい少年二名が給仕に出た。

もちろん、例幣使レイヘイシのことが話題の中心になった。例幣使はまだここを通過していないので、私たちの従者は心配でたまらなかったのである。野口の話では、例幣使の家来は自分の主人である高位者（訳注 武者小路公香）に適当な敬意を払わなかったという口実で金銭を強要するのを常習としているから、身分のある日本人はもちろん、最も下級の侍までが、例幣使の通る道筋を避けることにしているという。私も日本人の例にならって、できるだけ遭遇の機会を避けたいと思った。人々の話によると、このごろでは例幣使の地位もだいぶ低下しているそうだ。今夜は四マイル先の、すぐ次の町である袋井フクロイに泊まることになっていると聞いたので、私たち一行は午後のおちに早く目的地に着こうと、急いで見付ミヅを立つことにした。高原の道を二マイル進み、松林におおわれた美しい小山の曲がりくねった坂道を下り、稲田の間の平らな道を二マイル過ぎて袋井フクロイに着いた。その宿場で駕籠舁と荷物の人夫を替えるや、休まず先を急いだのである。

この日、五月二十七日のことだが、百姓は麦の刈り入れや、稲の苗の植えつけなどをやっていた。最後の休息時間をも入れて、掛川カケガワまで五マイル以上の道のりを二時間で駕籠をとばしたが、これは精いっぱいせいぱいぱいの速さと思われた。長崎へ行く途中だという若い薩摩人さつまじんがたずねてきて、例幣使のことや、その家来のやることを聞かせてくれたが、やつらの所業に対して最大の侮蔑ぶべつをあらわす言葉を吐いていた。例幣使の家来どもは、この晴れの行事に雇われて、わずかな権威けんゐを笠に

再び私たちに付き添った。これらの者は、大名井上の領地の外れに一行が着くまで、われわれのそばを離れなかった。

一昨日の雨のあとをうけて、この地方の景色はこのほか美しく見えた。治道の亭々とした松並み木のうしろには、実った大麦の畑が近くの丘のふもとのところまでずっと延び、その丘越しに、青い山々が遠くに連なっているのが見えた。私たちは、昨日も今日も、京都へ向かつて行進する大君の伝習兵の第三連隊の兵士に行き合った。これらの兵士は、幕府の頭首の新政策を擁護するため、そしておそらくは西方の有力な諸大名の武力連合に対抗して將軍を守るために京都へ上って行つたのだらう。

この地方の護衛たちが引き上げてしまうと、私たちはすぐに駕籠をおりて、天竜川の方へ歩いた。そして、渡し船でこの川をわたつたのだが、この川はひじょうに川幅が広くて、流れも急である。出水の季節を除いては、川のまん中にある砂洲で水流が左右の二つに分かれている。ワীগマンがあとに残つて写生していたので、私は外国係の一人と一緒に彼を待っていた。この役人は私に、多分この先で「野蠻人」に遭遇するだらうと、声をひそめて言つた。この野蠻人というのは、日光の家康の廟へ派遣されてその帰途にある天皇の宮廷の高官例幣使の一行のことであるのがわかつた。例幣使は日本中のどの大名よりも高い位にあるので、これに出会つた者はみな駕籠からおりて、土下座をしなければならないのだ。外国係の役人は、何とかしてこの例幣使の行列を避けたいと考え、私もまたそれを望んだ。そのうちに、他の者も私たちに追いついたので、われわれ一行は田圃の中を通っている近道をたどつて、行程を二マイルだけ短縮することにした。屋食の予定地になっていた見付に着いた時は、お昼にまだ少し間があつた。道路は、外国人を見物

凶徒はそこを打ち破つて闖入したのであった。

私たちが廊下へ出たとき、他の護衛たちが入ってきたが、おのおの拔身の一刀をひっさげ、陣羽織をきて、額に鉢金はちがねをあてていた。彼らは私の緋色ひいろの寝間着ズボンを見て、隠れるか、それともズボンを脱ぐかしてくれと言った。危険はもう去っているの、私は彼らを見ながら、ただ笑うばかりであった。彼らのなかの二名がワグマンを捜しに行き、彼がこの家の裏手に通ずる路次にいるのを見つけた。凶徒はワグマンによって、危うく拳銃けんじゆうの弾たまを見舞われるところだったのだ。

私たちは寒さを感じてきた。野口は、一部始終を物語った。彼は、正面の戸が打ちこわされる音を聞いてとび起き、帯をしめ、右手に刀を握り、左手に拳銃を構えて、部屋へやの入口に突っ立った。数名の凶漢がどかどか入ってきて、「毛唐バーバリーヤンズ」を出せとどなったが、野口は彼らに、もつと中へ入って来たら「毛唐」を渡そう、と答えた。そうした野口の態度と、凜りんとした威勢に驚いて、凶徒は逃げ去った。野口の見るところでは、相手の人数は全部で十二人ほどで、二人は長刀を、他の者どもは短い刀を持っていた。見まわすと、ワグマンの室の斜向はすかいの部屋へやの蚊帳かやがずたずたに切られている。蚊帳の中の人間は逃げてしまっていた。幸いに、私たちは寝しなにランプを消して置いたので、凶漢どもは勝手がわからなかったらしい。

ワグマンは、戸を打ち破る音と、「毛唐」を出せとどなる声に目をさまし、宿の人々が逃げ出すあとについて戸外に出たのだそうだ。「凶漢ども」の一人が落として行った提灯ちようちんで、例幣使一行のしわざだということがわかった。一人も怪我人けがにんはなかったが、凶徒の一人が狼狽ろうたいして逃げ出す際に、あやまって仲間の者のために傷を負わされたという。みんなが自分の経験談をやったあと

人、門、主人の意圖が神官織姿のままの外へと派司して行き、御幣使の衆来じもをふるえあがり、
また、また、は、本宮に襲撃されると思ひこみ、この町の名に警護をたのんだそうだ。護衛頭
は、おかしなことを感懐しく見せなまし、それにあかわれず事件は少しも解決し、
また、また、は、おかしなことを感懐しく見せなまし、それにあかわれず事件は少しも解決し、

[illegible]

然るに、此等には、何れも實に感嘆すべきところの事蹟があるので、感嘆する處としてゐる。我々は、
 此等を見て、又それによつた外國人の情を遙くして、心を引く。人々の感嘆が二つ、人々のもの
 づくが二つ、感嘆の爲め一人は、その人の人衆に傾く、人々の心は連なり、それらの感嘆に、その
 心は、心を動かさるゝ、心は、心を動かさるゝ、その心である。

[illegible]

こまれたものだろう。分割の手段として、川ほど有効なものはあるまい。川を徒歩で渡るには、着物を脱いだ上、溺死の危険をすら冒さなければならぬ。半裸体の姿を対岸に現わすときの情けなさについては言うまでもない。これはもちろん渡し賃が払えない場合のことだが。

われわれは人夫一同に一分の心付をやった。この一分は、見苦しくない程度でできるだけ経済を切りつめようという今までの習慣にしたがつたものだが、人夫どもは各自の分け前について大声で騒ぎだした。それは一人前にすると、一片の三分の二をいくらか上まわるものだった。

私たちは八時になって、ようやく宿舎に着いた。この宿の主人は格別丁寧で、こんな粗末な家にお泊まりをいただきまして、と厚く礼を述べた。われわれは、あの不慮の事件による興奮からまださめきつていなかったもので、すぐに酒や肴をあつらえて、一番快活な護衛の連中をこの宴席に招いた。その中の一人は、当時流行の民謡に新句をつけ足して喝采を博した。それは、「蕪菁の葉」のような上衣を着た例幣使の家来に對する輕蔑の意をこめたものだった。この唄は、この席に出た実に不器量な赤ら顔の女の弾く絃楽器の伴奏で、繰りかえし、繰りかえし、なんべんも唄われた。

翌日、府中という大きな町に到着した。その昔、十七世紀の初めに、家康が国政の第一線から退いて隠棲した所で、後年静岡と改称された。茶と紙の取引の重要な中心地で、私たちが通過した当時には日本の主要な大学の一つがあつたが、それでも往事の隆盛なころに比べれば、大いに衰退していた。私たちは、ここまで来る途中いろいろな地方の名産を味わつたが、見たところ鳥もちに似ていて、野生馬鈴薯の一種である日本産薯蓣属(Dioscorea Japonica)の根をすりつぶして作つた恐ろしくねばねばする粥のようなもの(訳注　とろろ)があつた。道路は、見物人でいっぱ

た。

ところで、凶漢と、この事件に関係した他の三名の者が、数か月後に江戸へ檻送かんそうされて審問をうけることになった。そして二名は死刑、さらに四名は遠島に処せられた。ハリー卿は私に、この二名の者の死刑執行に立ち会ったらよかろうと言ってくれたが、私は他の人を代わりにやつてもらった。自分の命を奪おうとした男の死刑を見物するのは、復讐心ふしゅうしんに燃えているようでよくないし、また当時の状況では私が立ち会わなくとも、処刑は立派に行なわれたものと思う。

つぎの行程は、日坂ニッザカまでであった。これは、小山にかこまれた盆地にある、きれいな小さい町だった。行く手は険しい坂道だが、かなりの疲れを覚えながらもこれを登りきって、その頂上へ出た。右手はだんだん低くなって海辺までのび、左手は道路よりもずいぶん高くなっている。山腹が平らに切りひらかれて段々畠をつくっており、その頂上まですっかり耕かされていた。峠にある一軒の茶店に休むと、小娘が、麦芽からとつたらしい粉でまぶした柔らかい餅もちを出してくれた。この娘は十五歳で、一人前の女になりかけているのだが、身の丈は四フィートもなかった。

この高地を越えすと、つぎの宿場町である令谷オウヤがある。それを過ぎると大井川オウイガハだが、その夜の宿泊地へ達するためには、どうしてもこの川を渡らなければならなかった。素っ裸の人足どもが大勢で、一行の駕籠と荷物をさつさと対岸へ運んだ。私自身は四角な担架のような物（訳注 輦れん台）にのつた。大いに安全を期するため十二人の男がこれをついだが、彼らはこの仕事の困難なことを示そうとして、急流の、一番深いところへ飛びこんだ。当時の日本人は、大井川は激流なので、渡し船では命があぶないし、また橋を架けることも不可能だと考えていた。後年架橋に成功したところを見れば、このような考えは、分割支配（divide et impera）の政策上故意に民衆に吹き

り、その二階の一室からは素晴らしい景色を存分に眺めることができた。私はこの部屋をとるために、光榮ある上段の間、すなわち壇のある部屋を放棄したのである。左方には伊豆の青い岬が大海のはるか沖合まで突出しているが、その先端はかすんでよく見えなかった。右手には小高い熊山があり、それにつづいて、奇態な枝ぶりの松でおおわれている低い砂浜の出洲が見える。それは、日本の歌で名高い三保ノ松原であった。うしろの窓からは、雪をいだいた富士の山頂が小山の上からのぞいているのが見えるし、おきへ目をやれば、箱根に近い双子山の二つならんだ山頂を見ることが出来る。

私たちは、去り難い気持ちを残して、この土地を離れた。海岸に沿って二、三マイルは岬のふちを伝いながら進んだが、一つの角を曲がったとき忽然として富士の全貌が目に入った。前方を見渡すと、この偉大な山の裾野は蒲原近くの海へ達している低い山脈のうしろにかくれて、白雲がその中腹を取り巻いていた。ローダマンは腰をおろして写生をやり出したが、その折りの一枚を、私は今でも保存している。

やがて、ヴィーナスの耳鰓と、奇妙な渦巻のある蓋をつけた大きな養貝の榮螺と名高い倉次に着いた。もちろん、ここでもしばらく休んで酒盞をかきね、この地方の料理を味わい、護衛の入きにもふるまった。掛川の一件以来、奇蹟を共にした人間同士の常として、私たちは護衛の連中と大の仲よしになっていたのである。道路はここから蒲原まで、海岸に沿っている。途中の景色は、至る所に見られるさえない、浅風景な漁村がなかったら、日本中で最も風光明媚な場所の一つであろう。

翌朝、早、起きて、途中の低い小山を越え、八時に富士山の堤についた。ここの官用旅舎では

이었다。物見高い見物人に押しつぶされないように、駕籠の中へ引きこもらなければならなかったほどだ。この町はまた、日用の家具類や漆器類の製産でも名高く、私たちの隣の部屋は一行の到着をあてこんで、市場のように改装されていた。品物も、横浜にありふれている物で、値段も大して安くはなかった。実のところ、上等な客と思ひこんで、勝手につけた値段なのである。当時の日本では、買物をする場合、「高い身分の者には、それ相当の義務が伴なう」という主義がよく守られていたのである。

翌朝六時に起きると、不二山(二つとない名山)の秀麗な姿が見えた。旅舎のほとんど真裏の方角にそびえ、地平線上に渦巻き流れる一帯の雲を抜いて、青空高く美しい山頂を見せていた。朝食のあとで、「大学校」をたずねる。一室に三十名ほどの若者がすわって、漢書の写本を前にし、年長の上級生の口について暗誦していた。このような授業を毎朝二時間ほどやり、また教師が月に六回教科書の解釈をやるという。校長は江戸の昌平黌(しょうへいこう)から来ていて、一年ごとに交替することになっていた。こうした勉強に、毛筆の習字を加えたものが、当時は年少の日本人の教育となっていた。このような教育法は、記憶力を養うにはよいが、推理力の点では全然役に立たない。もちろん、こんな教育法は余程以前に全く廃止され、今日の日本にはドードー鳥(the todo)(訳注 モーリシヤス島に産した鳩類の巨鳥だが、十七世紀末に絶滅した)がなくなったように、ほとんど影も形もないと言つてよい。

われわれの眼界に現われた富士山は、ここからほとんど江戸までの間、ずっと私たちから離れなかった。江尻(江注 今の清水市)の近くでは、左手の低い山々の上に現われた優美なその山頂に眺め入った。一時に興津(オキツ)に到着。ここで昼食することになっていた。宿舎は海岸に近い場所にあ

その日は箱根に泊まるつもりだったが、途中写生に手間取ったため（カシワバラ 栢原で鰻の蒲焼を肴に大いに酒をのんだことは言わないことにして）、どうしても箱根山の西麓（せいりやく）にある三島（ミナト）から先へは行けなかった。

翌朝は六時半に出発した。箱根の峠にかかったが、その道はローマの公会場（フオーラム）を起点とするアツピア道路ともいうように大きな石で舗装されている。松や杉の大木の立派な並木道である。そんな道を半分以上もゆくと、ささやかな部落があつて、数名の獵師が古式にしたがつて鶏卵をもつてきてくれた。

三時間かかつて箱根（へいふ）に着いた。箱根は、峻（けんそ）な草深い小山に囲まれている湖水の南縁の、小さな山村である。その日は陽気が暖かかったので、湖水で一浴びしたくなつたが、同行の外国係の役人が激しくこれに反対した。この湖水には一艘の小舟も浮かべることが許されないし、何者といえども游泳することは禁じられているという。泳いで関所の柵（さく）の裏手へまわつて、旅券を見せずに通過する者があるといけないからだ。私は、自分の泳ぎがそんな芸当をやつてのけるほど上手でないことを話し、かなり苦勞して相手を説得した末、とうとう反対を引っこめさせてしまつた。

この箱根は、今では横浜に住まっている外国人の避暑の好適地となっているが、私たちはこの魅力のある場所で二時間の時をすごしたのち、すでに先章で述べたこの峠の東側をくだつて、五時に小田原の宿についた。前に何が待っているかを夢にも知らずに。

宿へ着くとすぐに、重要な談判が始まっているから急いで帰れというハリー・パークス卿の手紙が私に手渡された。護衛頭に相談すると、これからすぐに立つて、夜を徹して大急ぎでやれば、

私たち一行を迎えるため玄関まで炬を敷きつめ、上段の間には赤い毛布を敷いて、万端の用意をととのえていた。この宿の主人のたつての頼みで、数分だけ立ち寄ることにしたが、ワグマンとこの宿の主人とは昔の知合いであった。一八六一年にラザフォード・オールコック卿が長崎から江戸に至る陸路の旅をしたことがあった。ワグマンもその折り卿にしたがつてこの地を通過したが、その際に会ったというのである。私たちは、ばかに儀式ばったやり方で一番上等な部屋へ通された。ついで、この村の名産と言われる栗粉でつくった菓子、積み重ねた箱（重箱）にいっぱい詰めて、上の段に大根の漬物を少し入れたのが運ばれた。この土地で売っているもう一つの「名物」は硯だが、それは一般の人の目にはガラスか瑠璃とも見える、緑のすじの入った水晶でできていた。

私たちは、広い砂利の河床の間をわけて細く流れている富士川の急湍を渡し船でわたった。今なら汽車で通るのだが。この時に、まるで海の中から屹立して、海のかなたになだらかに裾をひいているような富士山を見たのである。しかし、その姿は珍しくはあったが、比較の標準になる低い山に下半身が隠されている場合の富士にくらべて、それほど美しくはなかった。実際、途方もなく大きなもぐら塚に一番よく似ているような感じがした。

その途中、十二歳と十四歳になる二人の少年に出会った。この少年は、江戸から聖なる伊勢神宮と讃岐の金毘羅宮へとはるばる巡礼の旅をして、いま江戸へ帰るところであった。神社の護符などの大きな包みを油紙にくるんで、それを斜めに背負っていた。道路はひどい砂ぼこりで、暑いし、それにほとんど百姓家の庭の竹垣の間ばかりをゆくので、美景どころか、全くいやになった。

一休之前、見た町を離新 全2冊
一休のくさくさ物語

1960年9月25日 第1刷発行
2012年2月15日 第72刷発行

著者 一休精一

絵者 山口昭男

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111

文庫編集部 03-5210-4051

<http://www.iwanami.co.jp>

印刷・理想社 カバー・精興社 製本・中永製本

ISBN4-00-334251-8

Printed in Japan

《法律・政治》

人権宣言集

新編世界憲法集

君主論

リヴァイアサン

法の精神

ローマ人盛衰原因論

ペルシア人の手紙

第三身分とは何か

人間知性論

憲法統治二論

社会契約論

アメリカのデモクラシー

犯罪と刑罰

リンカーン演説集

権利のための闘争

デモクラシーの本質と価値

法における常識

ザ・フエデラリスト

アメリカの軍人演説集

人間の義務について

《経済・社会》

国富論

道徳感情論

法学講義

コモン・センス

《経済学原理

戦論

自由論

ミル自伝

ロンバード街

経済学・哲学草稿

経済学・哲学草稿

経済学・哲学草稿

新編ドイツイデオロギー

共産党宣言

賃労働と資本

賃銀・価格および利潤

マックス・経済学批判

マルクス資本論

文学と革命

ロシア革命史

トロツキーわが生涯

空想より科学へ

フオイエルバッハ論

改婦人論

帝国主義

レーニン哲学ノート

暴力論

ローザ・ルクセンブルグの手紙

ローザ・ルクセンブルグ経済学入門

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

マルクス・エンゲルス

讀書子に寄す

岩波茂雄

— 岩波文庫発刊に際して —

[illegible]

《音楽・美術》

ベートーヴェンの生涯	ロマン・ロナン 片山敏彦訳
音楽と音楽家	吉田秀和訳
モーツァルトの手紙	柴田治三郎編訳
レオナルド・ダ・ヴィンチの手紙	杉浦明子訳
ゴッホの手紙	碓伊之則訳
改訂回想のセザンヌ	エミール・ベルナル 有島生馬訳
ワグネル日本素描集	清水 勲編
河鍋曉斎戯画集	山口静也編
『パンチ』素描集	松村昌家編
岡本平漫画文集	清水 勲編
ヨーロバのキリス ト教美術	エミール・マル 柳宗玄訳
近代日本漫画百選	清水 勲編
うるしの話	松田権六
河鍋 曉 斎	ジョサイア・コトル 山口静也訳
伽藍か白かしたとき	生・コルビユ 樋口七郎訳
ラダ	前川誠一郎訳

《自伝と書簡》

蛇 儀 礼	前川誠一郎訳
セザンヌ	ヴァールブルク 三島憲一訳
日本の近代美術	ガストン・ケ 與謝野文子訳
迷宮としての世界	土方定一
建築の七灯	グスタフ・ルネ・ホッ 種村季弘訳
《哲学・教育・宗教》	矢川澄子訳
ソクラテスの萌・クリトン	ラス・キン 高橋栄川訳
ゴルギアス	ブラト 久保 勉訳
饗 宴	ブラト 加来彰俊訳
テアイテトス	久保 勉訳
バイドロス	プラト 田中美知太郎訳
メノ	プラト 藤沢令夫訳
国 家	プラト 藤沢令夫訳
プロタゴラス	プラト 藤沢令夫訳
法 律	プラト 藤沢令夫訳
バイド	プラト 藤沢令夫訳

《アナーバシス》

アナーバシス	クセノポン 松平千秋訳
ニコマコス倫理学	高田三郎訳
形而上学	出 隆訳
弁 論 術	戸塚七郎訳
動物誌	岡本道男訳
生の短さについて	島崎三郎訳
怒りについて	セネカ 大西英文訳
人さまざま	セネカ 兼利琢也訳
自省録	テオプラストス 森 進一訳
老年について	神谷美恵子訳
友情について	キケロ 中務哲郎訳
弁論家について	キケロ 中務哲郎訳
キケロー弁論集	小西英文訳
方法序説	小西英文訳
哲学原理	デカルト 谷川多佳子訳
情 念 論	デカルト 桂 寿一訳

ローザル・獄中からの手紙

ル・オ・ル・ル

雇用、利子および貨幣の一般理論

ケインズ

新経済発展の理論

間宮陽介

経済学史

中山伊知郎

近代経済学の解明

杉本榮

恐 慌 論

宇野弘藏

ユートピアより

ウィリアム・モリス

アメリカ先住民のすまい

ジョーン・リバー

ゲゼルシヤフト

上田 茂

有閑階級の理論

杉之原寿

社会科学与社会政策にかかわる認識の二客観性

折原 啓

プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神

マックス・ウェバー

職業としての学問

マックス・ウェバー

社会学の根本概念

マックス・ウェバー

職業としての政治

マックス・ウェバー

古代ユダヤ教

内田芳明

社会学的方法の規準

デュールケム

金 枝 篇

フレイヤザ

サイギス・タスク

永橋卓介

世 論

リッブマン

産業者の教理問答

サンロシモン

《自然科学》

小川政恭

古い医術について

ボアンカレ

改訂科学と方法

吉田洋一

光 学

島尾永康

天文対話

青木靖三

星界の報告

ガリエオガリエイ

大陸の海洋の起源

山田慶児

ロウソクの科学

谷川 泰

力と物質

都築 秋

ヒークル号航海記

紫藤 文子

種 の 起 原

フアラ

種 の 起 原

稀沼 瑞穂

自然発生説の検討

ハースト

実験医学序説

三浦 栄

近代医学の建設者

メチニコフ

セロニン

宮村 定男

フルーブル昆虫記

寿岳 文章

フルーブル昆虫記

矢島 祐利

フルーブル昆虫記

坂田 徳男

フルーブル昆虫記

川村 浩

微生物の狩人

ラマール

動物哲学

山田 彦

メンデル雑種植物の研究

岩 槻 邦平

相対性理論

須原 準男

家畜系統史

内山 龍雄

ダーウニズム論集

コンラット・ケルレル

近世数学史談

加茂 儀一

因果性と相補性

八杉 龍一

生物から見た世界

高木 貞治

生物から見た世界

日本義隆編

哲学の改造

清水幾太郎 訳

学校と社会

テューン 訳

民主主義と教育

テューン 訳

我と汝・対話

ルビィ 訳

音楽家訪問

杉本秀太郎 訳

幸福論

井谷 夫 訳

定義集

井谷 夫 訳

文法の原理

エス・ハルセン 訳

英語発達小史

イェス・ハルセン 訳

無敵、宇宙および諸

清水 一 訳

日本の弓術

イェン 訳

哲学の慰め

イェン 訳

キリシア哲学者列伝

イェン 訳

愛をめぐる対話

イェン 訳

食卓歓談集

イェン 訳

食卓歓談集

イェン 訳

夢の世界

カール・グスタフ 訳

衣服哲学

カール・グスタフ 訳

シンボル形式の哲学

カール・グスタフ 訳

食卓の賢人たち

カール・グスタフ 訳

比較言語学入門

カール・グスタフ 訳

比較言語学入門

カール・グスタフ 訳

ソクラテス以前以後

カール・グスタフ 訳

ハリネズミと狐

カール・グスタフ 訳

日本語の系統

カール・グスタフ 訳

連続性の哲学

カール・グスタフ 訳

論理哲学論考

カール・グスタフ 訳

自由と社会的抑圧

カール・グスタフ 訳

根をもつこと

カール・グスタフ 訳

全体性と無限

カール・グスタフ 訳

啓蒙の弁証法

カール・グスタフ 訳

啓蒙の弁証法

カール・グスタフ 訳

共同存在の現象学

カール・グスタフ 訳

種の論理

カール・グスタフ 訳

懺悔道としての哲学

カール・グスタフ 訳

死の哲学

カール・グスタフ 訳

創世記

カール・グスタフ 訳

出エジプト記

カール・グスタフ 訳

ヨブ記

カール・グスタフ 訳

福音書

カール・グスタフ 訳

キリストにならいて

カール・グスタフ 訳

告白

カール・グスタフ 訳

神の国

カール・グスタフ 訳

省察と箴言

カール・グスタフ 訳

キリスト者の自由

カール・グスタフ 訳

イエスの伝

カール・グスタフ 訳

聖なるもの

カール・グスタフ 訳

聖なるもの

カール・グスタフ 訳

ヘカル 科学論文集

ヘノザ エチカ

倫理

ユー・アトランティス

ハイラス・ワイロナスの二つの対話

市民の国について

人間機械論

君主の統治について

エミール

孤独な散歩者の思想

人間不平等起原論

社会契約論

ドロ・狂面について

道徳形而上学原論

啓蒙とは何なる

純粹理性批判

実践理性批判

判断力批判

松浪信三郎訳

島中尚志訳

ベリコン進訳

バロ、剛文訳

小松茂夫訳

杉捷夫訳

柴田三郎訳

今野一雄訳

今野一雄訳

本田三郎訳

前田武次郎訳

佐々小健一訳

カナン英雄訳

カナン英雄訳

カナン英雄訳

カナン英雄訳

カナン英雄訳

カナン英雄訳

永遠平和のために

フロレゴメナ

歴史哲学講義

自殺について

読書について

知性について

将来の哲学の根本問題

不安の概念

死に至る病

西洋哲学史

哲学の本質

近代美学史

眠られぬ夜のために

幸福論

悲劇の誕生

アラトム・ノ・ム

こうきつ

道徳の系譜

カニヤ芳明訳

島中尚志訳

ベリコン進訳

バロ、剛文訳

小松茂夫訳

杉捷夫訳

柴田三郎訳

今野一雄訳

今野一雄訳

本田三郎訳

前田武次郎訳

佐々小健一訳

カナン英雄訳

カナン英雄訳

カナン英雄訳

カナン英雄訳

カナン英雄訳

カナン英雄訳

善悪の彼岸

この人を見よ

ブラグマティスム

宗教的経験の諸相

心理学

純粹経験の哲学

デカルト的省察

社会学の根本問題

芸術哲学

創造的進化

笑い

思想と動くもの

時間と自由

人間認識起源論

教育論

幸福論

存在と時間

存在と時間

木場深定訳

手富雄訳

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

W・ンエイムズ

排簾小船・石上私淑言
本宣長注

紫文要領
本宣長注

一茶俳句集
九彦長注

七番日記
九彦長注

南総里見八犬伝
曲馬琴
公也藤井郎校訂

北越雪譜
鈴木牧之
岡式松校訂

東海道中膝栗毛
林生蔵次校訂

頼山陽詩抄
伊藤三沢註

こぶし 籠さん
関敬吾編

花さか籠
関敬吾編

わらべうた
月野建一編

日本民謡集
月野建一編

山家鳥虫歌
月野建一校訂

醒睡笑
安東庵策伝
鈴木三校訂

俳家奇人談
鈴木三校訂

砂
中井敏校訂

江戸怪談集
高田克編・校訂

蕉門名家句選
加切美福注

耳難波鉦
長谷川強校注

鼠小僧
野竹繁俊校訂

近世風俗志
寺田貞
宇佐美機校訂

物類称呼
果条探校訂

元禄世間咄風聞集
長谷川強校訂

柳多留
田澤英雄校訂

初代川柳選句集
千葉市校訂

柳多留名句選
田澤英雄校訂

嬉遊笑覽
多利院
長谷川三校訂

吉原徒然草
野子校注

松蔭日記
野子校注

詩本草
伯木如亭
損斐高校注

訳注聯珠詩格
星木如亭
損斐高校注

鬼貫句遣・独ひと
夜本郎校注

《日本思想》
野上弘一校訂

風姿花伝
野上弘一校訂

能作書・覚習条案・
世田新校訂

五輪書
宮本武蔵
渡辺武蔵校訂

政談
荻牛宿末
辻達也校訂

広益国産考
大歳永常
上屋喬雄校訂

葉隠
和辻常朝
古川新校訂

養生訓・和俗童子訓
石川謙校訂

日暮硯
田本一
荻谷和比古校訂

島津斉彬言行録
牧野伸顯序

華山・長英論集
佐藤昌介校訂

兵法家伝書
柳牛宗興
渡辺一校訂

南方録
西山松之助校訂

柳子新論
川柳人
川浦玄智校訂

重加翁神説・重加神
与阿典綱校訂

報徳記
富田高慶校訂

占史徵開題記
山田孝雄校訂

《日本文学古典》

占事記 有首等寸校注

日本書紀 坂本・多小校注

萬葉集 佐田不信賴編

竹取物語 数寄等表校注

伊勢物語 大平有・校注

玉造小町子壯衰書 朽尾・校注

古今和歌集 佐田・校注

上左日記 佐田・校注

源氏物語 佐田・校注

紫式部日記 佐田・校注

枕草子 佐田・校注

和泉式部日記 佐田・校注

更級日記 佐田・校注

今昔物語集 佐田・校注

堤中納言物語 大槻・校注

梁塵秘抄 後白河院校注

建礼門院白河院集 久松義典校注

占語拾遺 佐田・校注

王朝漢詩選 小島・校注

王朝物語秀歌選 佐田・校注

松浦宮物語 佐田・校注

方丈記 佐田・校注

新古今和歌集 佐佐木信綱校訂

愚管抄 佐田・校注

徒然草 佐田・校注

平家物語 佐田・校注

宗長日記 佐田・校注

御伽草子 佐田・校注

王朝秀歌選 佐田・校注

中世なぞなぞ集 鈴木棠三編

新勅撰和歌集 久松義典校訂

十六夜日記 佐田・校注

伊曾保物語 新井・校注

おもろさうし 外間・校注

好色一代男 井原・校注

好色一代女 井原・校注

日本永代藏 東山・校注

本朝二十不孝 佐田・校注

芭蕉紀行文集 中村・校注

おくのほろ道 萩原恭男校注

芭蕉俳句集 中村・校注

芭蕉連句集 中村・校注

芭蕉書簡集 萩原恭男校注

蕪村俳句集 尾形・校注

曾根崎心中 近松門左衛門校注

折たく柴の記 新井・校注

読史余論 松村・校注

東海道四谷怪談 河竹・校注

玉勝間 本居・校注

人間学としての倫理学	倫理學	日本精神史研究	イタリア古寺巡礼	孔子	風土	古寺巡礼	明治維新史研究	津田左右吉歴史小叢書	文字に託したるもの	十一支考	野草雜記・野鳥雜記	蝸牛考	海上の道	不幸なる芸術家の本願	ことも風一匹母の手は我
和辻哲郎	和辻哲郎	和辻哲郎	和辻哲郎	和辻哲郎	和辻哲郎	和辻哲郎	羽仁五郎	久米邦武編 田中彰校注	津田左右吉	南方熊楠	柳田国男	柳田国男	柳田国男	柳田国男	柳田国男

華国風味	家郷の訓	忘れられた日本人	山川菊栄評論集	懷旧九十年	武家の女性	わが住む村	林達夫評論集	黒船前後志しと経済	漱石詩注	田沼時代	「いき」の構造
青木正児	宮本常一	宮本常一	鈴木裕子編 中田薫	石黒忠恵	山川菊栄	山川菊栄	中久定編	服部之総	吉川幸次郎	辻善之助	九尾周造

大津事作	古語女性解放論集	中国文学における孤獨感	臨濟・莊子	原爆の子	最暗黒の東京	中世の文学伝統	柳宗悦 妙好人論集	柳宗悦 茶道論集	南無阿弥陀仏	工藝文化	手仕事の日本	民藝四十年	石橋湛山評論集	歴史と人物	大阪と堺
尾佐白編 三谷太一郎校注	堀場子編	斯波ハ郎	前田村録	長田新編	松原岩五郎	風巻次郎	寿岳堂章編	熊倉功夫編	柳悦	柳悦	柳悦	柳悦	松尾孝允編	朝尾弘編 林屋辰一郎編 朝尾直弘編	三浦弘行 三浦同編

靈の真柱

山田爲成校注

世事見聞録

山田爲成校注

弘道館記述義

山田爲成校注

茶湯・会集・閑夜茶話

山田爲成校注

山上宗二記

山田爲成校注

海舟座談

山田爲成校注

西郷南洲遺訓

山田爲成校注

文明論之概略

山田爲成校注

福翁自伝

山田爲成校注

学問のすゝめ

山田爲成校注

福沢諭吉の手紙

山田爲成校注

新島襄の手紙

山田爲成校注

新島襄教育手教論集

山田爲成校注

植木茂盛選集

山田爲成校注

近時政論考

山田爲成校注

日本の下層社会

山田爲成校注

内地雜居後の日本

山田爲成校注

醉人野編問答

山田爲成校注

中江兆民評論集

山田爲成校注

年有十統一年有半

山田爲成校注

寒塞録

山田爲成校注

茶の本

山田爲成校注

武士道

山田爲成校注

新渡戸稲造論集

山田爲成校注

地人論

山田爲成校注

代表的日本人

山田爲成校注

徳川家康

山田爲成校注

豊臣秀吉

山田爲成校注

善の研究

山田爲成校注

西田幾多郎哲學論集II

山田爲成校注

西田幾多郎哲學論集III

山田爲成校注

西田幾多郎歌集

山田爲成校注

帝國主義

幸徳秋水

社会主義神髓

幸徳秋水

兆民先生行状記

幸徳秋水

日本の労働運動

片山潜

明六雑誌

山室信一校注

吉野作造評論集

岡義武編

貧乏物語

河上兵衛解題

河上肇自叙伝

杉原四郎編

河上肇評論集

杉原四郎編

西郷相国を顧みて

河上肇

史記を語る

宮崎市定

自叙伝・日本脱出記

大杉飛鳥井雅道校注

女上哀史

細井和喜蔵

初日日本資本主義発達史

野呂栄太郎

遠野物語・山の人生

柳田国男

青年と学問

柳田国男

木綿以前の事

柳田国男

藤月貞和編

折口信夫古典詩歌論集

学者にして詩人、折口が生涯その中核においた歌。三十一文字に沈潜し、様々な視角から歌を読みひらく、女房文学から隠者文学へ」
「全」…篇を収録、注を付す 〔緑・八八四〕 定価九〇三円

ゴールドスミス 小野寺健訳

ウエイクフィールドの牧師

―むだはなし―

たえず災難に見舞われながらも挫折せず、ユーモア感覚を失わない温かな人生を描いて、英国文化の微妙な滋味を教えてくれる愛すべき古典 七六六年刊 新訳 〔赤・一三一〕 定価八八二円

フォークナー／藤平育子訳

アブサロム、アブサロム！(下)

次第に明らかになるサトベンの秘密、少年時代の屈辱、息子たちの反抗、南部の呪い……野望ゆえに滅びた男の生涯を、圧倒的な語りでたたみ掛ける人作 〔全二冊〕 〔赤・……七〕 定価一〇七一円

手塚伸一訳

フランシス・ジャム詩集

素朴で生命の輝きに満ちたはつらつとした詩を書いたジャム(ハバハル)とその詩作の歩みの全貌をたどれるよう、初期から晩年に至る代表作を幅広く収録。 〔赤五五七二〕 定価九八七円

……今月の重版再開……

水井荷風

雨瀟瀟・雪解 他七篇

定価七九八円
〔緑四二二三〕

伊藤整

近代日本人の発想の諸形式 他四篇

定価五二五円
〔緑九六・一〕

石川淳

森 鷗 外

定価五八八円

〔緑九四一・一〕

ウィットリニー 鷗平京子訳

シチリアでの会話

定価九四五円
〔赤七・五・一〕

極光のかげに

—シベリア俘虜記

高杉一郎

イスラーム文化

—その根柢にあるもの

井筒俊彦

意識と本質

—精神的東洋を求めて

井筒俊彦

幸福論

三谷隆正

フランス・ルネサンスの人々

渡辺一夫

評論選 狂気について

他二十二篇

大江健三郎 清水徹 編

維新旧幕比較論

木下真弘 注

宮地正人 校注

被差別部落一千年史

高橋貞樹 注

花田清輝評論集

粉川哲夫 編

新版河童駒引考

—比較民俗学的研究

石田英一郎

論文集 異人その他

他十二篇

大林太良 編

山びこ学校

無着成恭 編

新編綴方教室

豊田正己 編

職工事情

全三冊

犬丸義一 校訂

古琉球

伊波普猷 外間守善 校訂

福沢諭吉の哲学

他六篇

丸山眞男 松沢弘陽 編

朝鮮民芸論集

浅川 高崎宗司 編

娘巡礼記

高群逸枝 堀場清子 校注

田中正造文集

全二冊

小井正臣 編

新日本史

全二冊

竹越与三郎 西田毅 校注

国語学原論

全二冊

時枝誠記

国語学原論

全三冊

時枝誠記

定本 育児の百科

松田道雄

◆ 古典の宝庫——岩波文庫の名句一三〇〇余

世界名言集

岩波文庫編集部編

〈本文二色刷〉

岩波文庫に収められた古今東西の名著群から、心ひかれる印象深い言葉を選び出した一冊。



B6判・上製函入・612頁

定価2730円

(定価は消費税5%込)

ジャン・ジオノ／山本省訳

丘

フランシス・ジャム／手塚伸一訳

三人の乙女たち

パヴェーゼ／河島英昭訳

流

カヴァリエ／二宮フサ訳

フランス・プロテスタントの反乱

―カミザール戦争の記録―

和辻哲郎

日本倫理思想史 (四)

…… 今月の重版再開 ……

堀辰雄

菜穂 子 他五篇

大津栄一郎編訳

ピアス 短篇集

次々に起こる自然の異変。村人たちは死の床にある長老ジャネの意図だと疑うが……。『木を植えた男』で知られるジオノ（一八五〇―一九七〇）の処女作。ジイドが激賞。

〔赤N五一三二〕 定価六三〇円

信心ぶかくて純潔なクララ。情熱的でまっすぐなアルマイード。愛らしくて傷つきやすいボム。自然と愛の詩人ジャム（一八六二―一九〇六）がえがく三つの美しい物語。

〔赤五五七三三〕 定価六九三円

反ファシズム活動の理由で逮捕されたチエーザレ・パヴェーゼ（一九〇一―五〇）が南イタリアの僻村ブランカレオーネに流刑されたときの体験を色濃く映す自伝的小説。

〔赤七二四一三〕 定価六九三円

十八世紀初頭、ルイ十四世治世の南フランス・セヴェンヌ地方で、信教の自由を要求して蜂起し、国王軍と戦ったプロテスタントの指揮官が語る回想記。本邦初訳。

〔青四九二二〕 定価一三八六円

壮大な日本倫理思想の通史。徂徠・真淵・宣長等の潮流、尊皇から倒幕への転化、明治期の展開を概観。人名・書名索引を付す。（全四冊、注・解説）木村純二

〔青一四四一七〕 定価一〇七一円

定価七三五円

ローデンバック／窪田般彌訳

定価五八八円

〔緑八九二〕

死都ブリュージュ

〔赤五七八一〕

定価六九三円

荒畑寒村

定価六三〇円

谷中村滅亡史

〔赤三二二二〕

〔青一三七三〕



9784003342510

ISBN4-00-334251-8

C0121 ¥780E



1920121007803

定価（本体 780 円＋税）

